
ヴァンドル・バード

天猫 紅楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンドル・バード

【Nコード】

N4816V

【作者名】

天猫 紅楼

【あらすじ】

ソラール兵士養成学校の生徒である寡黙な少年カイルは、サクとその友人シリウ、サクの幼馴染みのヤツハと、ひよんなことから仲間になった。ファンネル校長の直々の依頼によって、旅をすることになった四人。その中でラディンという謎の少年と心を通わせ、ますます仲間内の絆が深まっていくなか、それぞれの秘密が明らかになっていく。そしてヴァンドル・バードとは何なのか…… 少年達の心の絆を描いたファンタジーストーリー。

始まりはソラール

人口二千五百人ほどの小さな街、ヴィルス。

寄り添うように横たわる、さほど高くないカナン山の中腹に、そのソラール兵士養成学校はあった。

三棟ある建物は、講堂、医務室、給仕室や約二十人居る教官の待機場、図書館を兼ねた学習室が入っている三階建ての建物を挟むように、二階建ての男子寮と女子寮の二棟が建っている。外には、広くならされたグラウンドが整備してある。

そのなかで、現在二百人ほど居る生徒たちはそれぞれに夢を持ち、日夜鍛練している。

ここの教育のしかたは、時間にしばられた厳しい規律に凝り固まったスパルタ学校というわけでもなく、朝と晩の決まった時間に講堂に集まり、点呼と連絡や注意事項を伝えられたあとは、基本「自由」というスタイルだ。基本的なマナーや常識を外れないかぎり、教育を受けられる。

教官たちのスケジュールが毎日決まっていて、生徒たちは自分が求める技術や知識を、自ら動いて得なければならぬ。

教官たちは分け隔てなく、授業を受けに来た生徒に自分のペースで教育する。ついていけなくなったら、容赦なく置いていく。

そして、月に一度の試験に合格しなければ、すぐに養成学校を出なくてはならないという残酷な規則があった。

生徒たちはいつも必死に生きていた。それでも自分の夢を叶えたいがために。

今日も養成学校のおちこちから、訓練の息遣いや覇気が放出されていた。

夜

講堂での一通りの集会が終わり、明日の朝までは自由な時間。皆それぞれに夕食を取ったり、図書室で勉強に励んだり、自室で休んだり、好きな事をしている。いつものように静かな夜だった。

講堂などが入っている建物にしかない屋上では。

山の麓から吹き上げる風が、静かに建物の壁を撫でていく。灯りがひとつも無い屋上は、ただ月明かりがぼんやりと照らし、穏やかな時間を奏でている。

貯水タンクの下にある鉄製のハシゴに座る人影がひとつあった。ストレートの藍色の髪の毛は耳がちょうど隠れるくらいに綺麗にカットしており、少し長めの前髪が鬱陶しいほどに目を隠している。少し小柄な体型の少年。十六歳。

名をカイル・マチといった。

カイルは一人きりでハシゴに座り、夜空を眺めていた。そしてその頬には、あろうことが涙が一筋流れていた。

カイルには、秘密があった。

それは医務室の担当医、ミランにだけ伝えてある。

誰にも言えない秘密。それは、癒えない傷と共に心に突き刺さっていた。

彼は一人の時間ができると、一人でいつもそこで体を休め、空を眺めていた。

成績は優秀。何でもソツなく、たいていの事は器用にこなしている。

ただ、人付き合いだけは苦手だった。というより、故意に人を近づけまいとしていた。見えない壁を作り、必要最低限の会話以

外は、誰とも交わさなかった。

ソラール兵士養成学校に入って三年。
今のカイルに、友達と呼べる者は居なかった。

彼はしばらくそこに座ったまま夜空を眺めた後、涙が乾いた頬をそのままに、屋上を出た。

そして、自室へと戻っていった。

夜の屋上には、静かに風の音だけが奏でられていた。

翌日

「いつっ！ てててて！」

医務室に、叫び声にも似た奇声が響いた。

担当医のミランが、少年のこんがりと日焼けした腕に包帯を巻いている。奇声はこの少年から発せられたものだった。

「いつもいつも怪我ばかりして！ ここ一週間、ほとんど毎日じゃないかっ！」

細い体に白衣をひっかけ、眼鏡をかけた知的な容姿とはうらはらに、意外にも男勝りな言葉遣いの女医、ミラン。半ばやけくそ気味に包帯を締め付けるものだから、少年は余計に痛がっている。

「しょうがねえだろ？ サライナの奴、容赦しねえんだから！」

「教官を『奴』なんて言うんじゃないっ！」

そう言いながら、留めおわった包帯の巻かれた腕をパンツと叩いた。

「いてえっ！」

飛び上がるように立ち上がり、少年は包帯の上から腕をさすった。

小柄な体は光が弾けるように輝き、健康的な色に包まれている。

「サク、また来たら承知しないからね！」

言いながらミランは、懐から煙草を取り出して火を点けた。――

つにまとめた金髪の束からひと束が零れ落ち、顔の頬をくすぐっている。それを細い指先で鬱陶しそうに耳に掛け、眼鏡を上げた。

サクは口を尖らせて反論した。

「怪我するのは元気な証拠だろ？」

「屁理屈を言うくらい元気なら、早く授業に戻りな！」

ふうっつと白い息を吹きかけると、サクは逃げるように扉の方へ駆けた。

すると、偶然にもサクの目の前でガラツと扉が開き、背の高い細身の少年が姿を現した。ストレートで少し長めの紺色の髪が顔を撫で、細縁の眼鏡とその奥の細い紺色の瞳が、知的な印象を与えている。

「シリウ！」

驚いたように見上げるサクに、シリウはため息をついた。

「また怪我をしたと聞きまして」

丁寧な口調で呆れたように言われて、サクは

「わはははは！」

と笑ってみせながら、黒髪がビンビンはねた頭をかいた。

「ハハハじゃないでしょうっ。そのうち怪我だけじゃ済まなくな

りますよ！」

静かな口調で、説得するように言うシリウ。そこにミランが近

づき

「ほらほら、説教なら外でやってくれ！ やかましい！」

と二人の背中を押して追い出すと、勢いよく扉を閉めた。

「わわわっ！」

「あ、すみません、ミラン先生！」

二人の声は、ミランが扉を閉める音にかき消された。閉じた扉の前で、ミランはフンツと鼻を鳴らして腰に手をあてると、小さく笑みをこぼした。

「元気な証拠、か。よく言うよ！」

嬉しそつに呟くと窓辺に寄り添った。そして一変、切ない表情で「死んだらおしまいなんだよ……」
と呟いた。ミランが吐いた白い煙が、窓から見える外の訓練風景を曇らせた。

「ほらみなさい。また次に行ったら倍返しされるかも知れませんか」

シリウがからかうように笑う。冷静そうな白肌の表情がニヒルに歪む。サクは白い包帯が映える褐色に日焼けした腕を一回転させた。

「でもオレ、母ちゃんみたいな感じがして、好きだぜ！」

ニツと笑うと、白い歯が眩しい。そんなけるつとした表情のサクを見下ろすようにシリウも微笑み、並んで廊下を歩いた。この会話もいつもの事なのだ。

元気の塊、十五歳のサク・パクオラと知的で冷静な十九歳のシリウ・ソム・イクシード。このデコボココンビは、まるで兄弟のよう

うにいつも一緒に居る。

出会いは、サクの入学の時だった。

入学試験と称して、体力測定をしていた時の事。小柄で元気が良く、豪快に動き回るまでは良かったのだが、勢い余って壁に激突したサク。当たり前が悪く気絶していたサクを医務室まで連れて行ったのが、偶然居合わせたシリウだった。

目を覚ましたサクが、何の反省も無くくっつくのない笑顔を見せて礼を言ったのは言うまでもない。

シリウはそれから、何かにつけてサクの傍にいたようになった。

周りからは暴走するサクのお守り役に見えたようだが、シリウにとっては、何事にも真っ直ぐで、凝り固まった考えを持たない彼に

魅了されたのかもしれない。

「午後から試験があるんでしょう?」

「おう! 今回もバツチンだぜ!」

シリウの問いに意気揚々と拳を上げるサクの鼻つつらを指先で弾いた。

「なあにが! また怪我をしないように!」

弾かれた鼻には、既に絆創膏が貼ってある。他にも頬や膝……

一体どうしたら、と思うくらい、あちこち怪我だらけのサク。

「分かってるよ!」

サクは舌を出し、アカンベーをしながら走っていった。シリウはその後ろ姿を見送りながら、呆れたように息をつき、眼鏡を上げた。

出会は闘技場

生徒たちの歓声が、学校裏の闘技場を包んでいる。

月に一度の試験場でもあり、国内外から集まってきた要人の使者たちの目に留まればスカウトもされる場所だ。

そして試験に落ちれば、即退学。

まさに生徒たちの目の色が変わる時。 皆、命を掛けて試験に挑む。

闘技場に入場した個人またはグループに見合った対戦相手を、試験官シャルサムが用意する。 それは人であったり、幻獣の姿をしていたり、大きかったり小さかったり、様々だ。

幻獣とは、高等武道のひとつである幻武道の達人であるシャルサム教官が創りだした対戦用のケモノである。 種類は数十種類あり、属性も様々で、生徒たちは戦いの中で幻獣の弱点を調べ対応することを要求される。

相手を降参させるか戦意喪失、あるいは命を取るか消滅させれば合格。 怪我を負って試合続行が出来なかった場合、それは中止され、改めて再試験を受けることになる。 また、対戦相手に怖気づいて生徒自ら逃げたりすれば、即刻失格となる。 再試験を拒否または失格となった場合は、規則によって数日のうちに寮から荷物をもとめて学校を出なくてはならない。

生き残るために、夢をかなえるために、生徒たちは毎日を命懸けで生きているのだ。 そして、そうでなくては外の世界では生きていけないということその身に教えているのだ。

無論、試験に出てくる幻獣のような浮世離れしたような獣は、現実には存在しない。 養成学校の中で厳しく訓練することで、世界に出たときに自信となり、実力が発揮出来るようになるという。

すべては、ファンネル校長の理念に基づいた教育方針である。

闘技場の真ん中で、自身の三倍はあろうかという巨体が地響きを立てて倒れた。歓声が降り注ぐ中、余裕の表情で戻ってくる姿があった。

さっきまで医務室で包帯を巻かれていた、サクだ。

彼は行くときと同じ笑顔でシリウの前に戻ってきた。シリウは観戦席で優雅にコーヒーを飲みながらサクを迎えた。

「余裕、でしたね」

サクは

「当たり前だ！」

と笑いながらシリウの隣に座り、手にしていたドリンクに口を付け、美味しそうに飲み干した。

「あなたはあらゆることを無視しますからね……」

怪訝に横目で見るシリウに、既に空になったボトルをもてあそびながらきよとんとしているサク。

「さっきの幻獣ザク口は、見たところ、体液を飛ばして相手の足を取り、相手を動けなくしてから攻撃してくるようでしたが……地面に剣を突き刺して足場にするとは……普段剣を使わないサクが、と少し驚きました」

「だってさ、ベトベトしてイヤじゃん！」

本能で動くところは、誉めべきなのか。

「勘が良いのは羨むべき本能ですが、もう少し識^{シキ}武^ブ道^{ドウ}を学ぶと、効率よく戦えると思うのですがねえ……」

少し残念そうに言うシリウに、サクは眉をしかめた。識^{シキ}武^ブ道^{ドウ}とは、知識を重んじて戦いを進める戦い方で、効率よく戦うためには相手をよく知ることと教えられている。

「オレ、勉強なんか大キライだ！　じつと座って話聞いてさ、つま

んねえんだもん！」

フンツと鼻をならし、両手を頭の後ろに組んだ。

「ま、今回はどこも怪我をしていないようですし、良しとしましよ
う」

シリウは呆れたように微笑んだ。

その時、歓声が一際大きくなった。

二人の目も闘技場に注目した。

一人の少年が巨大な幻獣オオクトを相手にしていた。少年を捕まえようと、長い触手を何本も鞭のようにしならせて襲い掛かる中を、いとも簡単そうに縫いながら、一本一本を確実に切り落としていく。そのたびにオオクトは悲鳴のような奇声をあげ、やがて体一つになった。少年はその目の前に立ち、静かに剣をその鼻つらに対して向けた。静止した切っ先の前で、オオクトはしなだれたように動きを止めた。

「勝負あり！」

審判員である教官が声をあげた。鮮やかな戦い方に、割れんばかりの歓声が闘技場を揺らした。

「す、すげえ！」

サクは目を丸くして身を乗り出した。

「一体、アイツ何者だよ！ シリウ、知ってるか？」

興奮状態で言うサクをあきれ顔で見つめ、シリウが答えた。

「知ってるもなにも、校内で知らない人は居ないと思っていただけですが……ま、仕方ないですね、あなたはいつも試験のたびに怪我をして医務室に担ぎ込まれていますから」

「いつもじゃねーよ！ なあ、アイツ何者なんだ？」

急かすサクに、シリウは指先で眼鏡を上げた。

「彼はカイル・マチ。静武道では彼より上に出られる人は居ませ
ん。他にもいくつかの教育を受けているようですが、僕も細かい

ことまでは知らないんです。なにしろ、いつも一人で居て、誰とも話さないらしいですから」

「へええ〜！」

【静武道】^{セイブドウ}とは、激しさを主体とする【動武道】^{ドウブドウ}とは逆に、冷静さを失わず、常に平常心で闘いをする武道である。どちらも闘い勝利をつかむことには変わりないが、うまく両方を組み合わせるほどに強さを生み出すとされている。

他に合気道を主体とした【波武道】^{ハブドウ}や身軽さを重視する【飛武道】^{ヒブドウ}などがあり、生徒達はそれぞれに自分の得意分野を生かしながら自分を高めていくのだ。

サクは目を輝かせて、涼しい顔をして汗を拭きながら一人で控え室へと戻っていくカイルを見つめていた。誰も一緒に歩く者は見当たらない。だがカイルは、それを当たり前のように平然と奥へと入って行った。

「オレ、アイツを仲間にする！」

「えっ？」

驚くシリウに、熱弁するサク。

「オレ、アイツのこと気に入った！ 仲間にしようぜ！」

今度はシリウに強制とも言えるような同意を求めた。

サクが勢いづくのは今に始まったことではない。喧嘩っ早く、売られた喧嘩は買いまくる。おかげで、サクが通るとあちこちで騒動が勃発する。だが、誰かを仲間にしたいと言うのは初めてのことだった。

『これも、サクの勘ってやつでしょうか？』

シリウはサクに頷いた。

「あなたの直感に、異論はありませんよ」

「よっしゃ！ 決まりだっ！」

拳を上げて早速走っていくサクの背中を見ながら、シリウもゆっ

くりついでいく。

『でも、彼は一筋縄ではいかなさそうですねえ……』
シリウは小さく笑った。

サクが闘技場の控え室を覗いたときには、すでにカイルの姿は消えていた。近くにいた生徒に尋ねても、どこへ行ったのかは誰も分からなかった。

「一体どこに行ったんだあ？」

サクは思い込んだら一直線に突き進む。試験の疲れなど忘れたようにカイルを捜し回った。

一方、シリウは喫茶室で一人本を読んでいた。

試験中は、各自、自由な時間を過ごせる。

シリウはサクの好きにさせようとするつもりなのだろう。窓からは午後の心地よい日差しが降り注ぎ、体をやさしく暖めている。若干眠気を覚えて小さくあくびをし、また本へと視線を落とした。

「カイル、どこだあ〜！」

サクはもはや、ヤケになりながらカイルを探している。校内のどこを捜しても居ないのだ。これはもう呼ぶしかない、ひたすら名前を呼びながら走り回っていた。周りの生徒たちは最初

「またサクが暴れ回ってるよ……」

と呆れた表情で見えていたが、すぐに気にしなくなった。いつものこと。元気いっぱいいなサクは、ひたすらカイルを捜し回っていた。

「おう、サクう、何してんだ〜？」

野太い声がサクを捕らえた。サクは体を大きく揺らして止まった。

「んだよ、ナトウ？ 今忙しいんだ。喧嘩なら後な！」

軽く受け流して手を振り、走り去ろうとするサクを、ナトウ・バ

タウサが引き止めた。

「お前が探してる奴なら、さっき屋上に行ったぜ！」
がっしりした褐色の体を揺らすナトウ。

「何、ホントか？ 屋上はまだ行ってなかったぜ。ありがとよ！」

サクは礼を言つと、手を挙げて走り去った。ナトウは、両端に従えた子分たちと顔を見合わせて含み笑いをした。

カイルを探して三千里

屋上の扉を開くと、眩しい光がサクの視界を塞いだ。

「カイル〜！ いるかー？」

早速名前を呼びながら辺りを見回したが、返事はなかった。人の気配も無く、静かな空間が広がっていた。

「んだよ、ここにもいねえのか？」

残念そうに呟きながら戻ろうとしたサクが、驚いて足を止めた。

「ナトウ！」

サクの目の前に、さっきカイルの居場所を教えてくれたナトウがにやけながら立ちはだかっていたのだ。その脇から、これみよがしにと二人の子分も顔を出した。サクは一步下がり、睨んだ。

「お前、嘘言っただろ！」

「ココなら誰にも邪魔されねえからな！」

そう言いながらパキパキと指を鳴らした。嬉しそうに顔をにやけさせている。

「そういう事がよ！」

じゃあしょうがない、といった風にサクも構えた。

「こいつ！」

サクの声に、ナトウはイヤらしく頷いた。

「そうこなきやな！」

ぶんつと風が唸ったと思うと、ナトウの巨体がサクに向かって突進してきた。サクはそれを軽々と交わすと、その後頭部に蹴りを入れた。

「っ！ のやろっつ！」

ナトウはよろめきながらも足を踏張り、振り向いた。そして顔面に迫るサクの足を丸太のような両腕でガードし、払った。

「っ！」

サクは回転しながら着地すると、ペロツと唇を舐めて笑った。

「まだまだだぜ！」

足元に力を込め、ナトウへと飛び出すサク。だがその体はナトウへは届かず、硬い床に容赦なく叩きつけられた。

「！　なんだっ？」

しこたま鼻つつらを叩き付けたサクは、顔をしかめて足元を見た。その両足には、いつのまにか鎖ガマが巻き付いていた。重い金属音が床を這う。

「お前ら卑怯だぞ！」

上半身だけ起き上がり睨み付けるサクの視線の先には、にやけながら見下ろす子分たちが立っていた。

「よそ見するな！　これは戦いだぞ？」

ナトウの声がしたかと思うと、サクの脳が揺れた。後ろから襲ったナトウの腕が、サクの側頭部を直撃したのだ。

「！」

視界が白くなり、体中に痺れが走った。

「やべえ……………」

そう思ったとき、目の前を人影が横切った。その後には子分たちが次々に倒れ、次にナトウのうめき声がサクの耳に届いた。

「昼寝の邪魔をするな」

その声は、サクが聞いたことのないものだった。

「誰……………だ……………？」

振り向くこともできず、サクはその場に崩れた。

サクが次に目を覚ましたとき、その体はベッドに寝かされていた。『医務……………室？』

ぼんやりする頭で見慣れた天井を見つめっていると、仕切られているカーテンが開いた。

「目が覚めたかい？　ったく……………どうせ喧嘩するなら勝って来な！」
ミランが憎まれ口を叩きながら近づき、煙草を吹かしながら腰に

手をあてて呆れたように見下ろした。

「そうだ！ オレ、ナトウと喧嘩してたんだ！」

あわてて起き上がったサクの頭を激痛が走った。

「！ つ痛う！」

「まだ動かさないほうがいい。脳震盪を起こしてたからね」

ミランがサクの額から落ちた氷袋を拾いながら言った。

「三人相手にしていたらしいじゃないか。一人じゃ無理だと思ったら、潔く逃げるのも戦いだよ！」

眼鏡の奥から冷たい目で見下ろし、氷袋をサクの額に落とした。

ひんやりとした感触と共に、氷の塊がサクの頭を直撃した。それを軽く押さえながら、サクは天井を睨んだ。

「次は負けねえ！」

「またそんなことを言って！」

ミランは脳震盪を起こしたばかりのサクの頭に容赦なくゲンコツを落とした。

「そついや、あいつらは？」

叩かれた頭をさすりながらサクが尋ねた時、扉が開いてシリウが現れた。

「シリウ！ お前が助けてくれたのか？」

「いいえ。今カイルに、あなたがココで寝てるからって言われたから来たところです。またナトウと喧嘩したんですね？」

シリウは眉をひそめて首をかしげ、眼鏡を上げながらため息をついた。サクは呟いた。

「カイル？」

「そう。カイルがお前を担いで、ナトウは子分に担がれて、仲良く医務室へ入ってきた」

ミランも呆れた風に煙草をふかしている。

「じゃあ、ナトウは！」

サクはあわてて周りを見渡したが、周りのベッドは空だ。すぐに眩暈を起こしてこめかみを押さえた。

「さつき出ていったよ。あんたみたいに減らず口をたたきながらね」

ミランは面倒くさそうに言うと、もう寝な、とサクをベッドに押しつけるように寝かしつけた。こうでもしないと、サクはまた飛び出して行ってしまふ。サクはまだククラクラする頭を冷やしなから、天井を見つめた。

「カイルが……？」

そう言えば薄れゆく意識の中で、カイルは三人をいとも簡単に倒していた。

「あいつ……絶対仲間にするんだ……」

何故そう思ったのか、サク自身にも分からない。だが、一緒に居たらなんだか楽しそうだということを直感で感じていた。サクは再び気を失うように眠りについた。

夜の屋上は、昼間のぬくもりを忘れたかのようにひんやりとした空気に包まれていた。虫の鳴く音が遠くに聞こえる。カイルはいつものように鉄製のハシゴに座り、うずくまるようにして微動だにしない。時折吹く緩い風が、鼻先まで伸びる藍色の前髪を揺らす。

「こんなとこに居たのかぁ！」

静寂は一瞬で壊された。その元気な声の正体は、昼間からカイルをずっと捜し続けていたサクだった。カイルは驚いた様子もなくゆっくりと目を開けると、サクを見上げた。長めの前髪から覗く黒目が月の光を反射して煌めいている。どこか、涙を湛えているように揺れていた。

「泣いていた……？」

サクの後ろについてきたシリウがそう感じたが、言わないことにした。カイルは無言でサクを見つめている。サクがにっこり微笑んでカイルの前にしゃがみこんだ。

「昼間はありがとな。 お前が居なかつたら、オレ、ぼこぼこにされる所だったぜ」

カイルは答えずに目を背けたが、サクはかまわずに続けた。

「カイル、オレたちと仲間になろう！」

楽しそうに微笑み続けているサクを再び見て、カイルは吐き捨てるように言った。

「俺は誰ともつるむ気はない」

そう言っただけで立ち上がり

「昼寝の邪魔をされたから手を出したただけだ。 勘違いするな」

と、逃げるように立ち去ろうとした。

「カイル！ オレはあきらめねえからな！」

サクはその背中に声を投げたが、振り向きもせず、カイルは屋上の扉を開けて去っていった。

「オレは絶対あきらめねえ！」

独り言のように言うその顔は、とても楽しそうな表情をしていた。シリウは、しばらく様子を見ることにした。

それから毎日のように、サクはカイルの前に現れた。木の枝から降りてきたり、屋上で待ち伏せをしたり、武道場で待ち伏せしたりと、手を変え品を変えては何度も声をかけたが、カイルの答えは変わらない。

「しつこく来ても無駄だ。 俺の気持ちは変わらない」

「いや、お前はオレの仲間になるんだ！」

その自信はどこから来るのか……サクははっきりと言い切る。

「何故俺を？」

あまりのしつこさにため息をつきながら、カイルは静かに聞いた。

「お前、いい奴だから！」

にっと笑うサクから、カイルは焦ったように目を背けた。

「そんなこと、お前に分かるか！」

「分かるよ！」

「一度助けただけで、勘違いにも程がある！」

呆れたように言うカイルに、サクは手を振った。

「違う違う。カイルの目が、そう言ってるんだ」

「？」

「それでいいじゃん！」

サクは微笑んだ。カイルは冷たい視線を送って踵を返すと、その場を離れようとした。

「カイル！」

「勝手に人をいい人呼ばわりするな！」

立ち止まったカイルは振り返らずに冷たくそう言って、立ち去ってしまった。

「オレは絶対あきらめねえからな！」

ぶつつと頬を膨らませて見せたが、カイルに届くことはなかった。

サク軍団結成！

「今度はあんたか……」

屋上に通じる階段を上がる途中、カイルの前に居たのはシリウだった。手摺りにもたれ、長い足を投げ出す彼をすり抜け

「何度来ても同じだ」

と屋上への扉を開いた。眩しい日差しが一瞬視界をさえぎる。

カイルはその眩しさにも慣れた顔で外に出ると、いつも座っている場所に向かった。

「サクは、たまに核心を突くんですよ。勘が鋭いというか」

カイルはついてくるシリウを気にする風もなく歩を進めた。シリウは慌てる素振りもなく、距離を保ちながらカイルについていく。

「それに、あきらめが悪い。悪い人じゃないんですけどね、少々無鉄砲な所もある。結構、お守りをするのが大変なんですよ」

冗談交じりに言うシリウを無視して、カイルは無言でハシゴに座った。山肌を吹き上げる風が心地よく頬を撫でる。カイルの前髪を、撫でるように揺らしていく。

「そこで、相談なんです……来週、試験が行われるのは知っているとありますが、その試験の間だけでも一緒に組んでいただけませんか？」

それは年に一度特別に行われる試験で、ソラール兵士養成学校の生徒三人以上でグループを作り、協力しあいながら目的を達成しなくてはならない。闘技場で一人で受ける試験と違い、学校の外で行う、少し規模の大きな試験だ。

「それなら、去年と同じ奴を誘えばいいじゃないか」

カイルは肘をつき、シリウを見ようとせせず返すと、彼は眼鏡を上げながらため息をついた。

「去年の彼はもうココには居ないんですよ」

思わずカイルがシリウを見た。前髪が邪魔をしているが、少し

驚いているように見えた。

「無事に卒業したんですよ」

シリウが微笑むと

「ああ……」

と、どこかホツとした表情でまた目を背けた。

「あなたは去年、この試験を棄権していますね？ 何故です？」

「言ってるだろう？ 俺は誰ともつるむ気はないと」

カイルは面倒臭そうに答えたが、シリウは静かに続けた。

「あなたはそのことで、かなりの減点を受けている」

「何が言いたい？ 説教をしにきたのか？」

不機嫌な表情で睨むカイルに、シリウは微笑みながら手を振って否定した。

「そんなつもりはありませんよ。この養成学校では、個人がどう行動しようと、どう思おうと自由ですから。ただ、僕たちは最低もう一人見つけないと、困ったことになるんですよ」

「俺じゃなくても、他に誰か居るだろう？」

カイルは立ち上がった。もはやそれ以上は聞きたくないという態度だ。

「カイルがいいんです」

「何故だ！」

「分かりません」

「はあ？」

「サクに聞いてみてください。今ダメでも、今度はサクがまたあなたに頼みに来るはずですよ。あなたも、しつこくされるのはイヤでしょうし、何度も断るのは面倒臭いでしょう？ 試験をクリアするまで。ね」

シリウは優しく微笑んでいる。カイルはしばらく黙った後、ため息をひとつついた。

「やったあ〜〜！」

部屋の中にサクの歓喜の声が響いた。

「カイル、よろしくなっ！」

はちきれんばかりの笑顔で手を差し出すサクを、怪訝な顔で見るカイル。

「お前が入ってくれば百人力だぜ！」

サクはカイルの手を取って強引に握手をしようと、嬉しそうに拳を握った。

「なんであんなに喜んでるんだ？」

あっけに取られているカイルに微笑むシリウ。

「さあ。でもあれは、かなり最高潮みたいですよ」

シリウは小さく笑った。シリウ自身も、ここまで喜びをあらわにするサクの姿を見るのは珍しいことだった。

そんなバツク宙をしながら喜びを体で表現しているサクに、声が飛んだ。

「サク！ あんたまた怪我するわよっ！」

甲高い声がサクのバランスを崩し、顔から着地してしまった。

「っ！ 行ってえ〜なあ！ なんだよ？」

あぐらをかいて鼻を撫でるサク。シリウやカイルたちの前に、ひとりの少女が立っていた。栗毛を後頭部でひとつに束ね、薄手の布で作った短めのワンピースから細く長い足がすらりと伸びている。茶色い瞳でサクを睨む。ヤツハ・キナソン。十五歳だ。

「ヤツハ！ これはお前の性だかな！」

これ見よがしに赤く擦り剥けた鼻を指差すサクに、ヤツハは勢い衰えずに言い返した。

「あんたが無駄にはしゃいでるからでしょうが！ 勝手に人の性にしないで！」

そう言いながら、絆創膏を懐から取り出して素早く貼った。そして離れぎわに指で弾くと、サクは痛みでのけぞった。

「っってえな！」

「ふんっ！」

二人のやり取りを見つめながら、カイルが呟いた。

「彼女は？」

「あの子はヤツハ。専ら医武道イブドウに通ってます。サクの幼馴染で、入ったときから仲が良いんですよ」

「「良くない！」」

いきなりサクとヤツハに否められ、たじろぐシリウとカイル。

【医武道イブドウ】とは、闘いに盛り込んだり、万が一の怪我や病気にも対処できるように医学を学ぶ授業のことだ。ツボや急所から、生物学、東洋・西洋医学の分野まで、幅は広い。

ヤツハは闘いに利用するよりも、人を助ける方の医学を専攻していた。勿論、普通に闘えるだけの実力は持っている。

「あたしはねえ、サクが怪我ばかりしてるから、ミラン先生に言われてきただけ！ 試験の間だけでも、サクを監視するようにって！」

「監視って何だよ？ それじゃ、俺たちと一緒に試験を受けるつもりか？」

ヤツハは腰に手をあてて大きく頷いた。

「あたしも誰かと組んで試験を受けなきゃならないし。ちょうどいいわ。一緒に試験受けてあげる！」

「いやだよ！」

いきなり不機嫌になるサクの膨らんだ頬を両手でつぶし、ヤツハはシリウの方を見た。

「それに、シリウとも一緒だし」

と、にっこりした。ヤツハはシリウの事がお気に入りだった。

サクをからかいて来たついでと言っては、シリウに勉強を教えてもらったりしている。そして次に、シリウの横にいるカイルに気付くと、目を輝かせた。

「あっ！ あなた、カイル・マチね？ どうしてここに？」

それにはシリウが答えた。

「彼は、僕たちと組んで試験を受けることになったんですよ」

「本当に？ まあ！ こんな偶然ってないわ！ 校内一優秀を争うシリウとカイルと一緒に組むなんて、素敵すぎる！ よろしく、あたしはヤツハよ！ ヤツハ・キナソン！」

ヤツハは、握手しようとして半ば強引にカイルの手を取った。

「え？」

一瞬、ヤツハが不思議そうな顔をしたが、すぐにいつもの笑顔に戻った。だがカイルは、無表情のまま踵を返して立ち去ろうとした。

「どこに行くんだよ？」

サクの問いに、カイルは少し振り向き

「試験には最低三人。 もう揃ってるだろ？ 俺は外れさせてもらう」

と冷たく返した。

「なんでだよ！ 三人以上なら何人でもいいんだぜ！ カイルが外れることはないじゃん！」

あわてて立ち上がるサク。 シリウもカイルに声をかけた。

「カイル、男が一度約束した事を破って、許されると思っているんですか？」

静かだが、気迫のこもったシリウの言葉だった。 その言葉はカイルの心に深く突き刺さった。 しばらく無言で背中を向けていたが、カイルは振り向いてため息をついた。

「……分かった」

「やったぜ！」

「カイルが仲間になるなんて、思ってもみなかったわ！ 嬉しい！ 今度はサクに加えてヤツハまでが喜びをあらわにしていた。

「もう少し静かなパーティーだと、いいんですがね……」

シリウが呆れながら言う横で、カイルは表情も変えず、黙ってそ

の様子を見ていた。

「お前、サクのパーティーに入ったらしいな！」

廊下を歩くカイルの前に、大男ナトウが立ちはだかっていた。

周りには誰もいない。カイルとナトウだけが、弾かれそうなオーラを漂わせて対峙していた。

「そこに、ヤツハちゃんも入ったそうじゃないか？」

褐色の太い腕がカイルの瞳に映る。無言のカイルに、ナトウは迫った。

「どうだ？ 俺とパーティー、変わらないか？」

と、にやけた顔で見下ろした。

「お前のその細腕じゃ、なんの力にもならんだろう？ それに、最初は嫌がってたそうじゃないか。お前ほどのいい成績なら、たかが一つ試験を落としたって大したことないはずだぜ？ 去年だって棄権したんだろ？」

ナトウの説得を黙って聞いていたカイルは、一言返した。

「断る」

「なんだと？」

今までナトウなりに微笑んでいた頬がピクツと引きつった。カイルは気にする風も無く、そのまますれ違おうとした。

「ちよつと待て！ 今何て言った？」

見下ろしながら凄むナトウに、カイルは表情も変えずに淡々と答えた。

「どうせ女目的なんだろう？ そんな不純な動機と脅して俺が頷くとも思っただのか？」

「このやろつ……せつかく下手に出てやってたのに……！」

拳を握り震えるナトウを置いて、カイルは淡々と場を離れようとした。ナトウはその背中に、恨みぶしを吐いた。

「お前も堕ちたもんだな。寂しくなって仲間が恋しくなったのか

？ 女みてえなツラしやがっ」

全部言い終わる前にナトウの口がつぐみ、顎が上がった。その喉元にはナイフの切っ先が突き立てられ、すぐ下には、カイルの睨む瞳がナトウを捕らえていた。

「二度と『女みたい』だとか言うな。次は殺す」

静かに言う中に、確かに殺気が漂っている。ナトウは小さく頷くしか出来なかった。カイルが去った後、ナトウは膝を折った。

『なんてえ殺気だよ？ 殺されるかと思っただぜ……』

ナトウの蒼白な頬に、一筋の冷や汗が伝った。

試験開始！

試験当日、生徒たちはグラウンドに集められた。それぞれのグループが、お互いに睨みを利かせている。試験は命懸けなのだ。その中には勿論、サクたち四人も揃っていた。

「目標は、山頂のほくらにある札を取り、ここに持つてくること。途中、様々な幻獣や罫を仕掛けてある。それらをクリアして札を持ち帰って来たグループに、栄誉と特別得点を与える。至るところで試験官たちが監視している。正当な戦い方で、目標を達成せよ！ 期限は明日の正午だ！ 検討を祈る！」

試験官の合図と共に、それぞれが飛ぶようにグラウンドを去っていく。あつという間に生徒たちは消え去り、一陣の風が吹いた。

「さて、我々も配置に着くでしょう」
試験官たちも、自分の持ち場へと風のように走り去った。

サクを先頭に、ヤツハ、カイル、シリウが木々の間を走り抜けていく。

軽装に加え、武器も軽いものを身につけている。今回はスピードも重視しているので、重い武器は足手まといになる。中にはどでかい剣を振り回す生徒たちもいたが、大きく遅れを取ってしまった。それを横目に見ながら、時折木々の間から飛び出してくる矢や降ってくる網などを器用に避けながら、四人は順調に山頂を目指していく。普通に行けば二時間もかからない道のり。それを約一日半の時間を設けたというのは、それなりの足止めを食らうということだろう。能天気なサクを筆頭に、頭脳明晰なシリウが計画を練り、カイルとヤツハが従う。パーティーとして、まとまっ

器用に、飛んでくる矢を避けながら、シリウがカイルに話し掛けた。

「カイル、今朝医務室に入っていくのを見ましたが、どこか具合でも悪いのですか？」

数十分走り続けているが、息が上がることもなく普通に会話できる。日々の鍛練の成果だ。カイルはシリウに少し驚いた顔をしたが、すぐに表情を戻して

「いや、なんでもない」

と、軽く返した。シリウは少し首をひねったが、それ以上は追求せず

「何かあるか分かりません。出来るだけ先を急ぎましょう！」
と皆に声をかけた。

その時

「！」

いきなり八方からの、矢の集中攻撃にサクが狙われた。

「うわっ！」

その体は地面に叩きつけられ、勢い良く落ち葉をはねあげた。

「サク！」

驚いたメンバーがサクの周りに駆け寄り、ヤツハが診ている間、シリウとカイルは周りを伺った。またいつ攻撃されるか分からない。

「ヤツハ、どうですか？」

シリウの問いかけに、ヤツハの気弱な声が返ってきた。

「ちよつと厳しい……」

「！」

思わず二人が振り向くと、そこにはサクが青い顔をして横たわっていた。

「サク！」

珍しく動揺した口調でシリウが駆け寄った。カイルは耳を傾けながら周りを警戒している。シリウとヤツハの傍らで、サクは腕を押さえて動けないでいる。

「矢に何かが塗ってあったんでしょうか？」

シリウが焦った口調でヤツハに聞くと、彼女は言いにくそうに口を開いた。

「多分、フルンザが……こんな珍しい毒の解毒剤は持ち合わせてないわ……」

悔しそうに唇を噛むヤツハ。

「放っておくと、どうなるんだ？」

カイルが視線を周りに配りながら、冷たい口調で尋ねた。

「サクを放っておくってどういうの？」

驚き睨むヤツハ。

「どうなるんだ？」

カイルは少し強い口調で同じ事を聞いた。

「毒の量にも寄るけど、もって一日……」

ヤツハの気弱な口調に、カイルは抑揚の無い口調で言った。

「材料を持ってきたら、解毒剤を作れるか？」

「カイル？」

シリウも怪訝な顔をしてカイルを見た。

「確かフルンザには、ザネルの葉を煎じてなんとかなると思ったが

……」

視線は周りを警戒しながらのカイルの言葉に、ヤツハは驚いた。

「そう、その通りよ！ でもその薬草は、この辺りではカタナ谷にしか生えていないの。やっぱり学校に戻るしか……」

ヤツハは悔しそうに言った。

「なんとか、なるだろ」

カイルは周りを警戒しながら背中の中の荷物を下ろし、必要そうな道具だけをポケットに詰め込んだ。

「まさかカタナ谷に行くつもりなんですか？」

驚いて見上げるシリウに、カイルは頷きもせずには答えた。

「戻って試験を落とすより、出来るだけやれることをやったほうが良いだろう。きつと試験官たちもどこかから見ている。この状況も計算されたものだとしたら、このまま戻るのは悔しいだろう？」

カタナ谷は山の裏手にある。断崖絶壁で、誰も寄せ付けようとしなない雰囲気を漂わせた風貌から、カタナ谷と名付けられたらしい人や動物が寄り付かないため、珍しい草花が生えていることもある。サクの状態を治すには、カタナ谷に生えるザネルがどうしても必要なのだ。

一刻も早く採取しようとして走りだしたカイルの後ろに、ぴつたりとシリウがついてきた。それを察知し

「サクが心配じゃないのか？」

と、シリウを振り向かず冷たく言うカイル。ひよいひよいと枝を渡りながら、シリウは眼鏡を上げた。

「心配するだけでは何もならないですからね。それに、サクにはヤツハがついていますから」

サクは木の根に体を委ね、ヤツハに見守られながら安静にしている。その体中を冷や汗が覆い、息も絶え絶えだ。ヤツハはその汗を拭きながら、二人がザネルを採ってきてくれることを祈るしかなかった。

カイルとシリウは、ほどなくしてカタナ谷についた。

「形は分かるんですか？」

シリウの問いに、カイルは谷を覗きながら答えた。

「辞典を見た。たぶん間違いない……アレだ」

二人が断崖絶壁の端に寝そべり下を覗くと、目も眩むような谷底への途中に、岩に挟まれるように一輪の花が咲いている。真っ赤な花びらと、大きな葉が特徴だ。だが、周りの足場が心もとないのは、誰が見ても容易に判断できた。

「厳しいですね……」

悔しそうに唇を噛むシリウの横で、カイルが静かに立ち上がった。
「俺が行く。あんたは上から引っ張り上げてくれ」

と言いながら、自身の体に持つてきたロープを巻き付けた。シリウは素直に従い、近くの木にもう片方の端をしっかりと縛り付けた。自分より小柄なカイルが行った方が、リスクが小さくなるのは分かっていた。

「無理だと思ったら、すぐに戻ってきてください！」
と言うシリウに

「頼んだ」

と一言だけ残して、カイルはするすると下りていった。シリウが心配そうに見守るなか、カイルは器用に岩を伝い下り、見事ザネルを手にした。

「今から上がる！」

カイルの声にシリウはロープを握り、引っ張った。タイミングを合わせてカイルも岩を蹴り、その姿はすぐに断崖絶壁を登りきった。

「お見事です！」

汗ばむ額を拭いながら微笑むシリウに、膝をつくカイルは照れるように少しだけ微笑み返した。

「行こう！」

照れくささを振り切るように立ち上がりかけた時、突然カイルの足元が崩れた。

「！」

後ろのめりに倒れていくカイル。

「カイル！」

全てを吸い込むかのように深く刻まれたカタナ谷に、シリウの声がこだました。

リンゴの思い出

一方ヤツハは、木の根に力なくもたれて浅い息をしているサクを目の前に、何も出来ないでいた。

「こんな時なのに何も役に立てないなんて……あたしは毎日、一体何をやってたんだろ……」

時折サクの額に滲む汗を拭いてやりながら、ヤツハは泣きそうな顔をしていた。すると、サクの手がヤツハの指に触れた。

「？」

サクの顔を覗くと、彼は脂汗をかきながらも笑顔を作って見せた。

「サク？」

ヤツハは涙を堪えながらサクを見つめた。小さく頷くサクに

「そうだね、サクも辛いんだよね……ごめんね、あたしがしっかりしなくちゃ……」

そう言って、ヤツハは涙を拭いてサクの手をしっかりと握った。

「お前、名前は？」

「……ヤツハ……」

見上げるサクに震える声で答えたのは、八年前のヤツハだった。

サツフル村

サクとヤツハの生まれ故郷だ。

山に囲まれ、広い敷地内では牛や羊がのんびりと過ごしている。人口100人ほどの、広大な敷地を持つ村。

二人はこれが初対面だった。

消え入りそうな泣き声に偶然気付いたサクが駆け付けると、真っ赤に熟れたリンゴがいくつも成っている木に、必死でしがみついているヤツハを見つけたのだった。たいして太くない木の幹に腕を巻きつけて、ヤツハは登ることも下りることも出来ないでただ泣いていた。涙をこぼし続けるヤツハに、サクは両手を口の横に沿えて声をかけた。

「ヤツハ！ ゆっくり右足を下の出っ張った所に乗せるんだ！」
「う……」

涙で視界が遮られ、足元もおぼつかない。だが、サクの言葉を頼りに少しずつ足を動かした。

「そうそう！ 次は左足をその下にー」

その時、ヤツハの小さな足がズルツと踏み外し、ヤツハの体は木から離れた！

「きゃあっ！」

ドサツ！

「いってえ！」

ヤツハの体の下で、サクがうめき声を上げた。サクは落ちてくるヤツハを受けとめようとしたが、勢い余って倒れてしまったのだ。

「ご、ごめんなさい！」

ヤツハは慌ててサクの上から下り、涙で真っ赤になった目で頭を下げ、謝った。サクはむくりと起き上がると、ヤツハに笑顔を見せた。

「こんなの、何でもねえよ！ それより、なんで木になんて登ってたんだ？」

「お母さんにあげようと思って……」

ヤツハは木を見上げた。葉の間から差し込む陽の光に照らされ

ながら、真つ赤なりんごの実が揺れている。

「この木、バロンおばさん家のだろ？ 見つかったらすぐ怒られるんだぜ！」

サクが身を縮めた。 何度か怒られたことがあるのだろう。 思
い出し奮いしている。

「でも……」

ヤツ八には、家で寝たきりになっている母がいた。

父は、ヤツ八が生まれてすぐに仕事で遠いところへ行ってしまったのだと母から聞かされていた。 女手一つでヤツ八を育てていたが、もともと丈夫な体ではなかったため、無理がたたって倒れてしまったのだ。 七才のヤツ八が頑張って働いたところで、日々を生きるのに最低限の稼ぎにしかならない。 少しでも栄養をつけてもらいたくて、叱られるのを承知で他人のりんごの木に登ったのだった。

サクは理由を黙って聞いた後、おもむろに木に手をかけた。

「……あ、ねえ？」

「オレはサクってたんだ。 そこで待つてな！ あのりんご、採って
きてやるよ！」

そう言つて、サクは慣れた手つきで木を登っていく。 あつとい
う間にりんごの成る枝にまたがると、その一つをもいだ。

「ほらっ！」

放り投げたりんごは弧を描いてヤツ八の手におさまった。 小さな手には充分ほどの大きさと重さがある。 ヤツ八はひんやりした
りんごの重さを感じながら、胸が熱くなるのを感じた。

次の瞬間、木の枝がメキメキッ！ときしむ音がしたかと思うと、
サクが勢い良く落ちてきた。

ドサツ！

「いつてええ！」

しこたま尻を打ち、顔をしかめて押さえるサク。そのすぐ横に、枝が落ちてきた。

「だ、大丈夫？」

驚いて駆け寄るヤツ八に、サクはさすがに苦笑して

「だいじょう」

と言いかけたが、途端に怒号がそれを消し去った。

「誰かまた、あたしのリンゴの木に登ったのかいつ？」

見ると、近くの家から恰幅のいい女性が出てくるのが見えた。

「ヤツ八は隠れてる！」

「え、でも……」

ヤツ八の体をリンゴの木の裏へと押しやったところへ、バロンが体を揺らしながらやってきた。

「まああんたかい！ 何度言ったら分かるんだい？ この木はあたしらが丹精こめて育てて、熟した実は売り物にするんだ！ 二度とするんじゃないよ！」

バロンの大きなげんこつがサクの頭上に降った。

「いつてええ！」

サクはバロンがまだ肩をいからせながら去っていく後ろ姿にアカンベーをしながら、頭を両手で押さえて痛みを堪えながら振り返ると、ヤツ八に笑顔を見せた。

「だ、大丈夫？」

心配して眉を寄せて駆け寄るヤツ八に、サクは笑った。

「こんなの、なんでもねえよ。それよりほら、早く母ちゃんに持って行ってやれよ！」

「ありがとう！」

ヤツ八は、両手でリンゴを大切に持ち、家へと駆けていった。

その後ろ姿を、満足そうな笑顔でサクが見送っていた。

「母さんはそれからしばらく経って死んでしまったけど、間際にこう言ったの。『あのリンゴ、とても美味しかったよ』って……あたしね、サクと母さんのあの時の笑顔、ずっと忘れられないでいるのよ。それから、あなたのいつも傷だらけの体もね……サク、お願い、死なないで……」

ヤツハは祈るように、汗の滲むサクの手を自分の額に押しつけた。

罰はお姫様抱っこ!?

「カイル!」

シリウはとつさに彼の手をつかみ、間一髪、カイルは崖に片手一本でしがみつく形になった。

「!」

カイルのはるか下の方で、崩れ落ちた土や石が砂煙を上げている。シリウはカイルの手をしっかりと握り、一気に引き上げた。

「はあっ!」

大きく息を吐いて座り込むシリウ。

「すまない……」

カイルも座り込んで息を整えている。

「いや、足元、意外に脆かったんですねえ。驚きました」

シリウは微笑みながら汗を拭いた。

「さあ、急ぎましょう。サクが待っています!」

立ち上がるシリウに続いてカイルも立ち上がるうとした時

「あ……っつ!」

小さくうめいて膝をついた。

「どうしたんですか?」

驚いたシリウが駆け寄ると、カイルは右足首を押さえていた。

「さっき挫いたみたいだ……」

唇を噛み、悔しそうに言うカイル。

「利き足ですね?」

シリウが懐から布のベルトを取り出した。

「これで少しは痛みが治まると思います……」

「医武道か……」

手際よくカイルの足首に布ベルトを巻き固定するのを見ながら呟いた。シリウはええ、と頷いた。

「サクがあんなですからね、少しは知識があつたほうが良いと思い

まして。フルンザの件といい、あなたの知識も、相当なものですね」

シリウは終わりを丁寧に留め、動かしてみるように促した。まだ痛みは残っているし、全力で動くには心配だ。カイルは手に握ったままのザネルを見つめた。そしてそれをシリウに差し出した。「先に行ってください！」

シリウはやっぱり、といった顔で息をついた。

「ダメですよ、あなたも一緒に行くんです！」

「俺が居たら、足手まといになる！一刻を争うんだ！行ってくれ！」

「……」

珍しく声を荒げるカイルを見つめ、シリウはゆっくりとザネルを受け取った。

「必ず迎えに来ます。だから無理せずにここで待っていてください。いいですね？」

そう言い聞かせてシリウは立ち上がり、あっという間に木々の中へ消えていった。

残されたカイルは、布ベルトが巻かれた右足をさすり、軽く振ってみた。

『少しなら動けそうだ……』

カイルは懐から小さな布の袋を取り出し、中から一錠の錠剤を出して口に入れた。少し苦い顔をしながら飲み込むとゆっくり立ち上がり、足を引きずりながら、シリウが消えていった木々の中へと姿を消した。

しばらくして、シリウはサクとヤツハのもとへたどり着いていた。

「シリウ！ ザネルは……？」

シリウは、顔面蒼白で浅い息をしているサクの前に、もはや泣きそうになっているヤツハにザネルを手渡し

「頼みます！」

と一言言つと、背中を向けた。

「っシリウ？ どこに行くの？」

「カイルを迎えに行つてきます！」

「えっ？ カイルに何かあつたの？」

「大丈夫です！ ヤツハはサクをお願ひします！」

啞然とした顔のヤツハを残して、シリウは再び木々の間に消えた。

「待つていてくださいって、言つたでしょう？」

足を引きずりながら木々の間を縫うカイルの前に、シリウが降り立った。

「全く！」

少し慥然とした口調で言いながら近づいたシリウは、軽々とカイルを抱き上げた。

「ちよっ！ 離せっ！」

いきなりのお姫さま抱っこに慌ててもがくカイルに、シリウは叱るように言つた。

「言いつけを守らなかつた罰です！ 走るのに邪魔ですから、決して暴れないでくださいねっ！」

そして、シリウはカイルを抱きかかえたまま走りだした。

身軽に風を切り、二人の影は木々の間を飛ぶように走り抜ける。

その見事な身のこなしに、カイルもおとなしく身を預けていた。

前を見てひた走るシリウの顔を下から見ていたカイルは、いつしかじつと惹き込まれていた。

全員集合！ 山頂を目指せ！！

ものの数分で、シリウたちはヤツハとサクのもとに着いた。

「ヤツハ、サクの具合はっ？」

シリウはカイルをそつと下ろし、サクの傍にしゃがみこむと、その顔を覗きこんだ。

浅く早かった息がゆっくりになり、心なしか頬に赤みが戻ってきている。

「二人ともありがとう。だいぶ落ち着いたわ。もう大丈夫。

それより、カイルの具合はどう？」

ヤツハの表情もやっと緩み、カイルを心配そうに見つめた。

「俺は大丈夫だ。足を挫いただけだし、シリウが応急措置をしてくれた」

それでもヤツハは、診せて、とカイルの足首を取った。

「腫れはあまりないみたいだけど、湿布しておくといいわね」

ヤツハは手際よくカバンの中から一枚の布を取り出し、すばやく薬草をすりつぶすと薄く塗り、カイルの足首に処方した。すぐにひんやりした感触が足首全体に広がった。

「……………ありがとう」

カイルが小さな声で礼を言うと、ヤツハは微笑んだ。

「ね、あたしが同行して良かったでしょ？」

自慢気に言ってみせるヤツハの後ろで、サクが声を出した。

「う……………うっん……………」

サクは顔をしかめ、ゆっくりと目を開けた。

「気が付きましたね。分かりますか、サク？」

シリウが優しく声をかけた。サクは横たわったまま瞳を回した。

三人がそろって覗きこんでいる。

「皆……………」

サクは体を起こそうとした。

「まだダメよ！ 動かないで！」

慌てて肩を押さえるヤツハの手をつかみ、サクはまだ蒼白の顔で言った。

「そうは言ってもらえない。 ずいぶん時間をロスしたんだろ？ これ以上寝ていられるか！」

「でも……」

サクは無理やり体を起こして、皆の顔を見回した。

「ヤツハ、シリウとカイルもありがとう。 だけどここで終わるわけにはいかない、そうだよな！」

「その通りですね」

シリウも静かに即答した。

「シリウ！ あなた何を言ってるのか分かってるの？ サクはまだ動ける体じゃないわ！ せめて体内の毒がもつと治まってから……」

必死で説得するヤツハ。 カイルはその様子をじつと見ている。

「もしあの毒矢が、試験官が放つたものだとして、生徒を殺すほどの毒を塗ってあったとは考えにくい。 だとしたら、限界まで自分を追い込むのが得策だと思いますよ。 試験とはそういうものです。 自分の限界を超えるのも試験ですよ」

シリウは冷静に答えた。 だがヤツハは納得できない様子で俯いた。

「でも……」

「もう少し行ってみて、ダメだったらあきらめればいい」

カイルが抑揚のない口調で言った。

「カイルまで！ サクが死んじゃってもいいの？」

ヤツハは驚き、必死な顔で皆の顔を見回す。 サクをはじめ、三人とも譲れない決意をした表情をしている。 ヤツハはこみ上げてくる思いに、泣きそうな顔になった。

「皆、バカだよ！ ただの試験なのに、なんで命かけるのよ？ 死んじゃったら、終わりなのよ！」

ヤツハの言葉を聞きながら、カイルが表情を押し殺すように唇を

噛んだ。涙が溢れそうなほど潤んだ瞳をしたヤツ八に、サクが言った。

「試験だからこそ、安心して命かけられるんだ。オレたちは、それぞれの夢を持ってここで学んでいる。外に出たらきつと、もっと危険で、厳しい世界が待ってる。だからこそ、今ここで命かけないでどこでかけんだよ！」

ソラール兵士養成学校には、様々な国から生徒が集まってくる。それぞれが目指す目標に見合う資格を取るために、毎日を過ごす。自分の夢を叶えるために、必死で自身を追い込んでいるのだ。その成果を発揮する場所が、試験であり、自分の限界を試し高める機会なのだ。

勿論、ヤツ八もそれは理解していた。その厳しさに逃げていった生徒も少なくはない。ヤツ八はサクのまっすぐな瞳に見つめられ、もう一度考え直した。

「……そうね……ここであきらめたら、何のために皆が集まったのかも、意味が無くなるわ」

ヤツ八は、気持ちを切り替えるように微笑んだ。

「もしサクが動けなくなっても、僕たちにはヤツ八がいる。心強い仲間ですから」

シリウも微笑んだ。四人は顔を見合わせ気持ちを合わせるように頷いた。

夜明けまで数時間となっていた。暗闇で動くのは危険と判断し、それとサクとカイルの回復を待つためにそこで朝を待ち、日の出と共に、四人は再び動きだした。

目指すは山頂のほくらにある札だ。道中、怪我人を背負って戻っていく生徒たちとすれ違った。それらを見て、この先に何があるのか、不安がないわけではない。だがサクたちは進み続けなく

てはならない。

「もうすぐだ！」

サクが嬉しそうな笑顔で指差す先には、山頂のほこらの屋根が見えている。皆の顔が緩んだ。心なしか体も軽くなり、山頂へと急いだ。

ほくら前の激闘！

ほくらの周りは、気味が悪いほどの静けさに包まれていた。時折吹く風が、草の匂いを運ぶ。

他の生徒たちの姿も見当たらないが、所々に血痕や折れた刃など、闘いの痕が残っている。

「いい眺めだなあ〜！」

サクの気の抜けた声が響いた。数時間前まで意識が混濁していた同一人物とは思えない。

眼下には、ヴィルス町が見渡せる。遠くの景色も晴れ渡った空に溶けるようになだらかに横たわっている。

「ちよつとサク！ そんな悠長にしている場合じゃないのよっ！」

ヤツハがサクの耳をつかんでほくらへと連行した。

「いってえなあ！」

やっと離してもらった耳を押さえて涙目になっているサクを見て、シリウが笑った。

「もう！ 皆、緊張感持って！ 時間がないのよ！」

あきれたように言うヤツハ。カイルはクスリともせず、その様子を見つと見ている。

「扉が開かないんです」

シリウが静かに言いながら、肩をすくめた。

「鍵が要るのかしら？」

ヤツハが言う後ろで、サクが拳を上げた。

「んなの、壊しちゃえばいいじゃん！」

と、いきなり皆の至近距離で、扉に拳を叩きつけた。

「きゃあっ！」

「サク！」

「！」

三人にげんこつで制裁され、うづくまるサクを尻目に、扉の前で話し合いが始まった。サクが拳を叩き込んだところには、傷ひとつ付いていない。

「鍵穴らしきものはなさそうですね……」

気持ちを落ち着かせるように眼鏡を上げるシリウの横で、カイルは扉に触れた。

「ぴったり閉ざされている……」

「封印魔法かしら？」

ヤツハが呟いた。

「そんな所でしょうかねえ……きっと何かの力が加わることで開くようになっているのではないでしょうか？ ほら、この円の中心には、呪文を封じ込めたような印があります」

シリウが指差した扉の中心には、人が手のひらを広げたくらいの円と、中には何かの封印模様が描かれている。

「……うん……」

三人は困り果ててしまった。その間にも、時間は刻々と流れている。

「悩んでも仕方ない……これは多分、皆の力を試されているのでしようから、それぞれが力を合わせてこの印にぶつけてみましょう！」

シリウが苦肉の策を打ち出した。途端に、頭を抑えてうづくまり拗ねていたサクが勢いよく立ち上がり、拳を振り回した。

「力勝負なら負けねえぞ！」

嬉しそうにするサクも円陣に入り、それぞれが得意な武器を持って力を溜めた。

まずはサクの攻撃だ！

サクはオープンフィンガータイプの革グローブを装着している。

もっぱら剣は使わず、自身の拳と足で勝負をする。サクは両拳

を強く握って気を溜めた。身体全体から熱気が噴出し、周りを圧倒した。そして拳に溜めた気を一気に扉へと叩き込んだ。
「はああっ！ 爆拳刀刹！」

次は間髪入れずにシリウがサクの後ろで剣を構えた。身長に並ぶかのような長い剣を上段に構え、気を入れ、扉に向かって振り下ろした。

「はああっ！ 奏拍龍刃！」

次はヤツ八だ。彼女はナイフの二刀流で挑んだ。胸の前で両腕を交差し、気を込めた。自らの気が高まり、栗色の髪の毛が逆立った。

「深華滝泉！ はっ！」

カイルが細身の剣を上段に構えてヤツ八の後ろから次を狙う。扉を睨むように飛び掛り、渾身の力で振り下ろした。

「はあっ！ 仙剣突刃！」

だが、叩きつけられた武器や気は散々に跳ね返され、扉には傷ひとつ刻まれる事がなかった。

「くそあっ！」

サクは悔しそうに拳を地面に叩きつけた。土煙が風に流された。シリウとヤツ八も、微動だにしなかった扉を前にため息をついた。
「一体、どうしたらいいのよ……？」

すると、カイルは引き寄せられる感覚に捕らわれ、抗わずにゆっくりと扉に近づいた。そして手のひらを扉の印にそつとあてた。

「暖かい……」

そう呟いて目を閉じるカイル。その温もりはどこか懐かしく、もっと深くまで感じたい気持ちが生まれた。心が落ち着き、カイルの息はゆっくりと整えられた。

「もしかして……」

それを見ていたシリウは、自分の手をカイルのソレに重ねた。
「ヤツハとサクも、一緒に重ねてください」

二人は顔を見合わせながらも、言われるがままに手を重ねた。

「暖かい……不思議……」

ヤツハも懐かしい温もりに包まれる感覚を覚えた。サクも、少し驚いたような顔で扉を見つめた。

次の瞬間、それぞれの体が熱を帯び、光に包まれた。

心の中にも光が入り込み、包み込まれ、身体が宙に浮いたような気がした。四人はそれぞれに、扉に願った。

『開け！』

扉の中心に一筋の光が生まれた。

「開くぞ！」

サクの声と共に手を離れた四人の前で、扉は音もなく開いた。

「やったな！ すげーじゃん、カイル！」

とサクに肩をつかまれ、大きく揺さぶられながらも、カイルは彼を促した。

「サク、早く札を……」

「ああ！」

サクは開いた扉をくぐり、部屋に一步入ると息を飲み込み、ゆっくりと目の前にある札を剥がした。

「取った！」

サクが札を掲げた途端、地面が揺れた。

「な、なんだっ！」

四人が動揺しながら慌てていると、背後から大きな影が襲ってきた。

た。

「幻獣だ！」

「かなり大きい！ きつと札で封印されていたんですね！」

「その札を取ってこいってことは、この幻獣を倒してこいってことだったのね？」

「こうなれば、倒すしかないだろう！」

カイルが剣を手に飛び出した。

「カイルの言う通りだぜ！」

サクも楽しそうに幻獣に向かっていく。

「それもそうね！」

ヤツハも半ばあきらめたように走っていき、シリウはそれらを見送って眼鏡を上げながら微笑んだ。

「チームがだんだん固まって来ましたねえ」

と嬉しそうに言うと、自身も幻獣へと向かっていった。

幻獣を倒すのに、大した時間はかからなかった。

「爆拳弾！」

サクの拳から、幾つもの気の弾が放出され、幻獣の大きな体にヒ

ツトした。

「奏拍龍刃！」

まるで音楽を奏でるかのように、シリウが振り下ろした刃先から気が突き出し、幻獣の体を突き抜けた。

「深華滝泉！」

真紅の軌跡を描き、ヤツハが幾つもの切っ先を幻獣の体に刻んだ。

「剣舞四奏！」

カイルは幻獣の周りを駆け回り、幻獣の体を切り刻んだ。

それぞれが順番に自分の技を叩きつけ、息一つ上げずに片付けた四人が見ると、扉は再び何もなかったかのように閉じられていた。

「たいした試験だぜ！」

サクが余裕の顔で言うと、ヤツハが急かした。
「早く戻りましょう！ 時間が迫ってる！」
四人は頷き、養成学校へと走りだそうとした。

その時、大きく黒い人影が四人の前に立ちはだかった。
「ナトウ！」

サクたちは睨みながら身構えた。 ナトウの脇には、いつもの子
分が従っている。

「すっかり待ちくたびれちまったよ！」

「なんだと！」

「何故あなたがここに？」

シリウが迷惑そうに言うと、ナトウはにやけながら言った。

「ここまで楽勝だったんだけどよ、どうしてもあの扉が開かなく
てよお？ 武器も力も効かねえから、こりゃあ、誰かから頂いたほ
うが簡単だと思って、ここで待つてたんだ！」

「卑怯な男！」

ヤツハが軽蔑すると、ナトウは切なそうな顔をした。

「ヤツハちゃん、そんなこと言うなよう。 これでも俺ら、頑張
つてんだぜ！」

「何を頑張つてんのよ？ 力任せなだけじゃない！」

「ヤツハちゃんにはケガなんてさせないからね。 札を取ったら、
俺らの仲間に入れてあげるから！」

体をくねらせながら言うナトウにすっかり気分を害され

「願い下げだわっ！」

と腕を組んで顔を背けるヤツハにお構い無く、ナトウたちは武器
を構えた。

「お前ら、おとなしく札を渡せ！ でなきゃ、覚悟はあるんだろう
なあっ？」

息巻くナトウに、サクは肩を回して唇を舐めた。

「まあ、ちょうどいいや。 この間の札がまだだしな！」

同じく、と身構えるカイルの横で、シリウはため息をつきながら眼鏡を上げた。

「仕方ありませんねえ……」

三対三が始まった喧嘩が、空気を揺るがした。

カイルの涙と月の呪縛

時刻まであと十分。

最高試験官は他の試験官たちに合図を送った。まだ帰ってきていない生徒たちに、試験終了を知らせるためだ。試験官たちは、風のようにグラウンドから姿を消した。

すでにほとんどの生徒たちは、途中断念して戻ってきている。彼らの手当てをするために、医務室はてんでこ舞いの忙しさだった。ミランにとっては、この合同試験の時期が一番嫌いだった。

「ホントに、忙しくてたまらないよ……!!」
イラつき、独り言をこぼしながら生徒たちの手当てをしている。

そして時計の針は刻々と進み続け、やがて最高試験官が終了を知らせるために高く手を挙げようとした。

その時

「おりゃああっ!!」

という怒号と共に、草むらからサクが飛び出してきた。あとからシリウ、ヤツハ、カイルも同様に姿を現した。皆、身体中に枝葉をいっぱい付けている。

「間に合ったかあ?」

サクが息せき切って試験官に尋ねると、彼は半ば驚いた表情で
「あ、ああ……」
と頷いた。

「やあつたあ!」
と飛び上がって喜ぶサクを尻目に、ヤツハは身体中に付いている枝葉を迷惑そうに払い落としながら言った。

「まったく……サクが『近道だ!』って言うからついていたら、

ひどいめにあつたわ……」

シリウとカイルも眉を寄せて、同意するように頷きながら身体を払っている。

「いいじゃん、間に合つたんだからさあ！」

悪気もなく、はちきれそうな笑顔で言うサクを見つめ、三人は息をつきながらあきれていた。

その頃ナトウたちは、山頂付近で白目を剥いて伸びていた。

「絶対……許さねえ！」

と悪態をつきながら、体を痙攣させた。

「サク・パクオラ、シリウ・ソム・イクシード、カイル・マチ、ヤツハ・キナソン！ 君たちは見事に試験を乗り越え、全員揃つて帰還した。ここに合格点および特別点を追加する！」

試験官の読み上げにより、グラウンドに集まった生徒たちは並ぶサクたち四人に対して、口々に榮譽を讃えた。その身体はあちこちが傷だらけで、試験の厳しさを物語っていた。

その夜、生徒会が中心になって、打ち上げも兼ねて祝いの席を設けた。

この時ばかりは無礼講だ。生徒も試験官、教官たちも交じって、夜遅くまでラウンジで宴が繰り広げられる。

医務室を飛び出したサクは、毒もすっかり抜けたかのように、喜び勇んで宴へと飛び込んでいく。ヤツハも友人たちと共に並んだ料理に舌鼓を打ち、話に華を咲かせていく。

そんな喧騒も届かないような静かな屋上に、カイルはいた。ひとりきり、いつもの場所で景色を眺めていた。

「身体はもういいのかい？」

不意な声に見上げると、保健医のミランが立っていた。白衣が夜風にたなびく。頬を撫でる金髪の後れ毛を、うっとうしそうに耳に掛けた。やっと忙しさから開放されたばかりのようで、顔には少しの疲労が浮かんでいる。

「はい、もう大丈夫です。足も少し挫いただけだし、二、三日で治りますよ」

包帯が巻いてある右足をさすりながら、カイルは答えた。

「楽しかったかい？」

「え？」

「顔がほころんでるよ」

「！」

慌てて両頬に手をあてるカイルを見て、ミランはフツと笑い、煙草に火を点けた。

「仲間っていいだろう？ 楽しめばいいんだよ。片意地張らずにね」

白く長い煙は夜風に流れていく。カイルは黙ったまま遠くの景色を見た。

「まだ気持ちは変わらないのかい？」

ミランも遠く景色を見ながら咳くように言った。カイルはひとつ息を吐いた。

「ええ」

それ以上ミランは何も言わず、二人の間に沈黙が流れた。

その時、屋上の扉が勢い良く開き、ひとりの男子生徒が飛び込んできた。

「ミラン先生、ここにいたんですね？ サクがナトウと喧嘩を始めました！」

息急き切って話す生徒。ミランは大きなため息をついた。

「まあたあいつらは！ 懲りない子らだねえっ！」

と文句を言いながら男子生徒と屋上を出ていく。扉の前で振り

返り、カイルに声をかけた。

「気が向いたらおいで！ 旨い料理もたくさんあるよ！ 動いた分、精力付けなきゃ！」

ミランは微笑んで手を上げ、カイルの答を待たずに去っていった。カイルは少し微笑んで見送り、また遠くを見た。月明かりが薄く景色を照らしている。

「素敵な景色ですね」

「シリウ？」

知らぬ間に、シリウが傍らに立っていた。そして、カイルの横に静かに座ると、大きく伸びをした。

「夜風も気持ちいいですね」

「サクに付いていなくていいのか？ ナトウと喧嘩してるって……」

「カイルも見に行きますか？」

微笑むシリウに、カイルは驚いて目を逸らせた。

「な、なんで俺が！」

「仲間、だからですよ」

シリウは優しく言った。すると、カイルは慌てて言った。

「言っておくが、組んだのは試験の為であって、終わった今はもう赤の他人だ！ もう二度と、面倒なことに巻き込まないでくれ！」

シリウの眼鏡が光った。

「ああ、またこの間みたいに、サクが意識を失って倒れ、ナトウの巨体の下敷きに」

「ああもう！ 分かったよ！」

カイルは勢い良く立ち上がり、屋上を出ていった。シリウの軽い微笑みがこもったため息も知らないで……。

サクとナトウは人の輪の真ん中で対峙していた。お互いまだ傷だらけの上に生傷を作っている。

「ナトウ、まだ寝とけよ！　なんだその包帯はあ？」

「お前がやったんだろぅがよ！」

すでにテーブルや椅子は端に寄せられ、二人が暴れてもいいようになっている。　そろそろ教官たちも止めに入ろぅかと伺っていた。

「お前だけは絶対許さんからなっ！」

ナトウがサクに向かって拳を振り上げる。

「いつまでも引きずってんじゃねーよ！」

二人が再びぶつかり合うかと思った時、ナトウの顔面にカイルの膝が入った。

「がっ……」

スローモーションのように倒れていくナトウの前に軽い足取りで着地し、足早にサクの前まで行くと、思い切り頭を叩いた。

「つてえ！」

「たまにはおとなしくしてろ！」

「カイル！」

止められずに成り行きを見ていたヤツハが嬉しそうに駆け寄った。

「ありがとう！　誰も止められなくて困ってたの」

礼を言うヤツハの後ろで、サクが嬉しそうに頭をさすった。

「心配して来てくれたのか？」

「そんなんじゃない！」

カイルが慌てて言う

「まあまあ、そう意地張らなくていいんだぜ！」

サクがからかうように肘でこづく。

「やめろ！」

逃げるカイルにサクが迫った。

「うまくいつてるじゃないか」

煙草をふかしながら壁にもたれ、遠くからサクたちの事を眺めているミランの横に、シリウが立っている。

「結構いいコンビになるかもしれませんよ」

「楽しそうに微笑むシリウ。」

「助かったよ、あんたが一声かけてくれてさ」

「僕は、彼の笑顔が見たかっただけですよ」

サクたちと会う前のカイルは、いつも一人で物思いにふけり、誰とも絡むことはなかった。周りもそんなカイルに話しづらい印象を持ち、自然に壁を作っていた。

「そうは言っても、カイルは必死な顔してるけどねえ」

ミランが少しあきれながら見る、遠くでサクから必死で逃げ回っているカイルは、少しずつだが感情を見せるようになっていた。

カイルは振り返ると、サクに叫んだ。

「いいか！ 勘違いするな！ 俺は誰ともつるむつもりはない！

これからもだ！ だからもう俺と関わ……」

言い終わらないうちに、カイルの身体が崩れ落ちた。

「まずい！」

とミランが吐いた焦りのこもった呟きと同時に、シリウが走りだした。

目を覚ますと、カイルは医務室に寝かされているのに気付いた。

薬の匂いが鼻をくすぐる。次に、仕切つてあるカーテンの向こうからなにやら騒がしい話し声が耳に入ってきた。

「だからただの貧血だった！」

「あいつ、ちゃんと食べてんのか？ もしかして夕飯食ってないのか？」

「何か栄養のあるもの、持ってこようかしら？」

「ラウンジに行けば、まだ料理も残っているはずですよ」

「いいから静かにしてくれ！ でなきゃ出ていきな！」

せわしない幾つかの足音が聞こえたあと、イラついた感情がこもった扉が閉められる音がして、医務室の中はいきなり静かになった。

「つたく……」

静かにカーテンを開けたミランは、目を開けているカイルに気付いた。

「気が付いてたのかい？」

「ついさつき……俺は……？」

「倒れたんだよ。慣れてないのに、暴れて大きな声を出すから」

「ああ……」

『しつこいサクに説得して聞かせようと思ったら、目の前が真っ白になって……』

「昨日から動きづめだったから、そりゃあ疲れも出るよ。それに

あんたは……」

ミランが呆れたように見下ろすカイルは、ベッドに起き上がってゆっくりと下腹をさすっている。表情がどこか暗い。

「皆心配して、あの通りさ。シリウなんて、一番遠い所から走って行って、あんたを抱きかかえて……」

カイルは力なく肩を落とした。

「あんたのことなんてなあんにも知らないくせに、あんなに心配してくれたこと、感謝するんだよ」

「……」

カイルは小さく肩を震わせていた。その頭に真つ白なタオルをかけ、ミランは窓辺に座った。

「あんたは、月からは逃れられないんだよ……」

呟くようにミランは言った。その言葉を受けながら、カイルはタオルの下でとめどなく涙を流していた。声を殺し、抑えきれない感情を必死で隠していた。

ミランは何も言わず、窓辺で煙草をふかしていた。

夜空には眩しいくらいの月が浮かんでいた。

ザ ピクニック！

翌朝の集会には、何事もなかったかのようにカイルの姿があった。

「カイル！ もう身体はいいのか？ 飯食ったか？」

サクが駆け寄り、心配そうな顔をしてカイルを覗き込んだ。

「サク、しつこく追い回したのが良くなかったんじゃないかって、悩んでましたよ？」

シリウも静かに近寄った。

「サクの性じゃないよ……」

カイルが言うと、ヤツハも駆け寄ってきた。

「カイル！ よかった、元気になったのね？ いきなり倒れるんだもの、びっくりしたわ」

「あの……」

カイルは、三人を前にして少し体を揺らしながら言葉を選んでいった。

「皆、心配してくれて……ごめん」

すると三人は顔を見合わせて微笑んだ。サクがカイルの肩を叩いた。

「当たり前じゃんか！ オレたち仲間だぜ！」

傷だらけの顔が笑顔で溢れている。

「心配して当然です！」

背筋を伸ばしたシリウが、眼鏡を上げながら言った。

「ね、昨夜考えてたんだけど、皆でピクニックに行かない？」

ヤツハが突然な事を提案した。

「ピクニック？」

カイルが怪訝な表情をして言った。ヤツハは人差し指を立て、飛び上がるように迫った。

「そう！ 皆せっかく協力して試験を合格したんだしき、あたしたちだけでお祝いしてもいいんじゃないかなって！ カイルだって、

あの料理もろくに食べてないんでしょ？」

「それいいな！ 弁当持つてなっ！」

サクはすっかり乗り気だ。そもそも彼は楽しそうなことには目がない。すでに瞳が輝いている。

「一日くらい授業を捨てても良いじゃないですか。夕方の集会に間に合えばいいですね。お互いを知るいい機会かも知れませんが、カイル」

シリウが微笑んで言うと、カイルはあまり嬉しそうな顔をしていなかった。

「いや、俺は……いいよ」

少し後退りをしながら断る態勢をカイルから感じたサクは、しっかりと両肩をつかんで迫った。

「絶対楽しいって！ オレが保証する！ な！ 決まり、なっ！」

カイルはサクの押しに勝てず、思わず頷いてしまったことで、サク、ヤツハ、シリウ、そしてカイルの四人によるピクニックが決定した。

その日は快晴だった。

澄み渡る青空が、山道を歩く四人の心を晴れやかにしていた。

朝の集会のあと、学校を出て歩く山の中は、つい数日前に凄惨な試験があった同じ場所だとはまったく感じさせず、木々の間を穏やかな風が流れていた。山の裏側に向かって何分か歩くと、急に目の前が開けた。

「こんなところが……？」

カイルは思わず目を疑った。

目の前には、木々が囲むように草原が広がっていたのだ。はるかかなたに、山々が浮かんでいる。

「素敵なところでしょう？ サクが見つけたのよ」

「たまにこうして遊びに来るんですよ」

ヤツハとシリウが楽しそうに言う。一足先に草原で気持ちよさそうに転げ回っていたサクが勢い良く立ち上がり、カイルを呼んだ。「お相手願おう！」

「たまには幻獣以外の相手も、いいんじゃないですか？」

シリウが背中を押すので、カイルは仕方なく荷物を下ろした。それでも

「ここなら、思い切り暴れられそうだな」

と静かに言うその口元には、かすかに微笑みが浮かんでいた。

草原の真ん中で手合わせをしているサクとカイルから少し離れて、ヤツハは周りを散策しながら薬草を摘み、シリウは木陰で涼みながら読書をしている。皆それぞれにのんびりと時間を過ごしている。静かな草原では、二人の気迫のこもった声が空に吸い込まれるだけだった。

やがて一時間ほど経った後

「ヤツハ、飯　！」

という声と共に、サクがカイルと共にシリウのもとに駆けてきた。シリウの近くには、皆の荷物が無造作に置かれている。カイルはその中から自分の荷物を取り出すと、タオルで顔を拭きはじめた。気持ち良さそうに、風に頬をあてている。

「お疲れさまでした」

シリウは自分の水筒を差し出した。

「いや、自分のがあるから」

断る口調も以前のような刺々しさが少し無くなっている。シリウが

「そうですか」

と素直に水筒を下げると、自分が持ってきた水筒から水分補給するカイルをじつと見た。

「なんだよ？」

シリウに気付いたカイルは、迷惑そうに眉をひそめた。シリウ

は軽く微笑んだ。

「いえ、カイル、楽しそうだなあって思ってた」

するとカイルは、動揺したように水筒の蓋を慌ただしく閉め、顔を背けた。その様子をただ嬉しそうに見つめるシリウの後方から、ヤツハと言い争いをしながらサクが戻ってきた。

「だからまだ昼食には早いんだってば！」

「だって腹減ったんだもん！　なんかあるだろ？　おやつ的なものが！」

「あんたは食べることしか頭に無いのね！」

ヤツハは文句を言いながらも、自分の荷物の中から小さな箱を取り出した。

「わお！　焼き菓子じゃん！」

蓋を開けるヤツハに待ちきれず、瞳を輝かせながらいち早く手を出すサク。一口食べて雄叫びをあげた。

「うんめえー！」

その様子にあきれながら、ヤツハはシリウとカイルには微笑みを見せて勧めた。

「今朝作ったの。　お口に合うか分からないけど……」

少しはにかみながら言うヤツハから焼き菓子を受け取りながら、シリウはカイルに言った。

「ヤツハの手作り料理は、とても美味しいんですよ」

と、一口食べて微笑んだ。　カイルも習って一口頬張った。

「……美味しい」

正直な感想がカイルの口から漏れ、ヤツハは嬉しそうに微笑んだ。

「よかった！　たくさんあるから、遠慮しないでね」

「おう！　遠慮なんてしねーよ」

とサクがヤツハの肩ごしに手を出し、一掴み取っていった。

「あんたは遠慮しなさいっ！」

ヤツハとサクが追いかけてこをしている様子をバツクに、カイルは自分の手にあるヤツハの手作り菓子を見つめていた。

「どうしました？」

シリウが覗き込むと、カイルは我に返って背中を伸ばした。

「あ、ああ、女の子なんだなあって……」

感心したように言うカイルに、ヤツハから逃れようとするサクが声をかけた。

「こいつの取り柄は、料理だけだぜ！」

「サクっ！」

ヤツハが襲い掛かるのを器用に避けながら逃げていくサク。その様子を見ながら笑うシリウ。

「あの二人は、本当に仲が良いですねえ。さて、今から何をしますか？」

尋ねられたカイルは、手に残っている焼き菓子を頬張った。

「しばらく休憩」

「そうですね、では僕も読書の続きをしましょう」

タオルで顔を隠して寝そべるカイルの頭近くにシリウが座り、二人は木陰で涼みながら静かな時間を過ごした。しばらくして、ヤツハが戻ってきた。

「アイツ、逃げ足だけは早いんだから……」

そして、カイルの足元に座ると息をついた。

「いい運動でしたね」

笑いながら言うシリウ。カイルも体を起こした。タオルがフ

ワリと胸に落ちた。

「あ、起こしちゃった？」

「いや」

ヤツハはじつとカイルの顔を見ている。

「なに？」

「あたし、カイルって不思議な人なあって、いつも思うの」

「どうしてそう思うんです？」

シリウは興味深そうに本を閉じた。

「なんて言ったら良いのか分からないけど、いつも一人で、誰とも

仲良くしてないみたいだったから、きつと怖くて冷たい人だろうって印象だったのに、こうして一緒に過ごすようになって、思ってた人じゃないって気がしてきたのよね……」

「買い被りすぎだ。俺は多分……最初の印象そのままだ」

カイルは少し不機嫌そうに言った。そしてヤツハを見ると、冷たく言った。

「俺に深く関わらないほうが良い」

シリウはそれを見ながら微笑み、カイルの肩を軽く叩いた。

「まあそんなに固くならなくても。僕たちは厳しい学校生活を楽しむために一緒にいるだけです。お互いの気を悪くする集まりなんかじゃないですよ？」

カイルは何も言わずに、シリウのなすがままになっていた。

そのうち、どこを走り回っていたのか、汗だくのサクも戻ってきた。

「ヤツハ、腹減ったあ」

気の抜けた声に、場の空気が和んだ。

「サク、あんたはホントにそればかりよね……でも、もうそんな時間か。昼食にしましょう！」

ヤツハは手早くシートを広げると、カバンから三段重弁当を取り出した。蓋を開けると、センスよく色とりどりに散りばめられた弁当が現れた。

「うまそ〜！」

サクは目を輝かせながら食べはじめた。

「うんめえ〜！」

シリウもパンを二つ手に取り、一つをカイルに手渡した。

「ヤツハの手作りパンは、本当に美味しいんですよ」

微笑むシリウの前に、カイルは一口かじった。ふわふわの生地から立ち上った甘い香りが鼻をくすぐる。

「本当だ……」

カイルの一言に、ヤツハもとびきりの笑顔を見せた。

「そう言ってもらえると、作った甲斐があったってものだわ！ たくさんあるから、どんどん食べてね！」

そう言って勧めるヤツハに、カイルは言った。

「さつきはきついこと言ってごめん」

するとヤツハは、気にしてない、と首を横に振り

「この学校の生徒は皆、何か思うところがあつて来てる人ばかり。

仲間って、そういう痛みを和ませたり、励まし合ったりするものだと思ってる。カイルの心が少しでも和らぐことは、あたしも嬉しいと思うの。今のカイルの言葉は、その証だつて思っているよ
ね？」

首をかしげて覗き込むように微笑む笑顔は、いたずらっ子のようにだ。カイルは恥ずかしそうに目を背けた。

「よし、次はシリウだ！ 手合わせ願おう！」

腹ごしらえも済み、体力も回復したサクは、勢いよく立ち上がって構えた。シリウはゆっくり立ち上がり、眼鏡を上げた。

「では、少し汗をかいてきますか」

少し嬉しそうな表情で、シリウはサクへと歩を進めた。

「ホントに、皆全然違うでしょ？」

弁当の片付けを終えたヤツハが、カイルの横に座った。

「そうだな」

並んで座った二人は、草原の真ん中で戦い合うサクとシリウを見つめていた。二人が動くたびに草と土埃が舞い、風に流れる。

「どんな夢であれ、皆、それを叶えるために一生懸命になってる。

卒業したらバラバラになっちゃうのに、こうして集まっている。これって、とても不思議じゃない？」

ヤツハは微笑んだ。カイルはそれを視野の端に見て、また前を向いた。

「そうだな」

一言呟いてうつむくカイルの何か思いつめた様な表情に、ヤツハはただならぬ雰囲気を感じた。それを気にしない風に装って、静かに言った。

「仲間になったからって、最初から自分の事を全部言うことはないわ。気が向いたらでいいのよ」

「ヤツハは……」

カイルはうつむいたままで改めて言った。

「女の子なんだな」

「な、なによ、また急に？ 当たり前でしょ？ 胸だっちゃんがあるわよ！ 小さいけど……」

頬を赤らめて言うヤツハを見て、カイルは少しだけ微笑んだ。

「それでいいと、思うよ」

ヤツハには何のことか分からなかったが、カイルが微笑んだ顔を見られたことが嬉しくて、それでよしとした。ヤツハの心が希望で温かくなるのを感じた。

その時、静かに時が流れていた草原に怒号が響いた。

ファンネル校長の依頼

「こんなところにいたのか、お前たち！」

四人が驚いて声のした方を見ると、風紀教員のゴンドル教官が巨体を揺らして近づいてきていた。

巨体の割に動きが素早く、いつも校内を走り回り、学校の風紀を乱すものを注意し直すことを担っている。黒い短髪に、四角い顔。小さい三白眼が鋭い輝きを放っている。生徒たちの苦手とする教官だ。

「うわ、やべっ！」

思わず逃げようと背中を向けたサクに俊足で近づき、その首根っこを掴むと、自分の目の高さまで軽がると持ち上げた。

「探すのに苦労したぞ！ まさか揃って外にいるとはなあ！」

「なんだよ！ 別に悪いことなんてしてないだろ？」

「じゃあなんで今逃げようとしたんだ？」

ゴンドルは目の前で手足をばたつかせるサクを鼻で笑い、放るようにならした。器用に着地したサクは、拳を握って構えた。

「やるか、このっ！」

ゴンドルは臨戦態勢のサクを無視して、他の三人に言った。

「ファンネル校長がお前たちを呼んでいる。早急に校長室へ行くように！ それと……」

三白眼をもって、ゴンドルは四人を流し見た。

「仲が良いのはいいことだが、くれぐれも試験を落とさぬように！ 落ちたら、例外なく即刻退学だからな！」

ゴンドルはイヤミっぽくそれだけ言って、踵を返すと風のように消えた。

「校長が、僕たちに何の用なんでしょう？」

首を傾げるシリウに

「行けば分かるだろ！」

と、まだ動き足りなそうに体を動かすサク。　ともすれば、本当にゴンドルとやりあうつもりだったのだろうか。

「そうね、とにかく行ってみましょう」

ヤツハの言葉に異論はなく、早々に荷物を片付けると、四人は養成学校へと戻って行った。

「お楽しみのところ、邪魔をしたかいのう？」

たっぷりと蓄えた白いあご髭をゴツゴツした指で何度もさすりながら、ファンネル校長は笑って言った。　小柄な老体に似合わず、いつも隙がない。　少し訓練をした生徒ならばその柔らかい表情の裏にある、鋭い切っ先のような気迫を感じるはずだ。

「ファンネル校長、僕たちに用とは何でしょう？」

シリウがしつかりとした丁寧口調で尋ねた。　ファンネル校長は少し真面目な表情になった。

「うむ。　君たちはこの間の試験を見事に通過した。　毎年やってはいるが、なかなかあれだけの素晴らしい仲間同士の助け合いは見られない。　私は感動した」

「だから、用事って何だ……　っぷ！」

結論を急かそうとしたサクの口を慌てて塞ぐヤツハ。

「っ、続けてください！」

「それでだね、ひとつ君たちに頼みたいことがあるのだ」

「頼み……　ですか？」

シリウが眼鏡を上げた。　四人は想像が出来ず、顔を見合わせた。

「そうじゃ。　君たちに、この手紙がある人に届けて欲しいのじゃ」

「普通の手紙のように見えますが……」

ファンネル校長から封筒を受け取ったシリウが、中身を窓から差し込む陽の光に透かしてみたが、何も違和感はなく、「ごく普通の白い封筒にしか見えなかった。　宛名も書かれていない。

「そんなの、普通に郵便で送れば……　っつ！」

今度はカイルのげんこつがサクの頭に落下した。

「少しは黙ってる！」

ファンネル校長は動じずに、笑って答えた。

「それは普通の郵便では運べんのじゃよ。そこには、ハミウカ紙が入っておる」

するとカイルが乗り出した。

「ハミウカ紙？ あの、浄化作用があるという？」

「そうじゃ。水に浸すと溶けて広がり、周りの土壌を浄化する」

「では、これを運ぶ先というのは、アルコド国……？」

カイルの呟きに、ファンネル校長はゆっくり頷いた。

「そうじゃ。詳しい話は、カイルから聞けば分かるじゃろう。」

事は急ぐ。早速明日にでも出発して欲しい。くれぐれも、気を付けてな」

ファンネル校長は白髭をさすりながら、頼むぞ、と微笑んだ。

四人が所長室を出て行った後

「本当に、彼らに託しても良いのでしょうか？ まだ十代の生徒たちですよ。私たちに任せて頂けた方が、よっぽど安心で早いでしょうに」

部屋の隅に立って話を一緒に聞いていたゴンドルが、不満そうに言った。事の大きさと緊急性を考えれば、実力のある大人の教官たちに託したほうが良い。そう思うのが普通だろう。

だがファンネル校長は、首を横に振った。

「あの子たちに任せる。アルコド国は、大人では救えないんじゃない……」

希望を託し、微笑みすら浮かべるファンネル校長の前で、ゴンドルは終始あまりいい顔をしなかった。

「カイルに聞けば分かるって、どういうことだ？」

その日、夕方の集会が終わってから食事もそこそこに、サクたちは図書室に集まり、地図を広げて明日からの旅の予定を立てはじめていた。

「そうよ。そもそもカイルは今回のこと、知ってたわけ？」

ヤツハがペンを器用に回しながらカイルに聞いた。カイルは首を横に振って言った。

「いや、依頼のことは知らなかった。噂に聞いたことがあるだけだ。アルコド国は森と水が豊かな国で、ずっと平穩に過ごしていたんだけど、ある日急に泉の湧き水が濁りだして、周りの土壌も汚れはじめたらしい。やがて食物も育たなくなり、人々の生活にも困るようになって。五年ほど前の話だ」

「ハミウ力紙は、特別な草で作った紙に呪文が封印してあるもので、それも強靱な魔導士が相当の念を込めなくてはならない」

シリウが補足すると、ヤツハがぼんと手を打った。

「そうか、ファンネル校長！」

「それに、他にも何人か力のある教官はいるし、協力すればハミウ力紙を作ることも可能です」

シリウの言葉に、カイルは頷いた。

「そおんなすごい紙切れには見えないけどな！」

サクが封筒を灯りに透かしている。

「でも、校長ともあるう人が、オレたちを信用して頼んできたんだよな？ じゃあその期待、裏切るわけにはいかねえよな！」

サクは冒険の匂いに瞳を煌めかせている。そして目の前に広げられた地図を見下ろした。続くように、他の三人も地図に目を落とした。

「さあ、どんな道順で行く？」

シリウがペンを取り、ソラール兵士養成学校を囲むように丸く印を付けた。

「ここが養成学校。山は極力登らずに、避けるように麓を行こう

「と思います」

言いながら、地図に道となる線を書き込んだ。それを見ながら、サクが呟いた。

「ずいぶん曲がりくねってるな」

「山は方向を見失いやすいし、何が出るか分かりません。多少遠回りでも、この道を行ったほうが安全でしょうから」

「腹が減ったらどうするんだ？」

「サク、あなたはそればかり！」

ヤツハがあきれ顔をし、シリウは笑いながら言った。

「途中、幾つか町や村がありますから、そこで休んだり食糧も調達できます」

サクは、地図を見ながら線をたどった。

「タニヤ村、ザック町、モノリス村……美味しいもんあるかなあ？」

「もう、あなたはあ！ちゃんと分かっている？遊びじゃないんだからね！」

ヤツハがサクに拳を挙げる横で、カイルは皆に聞こえないほどの小声で呟いた。

「ザック……」

旅のはじまり

出発の朝早く、ソラール兵士養成学校に在籍する何人かの教官や生徒たちが見送りをしてくれた。

「気を付けて行ってこいよ！」

「何かあったら、無理するな！ 逃げるのも勇気だぞ！」

それぞれが声をかけ、その中には保健医のミランもいた。

「あんたたち、何があってもヤケ起こすんじゃないよ！ まったく……まだ子供なのに大変な重荷を背負わせて、校長は一体、何を考えているんだらうね……」

半ば愚痴にも似た事を言いながら、ミランはカイルにそっと小さな布袋を渡した。

「いいかい？ くれぐれも、体には気を付けな！」

カイルはその布袋を大事そうに受け取り、頷いた。シリウはそつとその様子を見つめていたが、何も言わずにいた。ヤツハは、こんな時でもナトウと喧嘩をしそうになっているサクを引っ張り、前を向かせた。

「また帰ってきたら存分にやればいいから！」

「っ分かってるよっ！ さあ、行くぞ！」

気分を切り替えて荷物を背負い直したサクの声に呼応して、シリウ、ヤツハ、カイルの三人は頷いた。

まだ太陽は山の影になってその姿は見えず、東の空が目覚める予感を見せていた。四人は見送ってくれた人たちに手を振り、一路アルコド国へと向かった。

初めての旅。

途中に何かがあるか、全く予想がつかない。体力の温存も兼ねて、急がず確実に進む四人。

防御壁に守られた国や町、呪文札や高い柵に守られた村の中ならある程度安全だが、一步外に出れば、何があるか分からない。

飢えた野生動物、天候、そして、山には『流賊^{ルック}』と呼ばれる者たちがいる。

彼らは、多くは何十人という人数で集まり、道を行く者から金品を奪ったり、ともすれば小さな村を襲ったりする、卑劣で凶悪な者たちである。至る所にその類の賊はいて、派閥闘争も絶えない。

近隣に住み、平穩を願う人々の悩みの種となっている。ほとんどが屈強な男たちの集まりで、一ヶ所にとどまらず、野宿をしながらいつも移動していることから『流賊』と総称されている。

ある程度の訓練を受けているサクたちは、無理さえしなければ乗り越えられるだろう。きっとファンネル校長にも、仲間意識を向上させる目的があつたのかもしれない。

何より、ハミウカ紙をアルコド国に届けるといふ大事な役目がある。

責任を持って果たすこと。

そして、無事にまたソラール兵士養成学校へ帰ってくること。

この依頼には、一国の存続がかかっているという。

十代の若者たちには重くつらい任務かもしれないが、これも試練だと受け取るしかない。

何より、ソラール兵士養成学校を代表するファンネル校長の直々なる頼みなのだ。

サクも一晩経って、さすがに事の重大さを理解し、気を引き締めたようだ。というより、楽しみを見つけた、と言った方が良かったらどうか？ 狭く閉鎖された学校から出られるということは、今まで知らなかった世界を知る機会でもある。

馬車や汽車という、公共の、危険なものから守られた交通手段はいくつかある。だがそれらは、ごく限られた者たちがやっと、高

額な費用を払って乗ることが出来るものばかり。　実際、サクたちがソラール兵士養成学校へ入学するときも、自分で、または知り合いからかき集めた資金をはたいて乗り物に乗ってきた。

だが今回の旅は、周りを巻き込まないことを最重要条件にしていた。　ハミウカ紙を持っていることがどこかで漏れた場合、狙われる可能性は非常に高い。　それほどこのハミウカ紙というものは、大変貴重であり、入手困難なものなのだ。　裏で扱われれば、高額な値段で交渉されるだろう。

四人は、自分たちの力だけで、アルコド国への道を進むことに決めた。

毎日の過酷な訓練のおかげで、しばらくはさほど困難な旅ではなかった。　無論、シャルサム教官が作り出したような、センスのない強いだけの幻獣よりはマシだ。

三時間程進んだ所で

「ひとつめの休憩場所はどこだ？」

十人ほどの団体が襲ってきた流賊を早々と片付けたあと、いつもの口調でサクが吠えた。

「あの丘の上から、見えると思うのですが……」

シリウが地図を見ながら前方を指差して言い終わらないうちに、サクはすでに走りだしていた。

「もっつ！　一人で行動しないようにって言ってるのに！」

困ったように言うヤツハに、シリウは笑いながら言った。

「まあまあ。　彼も、やる時はそれなりに出来る人ですから」

そんな事を言っている間に、サクは丘の先端に立ち、三人に振り返った。

「見えた！　タニヤ村だ！」

すぐに追いついた三人と並び、丘の上から見下ろしたタニヤ村は、森に囲まれた小さな村だった。

辺り一面夕陽に照らされ、濃いオレンジに染まる風景は、日暮れ

が近いことを知らせていた。

村の周りには、数メートルにのぼる木と石の防御壁が立ち、あちこちに獣避けの草木が生えている。町や国でよく見られる、魔導士が強い念で強固に守られた壁とは違う、昔からの人々の知恵の一つだ。防御壁に小さく点在する数ヶ所の門は固く閉ざされていた。サクたちはそのうちの一つに近づいた。人の気配も無く、扉はぴったりと閉まっている。

「こんにちは！」

とシリウが門を叩いた。しばらくして、低く警戒した口調で男の声がした。

「誰だ？」

「旅をしている者です。今夜一泊の宿をお願いしたいのですが」
シリウが丁寧と答えると、門の一角にある小さな窓が開いた。

四人が近づくと、角張った顔のがっしりした体つきの男が顔を出した。

「驚いた！ まだ子供じゃないか！ あの物騒な森を通ってきたのか？」

「んなの、どうってことないぞ！」

サクが自慢げに言いながら、窓いっぱい顔に顔を近付けた。それを押し退けるように、今度はヤツハが顔を見せた。

「あ、あのっ！ あたしたち、怪しい者じゃないんです！ ソラー
ル兵士養成学校から来ました！」

すると男は、また驚いたように言った。

「ああ、そうだったか！ 昨日、その校長からうちの村長宛てに手紙が来たとお触れがあったんだ。生徒たちが寄った時には、受け入れてくれとな！ 少し待ってる」

男は小さな窓を閉じた。すぐに扉の施錠を解いた音がし、見掛けに寄らず重そうな扉を軽々と開け、サクたちを招き入れた。

「ありがとうございます。僕はシリウ。そしてサク、ヤツハ、
カイルです」

三人は順番に紹介されると、それぞれに挨拶をした。

「俺はバカラだ。子供たち四人だけで旅とは、大変だっただろう？ よく来たな。村長に会わせてやる、ついてこい」

四人は小さな扉をくぐり、体格の良い褐色肌のバカラについて行った。

村の中には十何軒かの小さな木製の家がひしめきあっていて、その隙間を縫うような細い路地裏で遊ぶ子供たちは、突然の来客に驚いたように手を止め、じつと四人を見つめている。

村の奥にあつた村長の家は、大きなかやぶき屋根の立派な家屋だった。

「でっかい家！ 金持ちなのかなあ！」

サクが目丸くして、家の外観を仰ぎ見て感嘆の声をあげた。

「村長に。ソラール兵士養成学校から旅人がやってきたと」

バカラが門の前に立っていた御用聞きに言うと、彼は少し待つように言い残して、家の中へ入っていった。あちこち覗きたがるサクをヤツハが押さえていると、再び中から御用聞きが戻ってきて

「中へ招くように、とのことですよ」

と、家の中へ促した。

バカラについて一歩踏み入れると、そこはなんとも煌びやかな内装だった。

「まるで外観はダミーのようですねえ」

シリウは驚いたように周りを見回した。

一面金箔の貼られた壁には、名画らしい絵画や彫刻品など、高そうな芸術品が整然と飾られ、サクも周りに気を取られて足元がおぼつかない。ヤツハのげんこつがサクに飛んだ。

「サク、しっかり歩きなさいよ！ ぶつかって壊したら弁償よ！」

「わははは！ 皆村長のコレクションばかりだ。あまり触るなよ

！ 壊したら怒られるじゃ済まないぞ！」

バカラは笑いながら言い、やがて四人は一番奥の部屋へと通された。

深々と彫刻の掘られた頑丈そうな扉を開くと、巨大な銅像に守られるように挟まれた村長が、柔らかそうな一人掛けのソファに深々と座っていた。

バカラは扉の外で

「俺はここまでだ。 ゆっくりしていけよ！」

と去っていった。

「ありがとうございます！」

シリウが丁寧な礼を言い、ヤツハとカイルもお辞儀をした。 サクは一人、明るく手を振っていた。

「さあ、どうぞ。 よくここまで無事で来られましたな」

初老の村長はたくましく大きな体を揺らして、笑いながら四人を中へと誘った。 口に太い葉巻をくわえながら、目の前のソファにサクたちを促した。 そとと座った体を、ふんわりと包み込み、心地よく感じた。

「私はタニヤ村の長を務めているガラムだ。 さぞや厳しい旅だっただろう？ 最近は本当に外の治安が悪い。 獣避けの草木も効果が無くなってきているなか、よく旅を続けられてきたな」

「この辺りは、そんなに危険にさらされているんですか？」

シリウが静かに尋ねた。 ガラム村長はゆっくりと首を横に振り、ため息をついた。

「この村もこれ以上大きくは出来ず、狭くて住みきれなくなって、やむなく村を出ていく者もいる位なのだよ。 外に出ると言っても、安全な場所などどこにも無いのに……」

「大変なんだな」

サクが心配そうに言っているなか、その腹の虫が鳴る音がした。

バカラはしまった、という顔をして手をひとつ叩き、御用聞きを呼んだ。

「すぐにこの客人に食事の用意を！」

そしてサクにすまなそうな顔をした。

「気が付かなくてすまなかった。きつと緊張のしずめの上、歩き詰めだったのだろう？ 腹が空いていないはずはない。久しぶりの客で、つい話を長引かせてしまった。すぐに用意させるから、ゆっくりしていつてくれ。 寝室も用意してある。 後で案内させよう」

「何から何までありがとうございます。 僕たちは、世の中をほとんど知らずに育っています。 訓練ばかりの毎日ですから。 滅多に無いこういう機会に、色々な話を聞くことが出来るのは、とても貴重で嬉しいことだと思っています」

シリウが言うと、ガラムはさも嬉しそうな顔をした。

「そうかそうか、では、少し聞いてくれるか？ 実は私は、話をするのが大好きで、何かあると口に出さなくては済まない性格なのだ。 おかげで家人には面倒くさがられている」

苦笑しながら言うガラムに、空腹のお腹を押さえたサクが力なく言った。

「食べながらでいいか？」

「こら、サクっ！」

ヤツハがしかる。

「勿論！ 夜は長い。 キミたちが良ければ、二、三泊していつでも良いくらいだ」

ガラムは肩を揺らして笑った。 するとシリウが微笑んで小さく手を振った。

「大変有難いのですが、僕たちは先を急いでいます。 今晚だけ、甘えさせていただく予定ですので」

柔らかい口調で言うシリウ。 ガラムは少し寂しそうな顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「そうか。 そうだな、旅には目的があるものだ！」

そうこうしているうちに、別室には食事の用意がされ、ガラムと共にサクたちはテーブルの前に座った。

「うわぁ！ 美味そうな料理ばかりだ！」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理を見た途端、サクが感嘆の声を上げた。ヤツハも、目の前のフルーツやデザートに目を輝かせている。

「こんな豪華な料理、見たことがないわ！ 学校では絶対に食べられないものばかりね！」

サクとヤツハは嬉しそうに料理を眺めていた。その横で、カイルはシリウにそつと耳打ちした。

「おかしくないか、この村？」

シリウも小さく頷いた。

「僕もそう思いました。」

周りに気付かれないように辺りをそつと見回し

「質素で、いかにも貧しそうな村の外観に比べて、この家の内装の派手さ……いくら村長のコレクションとはいえ、どこか引っかかるんですよ」

と言つて、目の前の料理に目を落とした。見るからに出来立てで、綺麗な盛り付けをされ、美味しそうな匂いと湯気が鼻をくすぐる。空腹なのは、シリウも同じだ。思わず心酔いそうになる。

「料理に何か入ってるんじゃない……おい、サク！」

カイルは思わず慌てた声を上げた。

サクはすでに、口いっぱい料理を頬張りながら、ガラムの話に聞き入っている。ヤツハも、メインよりもデザートに口を付けながら、料理人と思われる人に、どこで採れるフルーツなのか、どうやって作っているのか、などと質問をしている。

「……大丈夫……のようですね」

シリウがあきれて言った。がつついているサクを見て呆然としていたカイルも息をついた。

「だと良いが……」

そう言つて、目の前の料理に恐る恐る口をつけた。

「！ 美味しい……」

カイルの素直な感想に、シリウも同じく、と感心したように頷いた。

それから、シリウとカイルもガラムの話に聞き入り、四人は充実した一夜を過ごした。

ガラムは分かりやすい語り口で、この村に起こった事件や、自分が長として村を必死に守ってきた体験談を延々と話し続け、その話は一刻も止む事がなかった。

途中、先ほど村を案内してくれたバカラも加わり、宴会のように盛り上がり、気が付けば朝陽が昇っていた。

「すまん！ つい話に夢中になつて、夜が明けてしまった！」

もう一日泊まっていかなか、と申し訳なさそうに話すガラム。

だが四人は、安全に夜を過ごせたことだけでも有難いと受け止めていた。

「いいよ、ガラムのおっさん！ オレたち、すげー楽しかったし、体は休めたし、美味しいものたつくさん食べさせてくれたし、充分だ！」

サクはまだ興奮した顔で言った。シリウも頷き

「大変貴重な話を聞くことが出来て、感謝しています。ありがとうございますと

と言つと、ヤツハも

「あたしも、色んなフルーツや料理の事を知ることができて、本当に良かったわ。学校に帰ったら、皆に自慢しなきゃ！」

と満足そうに微笑んだ。

「そうか、皆、道中気をつけてな。帰りには、このタニヤ村に必ずまた寄ってくれ！ その時には、今度こそゆっくり休んでもらうよ。待つとるからな！」

ガラムは大きな体を揺らして村の出口まで行くと、門番のバカラと共に、旅立つ四人を見送った。サクたちも振り返って手を振りながら、タニヤ村との別れを惜しんだ。

シンジテタノ二……

「良かったな、こんなにたくさん土産までもらっちゃまって！」
サクが歩きながら嬉しそうに背中革袋を揺らすと、ヤツ八が言った。

「土産じゃなくて、これからの食料！ あんな小さな村なのに、きつと必死に集めてくれたのよ！ 大事に食べるの！」

と言われている先で、そうつと革袋に手を入れようとするサク。

カイルのげんこつが飛んだ。

「お前、分かかってやってないか？」

「いつてー……」

「しかし、本当に良い村でしたね。 皆さん良い人たちばかりでしたし……ですが……ふああ……」

四人は同時にあくびをした。

「やはり疲れた体に徹夜というのは辛いですね……」

シリウは眼鏡を外して目をこすった。 他の三人も、急に元気を無くしていた。

「少し、はしゃぎ過ぎたかもな……」

カイルがこめかみを軽く押さえた。

折りしも、朝から快晴。 穏やかな日差しが四人を麗らかに暖めていた。

「やべえ……」

サクはふらつき、ついに道端に立つ木の根にぺたんと座りこんだ。
「もう歩けねえよ、眠くて……」

泣きそうに悲痛な表情で、サクが大あくびをした。 体に力が入らない……。

「……あたしもダメかも……」

ヤツ八も同じように、木陰に座り込んだ。 シリウとカイルも長いため息を吐いた。 二人も同じように睡魔に襲われ、体中を疲労

感が支配している。シリウは白くなっていく視界のなか、辺りを見回した。

「本当なら、もっと安全そうな場所を見つけるべきなんです……限界のようですね……」

「見張り役、してやるよ」

カイルが力なく言うと、シリウもつらそうに微笑んだ。

「とりあえず十分だけ……すぐに起こしてください……」

言い終わらないうちに、シリウの体は崩れ落ちた。

「！ シリウ……」

カイルもまた、助けようと膝を付いたあと、そのまま倒れこんでしまった。サクとヤツハも、すでに木陰で目を閉じていた。四人は、突然襲ってきた睡魔に抗うヒマもなく、深い眠りに落ちていった。

しばらくして、寝息をたてるサクたちを、複数の影が囲んだ。

「ん……」

一番最初に目が覚めたのは、カイルだった。目の前に地面が横たわっているのを見て、慌てて起き上がると、反射的に自分の体を探った。

「！ しまった！」

カイルは急いで、まだ寝息を立てているサクたちを揺り起こした。「まずい！ 皆、起きろ！」

目を覚ましたシリウも、すぐに事の大きさを理解したようだった。自身の両頬を叩くと、首を振った。

「不覚でした！ 所持品を奪われるとは！」

「オレの食料もねえ！」

サクが叫んだ。タニヤ村でもらった、食料の入った大きな革袋も姿を消していた。

「一体誰だ、このやるう！」

その体は怒りに打ち震えている。

その時、ヤツハはふと足元にキラリと光るものを見つけた。

「これ……ってまさか……」

シリウはヤツハからソレを受け取ると、丁寧に見た。

「……金箔……ですね……」

「もしかして！」

シリウはヤツハの言葉に頷いた。

「タニヤ村か！」

カイルとサクが同時に言った。

「何て奴らだ！ 戻るぞ！」

サクは震える手で拳を握った。シリウも眼鏡を上げて背筋を伸ばした。

「そうですね。武器も取られてしまつては、この先一步も進めません。それに……」

シリウの表情が曇り、それを察知したヤツハが言った。

「まさかハミウカ紙も？」

「ええ、しつかり盗られてしまいました」

「奴ら、ハミウカ紙を狙つて？」

カイルの眼光が鋭くなつていた。怒りに満ちている証拠だ。

シリウは静かに首を横に振った。

「いえ、校長が僕たちのために近隣の村や町に手紙を送つたとはいえ、旅の目的までは書いていないハズです。ハミウカ紙は、世界でも手に入れにくい貴重な物。そう軽々と口外することはないでしょう」

「それって、売ったら高いのか？」

サクが体をほぐしながら聞いた。ぐっすり睡眠も取つたので、頭はすつきりしている。暴れる準備をするには、充分すぎる体調だった。シリウは頷いた。

「知っている人が見れば、かなりの高額になると思います。ただ、あの村の人たちがそれを知っているかどうかは分かりませんが……」

「そうか！」

サクは充分に体をほぐした。

「じゃあ、そろそろ行くか！」

三人も、大きく頷いた。

その頃タニヤ村では、ガラムの屋敷に数人の男たちが集まっていた。その中にはガラムもバカラも居る。

「ボス、今回の得物はこれだけです。相手が子供ばかりってのが、よくなかったんじゃないですか？」

床に無造作に置かれたサクたちの武器や所持品を見下ろし、不満そうなため息をついた。ガラムもまた、剣やナイフを蹴りながら横に避け、金めの物がほとんどないことを確認すると

「フンッ！」

と鼻で笑った。

「こんなもんじゃあ、昨夜の宴の分にもなりやしねえ。いっそあいつらの体を売るか、人質にして学校を脅迫するかした方が良かったかもな！」

と悪態を付きながら物品を蹴飛ばし

「売り物にならねえもんは捨てちまえ！」

そう仲間たちに言っつてその場を離れようとしたその時、ガラムは何かに気付いて足を止めた。

「ちよつと待て」

そう言っつて仲間の足元にあつた一枚の封筒を拾った。宛名も差出人も書かれていない、白紙の封筒だが、封はしっかりとしてある。中身がある証拠だ。

「こりゃあ……」

いちべつしたガラムは、ニヤリと顔を歪めた。

「大物だぜ、こりゃ……」

バカラたちは何のことか分からず、ただ途端に嬉しそうな顔をし

たガラムをきよとんとした表情で見るだけだった。

その時、何か破壊される大きな音と共に、大きなものが倒れる音がした。

「な、何だ！」

慌てて様子を見に行つたバカラたちの前には、粉々に砕け散つた門が崩れ落ちていた。

「一体誰が？」

呆然としているバカラたちに、立ち上る砂煙の中から声が届いた。「オレたちだよ！」

「おっ！ お前らか！」

サクの声に、バカラたちは一斉に彼らを見据えた。シリウは眼鏡を指で上げながら悠然と言つた。

「預けていたものを、返してもらいに来ました」

「おとなしく返しなさい！」

ヤツハも怒り心頭だ。カイルも鋭い眼光を放つて睨んでいる。バカラはそんな彼らを見て、高笑いをした。

「わははは！ やめておけ！ 俺たちは戦いなれた流族だぜ。目的の為なら女子供だろうと容赦はしない。だが、子供の命を無造作に取るのも気が引けるのでな、今あきらめて引き返せば、命だけは見逃してやるぞ！」

シツシツとまるで小動物でも追い払うかのような仕草をするバカラ。完全に見下しているバカラに

「それが、あきらめられないんですよ。とても大切なものをあなたたちに奪われてしまったのでね」

とシリウが静かに言った。そうは言っても、彼の心の中は燃えるように怒りに震えていただろう。他の三人も同様だ。立ち姿から、怒りの気が放たれていた。

「ご託はいいから、早くあたしたちから奪つたものを返しなさい！」
ヤツハも苛立った口調で言った。

バカラは一層笑い飛ばしたあと、大きな斧を構えた。他の仲間たちもそれぞれに剣や鎌などを構えた。臨戦態勢だ。

「やるってんなら、遠慮なく行くぜ、おっさん！」

サクが飛び出すと、他の三人も同時に地面を蹴った。

訓練で身に付けた技術を駆使して、四人は戦った。サクはまだしも、シリウ、ヤツハ、カイルにとって一つ難点だったのは、丸腰だったことだ。それぞれ得意とする戦いを伸ばしてきた彼らにとって、いつも使っている武器が無いのは、心もとない事だった。

だがその心配も、やがてそれぞれが倒した男たちから奪った武器ですぐに解決した。

屋敷の外は、戦いで生まれた土煙に包まれた。

村のあちこちから仲間が出てきて襲いかかる。こんな小さな村に、こんなに屈強な男たちが何十人も居たのかと不思議に思うほどの団体に囲まれながらも、四人はその身軽さを武器にその壁を崩していった。ガラムの屋敷までもう少しの距離まで近づいた。

「クソツ！ ちょこまかとうるさい奴らだ！」

バカラが大きな斧を振り回すが、サクたちにはかすりもしない。苛立つて力任せに叩きつけた地面に深々と刺さった斧を引き抜こうとするバカラの後頭部をサクの足が蹴りおとし、もんどりうったその太い腕をシリウが背中からねじり上げ、うめき声を上げる首元にカイルがナイフを付きつけ、動けなくなった汗だくの顔を見下ろしたヤツハが余裕の表情で尋ねた。

「お頭さまは、どこ？」

残党たちは、リーダーであるバカラがねじ伏せられている様子に愕然とし、動きが止まった。

「っ……奥の……部屋だ……」

「行くぞ！」

サクの声でシリウはその手を離し、一同はガラムの家へと歩を進めた。

山のように詰まれた流族たち。そこに、ゆっくりと起き上がる影。

「このガキっ！」

バカラは懲りてなどいなかった。勢いよく地面を蹴り、サクたちに再び襲い掛かるうとしたが、すぐにその体が止まった。冷静にカイルが放ったナイフが、バカラの喉元を貫いたのだった。

「な……」

血しぶきを上げ、大きな砂煙を巻きあげて倒れたバカラを振り返ることも無く、サクたちはガラムの屋敷へと入って行った。

御用聞きと偽っていた下っ端たちもなぎ倒し、わき目も振らずに奥の部屋へと歩を進め、やがてその扉はサクの足によって無造作に開け放たれた。

部屋の奥では、驚いた顔をしたガラムが追い詰められたように、サクたちを震えながら見ていた。

「オレたちの荷物、返せよ！」

迫るサクの前で、ガラムはハミウカ紙の入った封筒を破る格好をした。

「これだろ？ こいつは土地を浄化するというハミウカ紙。どこでこれを手に入れたのかは知らないが、こいつが無くなると、お前らは困ることになるんだらう？」

ガラムの目が見開かれ、その顔は憎らしげに歪んだ。

「てめえ！ 卑怯なことすんな！」

サクが動けずに怒ると、ガラムの顔は一層ひどく歪んだ。確証を得た証拠だ。

「それ以上近づくな！ こいつを破るぞ！」

だがシリウはかまわずに足を進めた。

「く、来るなど言っているだらう！」

ガラムは慌てふためきながら後ずさりをし、封筒を顔の前に持つてくると、今にも破り捨てる素振りを見せた。

だがシリウは冷静な顔で、ゆっくりと眼鏡を指で上げた。

「破るのが先か、あなたが命を落とすのが先か……」
そして不敵に微笑んだ。

「！ 何っ！」

動きが止まったガラムの首元に、ナイフが突きつけられていた。

「い……いつの間に……」

ガラムの冷や汗が、その頬を流れ落ちた。震えながら目玉だけを向けたガラムの目の前には、冷たい視線を向けたカイルの顔があった。

「その封筒を離せ」

抑揚も無く冷たく言い放つカイルの前で、ガラムの震える指から封筒が静かに落ちた。軽い音を立てて床に落ちた封筒をシリウが悠然と拾い、ホツとしたように微笑んだ。

「このやるーっ！」

サクが怒りの表情でガラムに殴りかかるうとしたが、その腕はシリウにつかまれた。

「何するんだよ！ 一発殴らせろよっ！」

もがくサクに、シリウは静かに

「もう、終わりました。無駄に手を汚すことは無いですよ」

と微笑んだ。サクは悔しそうに、ちっ！と舌打ちをして

「お前、命拾いしたな！」

と捨て台詞を吐いた。シリウもサクの腕をそつと離し、カイルに頷いた。

カイルのナイフが離れ、ガラムが力なく座り込む前で、サクたちは自分の荷物を拾ってほこりを叩き落した。

「ここ最近、この辺りで強盗が頻繁に起きているという噂は聞いていました。ここまで来る途中で襲ってきた流族たちがそうなのかと思っていました……まさか居を構え、普通の民を装っていると

は思ってもみませんでした」

シリウは冷たい目でガラムを見下ろした。ガラムは全てを失ったことを理解し、すっかり意欲を無くしてうつむいていた。

「確かに、外を歩き回る流族よりは、安全で確実な方法かもしれないませんけどね。人様に迷惑を掛けるようなことをする流族を、僕は絶対に許せません！」

シリウの冷たい視線に小さくなったガラムを置いて、サクたちは荒れ果てた廊下をすり抜けて、屋敷を出た。

真実と絆

外にはまだ残党が散らばって屋敷の中を伺っていたが、サクたちの姿を見た途端、怯え震えて後ずさりをした。ボスのガラムが落ちたことを知ったからだ。

サクたちは残党たちの視線を気にする素振りも無く、村の外へと向かった。その時

「お前ら！ 絶対！ 許せない！」
と甲高い声が響いた。

見ると、母親と見られる女性の制止を振り切って、まだ五、六歳ほどの少年がサクたちに駆け寄ってきた。見ると、小さな体には不釣合いに煌めくナイフをしっかりと両手で握っている。そのままでの勢いで、少年はサクへとナイフを振りかざして襲い掛かった。
「おっと！」

サクは、軽々と襲ってきた少年の攻撃をかわし、その細腕をつかみ上げた。その拍子に、手にしていたナイフも金属音を立てて地面に落ちた。

「くっ！ 離せ！ 離せつてば！」

「サク！」

ヤツハが戸惑いながら少年を見つめた。少年はもがきながら、今度はサクの体を蹴ろうと足をバタつかせている。だが、その短い足ではかすりもしない。

「ヤンバス！」

母親らしき女性が近づけないまま、地面に膝をついて少年の名を悲痛に呼んだ。

「お前、この村の子供か？」

サクが人懐っこく微笑み、軽い口調でヤンバスに尋ねた。ヤンバスはサクの頬につばを吐きかけた。

「！」

シリウとカイルの緊張が走った。怒らせたなら、例え相手が子供だろうが、何をするか分からない。

だがサクは、ゆっくりと頬を腕で拭き、少年を見つめ返した。

「ヤンバスって言うのか」

「強盗のお前らなんか、名前で呼ばれる筋合いなんかじゃない！」

「強盗？」

ヤツハが驚いて尋ねた。

「そうだろ？ 父ちゃんたちが一生懸命稼いできた物を、お前らは盗んだんだ！ 村もこんなに滅茶苦茶にして！ お前ら、絶対許せない！」

「そうか……」

カイルが呟いた。

「この村の男たちは、家族に自分が流族だっことを言っていないだ」

シリウはそれを聞き、小さく頷いた。

「その様ですね。彼らにとっては、僕たちはただの強盗………ということですか」

サクはじつと少年を見つめ、そして突き放すようにその手を離れた。

しりもちをついて地面に転がったヤンバスは、それでも心は折れなかった。睨む瞳は、憎悪で輝いている。

「ヤンバス！ 今はわかんねえかも知れないけど、聞け！」

「っ！」

ヤンバスはサクの気迫に押され、言葉をつぐんだ。

「大事なものは、真実を知ることだ！ 見えない所に、真実は隠れてる！」

ヤンバスは呆然と聞き入っていた。サクはニツと微笑んだ。

「お前、将来絶対強くなる！ オレが保障する！ 村を荒らしたことは謝る。すまなかった！」

すっかり言葉を失ったヤンバスを残して、サクは歩き始めた。

その後を、他の三人も追いかけた。後ろ髪を引かれる思いでヤツハが振り返ると、まだ膝を付いている状態で、じっと見つめるヤンバスの姿が見えた。その表情に、もう憎悪の気配は無かった。というより、ただサクの気迫に押さえ込まれたのだろう。

「あの子……」

ヤツハが心配そうに言うと、カイルが言った。

「大丈夫だ」

「え？」

「目は死んじやいなかった。あの子は、大人になって全て分かった時、自分で行くべき道を選べる男だ」

そう言うカイルに、シリウは微笑んだ。

「そうですね」

不快感をあらわにする村人の視線を浴びながら、サクたちはタニヤ村を後にした。

タニヤ村を出てしばらく行ったあと、戦いで受けた怪我の手当てをするために安全な場所を確保した四人の口論は激化していた。

「まったく、ちゃんと持つとけよな！」

ヤツハにキズの手当てを受けながら、サクはシリウを責めた。

彼は申し訳なさそうに

「すみません。僕も油断していました。まさかあそこまで睡魔に襲われるとは思いませんでした」

「シリウだけの性じゃないわよ！料理の中に何か入れられていたのかもしれないし、何より、シリウが持っているのを知っていたあたしたちだって、守らなきゃならない責任があるのよ。皆の責任だわ！」

ヤツハが弁護するように言うと、カイルもうつむいた。

「見張りするって言ったのに、俺まで眠ってしまった……」

「カイル、自分を責めることはないわ！サクの方が、一番先に寝

たじゃない！」

キズに巻いた包帯を無理やり絞られ、悲鳴を上げるサク。

「分かつてるよ……オレも油断してた。シリウの性だけにしちゃ悪いよな。ごめん！」

シリウは首を横に振った。

「これからは、もつと気を引き締めて行かないと！ 何があるか分かりませんから」

それから、胸のポケットを軽く叩いた。シリウはヤツハに頼んで、内ポケットを嚴重に縫いこんでもらうことにした。

その後、休み無く半日以上を歩き続け、時々襲ってくる獣たちと戦いながら進み、さすがにへとへとになった四人は、森に囲まれた泉のほとりで野宿をすることにした。ひとりひとりが交代で見張りをしながら、数時間ずつの睡眠を取ることにした。

月明かりにぼんやりと照らされ、虫の鳴き声だけが響く森の中は風も穏やかで、ゆっくりと時間が流れているようだった。

「静かですねえ」

シリウの声に、見張り役だったカイルが振り向いた。

「まだ起きていたのか？ 少しでも眠っておいた方がよい」

シリウは答えずに、カイルの横に座った。サクとヤツハは同じ木の幹にもたれて、毛布にくるまって眠っている。寝顔を見れば、まだ十代半ばの子供の顔だ。気を張り続けた末の、短い安息の時。

「シリウ、いいから眠って」

カイルの言葉を遮って、シリウはシートと自分の唇の前で人差し指を立てた。

「人にはね、適当って言葉があるんですよ。充分、休息は取らせていただきました」

そう言って微笑むシリウに、カイルは思わず見入ってしまいそう

になった。

「！」

我に返り、慌てて視線を逸らすと、カイルは緩やかな波を立てる水面を見つめた。

「これからも、学校では味わえないことがたくさん起こりそうですね」

シリウが穏やかに言った。

「まだ先は長い」

カイルが呟くと、シリウはその顔を覗き込んだ。

「怖い、ですか？」

するとカイルはキツと睨んだ。

「そんなことはない！ 俺も厳しい訓練を乗り越えてきている。

それにこの旅が危険なことくらい、最初から覚悟している！」

カイルは、眠っているサクとヤツハを起こさない程度の音量で言った。

「そうですね。僕は怖いですけどね」

シリウはそう言って微笑んだ。思わず見つめるカイルに

「意外そうな顔ですね？ でも僕は、一度過ちを犯しました。ハミウカ紙は、命を削っても守らなくてはならない。その重圧を、今更ながら思い知っています」

シリウは、胸を強く押さえ、カイルもその胸元を見つめた。

「そうだったな……この旅は、シリウが一番気が重いのかもしれない。でも俺たちは、あの事があったことで、一層絆が深まったはずだ！ もう間違いはないと思う」

「絆……フツツ……カイルからその言葉を聞くとは」

シリウは嬉しそうに笑った。カイルの頬が赤くなったようだったが、夜の薄暗さにはやむやにされた。

「と、とにかく、俺たちはファンネル校長に信用されて依頼されたんだ。その期待を裏切ることにはできないってことだ！」

まるで自分に言い聞かせるように言うカイルに、シリウは微笑ん

で頷いた。そしておもむろにカイルに寄り添うと囁くように言った。

「ところで、旅立つ時に、あなたがミラン先生から受け取った物が気になっているんですが……」

カイルは驚いたように体を離れた。

「知っていたのか？」

シリウは微笑んで頷いた。

「それに、月に一度、医務室に通っていることも気になります」

カイルはそこまで知ってるのか、と観念したようにため息をついた。そして懐から布袋を取り出した。旅立つ時に、ミランがそつと手渡したものだ。

「痛み止めだ」

カイルは袋の口を開き、手のひらにそのいくつかを取り出した。

錠剤の形をしているそれは、確かに薬のようだった。シリウはそれを興味深そうに見つめ、次にカイルの顔を見た。

「何か持病でも？」

心配そうに尋ねるシリウに、カイルは視線を逸らせて答えた。

「持病……まあ、そうだな……」

そして、錠剤を布袋に戻した。

「あまり聞かれたくないことも、人にはある」

と、それ以上は黙った。シリウはあきらめたように息をつく、木の幹にもたれた。

「そうですね。でも、無理しないでくださいね。薬があると

言っても、気休めにしかならないと思って」

「それはミラン先生にも言われた。薬に頼るな、と。でも……」

続けようとしたカイルだったが、口をつぐんだ。

「助け合うのが仲間です。薬よりも仲間に頼った方が、健康的かもしれないよ。あとは、睡眠も。さ、時間ですよ、カイル」

優しい口調のシリウに、カイルは穏やかに微笑んだ。

「ありがとう、シリウ。感謝する」

そして静かにサクとヤツハの所へ近づくと、上着を後頭部まで深く着こんで、眠りに付いた。

「おやすみなさい、カイル」

シリウは、カイルが小さくうずくまるのを見届けると、ひとり微笑んで再び泉を見つめた。

静かな時が、一時の安息を包んでいた。

いざ！ ザック町へ！

「次はザック町だな！」

「そろそろ食糧も尽きかけているし、少し急いだほうがいいかも？」
サクとヤツハが言うと、シリウも頷いた。

「アルコド国まではまだ中間地点です。 ザックは少し大きな町のようですよ、しっかりと体を休めて、続く旅に向けて備えましょう！」

シリウはふとカイルを見た。 どこか心ココにあらずと言った雰
囲気を感じたので

「カイル？ 大丈夫ですか？」

と尋ねると、カイルはハツと我に返り、慌てて頷いた。

そうして一行は、一路次の町ザックへと向かった。

ザック町は、森と海に面した漁業の町。

港では道の両側に店が立ち並び、海で獲れた新鮮な魚介類が並び、
人で溢れかえっている。 サクたちはその繁栄ぶりに圧倒された。

「にぎやかな町だなあ！ 美味しいもんがたくさんありそう！」

サクはすでにヨダレを垂らしている。

「サク、ヨダレが汚い！ でも、これだけのいろんな魚介類、あ
たしも見たことないわ！ ホント、栄えてるのね！」

すっかり興奮しているサクやヤツハ。 あちこちに目が奪われ、
興味津々でふらついている。

「ここからアルコド国に食糧を届けているんだ。 もうあの国に、
自給の力はないと思う」

カイルが神妙な顔でつぶやいた。 それを聞き、三人はそれぞれ
に、自分たちの責任の重さを感じるのだった。 シリウは胸のポケ
ットに忍ばせてあるハミウカ紙を、そつと押さえて確認した。

「とりあえず、食事にしましょう！」

シリウの一言で、もちろん大賛成のサクを筆頭に町の中を歩いた。

石造りの建物がひしめき合い、人通りも多い。まるで異世界に
来たような錯覚に陥る。いろいろな人種が集まり、交わす言葉も
知らない言語が混じる。

「カイル、ここは、何が美味しいんですか？」

シリウが聞くと、カイルは少し考えて言った。

「ここは、見ての通り漁業が盛んだから、魚料理かな。新鮮な魚
を出してもらえる」

一行はレストランを探すと、中に入った。

「魚くれ！ 魚、魚！」

サクがテーブルを盛んに叩くので、またヤツハの制裁が落ちた。

「他の人の迷惑も考えて！」

その前で、もう慣れてそ知らぬ顔をしたシリウがカイルにメニュー
を見せてた。

「どれが良いですかねえ？」

カイルはメニュー表を上から順番にたどった。

「これだと、皆で分けながら食べられるし、量も多い」

「じゃあ、これにしましょう！」

シリウは店員を呼んだ。

しばらくして、心待ちにしながら先に置かれたフォークとナイフ
を持って待っているサクの前に、テーブルいっぱい分厚い大皿が
重い音を立てて置かれた。

「でっけ〜！ いくらオレでも、こんなに食べねえよ？」

「バカね！ 皆で分けるのっ！」

「具だくさんで、すごいボリュームですね！」

シリウも驚いた声を出した。

「これ、なんていう料理なの？」

ヤツハが聞くと、カイルはひとつ頷いて答えた。

「『パエリア』っていうんだ。貝やイカとかと米を煮込んだ、家庭料理で」

「うんめえ〜！ しかしカイル、この町の事詳しいんだなっ！」

「ん？ あ、ああ」

カイルの返事を聞くのもそこそこに、はち切れそうな頬で笑顔になるサク。

「ホント、美味しい！ 素材の味がすごく生きてる！」

「本当に美味しいですね！」

空腹の性もあってか、それぞれかきこむように喜んで食べる姿を見て、カイルは思わず微笑んでいた。そして、自分も同じようにパエリアをかきこんだ。

「うまかった〜！ 腹がパンパンだ！」

満足そうに膨れた腹をさするサクを先頭に、久しぶりにしっかりと栄養補給ができた一行は、宿を取った。

「費用は学校持ちですから」

と微笑みながら、シリウは贅沢にも一人一部屋を取った。

仲間としてずっと一緒にいるが、曲がりなりにもそれぞれ違う思いを強く胸に秘め、毎日を学んでいる者たちだ。たまには一人になる時間も必要だろうという、ちよつとしたシリウの気遣いだった。いつも元気に小突き合っているサクとヤツハはまだしも、カイルの表情には、体力的以外の疲労が出ていた。

「カイル、今夜はゆっくり休んでくださいね」

そつと囁くように言ったシリウに、カイルは申し訳なさそうに頷いた。

「正直、人とこんなに長い間一緒に居ることに慣れてなくて……すまない、気を遣わせたな……」

カイルは静かに部屋の扉を閉めると、倒れこむようにベッドに沈んだ。途端に、清潔なシーツからのぼる石鹸の匂いが鼻をくすぐる。

「ぶつ……」

目を閉じて大きく息をした。

しばらくそうしていた後、カイルはゆっくりと起き上がり、窓から外を見た。二階の窓から見下ろす町には、まだ人や馬車がひっきりなしに道を行き交っている。夕暮れも近い。西日が町をオレンジ色に染めている。遠くに見える高い時計台が、午後六時を差している。

カイルは軽く身を覆っていた防具を脱いだ。そして着ていた服を替えると、洗面所で顔を洗った。そして、軽装のまま部屋の鍵と少しの金をポケットにねじこむと、部屋の扉を開いた。

「あ、カイル！」

宿の受付の辺りでサクの声がし、カイルが振り向くとそこにはヤツハも揃っていた。

「どこかに行くのか？」

サクが訪ねると

「サクたちこそ、どこかへ？」

とカイルも聞き返した。サクは途端に笑顔で答えた。

「近くに温泉があるってさっき聞いたからさ、行ってみようかと思つて！で、お前とシリウも呼びに行くところだったんだ！」

「ね、一緒に行かない？あ、もちろん混浴じゃないわよ！しばらくまともに体を洗ってないし、久しぶりにさっぱりしましょうよ！」

ヤツハもにつこりと誘った。カイルは愛想笑いで手を振った。

「俺はいいよ。シリウと三人で行ってこいよ。ザツクの温泉は、疲労回復によく効くらしい」

「じゃあなおさらカイルも温泉入った方がいいんじゃない？」

カイルは首を横に振った。

「俺は少し用事があるから。楽しんでこいよ」

軽く手を振ってその場を離れるカイルの背中にサクが呼び掛けた。

「後からでもいいから、来いよ〜！」
カイルは答えずに、夕刻の町へと姿を消した。

勢いよくしぶきが上がった。

「あつちい〜〜！ でも気持ちいい〜〜！」

サクの声が露天風呂に響く。湯けむりが漂うなか、シリウもちやっかり湯に浸かっていた。湯気で眼鏡が真っ白だ。

「本当に、気持ちいいですねえ。カイルも来ればよかったのに」
白く濁った湯を手ですくいながらシリウが言うと、潜っていたサクが勢いよく湯から飛び出して言った。

「なんか用事があるってさ。あいつ、旅の途中でも一緒に水浴びとかしたがるんだよな！」

それでもあまり気にしていないような口調で言い、そして不意に壁を見ると、耳を近付けた。

「シリウっ！ 向こう、女湯だったよな？」

サクが囁くように言うと、シリウも

「確かそうだったよな……」

と声を潜めた。サクはにやけながら、おもむろに壁をよじ登りはじめた。

壁と言っても、岩でできた簡易的なものだ。器用に上までのぼると、懸垂の要領で目の辺りまで覗かせた。

「湯気でぼんやりとしか見えねえ……」

残念そうに言っていると、急に激しい風が吹き、湯けむりを揺らした。

「うわお！」

サクが思わず声をあげた途端、彼に軽い物体がぶつかる音と共にサクが落ちた。湯しぶきが勢い良く上がり、起き上がったサクにヤツハの怒号が刺さった。

「なに見てんのよ？ バカ！ 変態！」

「お前なんか見るわけねえだろ！ 他にいねえのかよ、姉ちゃんがさあ！」

「なんですってーっ？」

いきなりヤツハの顔が壁の上に現れ、桶を振り上げた。

カコーン！

再び軽い音が露天風呂に響き、サクの頭には二つのごぶが出来ていた。

「やるか、このやろう！」

サクが構えると、ヤツハは鼻で笑い

「そおんなちっちゃい奴に負ける気がしないわ」

と言うと、サクはヤツハの視線をたどって自分の股間に手を当て、慌てて湯の中に沈んだ。

「見んなよ、こらあ！」

「あはははっ！」

ヤツハはサクを笑い飛ばし、サクは必死に言葉で返すが、事は明らかにヤツハが優位に立っていた。その様子を見ながら

「二人は、本当に仲が良いですねえ」

と湯に浸かったままのシリウは、桶を二つ持って微笑んでいた。

故郷は涙の香り

一方カイルはというと、夕刻の町の中を一人でゆっくりと歩いていった。

訓練に明け暮れる毎日を忘れさせるような平和な町中は、つい数時間前まで厳しく危険な旅をして来たことさえも和ませるようだった。武器も防具も持っていない普通の人になっているカイルは、町の片隅のベンチに座って、しばらく人の往来を眺めたあと、おもむろに立ち上がるとまた歩き始めた。

そして一軒の店の前まで来ると、立ち止まった。

木で出来たあまり大きくない建物は、どうやら飲み屋のようだった。『セブンスヘブン』と小さく看板がある扉を開くと、

カランカランカラン

と、丁度いい音量をしたベルの音が、心地よく頭上から降ってきた。

「いらっしやいませ」

低い声が耳に届いた瞬間、カイルの顔がほころんだ。

「あら、久しぶりですねえ」

カウンターの向こう側には長身のマスターが控えていて、彼はカイルを見るなり少し驚いた顔をした後、すぐに歓迎するように微笑んだ。

肩まで伸びたストレートの黒髪をひとつにまとめ、口元に髭を蓄え、白いノータイのブラウスに黒いベストがしっくり似合っている。清潔感のある、印象の良いバーテンダーだ。

「久しぶり。賑わってるみたいだね」

カイルはかるうじて空いていたカウンターの端に座った。店内

にはカウンターの他に五つのテーブル席があり、そのほとんどが埋まっていた。

ほろ酔いの客たちは各々に話し合い、盛り上がっている。

「おかげさまで。この辺りは商売もまだまだ盛んですから」

カイルは差し出されたメニュー表を手にとると、フルードリンクを頼んだ。

「かしこまりました」

マスターは丁寧に軽くお辞儀をすると、ドリンクを作りはじめた。その様子を、頬に手を付いて眺めるカイル。その顔にはずっと笑顔が浮かんでいる。

「懐かしいな……」

と呟くカイルの肩が、ぼんと叩かれた。振り向くと、トレイを持った女性店員が立っていた。まだカイルと同じ歳くらいの彼女は、カイルに向かって明るい声を出した。

「久しぶりじゃん！ 元気だった？」

途端、カイルの笑顔が弾けた。

「！ オツカ、久しぶり！」

思わず立ち上がったカイルに、オツカは空のトレイを無造作にカウンターの置くなり抱きついた。カイルもまた、オツカの背中を軽く叩きながら抱き締め返した。

「もう、会えないかと思った……」

そう呟くオツカの瞳には、涙が溢れていた。カイルは身体を離して、指でゆっくりとその涙を拭いてやると、笑顔で覗き込んだ。

「元気にしてた？」

オツカは無理やり微笑んでみせ、大きく頷いた。そしてカイルを再び席に座らせると、ゆっくりして行って、と涙を拭った。

「お待たせいたしました」

マスターが出してくれたフルードリンクをストローでゆっくり飲んでいると

「久しぶりだね！」

と再び声が掛かった。 さつきと違う声に再び振り返ると、目の大きな男の店員が笑顔で立っていた。 立てた短髪が元気の良さを表しているようだ。

「カゲ！」

カイルはまたもや笑顔が弾けた。

「久しぶり！ 皆、元気そうでよかった！」

ホツとしたように息をついたが、落ち着く暇もなく、カイルは二人と話しはじめた。

それは、久しぶりの再会を果たせた事の喜びであり、昔に戻れる一時でもあった。 カイルはずっと、とびきりの笑顔を見せていた。まるで無邪気な子供に戻ったように。

オツカもまた、仕事はそっこのけでトレイをカウンターに乗せたまま話し込んでいたが、マスターはただ微笑んで三人を見守るだけであった。

その時

カランカランカラン

という来客のベルが鳴った。

「いらっしやいませ〜！」

反射的にオツカとカゲが挨拶をした。 カゲは、注文を取ろうとトレイを手に取り掛けたオツカを制止して

「いいよ、ボクが行ってくる！ オツカはゆっくり話してて！」

と笑顔で言うと、お客のもとへと近づいていった。

「カゲはホントによく動いてくれるんですよ」

マスターが微笑んで言った。

「皆、変わってないみたいだ」

カイルは目を細めた。 カゲは一人で入ってきた若い男の客を席へと誘導すると、メニュー表を渡した。

「ご注文が決まりましたら、お呼びください」

丁寧に應對すると、客の男は微笑んで言った。

「なんだか、盛り上がったっているようですね」

男の視線をたどるとカウンターで仲良く話すカイルとオツカが見えた。

「ああ、久しぶりに会ったので、喜んでるんです」

「久しぶりの再会ですか？」

「ええ。で、ご注文は……？」

カゲが笑顔で尋ねると、男は

「珈琲を戴けますか？」

と微笑んでメニュー表をカゲに手渡した。

「かしこまりました。少々お待ちください」

軽く一礼すると、カゲはカウンターに戻り、マスターに

「珈琲ワン！」

と告げた。カゲもカイルとオツカの間に入り話し込んでいると、やがて珈琲のいい香りがあり広くない店内を漂いはじめた。賑わっている店内が、一時和むようだ。

「珈琲、出来ました」

マスターがカウンターにコーヒークップを置くと、カゲは小気味よい返事をして受け取り、男の前に丁寧に置いた。

「お待たせしました」

「ありがとう。ところで……」

男はカゲに囁くように言った。

「あの人たちは、恋人なんですか？」

『あの人たち』とは、カイルとオツカの事だろうと気付いたカゲは、思わず吹き出した。

「あはは！ 違いますよ！ あの店員じゃない方、男っぽい格好はしてませんが、れっきとした女なんですから」

「はい？」

「二人とも女の子！」

カゲはくったくのない笑顔で繰り返した。まるで、カイルの事

を面白がっているようだった。

「そうだったんですか……それで……」

男は不意に何か考え込んだ風になった。

「どうかしたんですか？」

カゲが心配そうに言うのと、男は我に返って微笑んだ。

「あ、変なこと聞いてすみません。ありがとうございます。いい香りですね」

「ありがとうございます。ココの珈琲は、マスターが自ら厳選した豆から挽いてますから！うちの自慢なんですよ。ごゆっくりカゲはまた軽く一礼して、カウンターに戻った。

店内はかなりの賑わいようで、やがてカゲとオツカも仕事に追われた。グラスに残った氷をストローで軽くつつくカイルに、マスターが優しい口調で尋ねた。

「気持ち、あれから変わりませんか？」

するとカイルは氷を見つめたまま手を止めて頷いた。マスターは小さく息をつき、言った。

「そうですね……オツカもカゲも、毎日の様にあなたのことを心配していますよ」

カイルは肘をつくと、苦笑いをした。

「分かってる。けど、俺はアイツを絶対許さない」

静かな口調からはそれでも、固い意志が感じられた。マスター

はやはり、とあきらめたような小さいため息をつき

「約束、覚えていますか？」

と尋ねた。カイルは微笑んだ。

「もちろん。必ず生きて帰って、セブンスへブンの用心棒になるよ」

そして、空になったグラスを軽く押しして席を立つと

「そろそろ行くよ」

と懐に手を伸ばした。

「今日は、お勘定はいりませんよ」

マスターはそう言って、グラスを下げた。

「帰ってきたら、その分働いてもらいますからね」

マスターはからかうように微笑み、カイルは少し驚いた顔をしたが、すぐに頷いて微笑み返した。 慣れた間柄の仕草だった。

「あれ、もう行くの？」

仕事に追われながら、カゲが声をかけた。

「ああ。 皆の元気そうな顔を見られて良かった。 また来るよ！」
カイルは笑顔で言った。 そしてひとつ手を振ると、静かに店を出ていった。

カランカランカラン

その音を追うように、扉を開ける音がした。

「カミイル！」

カミイルと呼ばれたのは、カイルだった。 トレイを持ったまま追いついてきたオツカは、助走をつけてカイルに抱きついた。

「オツカ！」

その勢いに、受け止めたカイルはかろうじて倒れることを免れた。

「お願い！ 生きて、必ず帰ってきて！」

悲痛な表情で言うオツカに、カイルは微笑んで頷いた。

「約束する。 全て終わったら、必ず帰ってきて、セブンスへブンで一緒に働く」

オツカの潤んだ瞳が街灯に照らされて揺れている。 外はすっかり夜だ。 だが、人の往来は相変わらず多い。

カイルはオツカの頭を優しく叩き

「ほら、もう泣かない！ 泣き顔なんて見せたら、お客さんに失礼だろ？」

いたずらっぽく笑いながら、オツカの顔を覗き込んだ。

カゲは放心した表情でカウンターに寄りかかっていた。
「行ってしまいましたねえ」

マスターの静かな言葉に、カゲは呟くように言った。

「でも、信じたいんだ……カミイルのこと……」

固い意志を持った瞳で言うカゲの横に、人影が並んだ。

「お会計をお願いします」

話し掛けたのは、さっきの若い男だった。

「呼んでくだされば、参りましたのに」

マスターが申し訳なさそうに言うと、男はいいえ、と首を横に振り

「さっきの子とお知り合いなんですか？」

微笑んで話し掛けた。カゲは会計をしながら

「あなた、一体誰なんですか？」

と怪訝な表情で尋ねた。さっきからカイルの事を探るような質問をしていることに、今更ながら気付いたのだ。

懐からお金を取り出すと、男は外していた眼鏡を掛けながら静かに答えた。

「一緒に旅をしている、シリウと言うものです」

すると二人は驚き、そして顔を見合わすと、途端に喜びの表情になった。

「アイツ、『俺はいつも独りだ』なんて言ってたけど、ちゃんと仲間がいるんじゃないか！」

カゲは嬉しそうに叫んだ。

「他にも二人居るんですよ。皆、いい仲間たちです」

シリウの言葉に、マスターも嬉しそうに頷いた。

「あまり自分のことを話してくれないので、ついここまで後をつけてきてしまいました」

苦笑いをするシリウに、マスターとカゲも同意するように苦笑いを返した。

「僕たち、孤児なんです。ある事件があって家もなにもかも失った時、救ってくれたのがマスターなんです」

「そうだったんですか。　で、その事件と言うのは……？」
そう尋ねた時、

カランカランカラン

とベルの音が鳴り、オツカが戻ってきた。　涙を拭きながら店に入ってきた彼女は、カウンターで二人と一緒にいるシリウに気付くと、近寄ってきた。

「何かあったの？」

客と何かトラブルでもあったのかと営業モードに切り替わったオツカに、カゲは笑って言った。

「この人、カミイルと一緒に旅をしているんだって！」

するとオツカは目を見開いて再び涙を溜めてシリウに詰め寄った。

「お願い！　カミイルを助けて！」

「オツカ！」

長身のシリウにしがみつくように肩口を掴むオツカを抑えるように、カゲがオツカの肩を優しく掴んだ。

「カミイル、と言うんですね、彼女の本当の名前は？」

オツカとカゲは大きく頷いた。　懇願する意志が詰まった瞳が照明を反射して輝いている。　シリウは微笑みながらオツカの両手を握った。

「カミイルは僕たちの大切な仲間ですから。　痛みは分け合ってもりでいます。　それに、僕も安心しました」

そう言いながら、二人とマスターを見た。

「こんなに心配してくれる人たちがいるということに」
シリウは三人に、必ずカミイルを守ると約束をした。

カイルがカミイルだった時

カイルは港の脇にある小さな公園のベンチに座っていた。

緩やかな潮風がカイルの前髪を揺らしている。ぼんやりと港を流れるように航行する船や、照明を反射して揺れる水面を見ていた。不意に、横に座った影に驚いて見ると、シリウだった。

「な、なんでここに？」

驚きを隠せず、動揺するカイルに、シリウは優しく微笑んだ。

「オツカちゃんが、きつとココにいるだろうって、教えてくれたんですよ」

「オツカ？ ……なぜオツカの事を！」

思わず立ち上がり後ずさりするカイルに、シリウは、まあまあと微笑みながら、ベンチに座るように促した。

「シリウ、君は一体何がしたいんだ？」

怒りにも似た口調で立ち尽くすカイル。両手の拳がきつく握られている。

「驚かせてすみません。僕はただ、あなたのことが知りたいだけなんです」

シリウは申し訳なさそうに言った。

「俺の事など詮索するなと言ったはずだ！」

「気分を害してしまって、本当にすみません。でも僕たちは、仲間なんですよ、カミイル」

カイルは、はっとした表情で目を見開き、そして、あきらめたように力なく肩を落とした。

「とりあえず、座ってください」

シリウの誘いに、カイルはベンチへとゆっくり近づいて座った。

「みんな、知ってるのか？」

カイルはシリウと視線を合わせずに呟いた。

「聞いたのは、あなたの本当の名前くらいです。僕は出来るだけ、

本当のことをあなたから聞きたい」

シリウは優しく言った。カイルはため息をついて俯いた。やがて観念したように大きく息を吸いながら顔を上げた。

「どこまで知ってる？」

シリウは、カイルの本当の名前の事と、オツカ、カゲと共に孤児だったと言う事だけは知っていると告げた。カイルは

「そうか……」

とまた少し俯いて考えると、やがて話し始めた。

「俺は小さい頃、マチという女性に育てられていた。物心ついたときにはすでにオツカもカゲもいて、三人は本当の兄弟のように育てられていた……」

カイルは、ザツクの町外れにある一軒家で育てられた。紛争地帯の焼けた村で泣いているまだ赤ん坊だった三人を、軍医だったマチは仕事を辞めて引き取り、カミイル、オツカ、カゲと名付けて女手ひとつで育てていた。

マチ自身、子供が好きだったこともあって、いきなり三人の子供が出来たことは負担ではなかった。むしろ、毎日が騒がしく楽しい生活だった。恰幅の良い、粹な男勝りのマチのもとで、三人は元気にすくすくと育っていた。

そんなある日、最悪の事件は起こった。

誕生日は分からなかったが、マチに助けられてから十年経ったということは知っていた。拾われてから数え年で、三人は揃って十歳になったばかりだった。

その日はマチに社会勉強だと言われ、買い出しに出掛けていた。

皆で協力してなんとか無事に必要なものを手に入れると、すっかり安心した三人はふざけてじゃれあいながら帰路についていた。やがて家の近くまで行くと、カミイルは何か不穏な空気を感じた。急に立ち止まったカミイルの背中にオツカがぶつかってきた。

「なっ！ どうしたの、カミイル？」

「しっ！ 隠れて！」

オツカの口を塞ぎながら木の影に走るカミイルを、カゲも訳が分からないうまま追い掛けた。

「カミイル？」

オツカの問いに答えず、じつと家の方を見るカミイルに、カゲもただ事でないことを察した。

「家に誰がいる……」

「マチさんじゃなくて？」

カミイルは首を横に振った。

「違う！ マチさんの感じじゃない！」

カミイルは咳きながら凝視するが、遠すぎて家の中の様子までは分からない。

「二人はココにいて。ちょっと見てくる！」

カミイルは木の影に二人を残し、抜き足刺し足で家に近づいた。近づくにつれて、家の中の明かりが揺れているのがわかった。

そして……

「！」

カミイルは血の気が引いたように顔面蒼白で踵を返すと、一目散に二人が待つ木の影へと走っていった。オツカもカゲも、ただ事でない顔をして戻ってくるカミイルに、底知れぬ恐怖心を覚えた。

「ど、どうだったんだよ？」

二人の元に戻ってきて息を整えるカミイルに、カゲは恐る恐る尋ねた。オツカはすっかり怯えて、カゲの袖を強く握っている。

「家の中に、誰がいる！ それもたくさん！」

「ええっ？」

二人は驚いて後ずさりをした。誰か客が来るなら、マチがあらかじめ言うはずだ。なのに何も聞かされていない。突然の来客にしても、子供心に嫌な空気が漂っていた。三人に緊張が走った。「ど、どうしよう?」

オツカが震えながらカゲの袖をなおも強く握った。カミイルはもう一度家の方を見つめながら言った。

「カゲ、オツカを連れてセブンスへブンに行くんだ。そして、マスターに助けを求めて!」

「カミイルは?」

「あたしは大丈夫! ここで様子を見てるから。早く!」

カゲは、大きく頷いてオツカの腕を引いた。

「カ、カミイル!」

今にも泣きだしそうなオツカに、カミイルは微笑んだ。

「オツカ、大丈夫だよ! 信じるんだ!」

「カミイル、無理しないでよ! すぐ助けを呼んでくるから!」

カゲは引きずるようにオツカを引っ張りながら町へと戻って行った。

カミイルはその姿を見送り、やがて見えなくなると、再び静かに家の方へと近づいていった。

扉の前まで行くと、壁伝いに窓の方へそつと横歩きした。窓からそつと中を覗くと、薄暗い照明の中で、五、六人の男たちがごめいているのが見えた。

「!」

途端に、カミイルの身体中を悪寒が襲った。訳の分からない寒気と恐怖に震えながら、カミイルは家の横に立て掛けてある斧を手にとった。普段はその近くに積んである木を切つて薪にするときに使うものだ。慣れているはずなのに、異常なほどずっしりとした鉄の重みがカミイルの細い腕を緊張させる。それを引きずらないように持ち上げ、扉の前まで近づくと、大きく息を吸って扉を蹴

り開けた。

バターン！

大きな音に驚いて、家の中に居た男たちが開け放たれた扉を一斉に見た。

皆、腕も首も太い体に簡素な服と汚れた身体。男たちが驚いたのは一瞬だけで、すぐに白い目でカミイルを見下ろした。

「なんだなんだあ？ ガキが邪魔しにきやがったぞ〜！」

見下した目をして、一人の男が笑った。それにつられて他の男たちも笑い始めた。

「ここはお前みたいなチビが来るところじゃねえぞ。早く家に帰んな！」

手を振って追い出すような仕草をする男に、カミイルの全身が鳥肌立った。それでも、勇気を振り絞って叫んだ。

「ここはあたしの家だ！ マチさんはどこに居る！」

「マチ〜？」

男たちは顔を見合わせ、怪しく微笑んだ。

「もしかして、こいつかあ？」

男たちの体が少し離れ、さまざまな物が散乱している部屋の奥には、マチがぐったりと倒れているのが見えた。生臭い空気が、カミイルを不快にさせた。

「マチさ……？」

近づこうと一歩踏み込んだカミイルの体がびくりと震えた。マチの服はボロボロに千切られ、身体のおちこちにアザと傷が刻まれている。床のおちこちには、血の痕がこびりついていた。

「マ…… マチさんに、何をした〜！〜！」

一瞬でカミイルは怒りに震え、斧を振り上げると、やみくもに男たちの中に飛び込んだ。

「うわっ！」

「あぶねえ！」

それぞれに声を上げながら散る男たち。

「マチさん！ マチさん！」

カミイルはマチの傍にたどり着き、その身体にすがりつくとき、その体を揺らした。気を失っているのか、抵抗のない体が重く感じた。

「マチさん！ 目を覚まして！」

懸命に声を掛けるカミイルの体が不意に宙に浮いた。

「このガキがあ！」

カミイルは首根っこを捕まれたまま持ち上げられ、斧を振り回そうとしたが、簡単に奪われてしまった。

斧を奪い取った男は、部屋の奥を見た。

「このガキ、どうします、ガラオルさん？」

すると一番奥に悠々と座っていたがっしりした体格の男が、余裕の笑顔で言った。

「うるせえ虫は、殺して捨てとけ」

気にする素振りもなく、ガラオルは軽い口調で言いながら唾を吐いた。

「はい！」

カミイルを捕まえている男は、淡々とテーブルの上に置いてあったナイフを取ると、開け放たれた扉のところまで行き、ナイフを持った手を振りかざした。

「悪く思っなよ！」

半ば口元がにやけた顔が、次の瞬間には苦痛に歪んだ。

「うああっ！」

金属音と共にナイフが落ちるのと同時に、フォークが同じように金属音を立てて転がった。拍子に男の手が緩み、カミイルは地面に尻餅をついた。

「カミイル、逃げなさい！」

声がした部屋の奥を見ると、マチが上半身だけ起き上がって必死

な表情で叫んでいた。

「マチさん！」

喜びもつかの間、マチは背後からガラオルに髪を掴まれ、腕を取られると後ろへ捻り上げられた。

「あああつ！……くつ！」

マチの悲痛な声が狭い部屋に響く。

「マチさんっ！」

「逃げなさいカミイル！」

苦痛に歪むマチの顔。だが、それでもマチは必死にカミイルを見つめた。

「逃げるなんてやだ……」

カミイルは呟きながら足元に転がるナイフを拾うと、男の足元をすり抜けて、マチのもとへと走りだした。

「このガキっ！」

捕まえようとする男たちの手をすり抜け、カミイルはマチの腕を握っているガラオルに突進した。

「カミイル！ やめて！ 手を出してはダメ！」

もはやマチの声は届かず、カミイルはガラオルの顔面にむかってナイフを振り下ろした。

「がああっ！！」

マチの腕を離して後退りしたガラオルは、両手で顔を押さえ膝をついた。

「ガラオルさんっ！」

男たちがガラオルに気を取られている間に、カミイルは座り込んだままのマチの腕を引き起こし、外へと連れ出そうとした。

「待て、この野郎！」

その声と共に、ドスン！という鈍い音がした。

急に足を止めたマチを振り向き

「マチさんっ！ 急いで！」

と言うカミルの両肩を優しく抱いたマチは

「カミイル、早く行きなさい。そして、オツカとカゲと、一緒に仲良く生きるのよ」

と言った。不気味なほどに優しい口調に戸惑いながら、カミイルが首を横に振った。

「やだよ……マチさんと一緒に……」

マチは微笑んでいた。

「ホントに……あんたたちはいい子に育ってくれた。あんたたちと出会えて、ホントに……よかった」

その瞳から涙をこぼしながら、マチは両膝をついた。

「マチさん……？」

戸惑うカミイルに、マチは突然睨みをきかせた。

「早く行きな！ あんたが今すべき事は、逃げ延びることだよ！ さあ！」

カミイルはいきなり怒鳴られて訳も分からず、その気迫に押されて思わず後ずさりをした。

「マチさん……？」

だがマチの瞳は、厳しくカミイルを突き放すようだった。もう近寄れない雰囲気を感じ取ったカミイルは、きつく目をつむると、振り切るように踵を返して走り出した。

涙がとめどもなく溢れて視界が揺れ続ける森の中を、無我夢中で走った。

小さくなるカミイルの背中を見送りながら、マチは再び微笑んだ。「生きるのよ……」

そして、気を失いながら力なく倒れた。その背中には、短剣が深々と刺さっていた。

マチの横を擦り抜けながら、男たちがわらわらとカミイルを追い

掛けようとしたが、すでにその小さな背中が森の中に消えていた。

部屋の奥で片膝をつき左半分の顔を押しさえるガラオル。左手の指の間から鮮血がしたたり落ちていた。ガラオルは怒りに満ちた声で呟いた。

「あのガキ……絶対許さん！」

後ろの方で、かすかに怒号が聞こえた。それでも振り返らずに、カミイルはひたすら走った。

何か泥ついた心を振り落とすように、ただ走るしかなかった。

勘違いから生まれた幸運

「俺は、それからしばらく森の中で息を殺して隠れていた。気が付いたら、セブンスへブンの二階に寝かされていた。オツカが言うには、ボロボロの服と体で、店の前に倒れていたらしい。マチさんの葬儀も終わっていて、家も壊された。残ったのは、新しい墓だけだった」

カイルは少しうつむいたままで、落ち着いた口調で淡々と話していた。まるで、他人事のように。

「どうして、セブンスへブンに残らなかったんですか？」

シリウの問いに、カイルは顔を上げた。その瞳には何かを見据える光が宿っていた。

「俺はアイツを許さない。必ず見つけだして、マチさんの敵討ちをするんだ」

「それで兵士養成学校に？」

カイルは頷いた。

「でも、何も男の真似をしなくてもいいんじゃないですか？」

シリウの問いに、カイルは少し不機嫌な顔になった。

「女は鼻屑される。俺は、自分自身を高めるためにも、本当の評価をしてもらいたかった。……それより、何故俺があのお店に居ると分かったんだ？」

するとシリウは、微笑みながら町の中心を指差した。

その方向には、時計台がそびえ立っている。この町では、どこに居てもこの時計台が見える。時計台は、ザック町の象徴とも言える建造物なのだ。

「あそこの時計盤に登って、見つけました」

軽く言うシリウに、カイルは驚いた顔をした。

「あそこって……高さが五十メートル以上もあるんだぞ！　そこか

ら町を見下ろしたとしても、人は米粒くらいにしか見えないだろう？」

シリウは余裕の表情でカイルに微笑んだ。

「僕の目は……」

言いながら眼鏡を取ると、青みがかつた瞳が港の明かりを反射した。

「強度の遠視が入ってるんですよ。だからね、眼鏡を取れば、どんなに遠くに居るカイルの姿もばっちり見えるんです」

「遠視……？」

シリウは頷いた。

「子供の時の病気が原因らしくて、普通の人が見えないものが見えると言つて、よく気味悪がられました。今では眼鏡で矯正してますが、まさか役に立つことがあるとはねえ」

半ば嬉しそうに話すシリウ。カイルは黙って彼を見つめていた。眼鏡を取った顔など初めて見たが、案外整った顔をしている。

青く透き通った瞳が、カイルを惹きこむようだった。

「？ どうしました？」

シリウに覗き込まれるように見られたカイルは、反射的に視線をそらせ、焦つて言葉を探した。

「皆には、内緒だぞ！」

カイルの言葉に、シリウはきよんとした。

「仲間なのに、ですか？」

カイルは強く頷いた。

「これまで男で通してきたんだ。学校の中に居れば、ばれる事も無い。今更言う必要はないだろう？ 俺は、男として生きていくと決めたんだ！」

シリウは、ため息をついた。

「じゃあ、約束してくれますか？」

「約束？」

カイルは怪訝な表情になった。シリウは優しく微笑んだ。

「無事に生きて帰ることができたら、デートしましょう!」

「でっ?」

カイルはあからさまに嫌な顔をした。

「そんな約束できるか!」

顔を背けるカイルの横顔に

「あ、じゃあ皆にバラします!」

とからかい気味に言つと、慌てて振り向いたカイルは

「卑怯だぞ!」

と声を上げた。シリウは笑いながら

「では、約束してくれますね?」

と無邪気に首を傾げた。

「……」

冗談ともとれるようなシリウの言動に言葉を失ってしまったカイルに、決まりですね、と微笑むと、再び眼鏡をかけて勢いよく立ち上がった。

「いい町ですね、ここは」

深呼吸するシリウの背中を、赤い顔で見つめるカイルだった。

そんな様子を見ていた二つの影があった。

サクとヤツハだ。

二人を見つけたのはいいが、声を掛けるタイミングをすっかり逃してしまった二人は、草影に隠れて覗き見をしていたのだった。

「お、俺は別に気にしないけどなっ!」

動揺しているサクに、ヤツハも強張った笑顔で言った。

「あ、あたしもよ。恋愛なんて自由ですもの」

二人はふらふらと宿への道を帰って行った。

翌朝、朝食の席で四人が揃った。サクとヤツ八の様子がどうもよそよそしいのに気が付いたシリウとカイルは、二人を見比べながら怪訝に思っていた。

「サクとヤツ八、どうしたんでしょかねえ？」

シリウが囁くと、カイルも少し眉をひそめて

「挨拶も何かぎこちなかったしな」

と囁き返した。その様子を見ながら、サクとヤツ八は気にしないふりをしながらも、どこか手元がおぼつかなく、しまいにはサクがパンを落としてしまう事態に陥ってしまった。

「？」

サクとヤツ八に疑問を感じながら、シリウとカイルは様子をみることにした。

荷物をまとめ、昼過ぎに四人はザツクの町を出発することにした。カイルは少し心残りを感ずるかのようには、何度も町を振り返りながら歩いていった。そして、シリウとカイルから、どこか距離を保っている二人。

「一体どうしたんだよ、二人とも！」

業を煮やしてイラついたカイルは、とうとうサクとヤツ八に声を掛けた。二人は途端に戸惑う顔をした。

「昨晚、何かあったんですか？」

シリウも心配そうに尋ねると、サクが少し頬を赤らめた。

「な、なにがあったって……それはシリウたちが知ってることであつて……俺たちは何も」

「僕たちが何を知ってるって？」

シリウとカイルは、お互いに顔を見合わせた。

「何よ。そんな隠すことじゃないわ。あたしたち仲間なんだし！」

「そつだぜ！俺たちは気にしないからさ！」

「何を言ってる……！」

カイルは途端に動揺した。

『まさか昨日の話を知られた……？』

シリウを見たが、もともとクールな上に、眼鏡と前髪に隠れて表情が分からない。

「恋愛って、自由だと思うの」

ヤツハがモジモジしながら顔を赤らめて俯き、視線を外して言った。

「は？」

ヤツハの言葉の意味が理解できず、言葉を失ってしまったカイルに、シリウが耳打ちをした。

「どうやら、少し違うみたいですねえ」

「ほら、また近い！」

ヤツハが恥ずかしそうな顔をしている。

「仕方ないじゃんか……俺たちの事なんて見えてないんだから……」
寂しそうな顔をして言うサク。

「ちょ、ちょっと待て！ お前ら何を勘違いしてんだよ？」

カイルが慌てて言うと、サクとヤツハは顔を見合わせた後、シリウとカイルを見てにんまりとした。

「タベ二人で寄り添って公園のベンチに座ってたことは、学校に帰っても誰にも言わないから安心しろ！」

「ここでやっとカイルも事態が理解でき、心にはさっきまでと違った動揺が走った。」

「違うって！ 昨日はそんなんじゃないよ！ いや、だから、そんな関係とかじゃなくて！」

しどろもどろになるカイルは、シリウに助けを求めた。

「なあ、シリウ！」

「僕は好きですけどね」

「はあっ？」

カイルは顔を赤らめた。

「シリウまで何を言っただつ！」

シリウは眼鏡を光らせて微笑んでいる。顔を近付けると

「ま、話が聞かれたわけじゃないみたいですし、カモフラージュには最適じゃないですか？」

と囁いた。

「変な勘違いされたままでいいのかよ？」

「じゃあ、本当の事を話しますか？」

「ぐ……」

言葉を失ったカイルをおいて、シリウはサクの肩を勢いよく叩いた。

「全く！ 覗き見なんて趣味が悪い」

「えー、だつてさ！ 声を掛けるタイミング無くしたんだもんよ！」

サクがヒリヒリする肩を押さえながら言った。シリウはなおも

サクの背中を叩きながら

「絶対学校の皆さんには内緒ですよ！ 僕たちの趣味が疑われてしまいますから！」

と釘を刺した。その様子を後ろから見ながら、カイルはただただ呆然としていた。話を聞かれなくて良かったという安堵感と、おかげでシリウとの仲を勘違いされているという衝撃が頭の中を駆け巡り、ただ立ち尽くすだけだった。

「カイルー！ 何やってんだよ？ おいてくぞー！」

サクの声に我に返ったカイルは、ため息をついた。

「とりあえず、様子をみるか……」

ひとり呟いて、ため息をついた。

「複雑だけど……」

そう言うカイルの口元には、どこか笑みが生まれていた。

モノリス村は土の匂い

アルコドまでの、最後の中継地点モリノス。小さな村である。それに似つかわしい位の厳格な門をくぐると、村人たちは見渡す限り一面に張り巡らされた畑で仕事をしていた。

「精が出ますね」

シリウが一人の男に声を掛けると、かがめていた腰を伸ばした。

「おや、珍しい。旅人ですか？」

「はい、アルコドまで旅をしています」

額に汗を光らせ、柔らかい笑顔で尋ねる村人に丁寧に答えるシリウの足元でしゃがんだサクが、土を手ですくった。

「カサカサだな」

村人は悲しそうな顔をした。

「そうなんだよ。この村の土は、もうほとんどが死んでしまった。食物を育てても、こんな痩せた土では育つこともままならない」

「もしかして、アルコドの影響がここまで来ているの？」

ヤツハが畑を見渡す。村人も同じように見回した。放射線状に広がる畑の中心に、大きめの一軒家がひとつ建っている。そこが自分たちの住む場所なのだ、村人は言った。

「住むところを潰し、畑を広げてきた。これで皆の食糧がやっと確保できるくらいだ」

「そんな……」

ヤツハは悲痛な顔をした。

「アルコドで、一体何が起こっているの？」

サクは黙ったまま立ち上がり、歩きだした。

「サク？ どこに行くんだよ？」

カイルの問いにも答えず、サクはゆっくりと歩いていく。畑と畑の間は、人がやっと通りすがれる位の狭さだ。ヤツハは吸い寄せられるようにサクの背中を追った。

「ヤツハまで！」

止めようとするカイルを制止して、シリウが村人に尋ねた。

「一晩、宿をお借りしたいのですが……」

村人は汗を拭きながら少し考えた後、少し離れたところで鍬を振り下ろしている一人の老人を指差した。

「オレは何も言ってやれんが……あの人が村長だ。聞いてみな」

悪いな、と軽く頭を下げると、また黙々と畑仕事に戻った。シリウとカイルは村人に頭を下げて礼を言おうと、紹介された老人に近づき声を掛けた。

「こんにちは、僕たちは旅の者です」

老人は顔を上げると汗を拭いた。

「ああ、君たちかね、ソラール兵士養成学校から来たというの？ ファンネル校長から、連絡は来ておるぞ。わしは村長のシカワじゃ。ここは、見たとおり何も無い。畑しかない村じゃ。旅人をもてなす宿も馳走もない。それでも良いと言うのなら、寢床は、村人たちが使う共同宿舎を自由に使っていていいぞ。皆、雑魚寢で良ければな」

シカワは本当に何も無いぞ、と念を押した。

「構いません。安全な場所を提供していただき、ありがとうございます」

シリウとカイルは畑仕事に戻ったシカワの背中に丁寧にお辞儀をすると、その場を後にした。

「サク、待って！ 待ってってば！」

ヤツハが追い付くと、サクは振り返ってヤツハを見ずに一面の畑を見た。何十人という村人たちが、ただ黙々と畑仕事をしている。

「サク、一体どうしたの？」

「俺たち、こんななんびりしてていいのかな？」

「え？」

サクの表情は、珍しく神妙だった。

「ここの人たちは、きつと朝から晩までこつやつて畑仕事をしている。痩せてカラカラの土をひたすら耕して、種を植えて、育てて……俺は、ここの人たちを救いたい」

ヤツハは黙ってサクの横顔を見つめていた。すると突然、サクはとびきりの笑顔を見せた。

「サク？」

「なあんてな！」

そう言うと、サクは自分の荷物をヤツハに持たせて畑に入っていくと、村人の足元にある鍬をつかんだ。驚いて見つめる村人に

「俺も手伝うよ！」

軽がると肩にかつき、戸惑う村人に指示を貰うと、サクは意気揚々と畑を耕し始めた。その様子を見ていたヤツハは、クスツと笑った。

「サクったら、素直じゃないんだから」

シリウとカイルは、村の中心にある、周りを畑に囲まれた建物の中に入った。

「本当に何もありませんね」

幾つかある部屋の中は、がらんとした空間が広がっていた。棚も机も何も無い。ただ襖で仕切られた畳み敷きの部屋が並んでいた。

「皆さん、働きの出掛けているんでしょうか？」

シリウは、人の気配の無い部屋の片隅に、邪魔にならないように荷物を置くと、ゆっくりと伸びをした。

「お客様？」

不意な声に振り向くと、廊下から女性が顔を覗かせていた。小さな顔をした可愛らしい女性は、しとやかな微笑みを見せた。

「すみません。入口のところでご挨拶はしたのですが、答えがなかったので勝手に入ってしまった」

「ヴィルス町のソラール兵士養成学校から来たという旅の方ですね？ お疲れ様です。 何も無いところですが、ゆっくりしていただくさいね」

静かに優しく声を掛けると、適当に座るように促した。

「少し待っていてくださいね」

と言うと、部屋を出ていった。

「シリウ、今の人……」

カイルの囁きに、シリウが頷いた。

「妊婦さん、ですね」

二人は、女性のお腹が異常に膨れているのにすぐ気付いた。

「初めて見た……」

「僕もです」

シリウは微笑んだ。 そうしていると、また女性が戻ってきた。

押入れからテーブルを出そうとするので、二人は手伝った。

「本当に、こんなものしか出せませんけど……」

申し訳なさそうに言いながらお茶を差し出す女性に、二人は手を振った。

「いえ、すみません、こちらこそ気を遣っていただいて」

「あの、そのお腹……」

カイルの言葉に、女性は微笑んで自分の腹をさすった。

「ええ。 もうすぐ産まれるんです」

いとおしそうに腹をさする女性の名前は、ラクラ・サクラと言った。

ラクラが出してくれたお茶は、適度に温かったが、味は無いに等しいほど薄かった。 それでも、二人はその気持ちに深く感謝していた。

「この村は本当に何も無いところですが、皆の心はいつも、豊かだった頃を夢見ているんです」

「先ほどご挨拶させていただいた皆さん、疲れた顔はしていました。が、一人も暗い顔はしていませんでした」

シリウが言うと、ラクラは頷いた。

「畑が枯れるのに習って、私たちの心まで暗くあつてはならないと、村長シカワが説いたんです。そうでないで、どんなに一生懸命働いても、畑は私たちの心を映してしまふと」

シリウとカイルは、窓から見える畑を眺めた。畑には点々と働く人の姿が見える。シリウはそれらを眺めながら呟いた。

「僕たちは、こんなにのんびりしていてもいいのでしょうか？」

カイルは、すぐに答えを見つけられずに黙ってしまった。するとそんなカイルに、シリウはにっこりと微笑んだ。

「悩んでいるのは、皆一緒ですよね」

カイルは小さく頷くしか出来なかった。不意にカイルは立ち上がり

「お手洗いを……」

と、ラクラと共に部屋を出ていった。

なだらかな畑の真ん中で

「何やってんだ？」

突然、顔中を土だらけにしたサクが、ヤツハの目の前に現れた。

「わっ！」

驚いたヤツハは、思わずサクの頬を殴ってしまった。

「いつてえなあ！」

頬をさするサクに、ヤツハは頬を赤くして膨れっ面で言った。

「あんたがいきなり目の前に現れるからでしょうが！」

「んで、何をやってんだ？　じつとどこかを見てたけど」

見てたの？と恥ずかしそうな顔をしたヤツハは、さっきまで見ていた方を見つめた。

「あんな小さな子たちまで、一生懸命働いてる……」

サクもそつちを見ると、畑仕事をする親子の姿があつた。

まだ歩き始めたばかりくらいの男の子が、父の後ろをおぼつかない足取りで追い掛けている。そのまだ幼い腕には、今しがた収穫したのであろう、細く頼りない野菜を幾つか抱えている。

「あっ！」

サクとヤツハが見る前で、その男の子は勢いよく転んでしまった。拍子に、腕に抱えていた野菜が宙に飛び、バラバラと落ちてしまった。

「！」

助けにいかうとするサクの腕を掴んで、ヤツハは彼を止めた。

「なんで止めるんだよ？」

不機嫌に言うサクにヤツハは、見て、と親子の方へ促した。父

は振り向いて、転んだ子をじつと見つめていた。

「なんで助けないんだ？」

あきらかにイラついているサクの肩をしっかりと抱いて、ヤツハは親子の様子を見守った。

やがて、ゆつくりと手をつき膝をつき、立ち上がった息子は、散らばってしまった野菜を一つ一つ広い集めると、再び腕いっぱい抱えて父のもとへと歩きだした。父は近づく息子を見つめながらしゃがんだ。そして

「よくやったな！　すごいぞ！」

と笑いながらその頭を撫でた。息子は嬉しそうに、土まみれの笑顔を見せた。

「もう何回も転んでるけど、お父さんはああやって、息子さんを見守ってるの」

ヤツハの瞳は、いとおしくてたまらないといった輝きを放っていた。

「私は、お父さんにああやって頭を撫でられたことも、抱き締められた記憶もないわ。でもきつと、あんな感じなんだろうな……」

サクはまだ少し不機嫌そうにヤツハを見た。

「俺は、殴られてばかりだったけどな」

サクが言うと、ヤツハはサクを見て微笑んだ。

「知ってる。いつも追い掛けられてたもんね。でも……」

ヤツハはまた親子を見た。

「それも、うらやましかつたんだ……」

サクは返答に困った。

ヤツハがあの子を見て、父を恋しく思っているのは容易に分かる。出会った時からずっと、ヤツハはまだ見ぬ父親の像を見つめ続けているのだから。幼い頃から、思い描く父親の話を、サクはよく聞かされていた。

サクは振り払うようにくるりと踵を返すと

「畑仕事に戻るぞ！」

と言葉を残し、ヤツハをおいて再び鋤を構えた。

正直、サクには何をすればいいのかわからず、もう何年もヤツハの近くにいる。ソラール兵士養成学校に、サクを追って入

学してきたヤツハを見たとき、彼女の本気な気持ちがあった。

ヤツハは、自分を高め、父親を探す旅に出るつもりなのだ。

だがサクは、もしヤツハが父親と再会した時があっても、絶対に許したくなかった。

ヤツハが途方も無い苦勞をして今まで生きてきたのを、自らの目で見ているからだ。そしてヤツハは、母が亡くなった時も、気丈にしていた。涙一つこぼさず、むしろ葬式の手助けをしてくれた村の人たちに笑顔で礼を言っていた。

だが、サクは知っている。

誰も居なくなつた小さな家の中で、月の光に包まれながらひとり、泣いていたことを。

『俺は一体、どうしたらいいんだよ?』

サクの苛立ちと焦りは、アルコドの一件も加わって大きくなつていた。

やがて日が暮れ始め、畑仕事に出ている人たちが続々と共同宿舎に戻り始めた。陽が落ちてしまえば、外灯もない畑は真っ暗になる。

「そつえば、シリウとカイルが居ない」

二人はやつとそのことに気付き、顔を見合わせると途端に赤い顔をした。

「何考えてんだよ?」

「サクこそ!」

言い争いが始まりかけた二人に、村人が声を掛けた。

「手伝つてくれてありがとうよ。お仲間さんがいたのかい? 村の外に行くことはないだろうから、あの宿舎にいるかもしれねえ。

案内するよ。ついてきな!」

村人はアルシス・ツバツクといった。二十一歳で、畑仕事で鍛

えられてか体格も良く、陽に焼けた健康そうな肌に、黒い短髪と白い歯が似合う。話し方が老けているのは、周りに若者が少ないからだと言っていた。

「だけでもよ、今度子供が産まれるんだ！」

畑仕事の疲れも忘れたように、嬉しそうに話すアルシス。ヤツハの笑顔が弾けた。

「素敵！ 元気な子が産まれるように、祈らなきゃ！」

そう言いながら、胸の前で手を組んだ。

「もうすぐ産まれるはずなんだが、こんな痩せた土地で育った野菜を食べていては、母子共に元気でいられるかどうか……」

不安な考えに襲われて、アルシスの表情が曇った。

「数年前までは、この村ももつと豊かだった。緑にあふれ、それぞれの家族に家も一軒持てた。ところが、短い間に、急にこんなふうになっちゃった……」

三人は周りを見回した。ぞろぞろと宿舎に戻る人影以外には、畑以外何も無い。見渡す畑の向こうには、重厚な壁が景色を遮る。獣避けの壁は、悲しいかな、景観を損ねてしまう。

「何もないところだが、今晚はゆっくり休んでくれよ！」

アルシスが気を取り直したように微笑んだ。

「笑顔だけは絶やさないと、素敵だと思っわ。きっと思いは届くし、きっと、元気な赤ちゃんが産まれるわよ！」

ヤツハはアルシスの背中を叩いた。

「そうだな、君たちには救われるよ。そして元気をくれる。私たちには想像も出来ない、危険な旅をしてきたのだからな！」

背中をさすりながら、アルシスは痛みを我慢するように、苦笑いにも似た微笑みを見せた。

「サクとヤツハ！ どこに行ってたんだ？」

カイルが宿舎の窓から顔を出した。

「おー！ カイル！ 畑仕事してたんだ！」

大きく手を振るサク。続いてシリウが、同じように窓から顔を

出した。

「大変なことが起きてしまいました！」

「「？」」

顔を見合わずサクとヤツハに、カイルの声が飛んだ。

「産まれそうなんだ！」

「なんだって！」

その言葉に体を震わせ、持っていた畑道具を足元に落とすと、アルシスは走りだした。

「アルシス！」

サクの声も届かず走るアルシスの後を、ヤツハも追った。

「サク、それ持って、急いで！」

残されたサクは、慌てて足元に散らばる畑道具や野菜が入った籠を持ち、両手いっぱいになりながらフラフラと二人の後を追った。

宿舎の中では一室の扉の前に村人たちが集まり、ざわついている。

「ラクラは？ 子供は？」

駆け込んできたアルシスが、人々をかきわけて扉の前に現れた。

中から産婆のハルが現れると、アルシスはその両肩をつかんで言った。

「ハルさん、ラクラはっ？ 子供はっ？」

頭を大きく振られて眩暈に襲われたハルは、アルシスにげんこつを落とした。

「しっかりせいっ！ お前が落ち着かんで、どうするんじゃ！」

「しっ……しかしハルさん……」

こぶができた頭をさすりながら、アルシスが不安げにしている。その横に、追ってきたヤツハがやっと現れた。

「きつと大丈夫！ 信じるのよ！」

ヤツハがじつとアルシスを見つめると、彼もやっと落ち着いたように息をついた。そしてヤツハはハルを見て言った。

「あたしにもお手伝いさせてください！」

「あんたは？」

「ソラール兵士養成学校から来ました。医学のことも勉強してます！　お願い！　あたしも何か手伝いたいのです！」

ヤツハにまっすぐに見つめられたハルは、ふむ、と微笑んで頷いた。

「いいだろう！　今は少しでも人手が必要じゃ。まずは湯を沸かして来てくれんか？」

ヤツハは大きく頷いて、大きなたらいを持つ他の女性たちと一緒に台所へと急いだ。

「お……俺はどうしたら……？」

「男は役にたたん！　外で静かにしておれ！」

不安げにたたずむアルシスに、ハルは微笑んだ。

「ラクラは芯の強い子。きっと大丈夫じゃ。信じておれ！」

アルシスはふつと息をついた。

「ハルさん、よろしくお願いします！」

深くお辞儀をするアルシスに、ハルは小さく何度も頷きながら部屋の中へ入っていった。

新しい命

「サク、あんなところで何やってんだ？」

窓から、真つ暗な畑の真ん中で立ったまま空を見つめているサクが見える。不審に思ったカイルはサクを呼び込もうとしたが、シリウがそれを止めた。

「シリウ？」

「サクは、時々ああして空を見つめるときがあるんですよ」

「空？」

すっかり日も暮れて、真つ黒な空には三日月が浮かび、満天の星が瞬いている。

「サクがああする時は、決まって、強い思いがある時なんです」

「強い思い……？」

カイルとシリウはサクを見つめた。

「きっと、無事に赤ちゃんが産まれるのを空に願っているのだと思いますよ。だからそっとしておきましょう」

サクは畑にひとり佇んで、ずっと動かずに空を見つめている。

そのままサクが空へ吸い込まれてしまうような感覚に陥ったカイルは、視線を外して瞬きをした。

シリウは微笑むと、そういえば、と前置きをした。

「カイル、さっきクラさんから水を貰って何か飲んでいただけでしょう？ まだ僕に何か隠していますね？」

するとカイルは頬を赤くした。

「また覗き見か？」

不機嫌に言うカイルに、シリウは気にしない風に言った。

「どこが悪いところがあるなら、言っただけです。放っておけるわけ、ないでしょう？ 大事な旅なんですから」

静かながら強い意志を持った口調に、カイルはひとつ息を吐いた。「あれは、痛み止めだ」

「やっぱりどこか悪いんじゃないですか！」

少し焦りを見せたシリウに、カイルは首を横に振った。

「月経だよ」

「ゲツケイ……？ で、どこが悪いんですか？」

「え？ 生理のことだよ。……知らないのか？」

思わずカイルが驚くと、シリウは苦笑いをした。

「医武道では、人の急所や怪我の応急処置などの外傷を専門に勉強していたので、ヤツハのように病気のことまではあまり学べていないんです。 まだ勉強不足ですね」

それにしても、と、カイルはひとつため息をついて、月経の事をシリウに教えた。

女性だけに訪れる、体のなかに新しい命を宿らせるための準備。

毎月決まった時期に繰り返される生命の鼓動は、素晴らしくもある。 だが人によって、それは苦しみも与える。

「俺は多分、人よりもその痛みが強いんだと思う。 怪我や打撲の痛みには耐えられるけど、これはまったくの別物だ」

カイルは切なそうにため息をつく、下腹をさすった。

「それで定期的にミラン先生の所に？」

シリウの問いに、カイルは頷いた。

「じゃあ、ミラン先生も、カイルが女だということを知っていたんですね？」

カイルは窓の外に広がる空を仰ぎ見た。

「ミラン先生は、育ての親だった人の妹なんだ」

「えっ？」

「昔、まだ四人で平和に暮らしていた時、マチさんに言われたことがある。『もし私に何かあった時は、セブンスへブンのマスターか、ソラール兵士養成学校のミランを訪ねなさい。 必ず力になってくれるから』と」

シリウは静かに聞いていた。

「それで、オツカとカゲはセブンスへブンのマスターに預け、俺は

兵士養成学校を選んだ。入ってすぐ、ミラン先生に会いに行った。俺は既に偽名を使っていたが、ミドルネームに『マチ』と付けていたからすぐに気付いてもらえた。話を聞いてもらって、なんとか先生には味方になって欲しいと頼み込んだ。けど最初は反対された。性を偽ったところで、何も変わることはない。でも、それでも、俺はこうしたかったんだ」

「そうだったんですか」

シリウは、下腹をゆっくり撫でるカイルの手を見つめた。

「それが、あらがえない証なんですね」

カイルは突然、窓から外へ飛びだした。

「カイル？」

驚くシリウに振り返ったカイルは微笑んだ。

「男は部屋の中に入れないから、サクと一緒に祈ってくる！」

そう言っつて、カイルはサクのもとへ走りだした。その背中を見ながら、シリウは小さく呟いた。

「僕は、あなたのことをたくさん知りたい……」

サクは近づいてきたカイルに気付いたが、夜空を見上げたまま言っつた。

「オレは、ヴァンドル・バードは必ず存在^いすると思ってる！」

「サク？」

「オレは必ずヴァンドル・バードに会う。平和に生きたい人たちに、苦しみや悲しみは、あっちゃいけねえんだ！」

ヴァンドル・バードとは、伝説上の生き物だ。太陽と共に飛び、世界に夜明けを知らせる鳥。そのヴァンドル・バードに出会った者は、どんな願いでもひとつだけ叶えてもらえるという噂だった。

所詮人の口から口へと流れ伝わった想像の産物だと思われていた。サクはそのヴァンドル・バードを探し求めるために、自分を鍛え高める手段として、ソラール兵士養成学校に入ったと、カイルは聞

いたことがあった。その時も今も、ヴァンドル・バードの事を話すときは、サクはいつも真面目な顔をする。

カイルは否定もせず、空を見上げた。

「そうだな。俺も、そう思う」

そして二人は、今にも降ってきそうな満天の星空の下でひたすら祈った。

『元気な子が無事に産まれますように』

ラクラの部屋では、ヤツハが村の女性たちに交じって、額に汗をにじませて苦しむラクラの手を握っていた。村人たちも、それぞれに母子の無事を祈っていた。この干上がりそうな村にとって、一つの命はとて有難く何にも代えがたい大切な存在なのだ。部屋の奥で、村長シカワも座り込んで目を閉じ、祈っていた。

やがて、けたたましい泣き声が部屋の中から宿舍中に響いた。

その途端、アルシスは勢いよく立ち上がって、おそるおそる扉の前に近づいた。

静かに扉が開き、ハルが現れた。アルシスは震える声で尋ねた。

「あ、あの……」

ハルは疲れて少ししゃがれた声で、それでもしつかりと、見守っていた村人たちに伝えた。

「元気な女の子じゃよ。ラクラも無事じゃ」

途端に村人たちは歓声を上げた。その中でアルシスは、日焼けと土で真っ黒な顔を歪めて涙をこぼした。

「ありがとうございます！」

深々と頭を下げると、ハルは微笑み

「さ、早く二人に会いなさい」

と部屋に招き入れた。外にいたサクとカイルにも、皆の歓喜の

声が届いていた。

「うまくいったみたいだな」

サクが夜空から視線を外し、ホツとした表情で言うと、カイルも微笑みを浮かべて頷いた。

その時、窓辺で二人の様子を見ていたシリウに、ヤツハが駆け寄ってきた。そしていきなり彼に抱きついた。

「ヤツハ！ お疲れ様です！」

シリウが微笑んで言うと、ヤツハは体を離して満面の笑みを浮かべた。

「あたしなんて何もしていないわ！ 頑張ったのはラクラさんよ！」

そして外の二人に気付くと、窓から飛び出した。

「あっ！ ヤツハまで！ …… 皆さん、行儀が悪いですねえ……」

あきれたように言うシリウを置き去りに、ヤツハは二人に駆け寄ると、間に入るように飛び付いた。サクとカイルは驚いた顔で受けとめ、ヤツハはうっすらと涙をためた瞳を閉じて言った。

「生命って、本当に素敵！ いとおしいよ！」

そして体を離すと、満面の笑みで二人に伝えた。

「とつても元気な女の子よ！ ラクラさんも元気！」

「そっか！」

サクも笑顔で返し

「ヤツハ、お疲れさま」

とカイルも微笑んだ。

命が生きる村

その夜は、サクたち四人も交えて、新しい生命の誕生を祝った。分厚い布に守られて優しく抱かれている赤ん坊は、ゆっくりした寝息を立てて眠っている。皆代わる代わるに顔を覗き、サクも驚かさないうちに静かに覗きこんだ。

「うわぁ……ちっせえな」

小さい手が、時々ピクピクと動く。はち切れそうな頬がかすかに桃色がかっている。食い入るように見つめっていると、不意に赤ん坊は目を覚ました。突然泣き始めた赤ん坊に、サクも驚いて後ずさりした。

「サク！ 何やってんのよ？」

ヤツハに頭を叩かれ

「オレ、何もしてないよな？」

と呟きながらすぐごと離れるサク。

「可愛い寝顔でしたな」

シリウが、部屋の片隅に座って窓の外を見ていたカイルに話し掛けた。だがカイルは彼に目もくれず

「そつだな」

とそつけない返事をしただけだった。

「？」

シリウが不思議に思っていると、村長シカワが近づいてきた。

「あなた方が訪れたことと、新しい生命が産まれたことは、何か関係があるのじやろうか？ 本当に今日はめでたい日だ。ありがとう」

笑顔で言うシカワに、シリウは驚いて両手を振った。

「いえ、僕たちは何もしていません。むしろ、お邪魔をしてみましたようです」

苦笑いをするシリウに、シカワは笑った。

「いやいや。何もなかったこの村に、二つの出来事が起きた。それだけでも、皆の気持ちは変わったはずじゃ。このところずっと、畑とココの往復の繰り返し。皆の心も落ち込んでいた所じゃったからの」

テーブルの上には最初からわずかな食料しか載っていないのに、村人たちは和気あいあいと語り合い、喜びを分かち合っている。

その中に、何故かサクの姿もあった。違和感もなく、村人たちの中に入って何やら語り合っている。

「明らかに、今日を境に村は救われた気がするんじゃ」

シカワは、村人たちの様子を嬉しそうに見つめていた。

「でも、まだこの状況は解決していません」

シリウは痩せた畑を思い出していた。シカワは顔をしかめて頷いた。

「ほんの三年前じゃ……川の水が止まってしまった。この村は、アルコドから流れてくる川が生活を支えてくれていた。じゃが、日に日にその勢いが弱くなり、とうとう三年前にまったく流れてこなくなった」

「アルコドに何があったのでしょうか？」

「あの国には大きな城があって、その中心には泉があるんじゃ。

そこから湧き出る水が集まって、川となり、アルコドだけでなく周りの町や村を潤しておる。その泉が、枯れてしまったという話じゃ」

「泉が枯れた？」

カイルもシカワの話に聞き入っている。

「泉は、人々の生活を潤すだけでなく、土地の浄化もする。それが止まってしまったことで、土にたまった汚染物が悪さをしはじめているんじゃ。アルコドは規模は小さいながらも、ちゃんとした王国。民の生活もままならないと、シーノ王も頭を抱えておることじゃろう……悪いお人では無いんじゃ。きつと心を痛めて、今も出来る限りの努力をしているハズじゃ……」

「僕たちも急がなくてはいけませんね」

神妙な面持ちで言うシリウと目が合ったカイルは、すぐに目を逸らせた。それにはさすがに気に障ったシリウ。

「カイル？ 一体何」

「シリウー、カイルー！ ちょっと来てみるよっ！」

サクの声がそれを制した。カイルは素早く立ち上がると、サクのもとへ向かった。

「何なんですか？ 今日のカイルはおかしいですね……」

どこかよそよそしいカイルの態度に理由がわからず、シリウは苛立ちを感じていた。いつも冷静な彼には珍しいことだ。それでも遅れを取って、シリウもサクの所へ向かった。

「これ、見てみるよ！」

サクに嬉しそうに差し出された一枚の紙。そこには、一羽の鳥が描かれていた。

赤い空にオレンジ色の羽根を広げ、長い首をくねらせて飛ぶ鳥。

「これは？」

シリウはサクに尋ねた。するとサクは満面の笑顔で答えた。

「ヴァンドル・バードだよ！」

「ヴァンドル・バード……」

カイルが呟いた。サクがずっと追い求めている伝説の鳥。語り継がれるだけで、誰も見た者はいなかった。

「ラーニヤが見たっていうんだ！」

サクに肩を抱かれて紹介されたラーニヤという少女は、黒く大きな目をしばたかせてシリウとカイルを見た。背中までの黒髪を二つの三つ編みに束ね、まだ六歳だが、しっかりした雰囲気が見てとれる。

「お兄ちゃんたちも、信じてくれる？」

あまりにまっすぐに見つめるので、シリウとカイルは最初少し怖気づいてしまったが、すぐに彼女の真剣な思いを感じ取った。

「ラーニヤは、ヴァンドル・バードを見たんですね？」

膝を曲げ、視線をラーニヤに合わせて微笑みながら尋ねるシリウに、ラーニヤは大きく頷いた。

「朝早くにね、突然外が明るくなって、急いで起きて外を見たら、東の空から飛んできたの！」

懸命に説明するラーニヤを、近くにいた村人が鼻で笑った。

「ふん！ そんなの夢だつて言つてんのに、まだ言つてるのか」

「本当だもん！ 本当に見たんだもん！」

ラーニヤは顔を赤らめて言うが、誰も相手にしない。皆、まだ子供だし、夢を見たのだらうと思つていいるのだ。今までずっと、一人で言い張つてきたのだらう。自分で描いた絵を掲げながら。

「ヴァンドル・バードはいるよ！」

サクがそんな空気を切り裂いた。

「オレは見たことないけど、絶対ヴァンドル・バードはいるんだ！ オレはいつかきつと、ヴァンドル・バードに自分の夢を叶えてもらうんだ！」

一瞬、部屋の空気が止まった。だがすぐに、村人たちの笑い声で揺れ始めた。その中で、サクとラーニヤは真つ赤な顔で必死に説得している。

「どちら也讓りませんね……」

どちらが幼いのか、とシリウが呆れた顔で言うと、シカワがその様子を見ながら苦笑いで言った。

「皆自分の信じるものしか信じない。大人たちは、今この生活だけをこなしていくのに必死なんじゃよ。夢を見る余裕も無くなつてしまった……」

シリウは、そうですか……と眉をひそめた。

こうしている間も、日々一刻と事態は悪くなつていいるのだらう。笑う村人の中で必死に説明しているサクとラーニヤ。ラクラに付いて看病を続けているヤツハ。少し離れてじつと窓の外を静観しているカイル。何か情報を得ようと村の人たちと話すシリウ。

四人はそれぞれの夜を過ごした。

夜明けと共に村人たちは起き上がり、それぞれに道具を持って畑へと赴いていく。それは、いつもと何一つ変わらないモリノス村の日常。サクが大口を開けて眠っている横で同じように寝ていたラーニヤも起き上がり、サクを起こさないように部屋を出た。

「ラーニヤ」

そっと呼び止めたのは、カイルだった。部屋を出た所の廊下は、昇り始めた陽の光を浴びて明るくなりかけていた。

「おはよう、お兄ちゃん！ 随分早起きなんだね。サク兄ちゃんなんて、まだいびきかいて寝てるよ」

寝起きが良いのか、キシシと笑う口元に白い歯がまぶしい。カイルはしゃがんで視線をラーニヤに合わせ、微笑んだ。

「ラーニヤ、ヴァンドル・バードは、いるよね？」

ラーニヤは、少し驚いた顔をしたがすぐにニッコリと笑った。「いるよ。この目で見たんだ！」

輝く瞳でそう言うラーニヤをカイルは優しく抱き締めた。

「お兄……ちゃん？」

その意味もわからずにいるラーニヤに、カイルは呟いた。

「俺も信じよう」

そして体を離すと、ラーニヤをまっすぐに見つめた。

「俺たちは必ずこの村を救う！ だから、夢をあきらめないで。」

ラーニヤは、自分を信じればいいんだよ。周りの大人が何を言っても！

ラーニヤはじっとカイルを見つめ、そして大きく頷いた。

「お兄ちゃんの事、信じてる！ 絶対村を救って！」

カイルは微笑んだ。

小さな体には大きすぎるほどの鍬を持ち、走っていく背中を見送るカイルに、いつの間にか隣にいたシリウが言った。

「あの子の瞳だけは、曇らせたくありませんね」

「……ああ」

カイルは相変わらず彼の顔を見ずに部屋へと足を進めた。

そして大いびきをかいているサクを起こすと、自分の荷物を担いだ。

その頃、ヤツハもラクラに別れの言葉を伝えていた。

「必ずこの村は元通りになるわ。だから、あきらめないで！」

布団の上で横たわっているラクラの手を握り、ヤツハは優しく微笑んだ。ラクラは頷いてその手を握り返した。栄養不足の状態で出産したラクラの身体は、疲労が溜まっていた。しばらく安静にしていれば、やがて体力も取り戻すのだろうが、この村にはまだ、十分な栄養源が無かった。それを取り戻す為にも、ヤツハたちはアルコドへ向かわなくてはならない。

「ヤツハさん、本当にありがとう。この子は立派に育てます！」

そしてまた、ここに訪れてください」

ヤツハは頷いて改めて言葉を掛けると、部屋を出た。

ヴァンドル・バードの絵

ヤツハが宿舎の外に出ると、サク、シリウとカイルがすでに待っていた。

「さ、行こう！」

サクを先頭に、四人は畑仕事に精を出すシカワに一言挨拶をする
と、畑の間の道を歩き、村出口の門辺りまで近づいた。すると、
後ろから走って追い掛けてくる人影があった。

ラーニヤだった。

すでに頬を乾いた土だらけにして、細い足で駆けてくる。勢い
余ってつんのめったラーニヤを、サクが受けとめた。

「うわっ！ ごめんっ！」

「どうしたんだ、ラーニヤ？」

ラーニヤは明るく顔を上げると、荒い息のまま、手に持っていた
紙をサクに渡した。

「えっ、これ……？」

それは、昨夜見せていた、ラーニヤが描いたヴァンドル・バード
の絵だった。

「これ、持っていて欲しいの。いつかヴァンドル・バードに会
ったとき、間違えないように！」

目を丸くしながら聞いていたサクは、その場にしゃがんで目線を
ラーニヤに合わせると、笑顔で言った。

「ありがとう。お守りにするよ。そしてまた、ラーニヤに会い
にくるからな！」

そして、ラーニヤの頭をグリグリツと撫でると立ち上がった。

「お兄ちゃんたち、頑張つてね！」

ラーニヤは門の向こう側で大きく手を振って見送っていた。そ
れは、門が固く閉じられるまで続いていた。

「元気な女の子だったわね」

ヤツハが閉じた門を振り返り、いとおしそうに微笑んだ。

「ラクラさんの赤ちゃんも、あんな風に元気に健康に、育ってくれたらいいな」

壁に囲まれてもう見えないモノリス村を思いながら見つめるヤツハ。茶色の肩までの髪が風を受けている。サクはラーニヤにもらったヴァンドル・バードの絵を丁寧にたたみ、懐にしまった。「大丈夫さ。そのためにオレたちがアルコドに遣わされたんだ。必ず元に戻してやる！」

拳を握って前を見据えるサクは、振り向いて言った。

「シリウ！ ハミウカはちゃんと持つてるだろうな？」

すると、シリウは三人から意外なほど遠く離れていた。立ち止まったまま、少し俯いている。

「シリウ？ どうしたんだよ？」

サクの言葉に、ヤツハとカイルも立ち止まってシリウを見た。道の途中で佇んでいるシリウ。

「一体どうしたのよ？」

ヤツハが尋ねると、シリウが小さな声で呟いた。

「出来ません」

「？ 何って？ 聞こえねえよ！」

サクが問い掛けると、今度は叫ぶように言った。

「理由を教えてもらわなければ、旅を続ける事は出来ません！」

「？」

一同、意味がわからずに言葉を失った。シリウは怒っているようだった。クールな表情はそれほど変わっていないが、叫ぶほど口調が強くなるのは珍しい。

「何言ってるんだよ？」

サクが少し動揺しながら聞いた。すると、シリウはまた叫ぶように言った。

「何故僕に対して急によそよそしい態度になったのか、理由を教えてください、カイル！」

急に名前を呼ばれて驚くカイル。だがすぐにその意味に気付いたように視線を逸らした。

「気のせいだよ！ 早く行くぞ！」

そして踵を返すと、先に進もうとした。

「イヤです！ わけもわからずに素っ気ない態度をされて、普通に居られるわけがないじゃないですか！」

カイルは背中を向けたままため息をついた。その二人を見比べるサクとヤツハ。

「一体、どうしたの？ 昨夜何かあったの？ 喧嘩でも、した？」

ヤツハはずっとラクラに付いていたので、三人に何が起こったのかわからない。すると、サクが軽い口調で言った。

「お前がシリウに抱きついたりなんかするからだろ？」

「？」

「！」

きょとんとするヤツハの向こうで、カイルの肩が動いた。

「好きな奴が目の前で誰かに抱きつかれたら、気にならないわけないよな、カイルー？」

頭の後ろで手を組んで、からかうように言うサク。

「ちっ、ちがつ……」

カイルは慌てて振り向いた。その頬は真っ赤だ。

「あれ、当たり？」

サクが笑う。ヤツハは口を手で押さえて目を丸くした。

「やだ！ あたし、そんなつもりじゃなかったのよ？」

ヤツハは焦りながらカイルの手を引いた。

「ラクラさんの事で興奮して、つい抱きついちゃっただけ！ 何もやましい気持ちなんてないんだから！」

「やま……！ だからヤツハっ！ ちがっ！」

カイルは弁明しながらも、ヤツハに引きずられるようにシリウの所まで連れてこられると、その背中をドンと押された。 つんのめるカイルの両肩を、シリウが受けとめた。

「だから、へんに勘違いしなくていいの！ 分かったっ？」

ヤツハは半ば苛立ったように言うと、サクのもとへと駆けていった。

「ね、さっきのラーニヤの絵を見せてよ！」

「ん？ ああ」

サクが懐から出した絵を見ながら、ヤツハは微笑んだ。

「素敵な絵ね。 きっと、野草や花をすり潰したりして色を作ったんだわ」

所々茶色く変色している所も味があり、懸命に塗りたくった跡が、躍動感に満ちている。 きっと、頭の中にあるうちに描いてしまいたかったのだろう。

「大切にしておけるのよ？」

優しい瞳で絵を見ながらヤツハが言うと、サクは笑顔で言った。

「当たり前だ。 これはオレの宝物だからな！」

ヤツハはニッコリと頷いた。

ディンゴの逆襲！

「あの二人も、なかなかお似合いじゃないですか」

耳元で言うシリウの声に我に返ったカイルは、同時に、自分の両肩に置かれたシリウの手に気付いた。

「いつまでそうしてんだよ！……！」

慌てて身体を離れたカイルは、シリウの後ろから襲ってくる獣に気付いた。

反射的に、腰に装備していたナイフを手に取り

「シリウ動くなよ！」

と一喝するが早いかソレを獣に投げ付けた。ナイフは獣の足を大きくえぐった。

「キャンキャンッ！」

と鳴きながら逃げていく獣を見送り、ゆっくりと振り向いたシリウは、カイルに微笑んだ。

「ありがとうございます」

「ふん……」

カイルは照れたようにまた頬を赤くして、落ちたナイフを拾った。刃先に、さっきの獣の血液が付いている。それを近くの木から採った葉で拭き取ると、また腰に装備した。

「くそっ……仕留められなかった」

悔しげに言うカイルに、シリウは嬉しそうに言った。

「嫉妬なんてカイルらしくないですよ。僕を信じてください！」
カイルはビクツとしてシリウを睨んだ。

「だからそれ、やめろって！」

迷惑そうに言うカイルに、シリウは嬉しそうに微笑んでいる。

「シリウ、カイル、大丈夫か？」

サクとヤツハが駆け寄ってくるのを見て、シリウは微笑んて言った。

「大丈夫ですよ。カイルが僕を守ってくれましたから」
「シリウ！」

咎めるカイルに、サクが笑った。
「なんだ、仲直りしたんじゃないか！」

「でも、仕留められなかった……」
悔しそうに獣が逃げていった方を見ながら言うカイルに、ヤツハも眉をひそめた。

「今のはデインゴでしょ？ 仲間を呼ぶかもしれない。ここから離れましょう！」

四人はとりあえずの距離を稼ごうと、少し走ることにした。

仲間意識の強いデインゴの鼻は異常に発達している。道に残った僅かな匂いも嗅ぎつけ、どこまでも獲物を狙う。四人は方角を見失わないようにしながら、木々の間を縫って先を急いだ。

だが、野性の力は想像以上に侮れないものだった。程なくして走り続ける四人の前に、何十頭というデインゴの群れが立ちはだかっただ。

「うわっ！ やべえ！」

サクが木の枝にしがみついて急停止すると、他の三人も木の枝に乗ったまま立ち往生してしまった。

大きなものは、体長二メートル以上にもなる大型の犬科の動物デインゴたちが、サクたちが乗る木の幹によじ登ろうと爪を立て、うなり声を上げながら攻め立てる。口の端を大きく吊り上げ、よだれを垂らしながら、デインゴの群れは怒りに満ちている。やはりさっきのデインゴの仲間なのだろう。

「目の前にアルコドが見えているのに……」

シリウが残念そうに呟くと、カイルが装備していた剣を抜いた。

「ここは俺がおとりになる！ お前たちは先を急げ！」

と三人に残すと、カイルは地を覆うかのような巨大なデインゴ群

に飛び込むように切り掛かった。

「ケンバイシリュウ 剣舞四奏！」

カイルの剣がまるで四本になったかのように増殖し、デインゴを切り裂いていく。だが、ヤツハが戦況を見極めた。

「一人でなんて無茶よ！ 相手の数が多すぎる！」

「俺も行く！」

サクが拳を握って飛び降りた。

「バクケン トウサツ 爆拳刀刹！」

繰り出されるサクの拳から無数の気の弾が放たれ、デインゴの巨体を薙ぎ倒していく。カイルと背中合わせになったサクは、叫ぶように言った。

「無茶するなカイル！」

「こうなる原因を作ったのは俺だ。せめて、シリウだけは先に進ませたい！ 道を切り開く！」

カイルはサクから離れると、剣を上段に構えた。

「シリウ！ 先に進め！ ケンバイドウゴウ 剣舞道轟！」

気合いを込めて振り下ろすと、切っ先から旋風が生まれ、森の中に道を作るようにデインゴも木も、全ての障害物を薙ぎ倒していく。

「シリウ、急げ！」

カイルの声に

「あたしが援護する！」

と一足先に降り立つヤツハ。シリウはひとつ頷いて飛び降り、森の中にぼつかりと空いた道を走りだした。

「オレたちも後から行く！」

サクの声を背中に受け、シリウの俊足はカイルが作った道を風のように滑っていった。その後ろ姿を遮るように立ったヤツハが、腕を交差させて構えた。

「皆、息を止めて！」

サクとカイルが頷くと同時に、振り上げられたヤツハの両手から旋風が生まれた。

「百花眠眠！」
ヒヤッカミンミン

風の中に交じって紫色の花びらが舞い踊り、デインゴ群を囲んだ。それを吸い込んだデインゴたちが次々に倒れていく。そして寝息を立て始めた。いち早く息を止め、その場を離れたサクとカイルは、ヤツハと共にシリウの後を追った。

それでもデインゴの数頭がまだ追ってくる。

「つたく、しつこいなあ！」

振り返りながら迷惑そうに言うサク。デインゴたちは怒りに我を忘れたようにひたすら三人を目指してくる。走る速度では、完全にデインゴの方が速い。すぐに追いつかれるだろう。

再びカイルが振り返り、剣を構えたその時

「皆、早くここへ！」

と言うシリウの声が響いた。

「シリウ！」

サクはカイルとヤツハの腕を引いて、シリウのもとへ飛び込んだ。その脇でシリウの両腕が空を仰ぎ、念と共に円を描いた。

「蒼炎花！」
ソウエンカ

四人の前に蒼い炎の壁が立ち上った。

勢い余って触れたデインゴが焼け焦げていく。

「さあ、今のうちに！」

四人は頷きあって踵を返した。その時、炎の壁を抜けて、一頭のデインゴが飛び込んで来た。

「きゃあああつ！」

デインゴはヤツハの足に牙を立て、振り抜いた。

「ヤツハっ！」

驚くサクの目の前を、ヤツハの体が舞う。

「くっ！」

カイルの剣がデインゴの体を切り裂いた時、ヤツハの体は地面に叩きつけられていた。

「ヤツハっ！」

サクが急いで駆け寄って体を起こすと、ヤツハは気を失っていた。
太ももからは大量に出血している。咬まれた傷も深そうだ。

「ヤツハっ！　なんてこった！」

「急ぎましょう！　アルコドはすぐそこです！」

シリウの言葉に、サクは唇を噛んでヤツハの体を抱き上げた。

乾いた国、アルコド

アルコド国。

かつては人口一万人以上を抱える商業国だったが、五年前に、国を支えていたとされる泉が突然枯渇。人や物で賑わっていた町の中から活気が薄れ、人々は次々に国を捨てて出ていった。今は、ただっ広い町のなかに点々と二百人程度残るだけだ。それに伴い、周辺の町や村にも影響が出始めていた。水が届かなくなったモリノス村も例外ではない。

アルコド国の異変の影響は、広がる一方だった。

そんなアルコド国に、気を失ったままのヤツハを抱えたサクたちが駆け込んでいった。彼らは診療所を見つけると、診察を仰いだ。「ヤツハの具合はどうなんだっ？」

サクが、部屋から出てきたシリウに詰め寄った。シリウは神妙な顔で答えた。

「まだ時間が経たないと、はっきりとは分からないらしいのですが、もしかしたら狂犬病にかかっているかもしれないそうです」

「狂犬病……」

サクの顔から血の気が失せた。

「……治るのか？ 治るんだよな？」

シリウの襟元をつかんでなおも詰め寄るサクに、部屋から出てきたドクター・テリスムが静かに言った。

「あまり騒ぐな。とにかく、こっちで話をしよう」

テリスムが隣の診察室に二人を促した。落ち着きなく椅子に座るサクと隣に静かに座るシリウを前に、テリスムはため息をついた。「薬はある。それで一時は持ちこたえるだろう。ただ、毒素を体から出すためには、大量の水分が必要なんだ。ここには、それに対応出来る十分な水がもう無いんだよ……」

サクは思わず立ち上がった。

「それじゃ、どうしたらいいんだよ？ このまま放っておくのか？」
今にも暴れだしそうなサクの肩を押さえて、シリウが静かに尋ねた。

「何か方法は無いのですか？ 彼女は僕たちの大切な仲間なんです。どうしても、死なせるわけにはいかないんです」

必死な表情で見つめるサクとシリウを見て、テリスムはため息をついた。

「せめて、泉が戻れば……」

その言葉に、二人はハツとなった。

「ヤツハ」

サクは病室に入り、熱に冒され荒い息をしているヤツハが横たわるベッドの傍らに近づくと言った。

「お前の病気を治すために、大量の水が必要らしいんだ。だからオレたちはこれから、枯れた泉を元に戻しに行く。だから、ヤツハは自分のことだけ考えて、がんばれ！ 絶対へこたれんじゃねぞぞ！」

ヤツハはうつすらと目を開けた。

「サク……」

「？ なんだ？」

サクが小さく呟くヤツハの顔に耳を近付けた。

「ケガ……しないでね」

サクは微笑んでみせた。

「心配すんな！ オレたちを信じて、お前はゆっくり寝てろ！」

ヤツハは熱に冒された赤い頬で、それでもわずかに笑顔をみせた。サクがヤツハと話をしている間にシリウが病院の外に出ると、壁にもたれていたカイルが駆け寄ってきた。

「ヤツハは……？」

心配そうに見上げるカイルに、シリウは微笑みさえ見せられなか

った。その顔を見て、カイルもヤツハの状態が良くないことを察知した。

「俺が悪いんだ……」

唇を噛んで俯くカイル。

「俺がデインゴを寄せ付けたばかりに……」

「カイル！」

シリウがいつになく強い口調で言ったので、カイルは驚いて顔を上げた。

「今は、僕たちが出来ることをしなくてはいけません。今のヤツ八には、大量の水が必要です。だから、枯れた泉を戻さなくては」

「泉を……？」

シリウは強く頷いた。

「それから……」

と、カイルを真つすぐに見つめた。その瞳には、少し涙が滲んでいる。

「自分だけで背負わないでください。それに、自分だけ犠牲になるなどと、二度と言わないでください。あなたは……」

自然に伸びたシリウの手が、カイルの頬に触れた。

その時、病院の扉が開き、シリウの手はすぐに下げられた。

「行くぞ！」

出てきたサクの顔は、今までになく真剣で頼もしい顔をしていた。シリウとカイルも気を改めて頷いた。

目的の泉は、アルコド国のほぼ中央に位置する城の中庭にあるとテリスムが教えてくれた。

かつてはそこから四方に水路が引かれ、透き通った水が止め処も無く勢い良く流れていたと言う。その水路も今は、ただの枯れた溝に成り果て、あちこちに木の葉や枝が残り、異臭も漂って荒れた状態になっている。それを横目に眺めながら、サクとシリウ、カ

イルは静かにそびえ立つ城へと急いだ。

「ソラール兵士養成学校から命を受け、やってきました。シーノ王と面会したいのですが」

シリウが、応対した執事セツナに挨拶をした。セツナは静かに返した。

「お待ちしてありました。ですが情報によれば、ソラール養成学校から旅立ったのは四人ということでしたが？」

静かにはつきりとした口調で言うセツナに、サクが口を開いた。

「ヤツハは旅の途中で病気になって、今病院にいる。水が必要なんだ！」

逸る心を押さえ切れず、サクはセツナに詰め寄った。セツナは迷惑そうに少し眉をひそめた。

「そうですか。わかりました。では、こちらへ……」

セツナはほとんど無表情で踵を返した。冷たい態度を、背中まで伸びたストレートの紅い髪が余計に強調させる。すらりとした足首が見え隠れするロングのタイトスカートが、どこか知性も感じさせる。

「シーノ王はあちらです」

中庭の前まで来て、セツナは三人に振り返った。

「どこだよ？」

サクが言う先には、広めの庭園と、中央の土山に土木作業員風の男が一人見えるだけだ。セツナは抑揚の無い口調でその男を紹介した。

「あの方が、アルコド国王、シーノ・ソラーオ王です」

それを聞いた途端、一同は啞然とした。

全身が土埃にまみれ、簡素な服も所々端切れ、髭も伸ばし放題でひとり土を掘っているその男が、一国の王だというのだ。

「まさか……」

シリウが驚いて呟くと、セツナが無表情のまま

「泉が枯れ、国が衰退していくほどに、シーノ王は悩み、もう半年以上ずっとああやって、泉の辺りを掘り続けているのです」

と言うのを聞きながら、カイルは歩を進めた。その後を追うサクとシリウ。

近づいてくる人影に気付いたシーノ王は、ゆっくりと腰を伸ばした。

「やっと、来てくれたんだね……」

頬は痩せこけ、くぼんだ瞳が疲労を溜め込んでいる。よろめきながら体の半分ほどまで掘った穴からはいだすと、服の埃を叩き落とした。周りには水気の無い土が散乱し、時折吹く風に土ぼこりを舞い上がらせ、他にも同じような穴が数カ所点在し、庭は荒れ放題だ。とても一国の城の中庭とは思えない。シーノ王は力ない笑顔を見せながら

「こんな姿ですまない。広間へ案内しよう……」

と小さな声を絞りだすシーノ王の体がふわりと崩れ、サクとカイルが支えた。

「すまない……」

衣服越しに、そのガリガリに痩せ細った様子が、二人にも痛く伝わった。

セツナが先導し、一同は広間へと場所を移した。

静まり返ったただっ広い広間には、大きすぎるほどのテーブルが中央に置かれ、四十脚ほどの席が並べられている。

その奥にシーノ王を座らせ、サクとシリウ、カイルがテーブルの脇に並んで椅子に座った。

セツナがすぐにお茶をたてて配膳した。まるで白湯のような薄い波がカップの中に揺れている。

泉が枯れた原因

「遠いところを、よく来てくれた。心から礼を言う」

座ったままで頭を下げるシーノ王に、シリウが尋ねた。

「さっきの穴が、問題の枯れた泉なのですか？ 見たところ、一滴の水も無いようでしたが……」

シーノ王はため息をつき、話し始めた。

「何の前触れもなかった。ある日突然、ひと時も途切れることなく湧き続けていた泉が枯れはじめたのだ。徐々に水量が少なくなり、その日が終わる頃には四本の水路が賄いきれなくなった。慌てて水路を半分にし、次に一本にして、やっとぎりぎり人々の生活を支えてきたが、一カ月後には、遂に一滴の水も出なくなってしまった。やがて人々も希望を捨てて国を出ていった。君たちも見てきたのだろうか？ すっかり寂れきった国の姿を……」

シーノ王はもはや、威厳の欠けらも無くしていた。三人は墮ちた国の姿をまざまざと見せ付けられ、衝撃を受けていた。

「何故、泉が枯れてしまったのでしょうか？」

シリウは冷静に考えようとしていた。同情しては前に進めない。ヤツハの状態も、一刻を争うのだ。

「枯れた原因は必ずあるはずなんです。何か心当たりはありませんか？ ほんの小さな事でもいいんです」

カイルも身を乗り出してシーノ王の顔を伺った。シーノ王の言葉を待ちながら、サクもじっと見つめている。シーノ王はうつむいたまま、深いため息をついた。そして、ゆっくりと首を横に振ると

「何もわからんのだ……」

と力なくうなだれた。

突然サクが立ち上がり、広間を出て行くことするので、シリウとカイルも慌てて立ち上がると彼を追った。

シーノ王はその背中をじっと見つめ

「セツナ、肩を貸してくれ」

と、自分もゆっくりと立ち上がり、セツナに支えられながら三人の後を追った。サクは穴だらけの庭園に戻っていた。

「サク、一体何をやる気ですか？」

シリウが落ち着かせるように静かに言うのを背に、サクは庭園の中央まで行くと、おもむろに両手を上段に構えた。

「サクっ？」

シリウとカイルが止める間もなく

バッケンホウカ
「爆拳放火！」

という気合咆哮と共にその両拳が地面に叩きつけられた。

「サク！」

飛び散り襲ってくる爆風を腕で避けながら、シリウとカイルは立ち尽くしていた。

飛んできた土の塊が、シーノ王の頬にも当たり、赤く腫れた。だが、彼は何も言わずにただ黙って庭に大きな穴が開くのを見つめていた。傍で支えるセツナもまた、無表情で庭の土が舞い上がるのを見つめていた。

土煙が治まったのを見計らってサクの所に集まった面々は、ぱっかりと開いた穴を見下ろしていた。

「穴を掘っても水は出てこねえ。だけど、この国の周りには、緑の葉っぱをたんまり抱えた森で囲まれてる。それがどういふ事か分かるか？ ここにあつた泉だけが枯れた。人間が生きるために支えていた、必要な物だけが、人間の前から姿を消したんだ。必ず何か原因があるはずだ！」

サクはシーノ王を睨んでいた。

その気迫にシリウとカイルは何も言えず、サクに睨まれたままのシーノ王は膝をついて、無言で穴を見つめていた。

「水が一滴もない今、ハミウカは使うことが出来ません。これは、

流れる水と共に浄化を広めるものですから」

シリウはうなだれるシーノ王に静かに言った。

静まり返った庭園に、穏やかな風が吹き、地面を覆う土を軽く巻き上げた。

奇立ちの雨の中で

「くそっ！」

診療所の壁を悔しげに殴るサク。シリウとカイルは簡素な椅子に座り、うつむいていた。結局何も出来ずに、シーノ王に明日の出直しを伝えて、三人はヤツハの待つ診療所に戻ってきたのだった。シリウはため息をついて言った。

「僕たちは、ただハミウカをここに届ける為だけに、ファンネル校長に依頼されたのでしょうか？」

「どういうことだ？」

カイルがゆっくりと顔を上げて、シリウを見た。

「もつと何か、あるような気がするのですが……」

眼鏡を上げながら考えるが、答えは出てこない。シリウは、そこにヒントがあるような気がして仕方ないのだ。

「そんなこと、どうでもいい。今は、枯れた泉をなんとかしなきゃいけないだろ？」

サクは無造作に椅子に座ったが、落ち着かない様子でいる。数秒もしないうちに

「ヤツハの様子を見てくる！」

と立ち上がり、ヤツハが眠る部屋に向かった。

シリウとカイルが見送るなか、そつと部屋に入ったサクは、静かにヤツハのそばに近づいた。薬が効いているのか、息も落ち着き、静かに眠っているようだった。サクはベッドの脇に座り、ヤツハの顔を覗いた。

「ヤツハ、もう少し待っていてくれ。必ず、泉に水を戻すから」

囁くように言い、名残惜しそうに立ち上がったサクの手を、握る温もりがあった。

「ヤツハ、起きてたのか？」

熱っぽい手を握り返して座り直すサクを、ヤツハは薄目を開けて

見つめた。

「ケガ、してない？」

か弱い声は、サクの耳にしっかり届いていた。サクは頷いた。

「当たり前だ。シーノ王に会ってきた。泉が枯れた原因は、分らないって言ってたけど、必ず何かあるはずなんだ」

説明するサクの口元を見つめるヤツハは、微笑んで小さく頷いた。

「あたしは大丈夫……サク、アルコド国の……皆の願いを叶えてあげて」

サクは、自分のことよりも自分とはまるで関係のない国のことを心配するヤツハの手をぎゅっと握り、そっと布団の中へ戻した。

「もう少しの辛抱だからな！」

サクは笑顔でそう言い、ゆっくり眠るように告げて部屋を出ていった。ヤツハはしばらくぼんやりと天井を見つめ、やがてまた眠りについた。

一日中、何度か目は覚めたが、身体が全く動かなかった。薬の性か、眠気も激しい。何も出来ないヤツハは、ただサクたちが無事に泉を元に戻すことを祈るしかなかった。

『サク、皆……ごめんね……』

朝がやってきた。朝日は目も眩むほどの光で国中を包んでいく。人の往来はほとんど無い。静か過ぎる朝を迎えていた。

サクはすでに目を覚ましていて、窓から色付いていく建物を見つめていた。

「早起きですね」

声に振り向くと、シリウが立っていた。

「何か悩み事があると、決まって空を眺めている……。眠っていないのですか？」

サクは答えずに再び外を見た。

「ヴァンドル・バードに会えたら、こんな悩みなんて吹き飛んでし

まうのにな」

サクは自分の手元を見つめた。その手には、ラーニヤから貰ったヴァンドル・バードの絵が握られている。シリウはそれを見ながらひとつ息をついた。

「伝説を追いかけても、身にならないことが多いんですよ」

「何だと？」

サクがシリウを睨んだ。

「シリウは、オレやラーニヤの事を否定しようとしてるのか？」

立ち上がってラーニヤの絵を見せながら、シリウに詰め寄るサク。

シリウは何も言わずにその絵を見つめていた。

「何か言えよ！」

声を荒げるサクに、シリウは瞳をまっすぐ向けた。

「現実から逃げるのは、負けと同じです」

その瞬間、シリウの体が宙に舞った。

サクの拳が、シリウの頬を直撃したのだ。床に叩きつけられたシリウはゆっくりと起き上がり、口元を手で拭った。口の中を切ったのだろう、わずかに血が流れた。

「幻想なんか頼ってヤツハが良くなるのなら、皆とつくにしてますよ！」

今度はシリウの拳がサクの頬をとらえた。サクの手から絵が離れ、ヒラヒラと床に落ちた。悔しそうに口元を拭いながら起き上がったサクは、再びシリウに飛び掛かって行った。

「待てっ！」

二人の間に入ったのはカイルだった。お互いの胸に肘をあて、二人を止めていた。

「いい加減にしるよ……」

カイルは静かに言いながら体を離れた。サクとシリウは互いから視線を外し、黙って立ち尽くしていた。

「ヤツハのことを心配してるのは、皆同じだ」

そして床に落ちているラーニヤの絵をゆっくり拾うと、サクに手渡した。

「イライラしても、何も進まないだろ？」

二人の顔を見ながら、カイルはあきれたようにため息をついた。

そして二人分の椅子を並べ、そこに座るように促した。おとなしく座った二人を前に、カイルは話し始めた。

「今、ヤツハから伝言を預かった。昨夜、ヤツハの夢の中に声が響いたらしい。男の子のような声で『ボクのことを忘れないで』って。それがどういう意味があるのか分からないけど、何かのヒントになるような気がするってヤツハは言ってた」

シリウが口を開いた。

「『忘れないで』……ですか」

「忘れられた奴がいるってことか？ 誰が、誰に？」

サクが困惑している。

「何かを忘れるって事は、過去から今の間に何かあったってことじゃないでしょうか？」

シリウがカイルを見た。ファンネル校長が、旅立つ前に言っていた。話はカイルから聞けと。

「俺も、国のどこかに原因があると思ってる。けど……」

カイルも考えるが、全く手がかりになりそうな記憶がない。あえて言うなら、という記憶がひとつあった。

「あの城には化け物が住んでいて、外界から閉ざされた秘密があるってことを、子供の頃に聞いたことがある。まだ子供の時の記憶だ。信憑性は無い」

「化け物……？ 何か関係があるのでしょうか？」

シリウはため息をついて、指先で眼鏡を上げた。

「とりあえず、また城へ行ってみよう。何か分かるかもしれない」
サクが立ち上がった。

もうイラついてなどいなかった。三人は、自分たちに出ることを精一杯やるしかないと思っていた。三人は診療所を出た。

城へ向かう道中、カイルにシリウが声を掛けた。

「ヤツハに、顔を合わせられたんですね？」

ヤツハが怪我をしたのは自分の性だと、自らを責めていたカイルの姿を見ていただけに、シリウなりに心配していたのだろう。カイルはふつと微笑んだ。

「『なんて顔をしてんだ』って、怒られたよ……そして、俺たちの事を信じてるから、やれるだけ頑張ってる。病人に励まされて、ホントに情けないよ」

シリウは微笑んでカイルの肩を優しく叩いた。

「行きましようか！」

サクも話を聞いて微笑み、三人は風のように城へと走った。

城に着き、昨日と同じように無表情で対応したセツナに案内されて中庭に行くと、シーノ王は石段に座ってぼんやりしていた。

「何やってんだよ？」

その姿を見た途端にサクが苛立ち、殴りかかるように叫んだ。

だがそれに驚きもせず、ぼうつと中庭を見つめながら独り言のようにつぶやいた。

「どれだけ穴を掘っても水は一滴も出てこない。頼みの綱のハミ

ウカも使えず……もうこの国は終わりだ……」

その途端、パンツ！と軽い音が響いた。

セツナがシーノ王の頬をはったのだ。

シーノ王は驚いたようにゆっくりと見上げた。その先には、涙

をためるセツナが震えながら立ち尽くしていた。

「何故……何故そんな風になってしまわれたのですか？ シーノ王は……いいえ、私の知っているシーノは、そんな人ではなかった……」

…」

じりじりと後ずさりをし、遂に踵を返すと走り去ってしまった。

「セツナさんっ！」

カイルは思わず彼女の後を追った。

シリウとサクはその後ろ姿を見送ると、再びシーノ王を見下ろした。

「とりあえず、その昔の話をしてもらいませんか？ 忘れられた過去が、助けてくれるかも知れません」

シリウが言い聞かすように言った。

シーノ王は、石段に座ったまま再び中庭に視線を移しながら遠い目をした。それははるか過去に遡るかのようだった。

「忘れられた過去か……この頃の私には、過去を振り返る余裕など無いに等しかった。頭脳の全てをこの国に費やして、どうしたら繁栄するのか、どうしたら豊かになるのかだけを考える毎日だった

……」

一方、広間を出ていったセツナに追い付いたカイルは、小さな執事部屋で涙を落とすセツナをただ見守ることしかできなかった。

しばらくして、セツナは立ち尽くしているカイルに振り向き、涙を拭いて微笑んだ。赤くさらさらのストレート髪がはらはらと顔をなぞる。セツナは端正な顔立ちの、美しい女性だ。カイル自身女でありながらも、目を見張るものがあつた。

「こんな堕ち切った国の為に、あなた方は命を懸けて旅をしてきた……何と感謝をしたら良いのか……」

セツナは椅子に座り直し、カイルを向かいの椅子に促した。カイルはおとなしく座り、セツナを見つめた。

「俺たちは、ファンネル校長に言い渡された目的を果たすだけに来たつもりでしたが、途中でアクシデントがあつて、一緒に旅をしてきた仲間が今病気で苦しんでいます。彼女を治す為にも、どうしても泉を蘇らさなくてはならないんです。その仲間が、気になる

夢を見たと言っていました」

「夢を？」

カイルは頷いた。

「小さな男の子のような声で『僕を忘れないで』と」

その途端、セツナはハツとした顔で口を押さえた。

カイルは刺

激を与えないように、静かに尋ねた。

「何か、知っているんですね？」

セツナは少しうつむいて、ひとつ小さく頷いた。

シーノ王、心の旅

シーノ王は石段に座って、遠い景色を見つめながら話し始めた。それは彼にとって、思い出をたどる旅のようだった。

「アルコドの泉はコダマが作ってくれた泉。泉が生まれてから今に至るまで、どんな時でも枯れることはなかった」

「コダマとは、伝説と語り継がれている森の妖精【コダマ】のことですか？」

シリウの問いに、シーノ王は頷いた。話を始める前に、まずは森の妖精【コダマ】の事を説明しなくてはならなかった。

「アルコド国では、代々コダマを敬い祭る伝統がある。そして、国の王はそれを受け継ぎ伝えていく責任と義務を背負っているのだよ」

「コダマって、伝説上の生き物なんだろう？ 本当に存在するのか？」

サクが尋ねたが、そもそもサク本人も伝説上の生き物であるヴァンドル・バードを信じているのだから、おかしな質問だ。それを

知らぬシーノ王は、自虐的に微笑んだ。

「今となつては、国の民さえももう誰も信じなくなったがな。コ

ダマは本来、森の護り神だ。人間などのエゴの集まった国に祭られることなど、望んでいないのかもしれないかもしれん」

ため息をついて、シーノ王は続けた。

「だが私は、実際にコダマに会っている」

「コダマに？」

サクの瞳が輝いた。

「どんな奴なんだ、コダマって？」

サクは隣に座って、すっかり興味津々だ。シーノ王は遠い目を
して思いを馳せた。

「背丈は、人間でいうと十歳位で、全身緑がかった肌と髪の毛、深い緑色の瞳が印象的だった。見つめられると、心を深く見透かさ

れるようだな。それから、とても身軽で、まるで木の葉か風のよ
うに走り回る元気な妖精だった」

シーノ王の頬に赤みがさした。まるで子供の時に戻ったかのよ
うに、瞳が昔を思い出していた。

「コダマはいつも、城の中でひとりだった私の話し相手をしてくれ
た。コダマは、不思議なことに私たち王家の家系にしかその姿を
見せることはなかった。だから、私たちがおかしいのではと不信
感を抱く家来たちも、少なからず居た」

「そういえば、この城の中には執事しかいないのか？」

サクが周りを見渡した。本来ならば、数人の兵士なりが警護し、
客と王を放置することはないだろう。だがぐるりと見渡しても、
あるのはただっ広い広間や荒れ果てた中庭。人の気配が全く無い。

シーノ王は言った。

「今この城には、私と、私の世話をする最低限の人間である執事の
セツナと数人のメイドが居るだけだ。他の者達は、辺境の山など
から水を運んでくる任務に就いている」

シーノ王はため息をついた。

「荒れ果て、人も居ないような、廃墟のようなこの国に、攻め入る
うなどという稀有な者はいないだろうな」

シーノ王は息を吐きながらゆっくりと立ち上がり、フラフラと中
庭に入ってしまった。

「楽しく幸せな日々だった。だが、ずっと平和だったわけではな
い。コダマの存在を手に入れようとする族たちが、度々攻め入っ
てきた」

「コダマを欲しがるとして、一体なんだ？」

サクの疑問に、シリウが代わりに答えた。

「声は癒し、泣けば水晶……」

「？」

サクが首をひねったので、シリウは説明を付け足した。

「その存在が手に入れば、さぞや稼げるでしょうね。水晶がタダ

で手に入るんですから」

するとサクは手を叩いた。

「そうか、コダマを泣かせて水晶を出させて、それを売れば大金持ちだ！」

サクのストレートな言葉に、シリウの眉が寄った。

「サク、言葉を選んでください！」

たしなめられ、サクは舌を出して謝った。　シーノ王は振り返って微笑んだ。

「間違つてはいない。　心が悪い方向に傾いたとき、自然と狙われるのは私たちだからな。　ある日、辺境の国がそういう目的で攻め入ってきた。　まだ十代だった私は、コダマに姿を消すように言い、自分も隠れるように森に逃げた。　だがそれもすぐに見つかり、連れ戻された。　城に引きずられながら入った私が見たのは、全身傷だらけで虫の息の、父の姿だった」

サクの目が、シーノ王の背中をじつと見つめている。　自然にその拳が握られた。

「奴らのリーダー、ジアントが言った。『コダマの居所を言えば、命だけは助けてやる』と。　不敵に笑いながら勝ち誇ったように仁王立ちするジアントに、私は強い屈辱を覚えた。　これで国は終わるのだと、本気でそう思った。　その時、父は必死で顔を上げて、叫ぶように言った。『国を捨ててはならない。　それは、コダマにとつて地獄の始まりだ。　シーノ、お前はこの国を、コダマを守る義務がある！』その言葉を聞いたとき、私は全身が震え上がった。　もう国の運命は自分ひとりにかかっているのだと。　そして、いつも一緒だったコダマの姿が目に見えなくなった。　心が溢れるように、私は泣きながら叫んでいた。『私は国を捨てない！　例えばここで手足を失おうとも、この国は私が守る！』」

サクとシリウはじつと黙っていた。　シーノ王は、空を仰いだ。

暗雲が空を包み始めていた。　それらを見つめ、シーノ王は瞳を開いた。

「そう叫んだとき、突然辺りが真っ暗になり、風が吹き荒れた。それは私の周りを包み、辺りを巻き上げた。ジアントたちは驚いてひるみ、一目散に逃げ出した。『コダマの呪いだ!』と口々にしながら」

そのうち、ぽつぽつと小さな雨粒が空から落ちてきた。乾いた土に、いくつもの黒い染みが刻まれていく。

「気が付くと、すっかり荒れ果てた城と父だけが目の前にあり、ジアントたちは姿を消していた。その時、私の前にコダマが現れた。だがその姿は、私が知っている姿をしていなかった……」

シーノ王は全身を激しくなった雨に打たれながら見上げ、目を細めた。

「まるで枯葉のように赤茶けた肌、髪、手足もか細く痩せ細ってしまっていた。言葉を失う私に、コダマは微笑んで言った。『僕のは無くさないで』何か言おうとしても、何も言葉が思い浮かばなかった。やがてその体は薄くなり、向こう側が見えるほどになり……とうとう消えてしまった」

サクはうつむき、シリウは眼鏡をそっと上げた。シーノ王は、無残にも荒れ果てた中庭を指した。

「その途端、まさにこの場所に、泉が湧き始めたのだ。私はあの時改めて、自分に課せられた責任を思い知った。泉から湧き出す水はみるみるうちに庭から溢れだし、国を潤した。国を守らなければ……そう思い続けて今まで必死に來たつもりだ……」

「王は、忘れておしまいになった……」

不意な声に三人が振り向くと、セツナが立っていた。すぐ横にカイルが見守るように居る。セツナは、か細くもしっかりとした声で言った。

「王は、一番大事なことを、無くしてしまいました」

「私が何を無くしたというのだ?」

セツナを細い目で見るずぶ濡れの王は、すっかりみすばらしく見えた。セツナはそんな王を切なく見つめた。

「国の豊かさを求めるあまり、民衆の声を聞かなくなりまして。ご自分の思うように動かせば、全てうまくいくとは限りません。それをあなたは……」

おそらく、セツナは初めて王に意見を言ったのだろう。震えながら訴えるセツナを、付き添うカイルが優しく見守っていた。シリノ王はセツナの言葉に息を飲み、目を見開いて、そして膝をついた。

「おい！」

駆け寄ろうとするサクをシリウが止めた。小さく首を横に振ると、王を見守るように促した。ひとり中庭でずぶ濡れになっている王は、痩せ細った背中を丸めて震えていた。

「私は、何ということをしたのだ……」

流れ落ちる雨に紛れて、その瞳からは大粒の涙が零れ、顔は歪んでいた。

「国から民衆が離れていったのも、泉が枯れた性ではないのか……？」

「泉が枯れようと、国が衰退しようと、王の存在が頼れるものであれば、皆ここに残ってくれていたはずです」

セツナは悲痛な思いをシリノ王に訴えかけた。

「コダマよ……私はこれから、どうしたら良いのだ？ もう私には何も無い。富も権威も何も残っておらん。これから私はどうしたら……」

アルコドの泉

「私たちが居るじゃありませんか！」

突然の声に驚いた一同が振り向くと、広間にはいつの間にか数十人ほどの兵士たちが並んでいた。真ん中に立つ女性が、腰に両手をあててあきれたように言った。

「ちよつと出かけていた間に、なんてみすばらしい格好をしてんだい？ それじゃあ誰も一国の王だと認めてくれないよ！」

今はすっかり威厳も何も無くなっているが、仮にも国の王に対して失礼極まりない言葉に、サクたちは言葉を失った。気迫のこもったオーラをまとった彼女は、この衰退しきった国には不釣り合いなほど【元気】だった。顔も血色が良いし、体格も少しふつくらとされていて、頼りがいがある印象を与えている。栗色の髪の毛を一つにまとめ、くっきりした二重の瞳がキラキラと輝いている。カイルの横で、セツナが無言で改まったお辞儀をした。

「カリン……」

シーノ王はそう呟きながら、雨が降る中庭から彼女を見つめた。

カリンと呼ばれた女性は、サクたちに気付いて微笑んだ。

「お客さんかい？ こんなしょぼくれた国に何の様なんだい？」

シリウが姿勢を正して挨拶をした。

「僕たちはソラール兵士養成学校から来た者です。王に頼まれたものを届けに」

するとカリンは、ああ、と思い出したように手を叩いた。

「そうか、あんたたちハミウカを？ ……その割には、庭が前よりも荒れているようだけど……」

カリンは中庭の荒れ果てた様子を見て、何事かと目を丸くした。

「一体何があつたんだい？ 私たちが居ない間に？」

シリウとカイルが冷たい目で見る先には、頭を掻きながら苦笑い
をしているサクがいた。シーノ王は力なく微笑んだ。

「いや、何もなかったよ」

カリンはそれ以上追及せずに、ため息をついた。

「で、なんであんだ、泣いてんだい？」

一国の王である相手を見下すように細い目で見るカリンに、シリ
ウはやつと恐々尋ねた。

「あ、あの、あなたは……？」

カリンはサクたちを見て笑った。

「ああ、自己紹介がまだだったね、私はこの人の妻だよ！」

一同、目を丸くした。

「じゃあ……王妃……？」

サクが動揺しかすれた声で言うと、カリン王妃は微笑んで頷いた。
そこにはどこか気品も混じっていた。

「随分強そうな……」

弱気な王よりも、カリン王妃ひとりで国を動かせそうな勢いであ
る。

「全く！ こんなことになるなら、残していくんじゃなかったよ！」

そう言い、後ろに控える兵士たちに、運んできた水を民衆に配る
ように命令した。滑舌よく返事をして、それぞれの持ち場に向か
っていく兵士たち。広間には、また静かな空間が戻った。

カリン王妃は改めて話しはじめた。

「私はね、この人のもとに嫁ぐとき、あらゆることはこの人に習
い、抗わず、黙って半歩後ろを歩けと両親に言われて来たんだよ。

最初はそれでよかった。この人は私を深く愛してくれたし、何
不自由ない暮らしもさせてもらった。政治のこともうまく回して、

近隣の国々とも仲良くやっていた。何も息苦しいことなんてなかった。ところがいつからだったか、人が変わったように富を求めようになった。民衆の相談も聞き入れなくなり、全て自分の思うままに国を動かすようになった」

「何故そんなことに？」

シリウがシーノ王に尋ねた。その横で、サクが理解できていない顔で腕を組み、太い柱にもたれている。カイルとシリウに見つめられたシーノ王は、濡れた髪の毛をガシガシとかきむしった。

「それが得策だと思ったからだ。国のことを思えば、民衆の相談ごとが、小さなもののように思えてきて、民衆の意見に振り回されるようでは王の威厳も損なわれる心配にも襲われた。怖くなって、自分の意見を押し通すことにしたのだ」

悔い恥じるように告白するシーノ王に、カリン王妃はため息をついた。

「だから、私が立ち上がるしかないと思ってね。一発ガツンと言ってやったんだよ。そうしたら何のことはない。こんなに小さな人だったんだよ」

シーノ王は膝をついたままうなだれた。

「私は取り返しのつかないことをしてしまった……国を守ろうとしたのに、滅ぼすことになるとは……」

カリン王妃が雨の中を歩き、シーノ王の横に膝をついて肩を抱いた。

「何を言っただい！ これからやり直せばいいんだよ。あんたは根が弱すぎる。一人で抱えずに、私やセツナ、兵士や家来、皆に頼ればいいんだ。王様って言ったってただの一人の人間だ。強がるだけじゃ、誰も前には進めないんだよ」

シーノ王はカリン王妃を見つめた。

「出来るだろうか？ これから私は、やり直せるだろうか？」

カリン王妃はにっこりと微笑んで頷くと、シーノ王を立ち上げらせ、城の中へと促した。

その時、中庭から地を揺るがす響きと共に大きな音がした。驚いて皆が中庭を見ると、中央の辺りから、何千年という巨木のような太さの水柱が怒号と共に吹き上がっていた。

「な、なんなんだ？」

サクたちはただ驚いて見上げるばかり。シーノ王は立ち上がるのと、ゆっくりと水柱に近づいていった。

「シーノ王、危険です！」

止めようとしたシリウを、カリン王妃が制した。

「王のしたいようにさせてあげて！」

その目は、強気なだけではない、芯の強い輝きが生まれていた。

「何故突然……？」

カイルは独り言のように呟いた。だが誰も答えられなかった。

そんななか、シーノ王は笑みを浮かべながら降り注ぐ水を浴びて見上げた。

「帰ってきたんだね……」

流れ落ちる涙は、絶え間なく降り注ぐ水に紛れている。その時、吹き出すしぶきの中から声が聞こえてきた。

「……シーノ……」

「？」

サクたちは耳を疑った。

「なんだ、この声は……？」

頭の中に直接響く幼い男の子のような声。カリン王妃も驚いたように耳を押さえながら目を見開いていた。

「コダマだね？」

シーノ王は全身ずぶぬれになりながら、嬉しそうに微笑んだ。すると、しぶきの中に小さな影が現れた。それはやがて子供の形になり、宙に浮かびながらシーノ王を見下ろしていた。

「コダマ……」

シーノ王は切ない顔でコダマに手を差し伸べた。

シーノ……覚えていて……ボクの事は忘れてしまっても構わない……だけど、国の人々や森の声を忘れないで……いつも周りにあるものを大切にしたいんだ……

シーノ王はまるで子供が泣く寸前のように顔を歪めながら、大きく頷いた。コダマは微笑んだ。

シーノ……ボクが助けられるのはこれで最後だよ……だけど、いつだってシーノのすぐ近くにいる。見守っているからね

「コダマ……！」

差し伸べるシーノ王の指先がコダマに触れそうところで、その体は透けていく。

「コダマ！」

シーノ、大好きだよ……

コダマは微笑みながらゆっくりと消えていった。

「……」

シーノ王はゆっくりと腕を下げ、コダマが消えた宙を見上げたまま濡れた顔で微笑んだ。

「僕も大好きだよ……ありがとう、コダマ……」

そして、気持ちを振り切るように踵を返すと、カリン王妃やサクたちを振り返った。その表情は王の貫禄を備え、瞳には力強い輝きが生まれていた。

「あなた……」

カリン王妃がホツと顔をした。

「長い間心配をかけてすまなかった。私は自分に夢を見ていたよ。うだ。国を取り戻すために、全力を注ぐぞ！」

シーノ王は力強く微笑んだ。サクたちもそれを見て、安心して微笑んだ。

「では、コレはもう必要なさそうですね」

シリウが懐に縫い付けられていたハミウ力を取り出すと、シーノ王は頷いた。

「アルコドの泉から湧き出た水は、普通の水ではない。ハミウカを使わずとも、必ず国を復興させてみせよう！」

するとサクはにっと微笑み、シリウの手からハミウカを取ると、破り捨てた。それは降り注ぐしぶきの中に光を放ちながら消えていった。

「破ってしまったら、効果はないんだぞ……」

カイルが心配そうに言うと、サクは吹き出す泉を見ながら言った。
「いいんだ。コダマの願いは、シーノ王が国と共に蘇ること。

何かに頼らなきゃいけないほど、もう弱くはないんだろ？」

サクに見つめられ、シーノ王は微笑んだ。

「君の言うとおりだ。私は甘やかされすぎた」

しぶきに舞う光を見つめながら、柔らかな表情をしていた。

「もうコダマに心配はさせられないな」

「では、私はまたおとなしい王妃に戻りましょう」

カリン王妃は優しく笑うと、シーノ王は苦笑した。

「強いカリンも悪くはないがな」

「意地の悪い……」

小さく睨むカリン王妃。サクたちも交えて、笑い声が中庭に響いた。

いつの間にか雨もやみ、空には青空が広がって、天高く吹き上げるしぶきに虹が生まれていた。

旅立ちには微笑みながら

サクたちは急いで泉の水を汲み、ヤツ八のもとへと走った。

「ドクター！ 泉の水を持ってきたぞ！」

サクが病院に駆け込み一番にそう叫び、たつぷりと水を湛えた木桶を掲げると、ヤツ八を診ていたドクター・テリスムは目を丸くした。

「本当に泉が戻ってきたのか？ 信じられん……この数年、誰が何をしても効果ひとつなかったのに……」

「いいから！ 早くヤツ八に！」

サクたちに攻め立てられながら、テリスムは早速ヤツ八に治療を始めた。

数時間後

「もう大丈夫だ。しばらく安静にして毒素を出してしまえば、完全に治るはずだ！」

テリスムはあご髭を満足気に撫でながら、ホツとしたように微笑んだ。サクたちもやっと胸を撫で下ろし

「良かった」

と、誰からともなく安堵の言葉が出た。

そして数日後には、ヤツ八は歩けるまでに回復した。

「心配かけてごめんね」

ベッドの上に座り、まだ少しやつれた顔をしながらも、ヤツ八はずっと心配してくれていた三人に声をかけた。

「それに、アルコドの泉のために何も出来なくて……」

と申し訳なさそうに言うヤツ八に、サクが被せるように言った。

「何言ってるんだよ！ ヤツ八がヒントをくれたんじゃないかよ！」

「そうだよ。ヤツ八が夢の中であの声を聞かなかったら、今だって俺たちは悩み続けていたと思う」

カイルも微笑んだ。

「結局シーノ王が自ら泉を復活させたので、僕たち、何もしていないんですけどね」

シリウの言葉に、三人は苦笑した。それらを見ながらヤツハは思い出すように話した。

「とにかく意識が朦朧としていた時に、小さな男の子みたいな声が聞こえてきたの。途切れがちだったけど、すごく必死な気持ちっていうのは伝わってきて、皆に言わなきゃって、あたしも必死に意識を取り戻したの」

「それは、コダマという森の妖精だったんだ。可愛らしい小さな男の子だったよ」

カイルが言うのと、ヤツハは驚いたように尋ねた。

「姿を見たの？」

「少しだけでしたけど。シーノ王の事を、心底心配しているよかったです」

シリウが言った。ヤツハが

「あたしも見たかったなあ」

と残念そうに言う

「いつか会えるさー！」

とサクが明るい口調で言った。ヤツハは微笑みながら頷き

「とにかく早く治さなきゃね」

と瘦せた拳を握った。

それから数日後、だいぶ回復したヤツハも含め、サクたち四人は城に呼ばれた。

国を救ってくれたお礼をしたいとシーノ王直々の通達だった。

町には、泉が蘇ったと知った民衆たちが戻ってきていた。中には、まだ王を信じられないが、交通の弁が良かったために商売だけのために戻ってきた者もいて、まだ悶々とした空気は拭えずにいた。

だが確実に、復興への道を歩き始めているのが、城下町の空気を感じ取ることができた。

以前は人っ子一人いなかった城への道には、往来が戻り始めている。その中を歩きながら、サクたち四人は嬉しそうに微笑んだ。

「変わるもんだな」

両手を頭の後ろに組んで、開き始めた店先を眺める。

「でもまだまだ。これからの王次第ですね」

シリウも嬉しそうに微笑みながら歩いている。

「あたし、城へ入るのは初めてよ。でも、何もしてないのに呼ばれて良かったのかしら？」

少し上気した頬を言うヤツ八に、カイルは微笑んで言った。

「ヤツ八も立派に貢献してたじゃないか。堂々としていればいいんだよ」

「そうですね、ヤツ八はれっきとした仲間なんですし」

シリウが微笑む横で、いつの間にか手にしていた果実をかじりながら、サクが楽しそうに言った。

「何食わせてもらえるんだろな？」

途端にヤツ八は白い目で睨んだ。

「ホントにあんたは、遠慮つてものが無いわけ？」

するとサクは口を尖らせた。

「だってさあ、ここんとこまともな物食べてないんだぜ！ ヤツ八は病気だったから滋養のあるもの食べてたんだろうけどさ！」

「あたしの事は関係ないでしょ？ それ以前の問題！」

そして、パカツとサクの頭を叩いた。

「いてえなあ！」

「バカは叩いても治らないのよ！ なら、叩いておいて損は無いわ」
頭を押さえるサクにさらりと言うヤツ八の様子に笑いながら、シリウは楽しそうに言った。

「ヤツ八も元気になって良かったです」

「そうだな」

横でそう言ったカイルは不意にシリウと目が合い、照れたように微笑んだ。シリウは思わずカイルの頭を撫でた。

「っ！ 何するんだよ！」

驚いたカイルは後退りした。その頬は真っ赤だ。

「どうした？」

サクとヤツハが見ると、シリウは笑った。

「いやあ、可愛いな、と思っつてつい」

「つい、じゃないっ！ 城へ急ぐぞ！ 王を待たせるな！」

三人の間を突っ切りながら、赤い顔をしたカイルは早歩きで城へ向かった。笑い合いながら、三人もカイルの後を追った。

セツナに案内され、四人はシーノ王たちが待つという広間へと通される為に、廊下を歩いていった。

最初に訪れた時には殺伐としていた城内は綺麗に掃除され、ボロボロだった国旗も新しく掲げられ、装飾品も飾られて、威厳ある城へと変貌していた。離れていた家来たちも再び戻ってきたことで活気づいていた。

通された広間も、前に来たときとはすっかり様変わりしていた。

中庭も泉と共に綺麗に整備され、とてもあの穴だらけだった同じ場所だとは考えられないほどだった。

「ずいぶん立派になりましたね」

シリウの言葉に、迎えたシーノ王は微笑んだ。シーノ王もまた、血色を取り戻し、幾分か健康的な体つきになったようだ。もうボロボロの服ではなく、立派なマントを携えた貴族らしい煌びやかな服を着ている。

「皆よく働いてくれたのでな。作業も早く進んだのだ」

「王が自ら動いたので、皆が我もと働いたのですよ」

カリン王妃が姿を現した。綺麗なドレスを身につけ、化粧も綺麗に施され、以前に見た時の勝気な雰囲気はほとんどかき消されて

いた。

「変わるもんだな……」

サクが悪びれも無く言うと、隣のヤツハにしっかりと制裁を入れられた。カリン王妃は玉がころがるような笑い声を出し

「構いませんよ。私は王妃として、シーノ王を慕い添い遂げる身。その為には、自身の変革も必要な時があるのですから」

四人が促されて椅子に座ると、テーブルの上には次々に料理が運び込まれ始めた。

シリウがシーノ王とカリン王妃にヤツハを紹介し、挨拶を交わした。

「あなたがコダマの声を聞いてくれなかったら、私たちは今も迷い苦しんでいたでしょう」

カリン王妃の感謝の言葉に、ヤツハは激しく首を横に振った。

「あたしは何も……ただ、意識の狭間でかすかに聞こえてきただけですから」

シーノ王は微笑んだ。

「それでも、私たちの恩人には変わり無い。その礼の代わりと言つてはなんだが、たいしたもてなしは出来ないが、ゆっくりしていつてくれ！」

サクはすでに、目の前のごちそうに目が釘づけになっている。

「行儀悪いでしょ！」

頭を小突いて注意するヤツハに、カリン王妃は笑った。

「さあ、遠慮なく楽しんでくれ！」

シーノ王の声で、宴会は始まった。

サクとシリウ、カイルは、シーノ王が経験してきた話を興味深く聞き、ヤツハはカリン王妃との女の会話に花が咲いた。

「そうか、キミはヴァンドル・バードを探しているのか？」

シーノ王が言うと、サクは頬一杯に料理を詰め込んだ顔で頷くと、

懐からラーニヤに貰った絵を取り出して見せた。

「ラーニヤも見たんだ。絶対どこかにいるはずなんだ！」

そつ語る瞳はいつも光り輝いている。シーノ王はうむ、と大きく頷いた。

「ヴァンドル・バードの噂は聞くが、姿を見たことはない。だが、必ず存在すると私は思う！ 伝説と謳われるコダマが居るようにな！」

力強く話すシーノ王には説得力があった。噂話、戯言とも取られるコダマの存在をこの国は信じているのだから。現に、つい数日前にサクたちも目にした。幻は確かに目の前に在ったのだ。サクもまた、シーノ王に勇気づけられていた。

「中庭もすっかり綺麗にしたのですね？」

食事も落ち着いた頃、カイルは中庭に下りた。まだあちこちの土があらわにはなっているが、いくつもあつた穴も綺麗にならされている。

その中央には、透明な水がコンコンと湧き出る泉が太陽の光を浴びて輝いている。その周りにはすでに小さな草が生えはじめ、泉は緑に包まれかけている。

「泉の周りだけ、植物の成長が早いよね？」

いつの間にか近くに来ていたヤツハが泉の傍に膝をついた。

「これが、アルコドの泉……」

手を伸ばし、そつと水に触れた。

「温かい……？」

ヤツハが不思議そうに呟くと、カイルも習ってそつと水に手を入れた。

「本当だ、温かい……それに、優しい感じがする……」

カイルとヤツハは不思議そうな顔をして見合わせた。

「アルコドの泉は、コダマの意志を映すという話があるのよ」

二人が振り向くと、カリン王妃が微笑みながら立っていた。

「コダマの意志？」

ヤツハが繰り返す横で、カイルは少し意味が分かるような気がした。

「この泉は、コダマそのものだから」

カリン王妃も二人の間に膝をつき、いとおしそくに泉水の水に触れた。

その時、一陣の風が吹き、三人は顔を覆った。

ありがとう……

「……？」

突然、頭に響いた声に見上げた三人の前に、小さな男の子が現われていた。普通と違つとすぐ分かったのは、その髪や皮膚が緑がかった色をし、宙に浮いていたからだつた。深緑の瞳は深く心を見透かすようにじつと三人を見つめていた。

「コダマ……」

再びの出現に言葉を失い、ただ見つめる三人を、コダマは嬉しそうな表情で順番に眺め、ヤツハに止まつた。

ボクの言葉、ありがとう

ニッコリと微笑むコダマに最初は驚いていたヤツハだったが、すぐに意味を理解して微笑み返した。

「あたしは何も。あなたの気持ちが強かつただけよ」

コダマは笑つた。そして、くるつとひとつ回ると、愛嬌のある笑顔で微笑み、その姿はやがて薄くなつて消えてしまった。ヤツハは温かくなる胸を感じた。

「守ってあげてくださいね、この国を……」

コダマが消えた空を見ながらヤツハが呟くと、カイルは優しく見守り、カリン王妃は微笑み頷いた。

その様子を見つめるシーノ王とサク、シリウ。広間を、静かで平和な時が流れた。

やがて、旅立つ時が来た。

サクたちは、わざわざ国の外門まで見送りに来た王家に改めて挨拶をした。周りには、久しぶりを見る王の姿を興味深そうに見る民衆の人ばかりだ。

「お世話になりました」

シリウの言葉に、シーノ王は首を大きく振った。

「いや、こちらの方が世話になった。だが、まだやることは山積みだ。これから私は、皆と共に国を作り上げる。だから君たちも、自分を信じて突き進めよ！」

サクたちはその言葉を深く受け止め、大きく頷いた。

カリン王妃は、ヤツハに近づくと抱きしめた。そこには深い愛情がこもっていた。ヤツハとカリン王妃は、コダマを共に見たことで、どこか心が通じ合うようになっていた。名残惜しむ抱擁の後、カリン王妃はそっと身体を離し、ヤツハを見つめた。

「またいつでもいらっしやい。歓迎するわ」

「ありがとう。必ずまた来ます！」

ヤツハはカリン王妃と固く握手を交わした。そして、カリン王妃はカイルに近づくと、同じように抱きしめた。

「えっ？」

突然のことで戸惑うカイルに、カリン王妃は優しく微笑んだ。

「あなたも、自分の思う道を。でも無理はしないで。必ず、助けてくれる仲間がいることを忘れないで」

「カリン……王妃？」

カリン王妃の瞳は深く輝き、吸い込まれるようだった。

「知っていたのですか？」

「俺が女だつてことを……」

カリン王妃は何も言わずに微笑んだ。カイルは、フツと息をつくと、頷いた。

「ありがとうございます！」

四人は手を振りながら見送る王家を何度も振り返りながら、一路ソラール兵士養成学校への帰路に着いた。

「アルコド国が復興したら、また来ような！」

サクが皆を見ながら笑顔で言った。　ヴァンドル・バードの話で意気投合したシーノ王との仲も深まり、気持ち良く帰ることが出来るのが嬉しかった。

「そうですね、是非また訪れましょう。　コダマの加護を受けた国、アルコドに」

四人は高台に着くと、アルコド国を見下ろした。　まだ所々に茶色く廃墟と化した建物が見える。　次に訪れる時には、きっと立派な商業国になっていると信じて、四人はアルコド国を後にした。

ディックとの出会い

『女……女の匂いがする……』

「きゃっ！」

森の中で声を上げたヤツハに驚き、サクが思わず身構えた。

「どうした、ヤツハ？」

シリウとカイルも周りを警戒した。するとすぐにヤツハが苦笑して、一方を指差した。

「あれは……」

カイルはゆっくりと草むらに分け入り、ヤツハが指差したほうを見た。

「ディングゴの死骸だ。この間襲われたときに戦った跡だな……」

カイルは足元にゴロゴロと転がるディングゴたちの死骸を見ながら、感傷にふけた。自分のミスで群れを呼び、無駄な殺生をし、拳げ句の果て、ヤツハに重傷を負わせてしまった。

それに気付いたヤツハは、カイルの肩にそっと手を置いた。切なげに振り向くカイルに、ヤツハは微笑んだ。

「あたしはもう大丈夫よ。だからカイルも、もう気にしなくていいの！」

笑顔で言うヤツハに、カイルは微笑み返した。

「すまない……」

「こら！ 謝らない！ ……あ……」

ヤツハはカイルの頭を小突いた拍子に、その向こうに何かを見つけた。その視線の先には、小さなディングゴが、息絶え倒れている。大きなディングゴに擦り寄って小さく鳴いていた。

「ディングゴの子供ですね？」

シリウが眼鏡を上げた。

「もしかして、親……？」

カイルが言うより先に、ヤツハはその子ディンゴに近づいて行った。

「ヤツハ、危ないぞ！」

サクたちの心配も顧みず、そつとヤツハが近づくと、それに気付いた子ディンゴが一步後退りして歯を剥き出した。唸る子ディンゴを見つめながら、ヤツハは少し離れたところで静かに両膝をついた。

「あなたのお母さんなのね？」

そう優しく声を掛けるヤツハの前でしばらく警戒していた子ディンゴは、やがて傍らに倒れているディンゴの腹に鼻を擦り付けた。

「乳を探してるんだ……」

カイルもそつとヤツハの近くで子ディンゴを見つめていた。ヤツハはおもむろに子ディンゴへと手を差し伸べた。

「ヤツハ！」

驚いて止めようとするカイル。シリウとサクも心配そうに見つめる前で、ヤツハは

「大丈夫」

と呟いた。その手が背に触れる直前に、驚いた子ディンゴは咄嗟に牙を剥けた。

「！」

手を引いたヤツハの手から、赤い血が伝い落ちた。

「ヤツハ、危ないって！ 子供とはいえ、野生だぞ！」

カイルがヤツハの肩に触れると、ヤツハは振り向いて微笑んだ。

「大丈夫だから。たいしたことないよ」

そして、牙を剥いて威嚇している子ディンゴに話し掛けた。

「こんな怪我より、親を亡くす方がずっと悲しい」

カイルはハッと我に返った。

ヤツハは子供の頃に、母親を亡くしている。父親も行方不明で、その顔さえ知らない。そして、カイルもまた、育ての母マチを亡くした。二人とも、目の前の子ディングゴに自分を映した。

「あたしたちと、一緒に来る？」

「ヤツハ……？」

立ち上がるヤツハを、カイルは見上げた。

「来たかったら、ついておいで」

ヤツハは子ディングゴに微笑みかけ、踵を返した。カイルは子ディングゴに何度も振り向きながら、急いでヤツハを追った。

約十分後。

「ヤツハ……」

とシリウが後ろを促すと、少し離れた所を小さな影が動いていた。ヤツハが声をかけた子ディングゴがついてきていたのだ。

「さっきの！」

ヤツハは笑顔で子ディングゴに近寄ると、まだ警戒しているのか、少し離れてヤツハたちを伺っている。

「大丈夫。皆優しいわ。何も怖いことなんてしない。一緒に行きましょう」

ヤツハは子ディングゴに微笑みかけ、そっとサクたちの方に戻った。
「いいのか？」

カイルが聞くと、ヤツハは頷いた。

「せめてものお詫び……気持ちには、分かるもの……」

そう言って、ヤツハは軽い足取りで歩き始めた。

それから三十分もしないうちに、子ディングゴはその距離を次第に縮め、やがてヤツハの傍にぴったりついて歩き始めた。

「すっかり慣れたみたいだね」

カイルが子ディングゴの頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。ヤツハは嬉しそうに笑い、子ディングゴの背を撫でた。硬い

毛の感触は、すっかり大人のものだ。

「乳を欲しがっていたから、まだ生まれたてのようですが、随分大きいですねえ」

シリウの言う通り、子デインゴとはいえ、四本足で歩くその背は、ヤツハの膝上までである。時折じゃれるように立ち上がると、ヤツハの腰に軽く届く。

「成犬でも三メートルを超すというから、子供ならこれくらいでも小さい方なんじゃないか？」

カイルもすっかり子デインゴが気に入ったように微笑みながら見つめていた。

「野生だから、いつ何が起こるか分からないじゃないか！」

「？」

見ると、サクがかなり距離を取って前を歩いている。

「さつきから静かだと思ってたら、そんな先に行っていたんですね。大丈夫ですよ。急ぐ旅ではありませんから」

あとはソラー兵士養成学校に帰るだけだ。とりあえず、ファンネル校長宛てに手紙も飛ばした。アルコドの泉を元に戻すという依頼も無事に済んだ今、ゆつくり帰れば良いのだ。

「いいよ、俺は先に行く！ お前らはゆつくり来ればいいぞ！」

「？」

三人がきょとんとしていると、サクを目指して子デインゴが走って行った。途端に、サクは顔を引きつらせ、慌てて近くの木によじ登った。

「まさか……」

ヤツハが口を押さえて笑いをこらえた。カイルも勘付いて、思わず吹き出した。

「サク、犬系が苦手なのか？」

するとサクは顔を赤らめて叫んだ。

「そっ！ そんなわけねーだろうが！ 俺はそんな弱くねえっ！ ほら、こいつをそっちにやれっ！ ヤツハのだろっ？」

サクを見上げて木の根元に立ち上がり、舌を出してちぎれんばかりに尻尾を振る子デインゴ。

「この子は、サクと仲良くなりたがってるみたいですよ」

シリウの眼鏡が意地悪く輝いた。それを見たサクは

「シリウ、お前っ！ お前までっ！」

と目を丸くして叫んだ。カイルがシリウに尋ねた。

「シリウはもしかして、知ってたのか？」

「はい！」

シリウの力強い返事に、ヤツハとカイルは大笑いをした。

「笑ってないで、こいつをなんとかしろって！」

困ったように口調が変わったサクに、ヤツハは涙を拭きながら言った。

「この子は犬じゃないわ。これから一緒に生きてく仲間！ 名前も

決めたの。 デイツク！」

デイツクは嬉しそうに三度吠えた。

「ヤツハ、噛まれたトラウマがあるだろうか？」

サクが木の上から言うと、ヤツハは少し怒った表情で言った。

「サク！ あたしが咬まれたのは、攻撃したからよ！ 何もしなければ、群れのままおとなしくしていたはず。それにトラウマなんてないから大丈夫。 だからサクも下りておいでっ！」

まるで親のように叱るヤツハに、サクは渋々下り始めたが、デイツクがちぎれんばかりに尻尾を振りながら吠えるので

「頼むから、そいつ向こうにやっつけてくれよ……」

とサクは懇願した。 ヤツハは軽く笑ってデイツクの背を軽く叩いた。

「デイツク、サクはあんたが苦手みたい」

デイツクはヤツハの顔を見上げ、理解したのか、寂しそうに木の下から離れた。 やっと地面に下りられたサクは、デイツクを警戒しながら

「先を急ぐぞっ！」

と先頭を切って歩き始めた。シリウたち三人は顔を見合わせて
笑い、サクの後を付いていった。

「へへへ……女……女の匂いがするぞ……」

ユツキとの再会

ディックはサク以外の三人にも慣れ、たまにじゃれあいながら森の中を歩いていて、サクはその様子を困惑した顔で見ながら、少し離れた先を歩いている。

「サク。ディックはとても賢いので、突然襲うことはないと思いますよ」

シリウがサクに説明するが、彼は全く聞く耳を持たない。ヤツ八が不思議そうに呟いた。

「小さい頃は、犬が苦手だなんてことはなかったのに……」

「小さい頃？」

ヤツ八はカイルの問いに頷いた。

「サクとあたしは、同じ村の生まれなの。小さい頃は、サクも村の人が飼ってる犬とよく遊んでるのをよく見たのよ。だから変なの。サクが犬のことが苦手だなんて……」

するとシリウが、振り返った。

「サクは、以前学校の実戦試験でワルカラと戦ったときに、ひどい怪我を負ったことがあるんですよ。辛うじて試験には合格したんですけど、それ以来、似たような獣は苦手みたいなんです」

「ワルカラって、巨大な狼型の幻獣だね？」

カイルが思い出しながら言った。

「そうだったんだ？ でもワルカラは、シャルサム教官が作り出した幻獣じゃない？」

あきれたように言うヤツ八に、サクが焦ったように振り向いた。

「アイツは桁違いに強かったただけだ！ ホントはオレが完勝する予定だったんだっ！」

「ワルカラの唾液にすっころんで、頭からその口のなかに突っ込んでいきましたよね」

シリウが暴露すると、他の二人は腹を抱えて激しく笑った。そ

れらを不思議そうに見上げながら、ディックはひと吠えした。恥ずかしさをごまかしながら一步先行くサクの後ろを、三人と一匹が楽しげについて歩いた。

途中、彼らはモリノス村に寄った。

最初、村人たちは、ヤツハにぴったりと寄り添うディックに驚いたが、信用できるヤツハたちの説得の末、すぐに危害はないと信じてもらい、村の中へと入ることができた。

再びラーニヤに会ったサクは、抱き合って喜んだ。二人の弾けた笑顔に、周りの心も和んだ。

「元氣そうだな、ラーニヤ！ オレ、アルコド国でコダマに会ったんだぜ！」

「へえ！ コダマって本当に居たんだけ？ どんな姿してたの？ 教えて！」

興味津々で瞳を輝かせながら尋ねるラーニヤに、サクは自慢げにコダマのことを説明しはじめた。シリウとカイルはシカワ村長に会い、無事にアルコドの泉を復活させたと告げた。村長は

「良かった。これでこの村も直に潤うだろう。なんとお礼を言えれば良いのか……」

土まみれの頬を上げ、心底ホツとしたように笑顔を見せた。

「もう少しの辛抱ですね」

カイルが微笑むと、村長もまた微笑み、頷き返した。

「本当に良かったですね。皆が今まで苦労してきたことが、報われようとしている……」

シリウとカイルは村外れの高台に立ち、畑仕事に勤しむ村人たちを眺めていた。緩やかな風が心地よく、畑に辛うじて育っている細い茎葉を揺らしている。

「もうすぐ、この村に豊かに育った畑が広がるんだな」

カイルはしみじみと呟いた。シリウはカイルを見つめると、そ

の顔を覗き込んだ。

「！ な、何だよ？」

シリウは、驚いて一步後退りをしたカイルに微笑み

「ラクラさんのところに行ってみましようか？」

すでにラクラのところにはヤツハが向かっているはずだ。 ヤツ

ハはラクラのことをずっと気にしていて、村に寄ろうと言ったのも

ヤツハだった。

「ヤツハが見に行ってるんだろ？」

カイルが言うと、シリウは眼鏡を上げて微笑んだ。

「カイルも気になるんでしょう？ 赤ちゃんのこと」

カイルはふいつと視線を逸らせたが、その頬は少し赤らんでいた。

シリウはにつこり笑うと、村の中央に建つ宿舎に向かって歩き始

めた。そして振り向くと、まだ立ち尽くしているカイルに微笑ん

で手を差し伸べた。

「さ、行きましよう！」

部屋の扉がそつと開いたのに気付いたラクラは静かに振り返り

「誰？ アルシス？」

と扉へと声をかけた。

キィ……と小さな音を立てて開いた扉の向こうに、ヤツハが照れ

臭そうに立っていた。

「ヤツハさん！ 来てくれたのね？ 元気そうで何より！」

ラクラは嬉しそうに椅子から立ち上がると、ヤツハに駆け寄って

抱きついた。 ヤツハは笑顔で言った。

「ラクラさんも元気そうね。良かった！」

笑顔で見つめ合う二人を、けたたましい泣き声が包んだ。

「あらあら！ 起きちゃったのね？ ごめんねー」

ラクラは、部屋の隅にある小さなベッドへと慌てて駆け寄った。

ヤツハも後を追うと、そこでは小さな赤ちゃんが泣いていた。

「きつとお腹が空いたのね。ずっと眠りっぱなしだったから」

ラクラはそつと抱き上げた。細腕の中であやされ、やがてラクラの胸に落ち着いた。

「すごい勢いで飲んで……」

じつと見つめるヤツハに構わず、ラクラの子は一生懸命に乳を飲んでる。

「最初は痛くてたまらなかったんだけど、そのうち、この痛みはこの子を生かしてる証なんだって思ったたら、気にならなくなったの。」

不思議よねえ」

いとおしそうに見つめるラクラの顔は、母親のソレになっていた。

「ラクラさん、すっかりお母さんなのね？」

ヤツハが微笑むと、ラクラは照れ臭そうに笑った。

「私なりに、この子を守らなきゃっていつも思ってる。けど、村の皆が居なかったら、どうなっていたか分からないわ。このベッドもね、旦那と村の人たちが畑時間の合間を縫って作ってくれたのよ」

木で出来た簡素なベッドだが、所々に丸みを帯たフォームは優しさを醸し出している。皆の愛情がこもっているのだろう。村人たちも、子供の誕生を心から祝っているのだ。

「素敵なベッドだわ」

ヤツハが言うとラクラも

「この子も気に入ってるみたいで、このベッドに寝かせると、ぐっすり眠るのよ」

「名前はもう決めたのかしら？」

「ああ、まだ言っただわね。旦那と二晩考えて、『ユツキ』と名付けたの」

「ユツキ……素敵な名前だわ。よろしくね、ユツキ！」

ヤツハは、腹がふくれて既に眠そうなユツキに微笑んだ。ユツキはチラリとヤツハを見やると、何の反応もなく眠り始めた。

「っ……強い子に育ちそうね」

ユヅキから貰えると思っていた笑顔を見ることが出来なくて拍子
抜けしたヤツハは、ラクラと共に苦笑した。

「こんにちは〜！」

玄関の方から声がした。

「シリウだわ！」

ヤツハが玄関に行き、静かにするように言いながら、シリウとカ
イルを迎え入れた。

「あら、眠っているみたいですね」

シリウはにっこりとベッドの中のユヅキを見下ろした。

「ユヅキと言うの」

と言うラクラに

「いい名前ですねえ」

と微笑んだ。

「さっき眠ったところ。このベッドがお気に入りみたい」

ヤツハも並んでユヅキを見ている。どれだけ見ても見飽き
ないようだ。ベッドが村人たちの手作りだと聞くと

「きつと皆さんの優しい気持ちがかもっているんでしょう。カイ

ル？」

シリウは、後ろの方で所在なさげに立っているカイルに振り向き、
手招いた。

カイルとユヅキ

「カイルも見て御覧なさい。ユヅキちゃん、とても可愛いですよ」
シリウに誘われ、ヤツハに手を引かれてベッドの傍に立ったカイルが、戸惑いながらもそうつと見下ろすと、無防備にも両手を広げて気持ちよさそうに眠るユヅキの寝顔があった。思わず見とれていると、突然ユヅキの目が開いた。

「お、起きた！」

カイルが驚くと、ユヅキはカイルをじっと見つめ、そして両手を差し伸べた。

「え？」

黒目がちな瞳は全く視線を外さず、ユヅキはカイルに言葉にならない声を上げた。

「な、何？」

「何が言いたいのかしら？」

「目は必死な感じですけど……」

カイルたち三人が動揺していると、ラクラが言った。

「もしかしたら、抱かれないんじゃないかしら？」

「えっ！ 俺っ？」

カイルが自分を指差すと、ラクラは微笑んで頷いた。そしてユヅキを優しく抱き上げると、カイルへと近付けた。

「えっ！ お、俺、抱き方なんて知らないしっ！」

ユヅキが必死に腕を伸ばす前ですっかり戸惑うカイルの肩を優しく叩き、ヤツハが教えながらユヅキを抱かせた。温かな体温が、カイルの腕に体に伝わる。身体のを預けるユヅキに、カイルは恐怖さえ覚えた。

「あゝあゝうっ」

カイルの腕の中に収まると、ユヅキは笑い、満足そうな顔をした。「ユヅキちゃん、カイルの腕の中が気に入ったようね」

ヤツハが覗き込むと、ヤツハにも笑いかけた。

「かあわいい〜！」

その可愛さに一瞬で落ちたヤツハは、私も、とユヅキを抱き上げようとしたが、ユヅキは何故かカイルにしがみついて離れようとなない。

「？」

どうしたらいいかわからずに固まっているカイル。

「カイル？ 大丈夫ですか？」

シリウが尋ねると、カイルは首を不器用に向けて苦笑した。

「ど、どうしたらいいか分からないんだ……」

「ほら、こうやってあやすの！ ほらっ」

ヤツハが手振りやってみせるのを見ながら、カイルは戸惑いながらもユヅキを揺らした。

「そうそう！」

ヤツハが嬉しそうに言う横で、ラクラは微笑んでいた。

「ユヅキったら、気持ちよさそうな顔をしてるわ」

カイルの腕の中で、再び眠ろうかというまどろみのユヅキ。

「カイル、じっくり来てますねえ。 未来が見えるようですよ」

途端にカイルの頬が赤くなり、シリウを睨んだ。

「シリウっ！」

その声に驚いたユヅキがけたたましい泣き声を上げた。

「うわっ！ ご、ごめん、ユヅキっ！」

カイルは慌ててあやし、両脇でヤツハとシリウが顔を歪めてなんとか泣き止ませようと懸命になっている。 そんな様子を見ながら、ラクラはお腹を抱えて笑っていた。

「なんだ、皆ここに居たのか！」

サクがラーニヤと一緒にやってきた。

ちょうどユヅキをラクラに返したところのカイルは、近くの椅子にぐったりとしていた。

「ん？ どうしたんだ、カイル？」

「……疲れた……」

疲労困憊のカイルに理由が分からず、きょとんとした顔で見つめるサク。

「サク、ユヅキだよ！」

ラーニヤの声に、小さなベッドに近づき中を覗くと、再び眠りについたユヅキが寝かされていた。

「可愛いでしょう？」

ラーニヤが自慢げに言うと、サクは彼女の頭をぐりぐりと撫で、笑った。

「ラーニヤの妹みたいだな！」

するとラクラが

「そうなの。 本当に自分の妹のように世話をしてくれて、助かっているのよ。 村の人たち皆そう。 感謝してるわ」

と嬉しそうに言った。

「この子は、皆の優しさを一身に受けて、とても幸せな子」

ユヅキをいとおしそうに見つめるラクラに、四人は胸が暖かくなつた。

その夜はそのまま宿舎に泊まり、希望の止まらない話に沸いた。

アルコドの泉が蘇ったことで、村人たちにも明るい未来が見え始めていた。 今度はそれを現実にする番だ。

「もう行っちゃうの？」

翌朝早く、ラーニヤが門まで見送りについてきた。 とても残念そうな顔でサクたちを見つめるが、仕方ないことだというのも、

ラーニヤは分かっていた。

「絶対！ また来てね！」

ラーニヤはサクたちが見えなくなるまで手を振り続けた。 必ずまた会えるとお互いに信じて、ひとまずの別れだ。 四人と一匹は、

ソラール兵士養成学校へと進路を取った。

ヤツハ、さらわれの身！

ガールル……！

突然ディックが唸りだし、四人は立ち止まった。鬱蒼と茂った森の中、周りを見渡すその目は、警戒心にあふれていた。

「何か、いますね……」

「囲まれてる……？」

背中合わせで四方を警戒するが、草木一本揺れる気配もなく、四人を緊張感が包んだ。

「誰だ！ 出てこいっ！」

サクがたまらなくなつて声を上げ、拳を握った。額に汗が滲む。

「サク、落ち着いて！ まだ攻撃しちゃだめよ！ 相手を見なきゃ！」

ヤツハが小声で制し、サクは唇を噛んで抑えた。

数秒の静寂のあと、突然八方から矢の雨が降り注いだ。

「！」

四人は散り散りに避けながら、見えない相手を懸命に探した。

「くそっ！ どこから攻撃してくるんだ？」

サクは、矢が放たれたらしき草むらに攻撃を与えた。

「バッケンホウカ爆拳放火！」

土煙が舞う中を離れたところから伺ったが、すでに何の気配も無くなっていた。

「ハズレかよっ！」

歯痒さをあらわにして舌打ちをするサクに、シリウが声を掛けた。

「相手は動きながら攻撃しています！ 先を読まない……！」

「んなの、分かるかよ！ 超能力者じゃあるまいし！」

サクが苛立ちながら言うと、カイルも腹立たしく剣を振り下ろし

た。

「人数もわからねえ！」

やがて数十本という矢の雨が止み、サクが息を整えながら周りを見た。シリウとカイルもサクのもとへと駆け寄った。

「あれ、ヤツハはっ？」

「そついえば！」

カイルとシリウも周りを見渡したが、ヤツハの姿が見えない。

その時、離れたところから激しい咆哮が聞こえた。

「デイツク！」

三人は弾けたように、声が出た方へと急いだ。

デイツクは一本の木の根元に二本足で立ち上がり、幹をガリガリと前足の爪で削りながら見上げ、吠え続けていた。三人が立ち止まって見上げる先に、枝に立ち見下ろす人影があった。全身を覆うマントにすっぽりと被ったフードで、風貌が全く分からない。

「ヤツハっ！」

サクはその人影の腕に抱えられているヤツハを見つけた。だが気を失っているようで、ぐったりと体を預けている。

「ヤツハっ！ 今助けるからなっ！」

飛び上がるうとして、グツと足を踏みしめたサクを、その人影は笑った。

「お前らに用はない。ガキはおとなしく家に帰りな！」

声は男のようだ。小馬鹿にしたような見下した口調に、三人の気分はことごとく害された。

「お前誰だよ！ ヤツハに何をやる気だ！」

睨むサクに、男はフードを上げて顔を見せた。肩までの紺色のウェーブの髪の毛が顔を半分ほど隠しているが、その奥にあるくつきりした二重の瞳は眼光するどく、大きめの口はいかにも楽しげにニツタリと歪んでいる。

「威勢がいいなあ！ だが、この女はあきらめろ！ 悪いことは言

わねえから、ま、大人しく帰んな！」

「そういうわけにはいきませんねえ」

「ヤツハを返してもらおうか！」

シリウとカイルも武器を手に構えて威嚇した。すると男は肩をすくめて大げさに驚いてみせた。

「おいおい。そんな危なっかしいもんを振りかざしたら、この女も傷つけちまうぞ！ それに、あまりお前らと遊んでる暇はないんだ。じゃあな！」

と言葉を残し踵を返した。

「待てよ！」

サクが近くの枝に飛び乗った。男は振り返り

「俺の名はラディン。またどこかで会えるかもなあ！」

と笑いながら空いている手を振り、身軽に枝を飛び移り、その姿はあつと言つ間に木々の間に消えた。

「くそつ！ 待て！」

サクが追いかけたが、山の中に場慣れしているのか、すぐにラディンの姿を見失ってしまった。

「サク！ 大丈夫か？」

息が上がって立ち止まってしまったサクに、シリウとカイルが追いついた。その傍らにはピツタリと、興奮した様子のディックがついてきている。

「ディック！」

サクがいきなりそう言いながらディックに近づいたので、シリウとカイルは驚いた。

「お前、ヤツハの後を追えるなっ？」

サクの言葉が分かったのか、ディックはひと吠えして走りだした。「行くぞつ！」

シリウとカイルに声をかけると、サクはディックの後を追った。慌てて二人も彼らの後を追った。

「苦手なはずだったんですけどねえ……」

走りながらおどけるシリウを一瞥して

「目的が重なつたからだろうな！」

とカイルはサクの背中を見つめた。

『サクは本当に、ヤツハのことを……』

ディックはまだ幼生とはいえ、野性の脚力は一人前に近い。行く者を襲うように生える草木を器用に避けながら、風のように疾走している。それに遅れまいと、サクたちは養成学校で鍛えた足で森の中を走り抜けた。

ところが

「！」

「なんだこりやつ！」

突然立ち止まったディックと三人を強風が襲った。目の前には、地面が裂けたように深い谷があり、そこから吹き上がる風が襲ってきたのだ。

「行き止まりかよっ！」

腕でガードしながらサクが悔しそうに言い、カイルは周りを探ってみたが、この谷を渡れそうなところは見当たらない。

「あいつ、どうやって向こう側へ行つたんだ？」

「ディック、ヤツハは本当にこの向こう側なのか？」

サクが尋ねると、ディックは鼻をクンツと上げ、イエスとばかりに吠えた。

「参りましたねえ……」

シリウが眼鏡を上げてため息をついた。すっかり足止めを食ってしまった三人は、途方に暮れてしまった。

中でもサクは奇立ちが募り、地面に拳をぶつけた。下からの強風が、土煙を舞上げる。シリウは眼鏡を外して下を覗き込んだ。

遙か底の方に、細く川が流れているのが見える。

「落ちたら一溜まりもありませんね……一度下りて、向こうの崖を

「上るのも……」

シリウは視線を辿った。

「難しそうですね……急すぎる……」

すると傍を離れていたカイルが戻ってきた。

「近くを探ってみたら、多分あいつが使ったような跡があったぞ！」

カイルの案内で少し離れた岩壁に行くと、ちぎれたツルが揺れて

いた。サクは声を上げた。

「これを使ったんだ！」

周りを見ると、目ぼしいツルは全て切り取られていた。

「用意周到というわけですか」

シリウは肩を落として眼鏡をかけた。

「くそっ！ どうしたらいいんだよっ！ せめて空を飛べたら！」

サクが悔しげに声を上げた。

ヤツハ奪還の為、帆走中！！

その時、ザワツと木々が揺れた。風の性ではないそのざわめきの中から

“ コマツテル？ コマツテルヨ。 ヤサシイヒトタチガ、ボクタチノトモダチガ、コマツテル”

と、いくつもの声が聞こえてきた。 と言うより頭に直接響く声。

「？」

サクたちは耳を澄ませた。

「誰だ？」

“ コマツテルヨ、トモダチ、タスケナキヤ、タスケナキヤ”
囁きとも思える声が、三人を取り囲む。

「この感じどこかで……」

耳を傾けながら、カイルが呟いた。

「コダマ……ですか？」

シリウが声に尋ねた。 すると

“ コダマ…… ニンゲンハ、ソウイウ…… トモダチ、タスケル”

その時一陣の風が吹き、三人とディックは顔を覆った。 途端に、周りの枝がみるみる伸びて複雑に絡み合い、それは谷の方へと伸び続け、やがて向こう岸に繋がった。 呆気にとられる三人に

“ カゼニキヨツケテ”

“ トバサレルヨ”

“ ボクタチノトモダチ”

“ キヨツケテ”

と幾つものコダマの声が風に舞った。

「コダマ、ありがとうなっ！ 行くぞっ！」

サクが意気揚々と声を上げ、三人は走ろうとするが、ディックは立ち尽くして尻込みをしていた。

「ディック、どうした？ 早く行くぞっ！」

サクが声をかけたが、ディックは尻尾を股の下に入れて切ない鳴き声を発している。

「もしかして……高い所が苦手なのか？」

察したカイルが言うと、ディックは俯いて目を逸らした。

「つとに！　しょうがねえなあ！」

弾けたように舞い戻ったサクは、小さくなっているディックを軽々と肩に担いだ。

「キャウンツ！」

「バカ！　暴れたり噛んだりしたら、谷底に落とすからなっ！」

と一喝すると、ディックは途端におとなしくなった。サクはすぐ近くにあるディックの顔を見つめた。

「ヤツハを助けたいんだろ？」

ディックは瞳を輝かせた。そのひと吠えに、サクは大きく頷いた。

「さ、行こう！」

サクたちはコダマが作ってくれた鳶の橋を渡り始めた。

『コダマ、ありがとう！』

カイルは途中で振り返り、森を見渡した。木々は普段どおりに風に揺れ、何の気配も感じなかった。

「カイル？」

振り返ったシリウが声をかけると、カイルは森に微笑みかけて踵を返した。三人は谷底から吹き上げる風をもとせず、鳶の橋を一気に渡り切った。

サクの肩から下ろされたディックは、二、三度体を震わせてから、再び何事も無かったかのように走り始めた。振り返り、早く来いとばかりに吠えるディックに

「途端に元気になるんだな！」

と、サクはあきれ気味に言いながら笑ってディックを追った。

「本当に」

シリウとカイルも吹き出し、走り始めた。

ディックを追う森の中は相変わらず道もなく、そんな中を走っていくには、人間には辛すぎた。あちこちが枝葉で切れ、足を取られた。だが三人はヤツハを助けたい一心で、一足先に行くディックを追いかけた。

数分走ったところで突然、ディックの体が弾き飛ばされた。悲鳴と共に転がるディックを受け止め、サクは周りを伺った。

「誰だ！」

「帰りなつて、言っただろう？」

「その声は、ラディン！」

カイルが仰ぎ見ると、木の枝に座り、葉をくわえてニヤリと微笑みながら見下ろすラディンがいた。

「てめえ！ ヤツハをどうした？」

ラディンは手ぶらだった。彼は悠然と三人と一匹を見下ろし、笑った。

「あきらめなつて、言っただろう？ お前ら耳が悪いの？」

からかうように自分の耳をほじり、吹いた。

「もう間に合わねえよ。森の出口くらいなら教えてやるから、ついてこいよ！」

ラディンは立ち上がって隣の枝に移った。

「てめえ！ ヤツハの居場所を教えろっ！」

サクの拳が振り上げられた。

「バックンホウカ
爆拳放火！」

気の球が赤く燃えながらラディンへ襲い掛かった。

「うわっ！」

ラディンは驚いてのけぞり、落ちると見せ掛けて、器用に枝に手を掛けて別の枝に移った。

「あつぶねえなあ！ なにすんだよ！」

「下りてこい！ ヤツハの居場所を吐かせてやる！」

サクが今にも噛み付きそうな勢いで睨んだ。ラディンは肩をす

くめておどけた。

「ラディンさん、でしたね？」

シリウが口を開いた。

「見たところ、ヤツハさんが近くに居ないようですが、どこかに閉じ込められているのでしょうか？ 間に合わない、とは、どういうことなんですか？」

静かな口調が、森の中に響いた。ラディンは再び杖に座ると、へえ、と肩肘をついた。

「あんた、頭良さそうだな。それに、後ろで様子伺ってるお前！ そんな危ないもの、しまっとけよな」

カイルは息を飲んでナイフを懐にしまった。ラディンは続けた。「ああそれとさ、こいつ、うるさいからだまらせてくれない？」

木の根元で吠えるように叫んでいるサクを指差すと

「分かりました」

とシリウは音もなくサクの背後に忍び寄り、延髄に手刀を打ち込んだ。

「っ！」

気を失って膝から崩れ落ちるサクを、慌ててカイルが支えた。

「シリウ！ 何するんだ！ 気でも狂ったか？」

シリウは睨むカイルの前にしゃがむと、囁いた。

「あのラディンという男、おチャラけて見えますが実力はあるようです。あなたも分かるでしょうか？ 今のサクは頭に血が上っている状態です。残念ですが、彼にはしばらく眠ってもらおうほうが得策かと思ひまして」

「なるほど……」

カイルは腕の中でぐったりしているサクを見つめた。今のサクには冷静に判断することは出来ない。

「カイルは、サクとディックを連れて離れていてください」

シリウはカイルに微笑んだ。

「シリウ？」

「僕は……」

シリウは立ち上がってラディンを見上げた。彼は憎々しげに口元を歪めた。

「もしかして、俺とやる気？」

「手、出さないでくださいね」

シリウはカイルにウインクをし、眼鏡をそっと上げた。

「話しても埒があかないようなので、手っ取り早く済ませることにします」

静かに言うシリウに対し、ラディンは嬉しそうににやけ、立ち上がった。カイルはシリウの気持ちを感じ、サクと倒れているディックを抱えると、少し離れたところに彼らを寝かせた。

「シリウ……」

戦う時は、一対一。そう教えられてきた。不意打ちをしていいのは、自分の身が保障出来なくなった時だけ。カイルは拳を握って、二人の対峙を見守った。ラディンは地面に下り立つと、指を鳴らした。

「久しぶりに、楽しそうな相手みたいだな。そうだ！ ルールを決めないか？」

「ルール？」

シリウはじっとラディンを見つめている。そこにはさっきまでの、彼特有の柔らかい雰囲気は無かった。張り詰めた空気がカイルにも伝わった。

「シリウの気配が変わった……」

カイルは息を飲んだ。ラディンは相変わらず余裕の表情で言った。

「お互い、飛び道具や武器は使わない。ま、俺は最初から丸腰だけだな。あんだだっただけ戦士の端くれなら、フェアな戦い、したいだろ？」

軽い衣服をまとっただけの体を叩きながら、武器は何も無いこと

を証明するラディンに、シリウは眼鏡を上げた。

「あいにく僕は戦士ではありませんが……あなたの言うことも一利ありますね。分かりました。武器を一切捨てましょう」

シリウはスルスルと懐にあった武器を取出し、カイルへと投げた。「ちよつと預かってください」

カイルは黙って受け取ったが、内心は不安で押しつぶされそうだった。シリウは養成学校でもトップクラスの実力を持っている。

だがそれはあくまでも養成学校の中だけの話であって、世界にはもっと実力がある人物や強い獣は山ほどいると聞かされている。

どれほどの実力があるか分からないラディン相手にシリウが対抗出来るのかどうか。カイルの心は大きく揺れ動いていた。

シリウはラディンを見据えたまま、カイルに言った。

「カイル、合図をお願いします」

カイルは何も言わず、二人の間に立った。

「このコインが落ちたら。それが合図だ」

二人はお互いを見たまま頷いた。カイルは指先にコインを乗せ、間合いをはかると、弾き上げた。

捕らわれのヤツハ！

ヤツハは、身体に圧迫感を感じて目を覚ました。 ゆっくり目を開けると、乾いた土の地面が目に入り、湿りこもった空気が胸を害した。 そつと顔を上げると、屈強な二人の男が地べたに座り、向かい合つてカードゲームをしていた。

『っ！ 体が動かない……』

ヤツハは、後ろ手に柱のようなものに縛られ、座らされていた。

『な……なんなのこれ？ 一体何が……？』

次に、首の後ろの痛みに気付いた。

『そうか……あたし、森の中で誰かに襲われて、気を失つて……』
サツと血の気が引いた。

『皆はどこ？ 無事なの？』

思案しているうちに、二人の男はヤツハに気が付いた。

「あれ、目が覚めたみたいやで！」

異常にふくれた腹の大男が、カードを無造作に地面に置くと、大きな鼻を膨らませてヤツハに近づいた。 草の匂いと体臭が混ざつて、ヤツハの気分を害した。

「ラディンの奴、なかなかの上玉を捕つてきたやん。 ちよつとガキやけど、いい感じやと思わん？ ドウラス？」

ドウラスと呼ばれた、これまた太った腹を持った男も、厚い唇を歪ませてヤツハに近づいた。

「そうやな。 ボスも喜ぶやろなあ、何しろ久しぶりの女やからな
ー」

二人の男に囲まれたヤツハは嫌悪感をあらわにした。

「なあ、ちよつとだけ味見したらあかんかなあ？」

ドウラスはいやらしく顔を歪ませてヤツハの顔に鼻を近付けた。

「あかんて、ドウラス！ ボスより先に手を付けたら、殴られるどころじゃ済まされへんで！」

大鼻の男は怯えたようにドウラスの肩を掴んだ。ドウラスは笑いながら離れた。口臭がヤツハの鼻を包み、思わず顔をそむけた。「分かつとるわ。マナスカは怖がりやであかん！オレかて死にとうないで！」

「あーよかった。ドウラスは冗談に見えんからな」
マナスカはホツとしたようにヤツハを見た。

「そう言えばこいつ、喋らんな。口が聞けんのか？」

「ラディンは何も言っへんかったけどなあ。おい、お前！」

ドウラスはヤツハの顎をつかみ、自分の方へ向かせた。物怖じせずキツと睨むヤツハに、同じように睨み返しながら

「何か喋ってみるや！怖くて口も開かんか？ん？」

と言っ顔を揺り動かした。

「！」

弾くように手を離すと、ドウラスは臭い息を吐いた。

「つまらんのう！泣くとか喚くとかすれば、ちよつとは可愛げがあるのに！」

「ドウラス、ちよつとやりすぎやないか？」

マナスカが心配げに言った。ヤツハは黙ったまま俯き、吐き気と頭痛をこらえていた。

『サク……皆……助けて……一体どこに居るの？』

ドウラスは巨体を揺らしながら、さっきの場所に座り直した。

「まあええわ。どうせオレらには残り物しか回ってこんからな。

マナスカ、ボスが帰ってくるまでカードゲームやるうや！」

「ふふん」

マナスカは唇をパカパカしながらドウラスの対面に座り直し、カードを手を取った。

「さて、オレの番からやったかな？」

再び盛り上がる二人を盗み見ながら、ヤツハは周りを見た。

壁も床と同様に土か岩のようで、淡いランプの光を浴びた二人の巨体の影が揺れている。家具らしいものも無い殺風景でさほど広

くない空間には、男たちのむさ苦しい空気が充満し、ヤツハはますます気分が悪くなるのだった。

しばらくすると、遠くの方が賑わしくなった。

ドウラスが首を外の方へ向けた。

「フン？ ボスがお帰りのようやな」

ヤツハは気持ちを構えた。 どうにかして隙を見つけて逃げ出さなくてはならない。 後ろで縛られている腕を焦らすように動かしてみたが、全く外れる気配もない。 そうしているうちに、賑やかな声は近づき、扉のない部屋の壁に黒い影が大きく揺れるのが見えた。

ドウラスとマナスカは立ち上がって、やって来る影を待っていた。 「久しぶりの獲物らしいなあ！」

ドス深い声が部屋に響き、大きな体が姿を現した。

「お帰りなさい！ ガラオルさん！」

ドウラスとマナスカが丁寧にお辞儀をした。 それを無視しながらドスンと足音を響かせて部屋に分け入るとヤツハを見ながら

「おお、こいつか！」

と嬉しそうににやけ、唇を舐めた。

「ラディンが、森で捕ってきたそうです」

ドウラスがうやうやしく言うと、横目で流したガラオルはヤツハの前まで近づくと、勢い良くしゃがんで視線をヤツハに合わせた。

拍子に起きた風が、ヤツハの顔を撫でた。

「？」

その時ヤツハは不思議な感覚を覚えた。 ガラオルはニタニタといやらしく微笑みながら、ヤツハを舐めるように見つめた。

「ほう！ なかなか良いじゃないか！ 今夜は楽しみだ！」

と笑い、ヤツハの顔を覗き込んだ。

「おいお前、名前は何と言うんだ？」

ヤツハは答える気などさらさらなかったが、マナスカが口を挟ん

だ。

「ラディンが、『ヤツハ』と言うらしいと言ってました！」
途端に、マナスカの体が吹き飛んだ。

「！」

ヤツハは冷静を装いながらも、動揺していた。

『見えなかった……！』

だが確かに、マナスカを吹き飛ばしたのはガラオルだった。振り向いたただけのように思えたが、確かにガラオルの腕からは波動が感じられた。

『こいつ、強い……』

ヤツハはガラオルの顔をうかがい見た。分厚い体に簡素な服をまとい、左目に眼帯をしている。髭は綺麗にそっており、赤黒い肌に鍛え抜かれた筋肉が輝いている。ガラオルは

「勝手に口を開くな！ 俺はこの女から聞きたいんだ！」

と倒れているマナスカを睨み、再びゆっくりとヤツハと向かい合った。

「……ヤツハ？」

ガラオルは眉をひそめてヤツハの顔を見つめた。ヤツハは訳が分からないまま、それでも視線を外せなかった。それは恐怖のためではなかった。

『なんだろう……この感じは……？』

しばらく見つめた後、ガラオルは口元を歪ませて笑った。

「これは面白くなりそうだな。今夜が楽しみだ！」

そして勢い良く立ち上がると、部屋を後にした。

ガラオルが手下たちと共に去った後、倒れていたマナスカがムクリと起き上がった。そして、赤く腫れた頬を撫でながら苦笑した。
「ああ、びっくりした！」

それを見たドウラスが厚い唇を歪ませて笑った。

「ほらみる！ ボスに余計なことするからや！」

マナスカはいつもの事のように平然と立ち上がり、体に付いた土を払い落とした。

「つい口を挟んでもうた！ こいつ、喋る気配ないからなあ！ イライラするわ！」

マナスカはヤツハを見下ろした。

「ま、こいつはボスのもんやからな、オレたちは見張りするだけ！

ホンマ、いつつもいつつも、つまらん役所やのう」

ドウラスは大きくあくびをしてあぐらをかいた。 マナスカもドウラスと向かい合ってあぐらをかき、任務に戻った……というより、カードゲームの続きを始めた。 ヤツハは出来るだけ二人を視界に入れないように俯いて、静かにため息を吐いた。

『なんだろう……さっきの感じ……』

しばらく考えてみたが、何も分からなかった。 ただ、初対面の人物に対する感情にはおかしいとだけ、感じていた。

激闘！　そしてヤツ八のもとへ！

カイルの目の前ではあちこちで土埃が立ち、木の幹には破片を飛び散らせながら傷を刻まれ続けていた。空気の固まりが跳び回り、周りを異様な雰囲気が包んでいる。カイルの目には、しっかりと戦う二人の姿が映っていた。

実力は互角のように見えるが、シリウの体には次第に傷が増え始めていた。

『シリウの方が押されている……』

カイルは手を出せない苛立ちと悔しさに唇を噛みながら、二人の様子を見ているしかなかった。足元には、木の幹にもたれさせた気を失ったままのサクとディックが横たわっている。

その時、ラディンがカイルたちの方へ向かってきた。

「！」

カイルがサクたちを庇うように身構えると、目の前にシリウが立ちただかった。ピタリと止まったラディンは、にやけながら肩を回した。

「なかなかやるじゃん！」

「傍観者たちには手を出さない。それが戦う者同士の常識でしょう？」

「ああ、それは失礼しました」

ラディンは鼻で笑った。二人ともほんの少し息が上がるだけで、スタミナには問題なさそうに見える。だが、確実にシリウの傷の方が目立っている。袖が切れ、血が滲んでいる。頬も赤く腫れているようだ。

「隙ありっ！」

ラディンはいきなりシリウの腕を掴むと、傍の木へと叩きつけた。「うあっ！」

うめき声と共に、シリウの腕の関節が壊される音が響いた。

涙まで流して笑うラディン。カイルは歯痒さを必死で我慢していた。だがシリウは平然とした顔で左肘を気にしながら腕を回した。

「さて」

言うのが早いか、シリウの姿が消えた。次の瞬間には、ラディンの体が弾け飛んだ。背中を木に叩きつけられ、ラディンは地面にバウンドした。

「っなんだ？」

顔を上げるとそこにシリウの足があり、目を見開くと共に蹴り上げられた。ラディンの体は木の葉のように舞い上がり、すぐに地面に叩きつけられた。

「ぐあっ！」

ラディンの潰れた声が響いた。

「っんだよ？ 急に動きが良くなりやがった！」

言いながら唇を拭くと、親指が赤く染まった。口の中を切ったのか、ラディンは赤い唾を吐き出した。それでも気丈に立ち上がると、事もなげに立っているシリウを睨んだ。

「てめえ、何をした？」

「別に何も。言ったでしょう？ 身が軽くなったと」

「ふざけるな！」

ラディンはシリウへと突進した。それを軽く脇にかわすと腕をつかみ、捻りながら地面に叩きつけた。

「あああっ！」

ラディンの顔の大半は縮れた紺色の髪に隠れていたが、その様子は苦悶に満ちていると容易に見て取れた。腕を固められたまま身動きができない体を震わせながら、背中にいるシリウに言った。

「折れよ！ お前なら簡単に折れるだろうが！」

シリウは氷のように冷たい目でラディンを見下ろし、無表情で掴む腕に力を込めた。

「やめろ！」

「！」

シリウの力が一瞬緩んだ。その隙にラディンの体がするりと逃れたかに思えたが、シリウの手は一瞬早くラディンの髪の毛を掴んで引き戻した。再び腕を取られ、シリウに背を向けた形で座らされたラディンの前に、カイルがナイフを突き付けた。

「シリウの力は分かっただろ？ おとなしくヤツハの居場所を教えろ！」

ラディンはしばらくカイルと睨み合っていたが、やがて観念したように体の力を抜いた。

「仕方ねえ。……負けは負けだ！」

シリウとカイルは身支度を整えると、早々とラディンから聞いた場所へと向かった。途中心急処置をした左肘を気にしながら、シリウはカイルに尋ねた。

「何故あの時、止めたんですか？ 腕を折った後でも、尋問は出来たはずですが」

シリウはカイルから返してもらった眼鏡を丁寧にかけた。カイルは少し考えて答えた。

「なんとなく……ごめん。手出ししないのが常識なのに……つい」
シリウはふっと笑った。

「カイルは、それでいいと思いますよ」

シリウは責める気など毛頭無かった。それに彼にはもうひとつ、気掛かりなことがあった。ラディンからヤツハの居場所を聞いた後から、カイルの様子が変なのだ。カイルの妙に焦った雰囲気、シリウは心配に思った。

「カイル……」

「急ぐぞ！」

カイルの瞳にはもう次のことしか見えていないようだった。

「カイル、大丈夫ですか？」

カイルは苛立ったような口調で振り向いた。

「俺のことはいい！」

言うなり、先に走りだした。シリウも後に続き、二人はヤツハの居る場所へと急いだ。事は一刻を争う。森の中はだいたい暗くなってきた。

一方ヤツハは、ガラオルの部屋にひとり座らされていた。相変わらず言葉を発することはなかったが、抵抗もしなかった。拘束されていた腕も自由になっていたが、無駄なことだと分かっていた。ヤツハが今居るところは、洞窟のようだった。曲がりくねった穴の中を歩かされ、一番奥のガラオルの部屋に入れられたようだった。

まだ誰も居ない部屋には壁際に太いろうそくが二本立てられ、一本だけが火を灯され、部屋の中をぼんやりと照らしている。静寂だけが部屋に充満していた。床には固い御座が敷かれ、所々がほつれて汚れている。隅に積まれている厚い布は、布団の代わりだろうか。小さな物入れのようなタンスが端っこに佇んでいる。

ヤツハは周りを観察し終わるとため息をついた。

「これからどうなるんだろう……」

窓一つない穴蔵では、外の様子がまったく分からない。さらわれてからずいぶん時間が経っているような気がする。

「とにかく、なんとかしなくちゃ……」

そう思ってみても、さっきのガラオルの動きは、明らかに手慣れたものだった。訓練を受けてきたとはいえ、今のヤツハに適う相手ではないことははっきりと分かっていた。

考えあぐねていると、地面を踏みしめながら歩く足音が聞こえてきた。それは次第に大きくなり、ヤツハに近づいてきた。

「待たせたなあ〜！」

爪楊枝をくわえたニタリ顔のガラオルがゆっくりと覗いた。

「おや、何も食べてないのか？」

ヤツハの前に置いてある皿の上には、手付かずの食事が乗っていた。その前にドカリと座り、皿をヤツハへ近付けた。

「腹減ってるだろ？ 夜は長いんだ。食っておけ」

その優しい口調はわざとらしく、ヤツハには耳障りなだけだった。鼻先に近づけられた皿を両手で払いのけ

「あたしをどうする気？」

と、ガラオルを睨んだ。すると、臆することなく鼻で笑うと、にやつと微笑んだ。

「まあいい。女は元気なほうが好きだ」

そう言いながら、その巨体はヤツハにゆっくりと覆いかぶさっていった。

驚愕の事実！？

「ヤッハー！！」

カイルの怒号が洞窟のなかに響いた。その足元には、見張り番をしていた男二人が倒れている。

「カイル！ そんな大きな声を出しては、相手に『出てこい』と言っているようなものです！」

シリウが慌ててカイルの前に立って制止した。その身体を押し返すようにのけると、カイルは前へと進んだ。

「出てきてくれるならその方が早い！ 行くぞ！」

そのうち、なんだなんだと入り口の異変に気付いた仲間たちが出てきた。

「なんだ、お前ら？ ここはガキが来るところじゃねえ！ 帰れ帰れ！」

シツシツと手で払う仕草をしながら近づいてくる男に、カイルの体が飛んだ。

「！」

カイルの後ろで倒れる男に、仲間たちは驚き、次の瞬間には激昂した。次々に現れ近づいてくる男たちに、カイルの両手が振り下ろされた。

「蒼刃壁碎！」
ソウハヘキサイ

気合と共に振り下ろした剣から蒼い切っ先が二本、地面をひた走り、男たちを薙ぎ倒した。

「シリウ！ 急ぐぞ！」

カイルは振り向きもせずに走り始め、シリウは無言でその背中を追い掛けた。しかし、二人はすぐに立ち止まってしまった。

穴が縦横無尽に走り、まるで迷路のようだった。真つ暗闇のなか、標識があるわけでもない。闇雲に走り回っても迷うだけだ。

「くそっ！」

ちぎれるかと思うほどに唇をかみ、悔しがるカイルの肩をシリウが掴んだ。

「カイル！ 落ち着いて！」

その腕を振り払い、カイルはシリウを睨んだ。

「一刻を争うんだ！ アイツにさらわれたとしたら、こんな所で立ち止まっている余裕なんて無いんだよ！」

「カイル、もしかしてガラオルとは流族の……」

シリウはあえて静かな口調でカイルに尋ねた。カイルは小さく、それでもしつかりと頷いた。その瞳は、焦りでユラユラと泳いでいた。

「アイツは……マチさんの仇だ！」

シリウは息を飲んだ。そして自身を落ち着かせるように眼鏡を上げ

「そうでしたか……」

と息をついた。

「ガラオルは女好きで有名な流族だ。今までにたくさんのお女たちが餌食になってきた。まさかヤツハがアイツなんか捕まっただなんて！」

憎たらしそうに周りを見るカイル。シリウが冷静に判断を下した。

「ガラオルがボスだとするなら、多分一番奥の方に居るでしょうね」「くそっ！ 足止め食ってる場合じゃないのに！」

壁を蹴り上げるカイル。その時、遠く小さく吠える声が聞こえた。

「！」

二人が振り向くと、猛スピードで走ってくる小さな二つの光が見えた。

「ディック！」

小さな二つの光は、ディックの目だった。あっという間に二人を追い抜くと、くるっと振り向いてひと吠えした。

「ディック！ やつと気が付いたんですね！ ヤツハの所へ案内してください！」

嬉しそうに言うシリウ。二人は走り始めたディックを追い、洞窟の暗やみの中へ消えていった。

「！」

ヤツハの体から離れたガラオルは、再びあぐらをかいて、太い葉巻に火をつけた。ガラオルはヤツハを襲わなかった。腕を取り馬乗りにはなつたが、すぐに身体を離れたのだ。

『なんなの？』

ガラオルの意図がわからずにただ黙っていると、ガラオルはふつと鼻で笑い、俯いた。

「やはりとは思ったが、さすがにいい気分はしねえな、自分の娘を手掛けるのは」

「？ それ、どういうこと？」

ヤツハが恐る恐る尋ねると、ガラオルはニヤリと微笑んだ。

「お前は、俺の娘だつてことだよ！」

その時、仲間の男が駆け込んできた。

「ボスっ！ 侵入者ですっ！」

そしてその場で倒れた背後に、カイルの姿があつた。その脇を、風のようにディックが走り込み、ヤツハの傍に寄り添った。ヤツハを守るように、唸り声を上げるディック。

「ヤツハ、大丈夫ですか？」

すぐにシリウの姿も現れた。カイルは床にあぐらをかくガラオルを睨んでいた。ガラオルは驚く様子もなく、落ち着いた目ですとカイルを見ていた。

「マチさんの仇！ 覚悟しろ！」

カイルは剣を構えるとガラオルへと突っ込んでいった。

「うあっ！」

うめき声と共に、カイルの体は横殴りにされ吹き飛ばされた。壁に叩きつけられ、剣はくぐもった金属音と共に床に転がった。その隙に、何故かディックが外へと飛び出して行った。

「カイルっ！」

シリウは倒れているカイルの前に立ち、ガラオルに向かって構えた。

「無茶です！ 相手もよく知らないで突っ込むなんて！」

「くっ……！」

カイルは腕を立てて起き上がり、拳を握った。そしてソレを振りかざした。

「弾刃拔花！」

シリウの脇を抜けて、ガラオルへと気の弾が飛びかかった。ガラオルはそれを事もなげに手で払った。

気の弾は壁に当たり、拳大の穴にへこんだ。瓦礫がパラパラと地面に落ちた。

「素手で弾いた！」

カイルは驚いた声を上げた。ガラオルは太く笑い、空気を揺らした。

「挨拶にしては手荒すぎだな！ この女を助けに来たのか？ ガキノくせに、たいした勇氣だ！」

余裕の表情で笑い続けるガラオルに、遂にカイルがキレた。

「お前は必ず殺す！」

シリウを突き飛ばして地面に転がる剣を拾うと、ガラオルへとまた襲い掛かった。

「まだ分らんか？」

ガラオルはカイルが振り下ろした剣を軽くかわし、片手でその両腕をつかむと引き上げた。

「このっ！」

足が地面から離れ、吊されたカイルは必死でもがいた。 シリウも手出しが出来ないでいた。

ガラオルはカイルの顔を覗き込んだ。

「ほほう。 よく見るとお前もなかなか綺麗な顔をしてるな！」

カイルはそのいやらしく笑うガラオルに唾を飛ばした。 ガラオルは一瞬驚いた顔をしたが、すぐににやけた。

「ふん。 威勢のいいガキだ。 心配するな。 俺はそっちの趣味はねえ！」

そう言つと、ガラオルはカイルをシリウに向けて投げ飛ばした。

「カイルっ！」

シリウに受けとめられたカイルは、すぐに立ち上がった。

「カイル！ 落ち着いて！」

肩を掴むシリウに、カイルは構わずまた向かっていこうとしていく。 シリウの言葉などまるで耳に入っていないようだった。

その時、轟音と共に入り口付近の壁が崩れ、大きな穴が開き、土煙が部屋を待った。

「ヤッハ！」

荒い息と共に現れたのはサクだった。

ラディン、本当は良い人？ サクはやっぱり天然！

数分前

やっと気が付いたサクの目の前には、静かな森が広がっていた。鳥たちのさえずりが辺りに響き渡り、穏やかな雰囲気にしばらくぼうつとしていたが、すぐに我に返って頭を振った。そして立ち上がろうとしたが、起き上がれない。

「！ っ？ なんだ？ なんだよっ？」

見ると、サクの体は木の幹に縛り付けられていた。

「なんでオレ、縛られてんだよ！」

半ばキレ気味にもがいたが、ロープはびくともしない。周りを見ると、足元に一本のロープが落ちていた。

「おい！ あんまり動くなよ！ 痛えだろうが！」

不意に後ろから声が出た。サクは振り向こうとしたが、木の幹にピツタリと背中が付いているので後ろに誰がいるのか分からない。

「誰か居るのか？ なあ、これ、外してくれよ！」

「俺もそうしてえんだけどな！」

それはラディンだった。二人は同じ木の幹に縛られていたのだ。サクはすぐにその声の主がヤツハをさらった男だと気付き、声を荒げた。

「ああっ！ お前、ヤツハをさらった奴だろ！ てめえ！ 絶対許さねえからな！ ヤツハをどこへやった！ ロープ外せ〜！」

「なんか、こいつを縛って行ったあいつらの気持ち分かる気がする……」

ラディンはあきれながら呟き、後頭部を軽く木に当てた。

「もう負けを認めたから、戦う気はねえよ。ヤツハとかいう女の居所は、あんたの仲間に行った。今頃着いてんじゃねえの？ うまく助けだせるかどうかは分かんねえけどな！」

捨て台詞の様に言うラディンを、サクは睨むように振り返った。

「オレも行かなきゃならないんだ！ ヤツハを助けなきゃ！」

ラディンは少し考える仕草をしたあと、サクに尋ねた。

「なあ、なんでそのヤツハって奴を助けたいんだよ？ お前の彼女か？」

サクはじつと前を向いて、ぼつんと落ちているロープを見つめた。　「あいつは、小さい頃から病弱の母ちゃんを世話してて、いつも大変だったはずなのに、今まで一度だって泣いた所を見たことがないんだ。　いつも自分で解決しようとして、無理して……だからあいつが兵士養成学校に入るって聞いたとき、オレも強くなって、オレがヤツハを守ってやるって決めたんだ！」

ラディンは黙って聞いた後、ため息にも似た細く長い息を吐いた。　「仕方ねえなあ……これだけは使いたくなかったんだが……」

呟くように言うと、肩をすくめた。　同時に乾いた音が何度かすると、サクの体が軽くなった。　張りの無くなったロープがサクの足元に落ちた。

「？　なんだ？」

訳が分らず動揺するサクの後ろから、ラディンの声がした。

「早く行けよ！　まだ間に合うかも知れねえ！」

サクが立ち上がって木の裏側を見ると、力なくうなだれるラディンの姿があった。

「お前、どうしたんだよ？」

ラディンは弱々しく頭を上げると、サクを睨むように見た。

「俺のことはいいんだよ！　急いでんだろ？　早く行けっ！」

「でもお前、体が……」

「関節外しただけだ。　すぐ治せる。　ほら早く！」

顎をしゃくって促すラディンに、サクは後ろ髪引かれる思いで後退りを始めた。　すると森の中から鳴き声が聞こえ、それは次第に近づいて来た。

ザンツ！

と勢いよく草むらから飛び出したソレはディックだった。

「ディック！」

言うのが早いか、ゴンツツ！とサクのげんこつがディックの頭をはたいた。悲鳴を上げるディックに

「あの落ちてたロープはお前のだったのか？ オレを置いていくとは、覚悟してたんだろうな！」

指を鳴らし見下ろすサクに、イラついたラディンの声が飛んだ。

「早く行けつて！」

我に返ったサクはラディンに振り返り、微笑んだ。

「おう！ ありがとうな！」

と言葉を残して走り去ろうとするサクを、再びラディンが呼び止めた。立ち止まり振り向くサクに

「俺を縛りつけていかになくていいのかよ！」

と言うと

「いや、やめとく。お前、オレを助けてくれたからな、借りは返す！ じゃな！」

「なあ！」

ラディンは顔を覆う髪の毛の間からサクを見つめた。

「お前の仲間、強いな」

サクは笑った。

「当たり前だろ！ 自慢の仲間たちだぜ！」

そう言うサクは、誇りのある瞳をしていた。走り去る背中を見

送りながら、ラディンは

「仲間か……」

と呟きながらふつと微笑み、外れたままだった肩の関節をガコン、と戻した。

逃亡！ 巨体のガラオル、姿を消す！

ディックに導かれてヤツハのもとに駆け込んだサクは、息が上が
り興奮している。サクは部屋の奥にヤツハの姿を見つけると、目
を見開いて声をかけた。

「ヤツハ！ 大丈夫か？ ケガとかないか？」

ヤツハは床にペタリと座ったまま呆然とサクを見つめていた。

「サク……」

それ以上は言葉にならなかった。サクは部屋の中央に陣取るガ
ラオルを見ると、激昂した。

「お前だな！ ヤツハをさらったのは！」

サクは拳を握って気を溜めた。壁ぎわに立って、必死にカイル
を押さえていたシリウが

「よくここが分かりましたね？」

と言うと、サクは彼らにも吠えかかった。

「ディックが案内してくれたんだ！ お前ら、オレを置いていくと
はどういうことだよっ！」

シリウは苦笑した。

「まだ気を失ったので、荷物になると思いました」

「荷物ってなんだよ！」

サクは今にもシリウに噛み付く勢いだったが、ふと我に返ってガ
ラオルを睨んだ。

「喧嘩は後だ！ まずはこいつを倒す！」

カイルも頷いてシリウを振り払うと、剣を構えた。サクとカイ
ル、いや、シリウも含めて三人揃えば力は何十倍にもなるだろう。

その時、それまで呆然としていたヤツハが声を上げた。

「やめて！」

サクとカイルは驚いてヤツハの方を見た。ヤツハは震えながら床にペタリと座ったままそう叫んだ。

「それはどういう事だ、ヤツハ？」

目を丸くして言うカイルに、ヤツハはそれ以上何も言えないまま俯いていたが、それを見たガラオルはまた豪快に笑った。

「そうだな！ それがいい！」

笑い続けるガラオルに訳が分からず、ヤツハとガラオルを見比べるカイルとシリウ。ガラオルは壁ぎわにゆつくりとにじりよった。

「ヤツハ、今回は見逃してやる！ だがな、次は確実に食うからな！ 気を付けているよ！」

「待って！」

ヤツハがガラオルを呼び止めた。

「本当に……本当に、あたしのお父さんなの？」

震える声で言うヤツハに、サクを始めシリウやカイルも身震いするほど驚いた。ガラオルは

「ちよつと違うがな。俺様のなかにお前の父親は生きている。

確実にな」

と不敵な微笑みを残しながらその太く分厚い手で壁をポンと叩くと、同時に壁が回転し、その姿は一瞬で壁の向こうへと消えた。

「待て！ 逃げるのかっ！」

慌ててカイルが追い掛けようとしたが、すぐに壁はもとのように戻り、どんなに叩いてもピクリとも動かなかった。

「カイル！ どいてる！」

サクの声にカイルが壁から離れると同時に、サクの拳が壁に撃ち

付けられた。

「バックンダン爆拳弾！」

幾つもの拳が弾の様に壁を攻撃し、土煙と共に瓦礫が飛び散ったが、そこには大きな穴が空いただけだった。

「なんだよ？ 向こう側に道があるんじゃないのかよ？」

サクが驚き、カイルも信じられないという表情をした。

「何らかの念が込められているんでしょう。このルートは望めないようですな」

シリウが冷静に分析すると

「くそっ！」

カイルとサクは、取り逃がした悔しさに壁を叩いた。

その時、天井から小さな石が落ち始めた。同時に壁に亀裂が生じ始めた。

「いけません！ 洞窟が崩れます！ すぐにここを出しましょう！」

「ああ！ ヤツハ！ 立てるか？」

サクは座り込んだままのヤツハを無理やり立たせ、抱えると、四人と一匹は洞窟を脱出した。

夜空の下の苦惱

「ヤツハ！ しっかりしろ、ヤツハ！」

サクの声が森の中に響いていた。

さつきまでいた洞窟は入り口まで崩れ落ち、まだ少し土煙が漂っている。ヤツハをそつと木の根元に座らせたサクは、ずっと彼女の顔を覗き込んでいる。ヤツハの目は焦点を失い、唇には少しの震えが残っていた。その瞳はサクの顔さえ映すこともない。

「ヤツハ！ ヤツハ！」

肩を揺すってみても、言葉ひとつ発することなく、目は開いていても意識がない状態だった。ディックもヤツハの横にぴったりとついて、潤んだ瞳で見上げている。

ヤツハを心配するサクを気にしながら、シリウは崩れ落ちた洞窟の入り口を振り返った。

「脱出する時も、それまでに倒した仲間たちの姿がありませんでしたね。ガラオルと一緒に逃げたのでしょうか……」

「ガラオル……！」

カイルは唇を噛んで悔しさをあらわにした。握る拳が震えている。シリウはそれを見ながら小さく息をつくど、眼鏡を上げた。

「もう真夜中ですし、今晚はここで野宿ですね」と言い、周りを見回した。

崖と森に囲まれ、静かな所だ。公道からもずいぶん外れた場所のようで、なるほど、ガラオルたち流族にとっては、ひと目につかない好条件な場所だ。

「ここがどこかも分からなくなっていましたね」

シリウは独り言の様に呟き、苦笑すると、荷物を広げて寝床を作った。

「とりあえず、ヤツハを冷やさないようにしないと……」

手際よく小枝を集めて山を作り、火を起こした。この旅で、こ
ういうことにもだいたい慣れた。ヤツハを炎の灯りが照らし、隣に
サクが座った。ディックも、火が怖いはずなのに、ヤツハがよほ
ど心配なのだろう、火を気にしながら彼女の傍に寄った。

「あれ、カイルは……？」

シリウはカイルが居ないことに気付き、立ち上がった。

「ちよつと探してきますね」

ヤツハは勿論、サクからも返事はなく、ヤツハを見つめ続けるサ
クを確かめて、シリウはその場を離れた。

「ヤツハ……オレは一体、どうしたらいいんだよ……？」

サクは悔しさと苦惱で声を震わせ、空を見上げた。憎らしいほ
どに綺麗な夜空の下、二人を静けさが包んだ。ディックも切ない
声を出してヤツハを見つめていた。

「ここに、居たんですね？」

シリウの声に驚き振り向いたカイルは、皆から少し離れた木の幹
に座って何かしていた。

「やっぱり……」

シリウが近づこうとすると、カイルは慌てて拒んだ。

「俺のことは心配ない！ ヤツハに、付いててやれよ！」

「そういう訳にはいきませんよ。それに、ヤツハにはサクが付い
ているから、大丈夫です」

そう言い、カイルの足元にある白い布を取った。暗がりだった
が、カイルの腰の辺りが赤く腫れているのが分かる。

「ガラオルにやられた所ですね？」

胸下まで衣服をまくり、あらわになっている患部に触れようとす
るシリウに、カイルは慌てて衣服を戻してシリウを睨んだ。

「自分でやる！」

赤い顔で言うカイルに優しく微笑み、シリウは柔らかい口調で言

った。

「僕は医武道も習っているので、心配いりませんよ。怪我の手当てなら、頭に入っていますから」

「いや、そうじゃなくて！」

カイルは頬を赤らめたまま視線を反らせた。シリウは、ああ、という表情をした。

「変なこともしませんから」

「当たり前だっ！」

叫んだ拍子に、カイルの体が痛みに震え、うずくまった。

「ほら！ 無理しないで。薬草はもう用意してあるんですね？」

布と一緒にいくつかの薬草が並び、その中からいくつかを選んで取ると、手際よく潰して白い布に塗った。

「さあ、患部を出して」

シリウの言葉に一瞬躊躇したカイルだったが、黙って微笑みながら見つめるシリウに、やがてゆっくりと衣服を上げた。

「っ！」

布が当たると小さくうめき声を上げたが、唇を噛んで我慢していた。そして、静かにシリウの治療を受けた。細い腰が白い布で巻かれていく。シリウの手際は良く、手馴れたものだった。よほど練習もしてきたのだろう。さすがに学校一を謳われるほどの実力者だ。

やがて治療が終わると、カイルはまだ赤い頬で礼を言った。

「ありがとう……」

シリウはニッコリと微笑んだ。

「まだ無理をしてはいけませんよ」

「それより、シリウの腕の方はどうなんだ？」

カイルが、ラディンに痛めつけられたシリウの左肘を気にすると「そうですね、念のため、手当てしておきましょうか……」

と残っている白い布を手を取った。

「俺が、やってやる」

一言呟いて、カイルがその手から布を取り、薬草を手早くすり潰すと、シリウに肘を出すように促した。ゆっくりと差し出されたソレは赤く腫れ、熱を持っていた。

「少しひどいな……靱帯までいつてるかもしれない……」

眉をよせるカイルだったが、シリウの顔があまりにも無表情だったので

「シリウ、痛くないのか？」

と尋ねると

「痛いです。 どうも僕は、弱味を見せるのが嫌いなんですよね」

と苦笑した。カイルは少し笑った。その気持ちは、カイルにも理解できるものだったからだ。とりあえず応急処置だけをして、動きを制限しない程度に包帯を巻いた。

「カイル」

と言うシリウにその顔を見ると、シリウはここも、と、自分の頬のキズを指差していた。

「っ！」

少し顔を赤らめて、カイルはその頬に薬草を塗った。シリウは

「ありがとうございます」

と嬉しそうに微笑んだ。

「ヤツハの具合は、どう？」

道具を片付けながらカイルが尋ねると、シリウは少し顔を曇らせた。

「まだ何も反応は無い状態です。 医者に診せるにも、原因が原因ですからねえ……」

「ガラオルがヤツハの父親ってのは……本当なんだろうか……？」

カイルは呟いた。シリウはしばらく黙っていたが、気持ちを振り切るように微笑みを見せた。二人だけで考えていても答えは見つからない。 なにしる

「本当に、あたしのお父さんなの？」

そのたった一言だけを聞いただけなのだから。

「とにかく、二人の所に戻りましょうか」

カイルとシリウは、立ち上がった。

ヤツハは相変わらず、俯いたままで黙り込んでいた。

「どうですか？」

シリウがそつとサクに尋ねると、彼は無言で首を横に振った。

「そうですか……」

とため息をつく後ろで、カイルの顔も険しかった。

「一体、ヤツハは何を聞いたのでしょうか？ 僕たちは断片的にしか聞いていない」

「ガラオルがヤツハの父親だつて、ことか？」

サクの言葉に、シリウとカイルが頷いた。サクはヤツハの憔悴仕切った姿を見つめた。

「オレは信じねえ。 あんな奴がヤツハの父親だなんて、そんなわけねえ！」

サクは眉を寄せた。

「僕たちもそう信じていますが……ガラオルが言った『俺様の中にお前の父親が生きている』という言葉が、どうも気になります」

「一体どういうことなんだよ？ 全然わかんねえ！」

苛立ちながらサクが叫ぶように言った。このモヤモヤした気持ちをどこにぶつけたらいいのか分からないのは、三人とも同じだった。

「あいつは、人を喰うんだ」

突然の声に、三人は驚いて辺りを見渡した。サクは立ち上がり、ヤツハを守るように構えた。ディックが一方方向に向かって吠えだした。

「！ お前はっ！」

少し離れた木にもたれるように立ち、四人を見ている人影は、ラディンだった。

ラディンの助言

「お前！ 何しに来たっ！」

カイルが叫び剣を構えると、シリウも同じように身構えた。

「ちょ、ちょっと待って！ 俺は戦う気はねえよ！」

困惑した表情で両手を上げて、待てよと仕草をするラディン。

「では、何か用事でも？」

シリウが構えを解かずに尋ねた。その目は冷静さながらである。

「ガラオルの秘密を教えようと思ってさ！」

飄々と言うラディンに、三人は戸惑いを隠せなかった。

「どういうことだよ？」

サクが疑いの目で見つめながら尋ねた。ラディンは腰に手をあてて言った。

「ガラオルは女好きで有名だ。ちょっと気に入った女なら誰でもいい。貪るようにその体を楽しむ。だが、それだけじゃない。

アイツは、何十年かに一度、男を喰らうんだ」

「男を喰うだつて？」

サクが怪訝な顔をした。ラディンは頷いた。

「俺は実際に見たことはないけどよ、仲間がそう言ってたのを聞いたことがある。長くガラオルに付いてた奴らにとっては、有名な話だ。ガラオルは定期的に健康で頭の良さそうな男をさらい、喰うんだと」

「なんだよそれ……？」

サクたちは動揺していた。人が人を食べるなんて考えられない。言葉が出ないままにいるサクたちに、ラディンはこれ見よがしにヤツハを見ながら、思い出したように言った。

「そう言えば、たまに頭を抱えてた時があったなあ。『うぜえ。

頭の中にあいつの精神がまだ生きてる』って。でもすぐに治るみ

「ただったけどな」

シリウは眼鏡を上げてラディンを見つめた。構えも解いたが、まだその目は警戒していた。

「その話は、信じてもいいのですね？」

ラディンは肩をすくめて笑った。

「俺はもうガラオルの所には戻れねえ。だから今の俺は自由なのよ。何言ったところで、誰に咎められることもねえ。ま、信じてもらおうとも思っっちゃいねえけどな！」

「信じてもいいのね？」

全員がヤツハを見た。ヤツハはじつとラディンを見つめていた。

「あたしのお父さんは、あいつに喰われたのだと？」

「ヤツハ！」

シリウは驚いて駆け寄った。

「そんなこと……」

「いいえ。あいつそのものが父親だなんて、信じられないもの……もしそうなら、あたしは舌を噛み切って死ぬ！でも、もしラディンの言う通り、あいつの中にお父さんが生きていたら、あたしがしなくちゃならないことは一つよ！」

ヤツハの瞳に光が宿った。それを見て、サクがラディンを見た。

「お前の言ったこと、本当に信じるぞ！」

ラディンはにっと笑った。

「ご自由に」

まるで他人事のような口振りのラディンに少し苛立ちながら、カイルが口を開いた。

「ヤツハの父親の精神が身体の中に残っているというのなら、その精神をガラオルから離すことは出来るのか？」

「僕も同じ事を考えていました。ヤツハもでしょう？」

シリウが言うと、ヤツハは頷いた。

「あたし、お父さんを助けなきゃ！」

答えを仰ぐシリウたちに、ラディンは眉をしかめて首を傾げた。

「生憎だけど、その方法は知らねえ」

「そうか……」

カイルは悔しそうな表情で俯いた。

「だけど、必ず方法はあるはずだ。ガラオルからヤツハの父親を離して、俺はあいつを必ず倒す！」

強い口調で言いながら、カイルの両拳がぐつと握られた。

「？」

まだ事情の分からないサクとヤツハは、ガラオルにやっきになっているカイルを不思議に思いながら、二人で顔を見合わせた。それに気付いたシリウが、重い口を開いた。

「ガラオルは、カイルの仇なんです。カイルは、育ての親を殺されたんです」

「！ カイル……」

複雑な感情に襲われて、潤んだ目で見るヤツハに、カイルは少しの微笑みを返し、静かに言った。

「大丈夫。まずヤツハの父親を助けてから。それが先決だ」

シリウはそんなカイルを見て、安心したように顔をゆるませた。

「では、朝までは体を休めて、明日、作戦会議をしましょう！」
するとヤツハが座り直して言った。

「そんな余裕はないわ！ あたしは大丈夫！」

「オレもだ！」

「俺も同じだ！」

サクとカイルも円陣のように座り直した。それを見たシリウは微笑み、実は自分も、と皆と同じように座り直した。ヤツハの隣には、ちゃっかりとディックも座っている。もうすっかり仲間の一員だ。

「では、とりあえずやらなくてはならないことを挙げましょう」

シリウが言い、皆が耳を傾け始めると、ラディンはいつの間にか居なくなっていた。

やがて眠らずに夜が明けた。崖の上から周りを見ていたシリウが器用に岩場を伝い飛びながら戻ってきた。

「どうやらここは、サツフル村の近くの様です」

地図を片手に、外していた眼鏡を掛け直しながらシリウが言った。するとその途端、サクとヤツハが顔を見合わせた。

「オレたちの故郷だ！」

意外に知っている場所だったので、二人は半ば拍子抜けしていた。まさか自分の故郷の近くで事件が起こっていたとは思ってもしなかったのだ。

「じゃあ、サツフル村に行ってみましようか？ 何か情報も手に入るかもしれませんし」

四人は同意し、早速サツフル村へと足を運んだ。

サツフウル村の豪快かあちゃん

「うわあ！ 懐かしいなあ！」

「ホント！ 何年ぶりかしら？」

目を輝かせて村に入ったサクとヤツハの後ろ姿を見ながら、ついでいくシリウとカイルは顔を見合わせて微笑んだ。

サツフウル村は、牧場や果樹園が広がるのどかで穏やかな雰囲気
に包まれ、とても近くに惨悪な流族が巢食っていたとは信じがたい
ものだった。 点々と建つ木製の家や、細く長い道が続く村の風景
が、サクとヤツハにはとても懐かしいものだった。 なにしろ、ソ
ラール兵士養成学校に入学してから数年、一度も帰省していないの
だ。

「サク！」

「ヤツハ！」

外で作業していた村人たちが、すぐに二人に気付いて近寄ってき
た。

「もう帰ってきたのか？」

「ヤツハちゃん、大きくなったわね！」

口々に言いながらサクとヤツハを囲む村人たち。 次々に声を掛
けられ、二人はしどろもどろになっていた。 やがてその中心から
手を振ってサクがシリウたちを呼んだ。 すると、カイルの傍ら
に立つディックを見た一人の男が

「ディンゴだ！」

とひどく驚いた。 無理もない。 成長すれば、体長三メートル
を超すまでになるディンゴは、その凶暴な性格もあって、武器を持
たない普通の人々にとっては害のある敵でしかないのだ。 恐れて
後退りする村人たちに、ヤツハが説得した。

「大丈夫よ。 ディックはあたしたちの仲間なの。 とても優しい
子よ！」

ヤツハに手招きをされたディックは、軽い足取りでヤツハに駆け寄った。途端にヤツハたちを囲む輪が大きくなり、怪訝な村人たちの視線が注がれたその中心で、ヤツハとディックは仲良く寄り添った。

「こいつ、賢いやつだから、森にいる奴らみたいに無闇に襲ったりしないんだ!」

サクが言うと、ヤツハはきよとんとした顔で言った。

「あれ、サク、犬が苦手じゃなかったの?」

「そんなことあったっけ?」

と頭をかきむしりながらとぼけるサクに、シリウが笑った。それに気付いたサクが、二人を村人たちに紹介した。そ

「シリウとカイル! オレたちの仲間だ!」

「よろしく」

軽くお辞儀をして微笑む二人に、村人たちの反応も良かった。

二人とも賢そうな雰囲気です、信用できると思っただらう。

「サク!」

突然大きな声が場の空気を引き裂いた。

「か……母ちゃん!」

サクは一瞬怯えたように体を震わせた。村人たちの間を押しつけるように、恰幅の良い女性が現れた。彼女はサクの顔を見た途端に

「帰って来るなら来るで、連絡くらいよこしな!」

と言いながらげんこつを作り、サクの頭を勢いよく叩いた。

「痛つてえ〜!」

大きな乾いた音と共に、サクの悲鳴が響いた。

「懐かしいなあ、このやりとり!」

村人が笑いながら話した。

「サクが出ていってから、パンナさん、どこか元気なかつたんだよな！」

「そうそう。子供たちが悪さをして、前みたいに激しく怒ったりしなくなつたしな！」

「そ、そんなことないよ！ さあ皆、うちで休んでいきな！ 疲れただろう？」

はぐらかしながら言うサクの母パンナの後をついて、四人と一匹はサクの家へと向かった。

サクの家は木で出来た簡素なもので、必要なものしかないようなシンプルな内装をしていた。村の様子から、どこの家もこんな感じなのだろう。外では、すっかり仲良くなつたディックと村の子供たちが走り回っていた。

「何にもないけど、とりあえずこれを飲んで。今日はゆっくりしていけるんだろ？」

パンナがそれぞれに温かいミルクを渡した。白く揺れる水面から、優しい湯気が立っている。一口飲むと、なんとも優しい甘味がかまで潤すようだった。三人がホツとしている横で

「オレ、これ嫌いなんだよっ！」

眉を寄せてあからさまに嫌がるサク。

「あんたは昔から好き嫌いが多かったからね！ だから背が伸びないんだよ！」

「関係ねえよ！ ちゃんと肉とかたくさん食うぞ！」

「肉ばかりじゃなくて、何でもバランス良く食べるんだよ！」

そんなやり取りを、半ば呆れながら見ているシリウたち。ヤツハも笑いながら二人を見ている。ヤツハにとっては、これも懐かしい風景だった。

「ねえパンナおばさん、ザクラスおじさんはどこに行ってるの？」

パンナと共に食事の準備をしながら、ヤツハが尋ねた。ザクラ

スとは、サクの父親だ。もうすぐ夕食時だというのに、ザクラスは姿を現さない。パンナは食事の用意をしながら答えた。

「父ちゃんは、今ちよつと村の外に出かけてるんだよ。明日にでも戻ってくると思うけどね」

パンナは明るく言つて、こんなに大人数分の食事を作るのは久しぶりだと、嬉しそうに腕を奮つた。

その夜は、サクの家に泊まることにした。

一つの部屋に雑魚寝をすることにしたサクたちは、久しぶりに屋根のある場所で安心できる眠りを約束された。

やがて皆が寝静まつた頃、カイルがふと目を覚ますと、ヤツハが皆を起こさないように布団から出て、外に出ていくのを目撃した。

「？」

気になつたカイルは、自分もそつと布団から抜け出して後を追つた。

隣のサクは、気付くことなく大きな寝息をたてている。久しぶりの自宅に、すっかり心が落ち着いているようだ。

シリウは村の長に用があると行ってまだ帰ってきていない。話に盛り上がつて、一泊することになつたのかもしれない。

カイルはヤツハに気付かれないように物陰に隠れながら、彼女の後を付けて行つた。外灯などない。月明かりにぼんやりと照らされた道を、ヤツハは慣れた足取りで歩いていく。

やがてヤツハは、一軒の家の前で立ち止まつた。木製の小さな一軒家はカーテンもなく、中は暗く、誰も住んでいないようだった。ヤツハはその家の前で、入ろうともせず、立つたままじつと見つめていた。それを見守るカイル。

その時、人影がヤツハに近づいた。
「ヤツハちゃん、ここだと思つたよ」

それはサクの母親、パンナだった。

寝巻に上着を羽織つたまま

で、パンナはヤツハに微笑んだ。

「おばさん……」

「何も隠れて来ることはないんだよ。　ここは、ヤツハちゃんの家なんだから」

村の外れにあるこの小さな一軒家は、ヤツハが育ったところだったのだ。　ヤツハは俯いた。

「でも……あたし、ここにはもう帰ってこないつもりで……」

パンナはヤツハの肩を軽く叩いて通り過ぎると、家の扉の前に立った。　そして懐を探り、一本の鍵を取り出した。

「なに言ってるんだい。　思い出がたくさん詰まったこの家を、なんで捨てようとするんだい？」

パンナは鍵を回して扉を開けると、ヤツハに振り向いた。

「さあ、入りなよ。」

パンナに促され、ヤツハは最初躊躇したが、ゆっくりと歩を進めた。

「あんたも隠れてないで、おいで！」

ヤツハは、自分の後方に向かって声をかけたパンナに驚いて振り向いた。　すると、木の陰からカイルの姿が現れた。

「カイル……？」

「心配して、来てくれたんだろう？」

パンナは優しく声をかけてカイルを呼び込んだ。　カイルは照れたように小さく頷くと、おとなしくヤツハと共に家のなかに入った。

家の中は、必要なものしか置いていないシンプルなものだった。

生活の匂いは無いが、ホコリもほとんど無い。　見回すヤツハは

「変わってない……」

と驚いた顔で言った。

「たまに来ては掃除をしてるだけだよ。　他には何も触っちゃいな
い」

ヤツハとカイルは、パンナを挟むようにベッドに座った。　目の

前の窓から、月明かりに照らされた草原が見える。 外は穏やかな風が吹き、静かだ。

「ヤツハちゃん、あたしはね、いつでも帰ってきていいと思ってるんだよ！」

「おばさん……」

「あなたの母親はね、いつもあなたのことを心配してた。 自分が病に冒された時も、最期まで、あなたを思ってた」

パンナの脳裏に、ヤツハの母親が言った言葉がよぎった。

『ヤツハに、父親を会わせてはいけない……』

だがパンナは、ずっとそれを伝えずに来た。 言ったら、ヤツハは自分の父親がまだ生きていることを知り、会いたいと思うだろう。 それだけは出来ない。 なぜなら、ヤツハの父親は……。 それは、ヤツハの母親と、古くからの友人であったパンナしか知らない事のはずだった。

「だけど、あなたは父親を探すと言いだしてしまった……」

ヤツハは俯いた。

「そりゃあ、誰だって、自分の親に会いたいと思うのは普通だろう。

「ただどね、ヤツハちゃん」

「知ってる」

「え？」

パンナは、耳を疑い聞き返した。

「な、何を知ってるっていうんだい？」

パンナは動揺を隠しきれないでいた。 ヤツハは少し微笑んでみせた。

「あたし、自分の父親がどうなったのか、知ってるの。 今は、もう一度会って、真相を確かめたいと思ってる……」

ヤツハを見つめるカイルの表情が固くなった。 カイルもまた、自分の仇と思う相手が仲間の父親と知って、複雑な心境なのだ。

パンナは大きなため息をついた。

「……そうだったのかい……すまなかつたねえ」

申し訳なさそうに言うパンナにヤツハは首を振り、微笑んでみせた。

「お婆さんの気持ちは分かるから」

ヤツハの気丈な笑みに、パンナはホツとしたように微笑んだ。そしておもむろにカイルの方を向いた。

新しいお母さん

「な、何ですか？」

いきなり見つめられて戸惑うカイルに、パンナは少し強い口調で言った。

「あなた！」

「？ 俺？」

たじろぐカイルに、パンナは少し睨みながらパンパンに膨れた頬をした顔を近付けた。

「パンナおばさん？ カイルが、どうかしたの？」

ヤツハがパンナの大きな肩口から覗くように言っと、パンナは視線をカイルに定めたまま言った。

「ヤツハも気付いてるんだろう？」

「あたし？」

「カイル、あなた、そのまま隠し続けるつもりなのかい？」

大きな丸い目で見つめられ、カイルは言葉を失った。パンナはもう睨んではいない。優しく深い瞳に吸い込まれそうになった。

「あたしは、あなたに何があったのか、あれこれ聞くつもりはないよ。ただ、自分を押し殺すのはしちやいけない。いずれ、自分が壊れる日が来るよ」

カイルは視線を外せないでいた。得体の知れない不安感に襲われ、何か言わなくてはと思いつつも、何の言葉も出てこない。

カイルは、かろうじてかすれた声を出した。

「俺……は……」

「『俺』じゃないだろ？」

眉をしかめ、息を吐いて呆れたように肩をすぼめたパンナの後ろから、ヤツハがそつと口を挟んだ。

「カイル、もしかして本当は、女の子なんじゃない？」

「えっ！」

カイルは飛び上がるように立ち上がると、窓辺へと後ずさりをした。

「な……なんで……？」

二人に見つめられ、立ち尽くすカイル。 ヤツハは優しく微笑んだ。

「なんとなく。一番最初に握手した時、『あ、これ、男の子の手じゃないな』って思ったの。シリウとの事は、最初は誤解しちゃったけど、そのうち、もしかしてって」

「あ……ああ……」

カイルは俯いた。

そう言えば、初めてヤツハと握手した時、彼女の反応が少しおかしかったのを思い出した。だがすぐになんでもないように振る舞い、接してきたので、いつの間にか忘れてしまっていたのだ。

「もしかして、シリウももう知ってるんじゃない？」

ヤツハの優しい問いに、カイルは小さく頷いた。

「辛かったら？」

「！」

カイルは思いがけない言葉に、思わずパンナの顔を見た。そこには、すべてを包み込んでくれそうな笑顔があった。

懐かしい……。

カイルがずっと閉ざしてきた心に蘇る、過去の温もり。

全てが楽しくて希望に満ちていて、温かかった日々。ふざけあえるオツカヤカゲがいた。そして、厳しくも優しく見守ってくれていたマチの笑顔が、いつもそこにあった。

パンナはヤツハの肩を抱き、カイルを見つめながら言った。

「あなたたちは、強くなりすぎた。どんなに強くても、所詮は女だ。時には弱音を見せなきゃ、息が詰まっちゃうよ？ なんといいっても、あなたたちには、素敵な仲間がいるじゃないか！」

「！」

「……っ」

途端に、カイルとヤツハは息が詰まった。そして、今まで押さえてきたものが一気に溢れだした。

パンナは立ち尽くしたまま声もなく涙を流すカイルを自分の脇に座らせ、ヤツハとカイルの肩を引き寄せて抱き締めた。二人共が大粒の涙を流しながら、パンナの温もりの中で、開放された喜びを噛み締めていた。

「いつでも帰っておいで。あたしが、あなたたちの母親になってやるからさ」

パンナは二人の頭をポンポンと優しく叩きながら、優しい笑みで、泣きじゃくる二人をただ黙って抱き締めていた。

しばらくして、緩やかにろうそくの灯りが部屋を灯すなか、ヤツハとカイルは落ち着きを取り戻した。そして顔を見合わせると、お互いに照れ笑いをした。

「もう、これで、隠し事は無しよ！」

からかうように言うヤツハに、カイルは

「サクにも言わなきゃね」

と苦笑した。すると

「ああ、あの子には言わなくていいよ！」

と年配の女性特有の、手振りをしながらパンナが言った。「面白そうだから、しばらくは黙ってなよ。その代わり、真相が分かった時、あの子がどんな反応したか、教えてよ！」

片目をつぶって微笑むパンナに、二人は笑った。

「そうね、サクのことだから、すごくびっくりしそうだわ！ 思い込みの激しい子だから！」

ヤツハも楽しそうな口調で話し、カイルも含み笑いをしながら頷いた。

月明かりがぼんやりと照らす道を三人が並んでサクの家へ歩きながら、カイルが呟くように言った。

「俺の本当の名前、『カミイル』って言うんだ」

ヤツハは目を輝かせた。

「素敵な名前！ 勿体ないわよ！ シリウは名前ももう、知ってるの？」

カイルは頷いた。

「名前も、どうしてガラオルを追っているのかも。シリウには、何も隠せなかった」

「あんたまさか、親の仇を打とうとも思ってるんじゃないかい？」
パンナは強い口調で言った。

「あたしは反対だよ！ かたき討ちなんて古くさい！ それに、自分の娘が怪我をするなんて、考えただけでも寒気がするよ！ 全く！ バカなことを考えるんじゃないよ！」

そして、その丸っこい手を握ると、容赦なくカイルの頭を叩いた。
「っ！ 痛いよ！」

眉を寄せて頭を押さえるカイル。だが、内心は嬉しさを感じていた。マチにもよく悪さをして怒鳴られ、叩かれたものだ。

「パンナおばさん、あたしたち仲間だもん！ きつと良い方法を見つけて、願いは叶えてみせる！」

ヤツハが拳を握って微笑んだ。パンナは困った顔をして、ため息をついた。

「カイル、行こう！」

ヤツハはカイルの腕を取ると、まるで恋人同士のように寄り添ってパンナの先を歩いた。

「こら、お前たち！」

困惑した口調のパンナには振り向かず、二人は笑いながら歩いていく。

「じゃ、シリウはあなたに譲るわ！」

笑うヤツハに、カイルは顔を赤らめた。

「そ、そんなんじゃないって！ それに、ヤツハだってシリウの事、好きだったんじゃないのか？」

するとヤツハは少し頬を赤らめた。

「そりゃあ、確かにシリウはカッコいいし、頭もいいし、申し分ない人よ。でも、一番安心して傍に居られるのはサクだけ……」

「ヤツハ……？」

「言いたいことも、サクなら何故かラクに言えるしね！」

ヤツハは照れ臭そうに笑い、急ぎ足になった。

「そうか、ヤツハは最初からサクの傍にいたいから……」

「もういいからっ！」

カイルは照れるヤツハに引っ張られるように歩いた。パンナは、その後ろ姿を見守るように微笑みながら歩き、呟いた。

「手の掛かる娘が増えたね」

月明かりが、煌々と辺りを照らしている。気持ちの良い夜道だった。カイルとヤツハの心も、まるで霧が晴れたようにすっきりしていた。

やがてサクの家に近づくと、その辺りが何やら騒がしい様子が見えた。

「何だろう？」

カイルとヤツハは胸騒ぎがして、思わず走りだした。家の前に人だかりが出来、村人たちの手には松明が握られている。

「どうかしたんですか？」

ヤツハが息せき切って声をかけると、村人たちの中からシリウが現れた。

「カイル、ヤツハ！ 一体どこに行ってたんですか？ パンナさんまで居なくなってるんです！」

珍しく慌てた様子で二人に駆け寄るシリウからは、切羽詰まった雰囲気を感じられた。カイルは後ろから巨体を揺らして走ってくるパンナを指差した。

「パンナさんはあそこに……一体何があつたんだ？」

シリウは、近づいてくるパンナを見つめながら固い表情をした。

「……？」

カイルとヤツハは不思議そうに顔を見合わせた。

サクの父誘拐さる！ そりゃ助けに行くでしょ！！

やっと追いついたパンナが膝に手を付けて息を整えていると、その視界に細い足首が映った。小さい体に曲がった腰、杖を付いたその老人は、村長の印である羊の足のペンダントをぶら下げている。「ワンダさん？」

気付いたパンナが汗だくの顔を上げると、村長ワンダは固い表情で言った。

「パンナさん、気をしっかり持って聞きなさい」

ワンダは息を洩らしながらゆっくりと話した。

「ザクラさんが、行方不明になった……」

「なんだって？」

パンナは驚いて大きな目をさらに丸くした。

「あの人の身に、何かあったのかい？」

すると村長の後ろから、村人に肩を借りながら怪我だらけの一人の男がヨタヨタと現れた。

「パンナさん、すまねえ……ザクラさんが、ガラオルの手下野郎にさらわれちゃった！」

「！」

カイルとヤツハに、衝撃が走った。パンナはショックで何も言えずに立ち尽くしていた。

「行くぞ！」

皆がその声が出た方を向くと、いつの間にかサクが立っていた。

全身から燃えるようなオーラを放っている。その瞳は輝き、怒りが溢れだしていた。

「ヤツハだけじゃ飽き足らず、オレの父ちゃんにまで手を出すとは！ 絶対許さねえ！」

勢いよく両拳を打ち合せると、気が辺りに放たれた。シリウも黙って頷いた。

「本当に、許すまじ行為です！」

「俺も行く！」

カイルがサクとシリウのもとに歩み寄った。身体中から気合いが溢れている。

「あたしも！」

ヤツハが言うと、カイルは手を挙げて彼女を制した。

「ヤツハは、パンナさんの傍に居てあげるんだ！ ヤツハにしか出来ないことだから！」

ヤツハはゆっくりとパンナを振り向いた。焦点が定まらない目で、小刻みに震えながら立ち尽くすパンナ。ヤツハはどちらも選べない自分に切なくなり、悲痛な表情でカイルを見た。

「でも……！」

「ヤツハ、頼む！」

カイルは、黒い瞳でじつとヤツハを見つめた。カイルの瞳から思いを受け取ったヤツハは、唇を噛み締めて頷いた。安心したように微笑むカイルに、ヤツハは駆け寄った。

「必ず、無事で帰ってきて！」

カイルは安心させるように、ヤツハの肩を抱いて頷いた。

「分かってる。もう、パンナさんを心配させたりしないから！」

サクもヤツハに強い言葉を掛けた。

「必ず父ちゃんを助けて帰ってくるから！ 信じて待ってるよ！ デイックも留守番頼んだぞ！」

ヤツハに寄り添いひと吠えしたデイックを見てにっと笑い、サクは踵を返した。手には、それぞれの武器を持っている。心には、ガラオルへの熱い闘志をみなぎらせながら、村人たちに見守られながら出かけていった。

「シリウ、案内頼む！」

暗やみの林の中を風のように走るサクが言うと、シリウが頷いて一歩前を走った。カイルもその後が続いた。

「命からがら帰って来たトモトさんの話によれば、裏山の中腹辺りでガラオルたちと遭遇したようです。昼間の、僕たちが起こした落盤を見に行っていたようです」

「オレたちの性じゃないだろ？ 勝手に崩れたんだ！」

「どちらにしろ、聞いた場所に行ってみるんだ！ 何か手がかりがあるかもしれない！」

カイルが言うと、サクとシリウは頷いて走るスピードを増した。

「ひどいな……」

程なく付いた場所には、傷だらけの木々と血痕が残っていた。

「かなり、やりあったみたいですね」

「そうまでして、ザクラさんをさらいたかった理由って、なんなんだ？」

顔をしかめて周りを見るカイルに、シリウは呟くように言った。

「喰うため……じゃないでしょうか？」

「！」

サクが睨むようにシリウを見た。それを受け止めながら、シリウは自分の見解を静かに話しはじめた。

「今、ガラオルの中には、ヤツハの父親の精神が残っている。ラデインの話に

よれば、ガラオルにとって、それがストレスになっていたようです。だとすれば、違う誰かを喰らえば、上書きされるようにヤツハの父親が消えるかもしれないと考えてもおかしくはない」

「そんな単純なものかな？」

カイルが言った。だが、今まで人を喰ってきたキャリアから得

たものもあるのかもしれない。世の中には、常識では計り知れない、分からないことがたくさんあるのだ。その時、ずっとシリウを睨むように見つめていたサクが呟くように言った。

「オレの父ちゃんが喰われれば、ヤツハの父ちゃんは助かるのか？」

「サク！ 何言ってるんだ！」

カイルが驚いてサクを見た。サクは複雑な顔で視線を背けた。

「サクの父親も、ヤツハの父親も、助けます！」

シリウが叫んだ。

「何人たりとも、犠牲者を出してはいけません！」

サクはシリウを見つめ、苦笑した。

「そうだな！」

「何をモタモタしてんだよ？」

「！」

三人の前に、ラディンがどこからか現れた。

「ラディン！ てめえ、何しに来た？」

サクが臨戦態勢を取ると、ラディンは

「んな場合じゃねえだろ！ お前の相手は俺じゃねえはずだ！」

と一喝した。

「そうですね、ラディンは昨日も僕たちに助言をしてくれました。

もう、敵対する理由はないと思います」

と、シリウもサクの肩を押さえた。ラディンはやっと分かった

か、という風に肩をすくめた。

「ガラオルの居場所を知ってるのか？」

カイルが聞くと、ラディンは頷いて林の方を指差した。

「案内する！ 急げ、時間がない！」

言うのが早いか、ラディンは風のように走りだし、三人も後を追った。

どこかで訓練を受けていたのか、ラディンの身体能力は高い。

シリウは自分で戦って知っているし、カイルはその一部始終を見ている。サクもまた、ラディンに助けられた。特殊な技も持って

いるようだ。　まだ謎だらけの人物だが、瞳には嘘をつかないまっすぐな輝きがあった。　今の三人には、彼を信じるしか道はなかった。

蛇のような男、ガンク登場！

「ちよつと待てやあつ！」

突然、人影が四人の前に立ちふさがった。

「！」

足止めを食らったサクは、そのままの勢いで拳を振りかぶった。

「どけええっ！」

だがその人影は軽がると避けると、木の枝に飛び乗った。

「ガラオル様は、今から崇高な食事をなさるんだ。その邪魔をするのなら、ここで倒れてもらう！」

すっぽりとかぶったフードで顔は分からないが、その声は若い男のものだった。

「何を言ってるんだ！ お前なんかの相手をしている暇はねえんだ！」

サクは、木の枝に器用にしゃがんで見下ろす男に噛み付くように吠えた。するとラディンがサクの肩に手を置いた。

「ここは俺に任せてくれ！ あんたたちは先を急げ！ ここを真っ直ぐ行けば、ガラオルのアジトがある！」

「お前……！！」

驚くサクにラディンは頷き、シリウを見た。

「急げ！ 時間がない！」

シリウは

「分かりました！ ここはあなたに任せます！ さあ、サク、カイル、行きましょう！」

呼ばれた二人は、後ろ髪をひかれるようにラディンを見やりながら林の中を案内された方へ走りだした。

「おっ！ 逃がさないよ！」

男が素早く動き、手のひらを広げた。

「紅糸千波！」
クシセンバ

手のひらから無数の細系の束が放たれ、三人の背中を襲った。

「そうはいくかよ！」

ラディンが助走をつけて三人に襲い掛かる細系束に突っ込んで行った。

「ぐっ！」

体をねじって巻き取ると、勢いをなくした細系は地面へと力なく落ちた。

「邪魔をするなよ、ラディンさんよお！ 仲間じゃないか！」

苛立ちながら言う男に、ラディンは睨みをきかせた。

「あいつらには、借りがあるんだよ！ それにもうお前らの仲間じゃねえ！ ガンク！ お前の相手は俺だ！」

「うぜえ……何があったか知らねえけど、いつの間にか裏切りやがって……」

ガンクは睨むように見下ろした。そして音もなくラディンの前に降り立つと、その脇に蹴を入れた。

「ぐあっ！」

「その体じゃあ、動きたくても動けねえだろ？ そのまま寝ながら息絶えろ！」

吹っ飛ばされて転がるラディンの体半分はさっきの細系に巻かれ、右腕が体にピッタリと縛られた形になっていた。

「なりふり構わずに他人を助けようとするから、自滅するんだよ！」

と言いながら駆け寄り、再び蹴ろうとするガンクの足をナイフがかすった。

「！」

慌てて避けたガンクが振り向くと、カイルが立っていた。

「ちっ！ お前はいつも俺の邪魔をする……」

ガンクは不機嫌な口調で言いながら、無造作にフードを取った。

ガンクの顔が、あらわになった。

カッと見開かれた瞳は薄い灰色で、まるでとかげのように長い舌を出していた。それを見た途端、カイルは驚きの声を上げた。

「あっ！ お前！」

「知ってるのか？ カイル？」

木の根元に転がって呻きながら言うラディンに、カイルが頷いた。
「同じ養成学校にいた奴だ。試験に落ちて退学したって聞いたが

……」

「あんなとこに居なくても、俺の実力はこうして認められるんだ！
丁度よかった！ 悠々とトップを走っていた優等生さんを、ここで倒せるなんてな！」

楽しげに口元を歪ませ、長い舌を漂わせた。カイルは嫌悪感丸出しで顔をしかめたが、すぐに手にしていた剣を構えた。

「力を試したいなら、もっと違う方法があつただろう？ ガラオル
なんかに手を貸して、良いことなんて何も無いぞ！」

「お前には分かんねえよ！ 学校を追い出されて、国にも帰れず、
行くところもないまま、さ迷ってた俺の気持ちなんてな！」

苛立ちを憎しみに代えるように、ガンクはカイルに襲い掛かった。

『速い！』

カイルはガンクの素早さに驚きながらも、襲ってくる両手のナイフを避けながら彼の様子を見た。カイルはいつも、初めて戦う相手を分析する。しばらく様子を見て、弱点を見つけてから攻撃に反映させる。【静武道】の基本的な戦い方だ。

『速いだけか……』

すぐに分析したカイルはふわっと舞い上がり、木の枝に飛び乗ろうとした。

「ばあか！ 飛んでる間は無防備なんだよ！」

ガンクはそう言うと、手のひらを広げた。そこから再び細系の

束が吹き出し、宙を舞うカイルの体を襲う。

「カイル、あぶねえっ！」

ラディンは転がって身動きできないまま、悔しげに叫んだ。細系の束は剣を持つカイルの腕に絡み付き、その体は木の枝を通り越して向こう側に着地した。カイルの右腕は吊られた格好になり、ガンクは笑いながら長い舌を出した。

「そらみる！ もうお前はなぶり殺し決定だな！」

そう言って笑うガンク。カイルは右腕と共に固定されてしまった剣を振って切り離そうとしたが、何故か切っ先は系の束を滑るばかり。

『切れないのか？』

カイルの気持ちを読んだように、ガンクはにやりと笑った。

「そんなに簡単に切れるわけないだろ？ コレは俺の手製の糸だからな。あきらめな！ お前はもう逃げられない！」

勝ち誇った顔でいるガンクに、カイルはにやりと笑った。

「それは、どうかな？」

「ほざけ！」

ガンクは細系を握ったままナイフをかざしてカイルへと突進した。カイルは少し右腕に力を入れて強度を確認すると、再び近くの枝に飛び、また違う枝にと飛び回った。糸はまるでゴムのように、強い強度のまま伸びる。

「逃げても無駄だぞ！ お前はすでに、俺の手の中にある！」

ガンクは長い舌を揺らしながらカイルを追った。だが、カイルの動きに翻弄され、苛立ったガンクは自分の細系の束を握った。

「もう鬼ごっこは終わりだ！」

そう言い、勢い良く引つ張った。はずだった。

「っ！ んっ？」

びくともしない細系を辿るガンクの目が見開かれた。

ガンクとカイルの死闘！

「なんだこれはあぁっ！」

いつの間にか、ガンクとカイルを繋ぐ細糸束は木々の間を蜘蛛の巣のように張り巡らされ、ガンク自身の身体にも巻き付いていた。

「随分と頑丈な糸を作り出せるようになったもんだな！　だが、これでお前も身動きが取れなくなった！」

カイルは木の枝に立って見下ろしている。

「ふんっ！　こうなったら、これは捨てるしかないな！」

ガンクはカイルを睨みながら見上げ、細糸を握る手を顔の辺りまで上げ、左手に持ったナイフでザクツと切り落とした。

「何っ！」

驚くカイルの下で、身体に巻き付く糸をいとも簡単に切り落とすていくガンク。

「さあ、これで俺は自由だ！」

ガンクは両手を広げて舌を出し、嘲笑った。

カイルの腕に巻き付いている糸は、さっきも試した通り、切れるわけもなく、散々伸ばした糸が締め付けを増し、右腕は血の気を失いつつあった。

「わははは！　これは俺が作り出したモノ。　そう簡単に切れてもらっては困るんだよ！」

勝ち誇った顔でナイフを構えたガンクは、その自由になった体でカイルへと襲い掛かった。

「くっ！」

剣で応戦するカイルだったが、力の入らない右腕を利き腕でない左でカバーするリスクは大きかった。

「どうしたどうした？　そんなに弱かったんですか？　先輩っ！」

剣がぶつかり、目の前で弾ける火花。　カイルは足を滑らせて地

面へ落下した。

「っう！」

その身体は、地面すれすれの所で止まった。宙を揺れるカイルの頭上からガンクの声が降った。

「危ないところでしたねえ、先輩！」

木の枝に座って見下ろすガンクの手には、しっかりと細系の束が握られていた。カイルは地面に落下する直前に、ガンクに捕まったのだ。

「くそっ！」

もがいたところで、身体は虚しく宙を泳ぐだけ。吊り上げられた右腕は、既に感覚が無くなっていた。カイルはガンクを睨んだ。「おお、怖い怖い。綺麗な顔が台無しですよ！」

ガンクは手際良く細系を枝に固定すると、カイルの前に降り立った。その顎を撫で上げ、いやらしく微笑むガンクに、カイルは渾身の頭突きを食らわせた。

「ぐああっ！」

「汚ねえ顔を近付けるな！ ハゲ！」

「ハッ……！」

ガンクの目が見開かれた。フードが外されたガンクの頭部は、まだ二十歳前だというのに額は異様に広く、にじむ汗に輝いていた。養成学校時代から、ガンクはそうからかわれていた経歴があった。

「そっ、それは禁句だぞ！ てめえ〜！」

ガンクの手がカイルの胸ぐらを掴み上げた。

「すんなりとは殺してやらねえからな！」

怒りに震える声で睨みをきかせたガンクの平手がカイルの頬を打った。そこが赤く腫れる間もなく、腹に拳を叩きつけ、防戦する左手はもはや何の助けにもならなかった。

「ははははは！ ざまあみるー！」

さも楽しげに拳や蹴りをカイルの身体に叩きつけ、まるでサンドバッグのように揺れるカイルの体。

ガンクの足がカイルの脇腹を捉えたとき、カイルの口から一際大きな声が上がった。ガラオルとの対決の時に負傷した脇腹は、まだ癒えていなかった。

「うああっ！」

「？」

苦痛に歪む顔。腫れあがった頬。唇からは一筋の赤い血が流れ落ちていく。

「なんだ？ もう怪我でもしてんのか？」

ガンクは、脇腹の様子を見ようと、カイルの服の裾を捲り上げようとしました。

「ガンク！ それ以上カイルに触れるな！」

「！」

ガンクの視線の先には、ラディンが立っていた。彼の息は上がり、その額からは汗がにじみ出ている。ふらふらと立っている足元には、さつきまでラディンの身体を拘束していた細糸が力なくとぐるを巻いて落ちていた。

「ほう、縄脱けの術を使ったのか？ そういえば、得意だったもんな、お前」

特に驚いた様子もなく冷たい視線を送るガンクに、ラディンは輝きを讃える瞳で睨んだ。

「クセになるから本当はやりたくねえんだけどな、お前のやり方が気に食わねえんだよ！」

口だけはどうとでも動くが、ラディンの身体はまだ充分に動ける状態ではなかった。

『さて、どうするか……』

ラディンは力なくだらりと下がる腕に力を入れて感覚を確かめた

が、わずかに震えるだけだった。自由なのは、ダメージのなかった片方の腕と両足。

「なんとかガングの動きを封じなきゃ……!!」

ラディンは隙を探りながらじつとガングを睨みつけていた。なかなか動きだそうとしないラディンに、ガングはふつとにやけた。

「まあ、その身体で俺に敵うと思う心意気だけは、認めてやるよ!」そしてラディンに向き直り、歩き始めた。

長い舌を揺らしながらゆっくり近づいてくるガングを睨みながら、ラディンは動けずにいた。

その時、空気が裂ける音と共に乾いた音が林のなかに響いた。

「ぐあっ!」

突然ガングが地面に倒れこみ、そのまま気を失った。

「カイル!」

ラディンが驚いて見る先に、カイルが右腕を吊られたままで大きく揺れていた。カイルは吊られたまま自らの体を揺らし、ガングを背後から襲い、その足が、見事にガングの延髄を捉えたのだった。

「かはっ!」

衝撃で血を吐くカイルに駆け寄り、ラディンは動かせる腕でカイルを縛り付ける細系の束を外そうとした。だが、深く食い込んだ細系の束は指一本も許さなかった。

カイル負傷……そしてラディンは……

「くそっ！取れねえ！」

思うように動かない自分の体と、なかなか緩まない細系の束に焦るラディンに、カイルが震える声で言った。

「ラディン……」

カイルが傷だらけの左腕で指す方を見ると、倒れているガンクの近くに、彼のナイフが落ちていた。

「そうか、あいつのナイフならもしかしたら！」

ラディンは急いでナイフを拾うと、カイルを縛り付ける細系にあてた。乾いた音とともに、細糸はいとも簡単に切れ、カイルの身体は力なく地面に落ちるようにラディンへと倒れこんだ。

「カイル！ 大丈夫かつ！」

カイルの顔を覗き込んだラディンは、その痛々しい傷に息を飲んだ。

「とにかく手当てをしないと……！」

運ぼうとするラディンに、カイルが踏ん張った。

「ラディン……俺は大丈夫だ……」

そしてふらつきながら自力で立つと、右手を数回振って、血の循環を促した。ドス黒い右腕は、まだ冷たいままだ。カイルは、動かせる左手で落ちている自分の剣を拾うと、懐にしまった。

「俺は先を急いで。手当てなんてしてる暇ないんだ！」

そのまま歩きだそうとしたカイルだったが、すぐに膝を着いてしまった。

「カイル！ 動いちゃだめだ！ そんな身体で、行こうとするなんて……殺されに行くようなもんだぜ！」

「だけど！ 行かなくちゃならないんだ！」

腫れた顔で見上げるカイルに、ラディンは説得するように言った。「あの二人が向かってんだろ？ あいつらも強いから、絶対大丈夫

だ！ 逆にお前が行ったら足手まといになるだけじゃねーか！ 仲間のことを思うなら、無理するんじゃないよ！」

するとカイルは目を丸くして、ラディンをじっと見つめた。

「な、なんだよ？」

思わず赤くなって言うラディンに、カイルはふつと微笑んだ。

「お前が、仲間のことを思うなら、なんて言うからだ」

「ばっ！ そんなこといいんだよ！ とにかくそんな身体で戦うとか言っな！」

ラディンにも、何故こんなことを言うのか分からなかったが、目の前のカイルの事を心配に思うことは確かだった。カイルは自分の身体の限界を感じながら、かろうじて声を出した。

「……じゃあ、あいつらのこと、頼んでいいか？」

「俺、に？」

戸惑うラディンに、カイルは小さく微笑んだ。

「あいつらだけでも大丈夫だろうけど……な」

そしてカイルは、気を失って倒れた。

「カイルっ！ カイル、しっかりしろっ！」

ラディンはカイルの身体を支えて声を掛けたが、もう答えはなかった。

その頃、サクとシリウはガラオルのアジト近くに着き、様子を伺っていた。

小さな洞穴の入り口には、二人の見張りが退屈そうに立っている。それ以外は鳥のさえずりと風の音に和む、静かな山の中だ。

「突っ込むか？」

今にも飛び出していきそうなサクの肩を押さえて

「サク、もう少し様子を見ましよう！」

と言いながら、シリウは後ろを気にした。ラディンを心配して

引き返したカイルが心に引つかかるのだ。そんなシリウに、サクは明るい声で言った。

「カイルなら大丈夫だ！ あいつはあんなハゲに倒れる奴じゃないぜ！」

「気付いていたんですか？」

驚くシリウに、サクは鼻をこすった。

「匂いがした！ あいつ、養成学校にいた時、なんか目について仕方なかったんだ。いつもズルいことばっか考えてたから、一度ぶん殴ってやろうと思ってた！」

サクは拳を打ち合せた。いつも真正面から立ち向かうサクにとっては、苛立つ対象だったのだろう。シリウはそんなサクに笑った。

「カイルに任せておけば大丈夫でしょうね？ 僕たちは、これからのことを考えなくては！」

シリウはカイルの事が気掛かりだったが、眼鏡を上げて気持ちを切り替えた。カイルはサクとシリウに託してラディンを救いに行った。以前なら考えられない事だった。彼も変わってきたということだろう。

その時、後ろの方で草むらが揺れる音がした。

「カイルか？ 敵か？」

サクとシリウは身構えた。すると、二人の前に勢いよく現われたのはラディンだった。

「おっ！ お前っ！」

「カイルは？」

驚く二人に、ラディンは足早に近づいて見張りの様子を伺った。

「カイルは大丈夫だ。今サツフウル村に居る」

「ケガをしたんですか？」

詰め寄るシリウに、ラディンは眉をひそめて指を唇に当てた。

「しっ！ あいつは強い！ 安心しろ、大丈夫だ！ 俺たちには、

やることがあるだろ？」

「俺たち？」

サクが繰り返すと、ラディンは

「あんたには借りをたくさん作っちゃった。俺に出来るかぎりの協力は、させてもらおう！ こっちだ！」

ラディンは二人を手招いて素早く腰を上げた。

「どこに行くんだ？」

見張りのいる洞穴から離れていくラディンに、サクは怪訝な顔で尋ねた。ラディンは振り向かずに行った。

「あの出入り口から行っても、敵を大勢群がらせるだけだ。裏から出た所に、儀式をする場所がある！ ガラオルはそこで、獲物に月のパワーを貯えさせてから頂くつもりだ！」

「よく、知ってますね？」

シリウの問いに

「俺は実際に見たことは無い。けど、その場所は神聖な場所だからって、掃除とかやらされたし。話は仲間だった奴らに聞いたんだ。皆、気味悪がってたけどな」

『仲間だった……』

シリウは、ラディンの言葉を心の中で反芻すると、嬉しそうに微笑んだ。

「そうですね、では、急ぎましょう！」

サクも強く頷き、三人は木々の間を身軽に避けながら、山を上り始めた。やがて中腹辺りでラディンは立ち止まり、二人に

「あそこだ」

と指し示した。山の斜面を切り崩してちょっとした広場があり、祭壇らしき棚と、両脇には豪華な花が飾られている。

何人かの男たちがうろつろと準備に追われているが、ガラオルの姿は見えない。

「今夜、あそこで捕まえられた男は儀式を与えられ、ガラオルの胃のなかに入る。あんたたちが、さらわれてった男とどういう関係

か知らないけど、助けるんだろ？」

ラディンが淡々と言うと、シリウが静かに言った。

「サクの父親なんです」

ラディンはハッと息を飲んでサクを見た。

「悪い！ 変なこと言っちゃったか？」

サクはにっと笑って見せた。

「いや！ 気にすんな！ で、助け出す方法はあるか？」

ラディンは頷いた。

「あんたたちは、ここで待っていてくれ。そして合図を送るから、

タイミングを見計らって助けだせ！」

そう言って立ち去ろうとするラディンに

「あなたは？」

と言うシリウの言葉に、ラディンは振り返って親指を立てて微笑んだ。

「必ず隙を作る！ あとは、あんたたち次第だぜ！」

そして、ラディンは姿を消した。

スパイ：ラディン！

「サク、ここはラディンの事を信じるしかなさそうですね」
シリウの言葉に、サクは素直に頷いた。

「ここまで連れてきてくれたんだ。嘘は言っていないと思う！」
そういうサクの瞳には決意の輝きが灯り、目の前の広場を見据えていた。

ラディンは再び洞穴の前に来ると、見張りの前に姿を現した。

「お前！ ラディンじゃねーか！ どこ行ってたんだよ？」

驚く見張り番に、ラディンは白々しく頭をくしゃくしゃとかきむしりながら笑った。

「女の仲間にやられて、林の中で気を失ってたんだ！ そうしたら、アジトが崩壊してるしよ、なんかあったのか？」

「あったも何も、女は取り返されるし、アジトは破壊されるし、散々だったんだぜ！ 今からボスが儀式をするんだ！ 新しい獲物を手に入れて、また若さと力を補充するんだと！」

「へえ〜！ そりやすげえ！」

目を丸くして驚くラディンに、見張り番が耳打ちした。

「俺も聞いた話なんだけどよ、そりやあもう凄い凄惨な食事シーンらしいぞ」

「へえ〜！ そりやあ、ボスらしい！ 俺らみたいなチキンには従うしかねーよな！」

ラディンは大げさに驚いてみせ、見張り番たちにねぎらいの言葉を掛けると、悠々と洞穴の中へ入っていった。

『潜入成功！』

口笛を吹きながら奥へと進むと、横穴から明かりが漏れていた。

そつと覗くと、奥の暗がりには、鎖に繋がれた人影が力なく座り込んでいる。 蠟燭の炎に揺れながら、生気の無い身体は微動だにしていなかった。 ラディンは、彼がさらわれたサクの父親だと確信した。 その時

「なんだ、ラディンじゃねえか！」

以前ヤツハの見張りをしていたドウラスとマナスカの二人が、ラディンに声を掛けた。 驚いて振り向くラディンに、マナスカが大きな鼻を近づけた。

「行方不明になったって聞いたから、俺はてっきり死んだと思ってたんやぞ！」

ラディンは無駄に大きな声で言うマナスカに眉をしかめながら

「あいつ、死んでるのか？」
と尋ねた。

「いんや！ 殺さずに、生きてまま喰らうんだと！ いや、喰われたら死ぬかあ！」

大声で笑うマナスカに、相方ドウラスが拳を降らせた。

「うるさい！ 隣にボスが居るんやぞ！」

ハツとした表情で口をつぐんだマナスカ。 ラディンは、人質となつているサクの父親に近づいた。

「おい、おめえ！」

制止しようとするドウラスに、ラディンは

「まあまあ。 顔を見るぐらい良いだろ？」

と笑い、かまわずに部屋の奥へと入った。

ザクラスに近づいたラディンは、暗がりであなだれる彼の後ろ髪を引っ張り、無理やり顔を上げさせると、傷だらけの顔をしながらぎらつかせた瞳でラディンを睨んだ。 その輝きに射ぬかれたように、ラディンの胸がキリキリと痛んだ。

『さすが、サクの父親だ。 気迫がすげえ……』

「まだ元気がありそうだな」

とわざとらしく言ったラディンは後ろの二人に背を向け、ザクラ

スに囁いた。

「必ず助ける！ 信じる！」

「？」

何か聞きたげな表情をしたザクラスだったが、彼も状況を理解して、小さく頷くだけで止めた。ラディンは再び無造作にザクロスの髪の毛を引っ張り、顔をうつむかせた。そして振り返ると、何食わぬ顔をして部屋の外へと出た。

「どこに行くんや？」

ドウラスが尋ねると、ラディンは面倒くさそうに頭を掻きながら答えた。

「一応、ボスに挨拶しなきゃなんないだろ？ しばらく留守にしていたんだから」

「そうやな。何発かこぶが出来ることは覚悟しておいたほうがええで！」

半ばにやけながら、マナスカは可哀相に、と肩をすくめた。

『コブだけで済めばいいけどな……』

ラディンは小さくため息をついて部屋を後にした。そしてゆっくりと歩いて隣の部屋の前に立った。もう一度小さくため息をつくと、堅く閉ざされた扉を叩こうとした。

カチャリ。

「！」

ラディンが触れる前に扉が少し開き、中から灯りが漏れた。

「ラディンか。今まで何をしていた？」

ガラオルの落ち着いた野太い声が、中から響いてきた。再び扉は軋みながらゆっくりと開き、奥のソファに深々と座るガラオルの姿が見えた。

吸い込まれるように部屋の中に入ると、静かに扉が閉じられた。

『クロウチ……』

ラディンの後ろで、静かに扉を塞ぐように立つ男、クロウチ。この儀式の責任者だ。ガラオルが一目置き、信じている人物。全身ローブで覆った正装をして、細い眼鏡の奥にある細い瞳は冷たく光っていた。

『いつ見ても薄気味悪い男だぜ』

胸の内で悪態をつきながら、ラディンはゆっくりとガラオルに近づいた。そして頭を垂れると

「すみませんでした！ 女の仲間によられ、しばらく動けなかったんです！ でももう大丈夫です！ またあいつらを見つけたら必ず仕留めてみせます！」

ガラオルは目を細めて肩肘付き、ラディンの話を聞いていた。ラディンが顔を上げると、ガラオルはにやりと笑った。

「お前の性で、女は逃がすわアジトは壊されるわで、かなりの損害を受けた。それが、どういう意味か分かるよなあ？」

ガラオルはゆっくりと立ち上がった。

一閃！

ラディンの身体が部屋の壁に打ち付けられた。

「ぐっ！」

地面に膝まづくラディンの頭を踏み付け、ガラオルは唾を飛ばした。

「頭が高えんだよ！」

グリグリと顔を地面に踏み付けられ、ラディンの頬と額から血が滲みだした。

「お前、今度失敗したら、これだけじゃあ済まねえからな！」

ラディンの頭が軽くなり、ガラオルの足が離れた途端、その横っ腹に鈍痛が走った。数回転がったラディンは、ヨロヨロと両膝を付いて土下座をした。

「すみませんでした！」

叫ぶように言うラディンを冷たく見下ろしながら、ガラオルは再

びソファに座った。

「許すのですか？」

クロウチが抑揚の無い声で言った。するとガラオルはまた肩肘をついて答えた。

「これから俺様の将来が決まる大事な儀式をするって時に殺生なんかしたら、縁起が悪いだろ？　こんな奴の命なんて、いつでも取れる。　な、ラディン！　お前はそれを知っているから、ここに戻って来たんだろ？」

ラディンは震えた身体で、まだ額を地面に付けていた。　無言で冷たく見下ろしていたクロウチは

「ガラオル様の申す通りに」

静かにそう言うと、部屋の隅にある台で水を器に注ぎ、一枚のラハウの葉をはらりと水面に浮かべた。　ラハウは温めると薫りが生まれ、瞑想をする心を落ち着かせる効果がある。　世間一般的によく使われるものだ。　器の下に火を点けると

「では、そろそろ瞑想を始めましょう」

と、ラディンを無視して静かにガラオルの方へ向き直した。

「……………いてて……………」

部屋を出たラディンは、ズキズキと痛む脇腹と頬を擦りながらも、少しにやけていた。

『これでよし……………！』

瞑想を始めたガラオルは、小一時間ほどは動かない。　ラディンは痛む体をおして、なおも奥に進み、祭壇のある広場に出た。

もうすぐ夕刻。

夕陽が、周りの景色を紅く染めている。　何もなければ、いつまでも見つめていたい絶景だ。

ラディンは、祭壇の周りで忙しそうに働く男たちにねぎらいの言葉を掛け、チラリと向かいの斜面を見た。　そして、周りにばれなようにそつと親指を立てた。

『後はタイミングだけだ!』

ラディンの合図は、木々の間で息を潜めていたサクとシリウの目にはしっかりと届いていた。

「必ず助けだすぜ!」

ラディンの血だらけの顔を見ながら、サクは拳を握り唇を噛んだ。
「はい!」

シリウは静かに眼鏡を外し、懐に忍ばせた。二人とも、ラディンが自分の身を犠牲にして潜入してくれたことに胸を痛めた。

「あいつの気持ち、無駄にはしねえ!」

二人は少しの隙も見逃すまいと、じつと広場を見つめた。

やがて陽が落ちゆき、辺りは次第に暗くなっていった。広場に設置されている燭台には次々に灯りが灯され、祭壇がぼんやりと照らされて幻想的な風景を生み出した。そんな中を、クロウチが祭壇へと歩み寄り、鎮座した。

「あいつは……?」

「儀式の進行をする人でしょうか?」

サクとシリウが見守るなか、洞穴から人の固まりが現れた。両脇を抱えられ、引きずるように連れ出されたザク拉斯だった。

「とっつ」

「サク!」

シリウが辛うじて飛び出そうとするサクの肩を押さえた。

「気持ちは分かりますが、もう少し我慢してください!」

必死で止めるシリウに、サクは唇を噛み締めながらゆっくりと腰を下ろした。ザク拉斯を抱える一人はラディンだ。

「むやみに動くのは危険です! ラディンが隙を作ってくれるはず。もう少し、様子を見ましよう!」

ラディンたちに連れられ、祭壇の前まで来ると、ザク拉斯はクロ

ウチに促されて壇上に上げられた。

ランディたちはうやうやしくその場を離れ、膝を付かされたザクラスの頭上で、クロウチの手が踊った。

すっかり陽が落ちて広がった夜空には、満月が眩しく浮かんでいる。クロウチは月を仰ぎ見て両手を上げた。

「大いなる神秘の力を持って、この者を清めたまへ！」

そして大きくのけぞると、体中から気を発した。その気迫は突風のように辺りに飛び散り、ランディたちは腕で自分を守った。

『なんて気迫だよ？』

ランディは間近で見るクロウチの力に、胸がざわついた。どうにかして、ザクラスを解放しなくては。そうしている間にも、ザクラスは苦しみはじめ、手足を繋ぐ鎖がジャリジャリと踊った。

「あいつ、何を！」

サクは身を乗り出した。

「何かで読んだことがあります……月の力で身を清め、生け贄を捧げる儀式があると……全身が熱くなり、精神が抜け、脱け殻になった体だけを伝説の獣ゴルムが喰らうと、特定の人物にその能力が乗り移るのだと……まさか一流族であるガラオルという人間が、その儀式を行うというのか……。まさかこの世に、それが実在するとは！」

シリウの頬を汗が伝った。眼鏡を外しているの、いつもよりも視界が良好だ。親指ほどのザクラスの様子がはっきりと見える。そこまではないサクも、父親の苦悶の表情はしっかりと伝わっていた。

「くそっ！ まだかよ？」

苛立つサクの前で、ザクラスは身をよじって苦しんでいる。

その時、祭壇の横にある花瓶が大きな音を立てて倒れた。

祭壇崩壊！

「！」

驚くクロウチの視線の先に、足を上げたままのラディンが立っていた。口角を上げて細い目で見るラディンを

「神聖な儀式を、壊すおつもりですね？」

と冷たい目で射ぬくように見つめ、クロウチは両手を軽く下げて立っている。その足元には、クロウチの呪文が解かれて苦しみから解放されたザクラスが、息を荒げて倒れこんでいる。

「なあにが神聖な儀式だ！ こんな、ぶち壊してやるよ！」

「お前、何を言ってるのか分かってんのか？」

仲間の男が背後から羽交い絞めにしようと襲ったが、ラディンは体を曲げて簡単にかわすと、顔面に拳を叩き入れた。

「ぐあっ！」

と顔を押しさえて倒れこむ男。

その時、ラディンの傍らにサクとシリウが立った。

「待たせたな！」

「おせえよ！」

拳を握りながら言うサクに、悪態を吐くラディン。

「お前の合図が分かりにくいんだよ！」

とサクが返した。だがその顔は、信頼を寄せた穏やかな表情だった。その奥で、シリウは眼鏡を上げて微笑んだ。サクは拳を打ち合わせた。

「暴れてもいいんだよな？」

「存分にどうぞ！」

「よっしゃ！」

サクは嬉しそうに数回両拳をぶつけ合わせた。

「ガラオルは今、瞑想に入ってる。しばらく動けないはずだ！」
ラディンの言葉に、周りの男たちにも緊張が走った。

「お前ら、どこから来たんだ？ ラディン、裏切ったのか！」
「ただで帰すわけにはいかないな！」

それぞれに武器を握りサクたちを囲む男たちに、迎え撃つ準備は万端だった。なにしろ爪を噛んでずっと待ち続けていたのだから。
「ガラオル様は、やはり、あなたを許すべきではなかった」

クロウチの冷たく静かな言葉に、三人がその方を見ると、クロウチは足元に転がるザクラスにナイフを向けていた。

「あなた方のお目当てはこの男でしょう？ 儀式が壊された今、この男はもう使えない」

「じゃあ、円満に返してもらおうか！」

サクは言うが早い、クロウチに突っ込んでいった。

「くっ！」

いきなり向かってくるサクに意表をつかれたクロウチは、辛うじてサクの拳を避けて後退した。

「わっ！ 私はっ、人質にナイフを向けていたのですよっ！」

戸惑うクロウチに

「そんなの関係あるかっ！」

とさらに向かっていくサク。

「サクはそういう人なんですよ」

二人が離れたのを見計らって、シリウがザクラスの手足を繋いでいた鎖にナイフを突き刺した。

「はっ！」

気合いを入れると、鎖は重い音を立てて跳ね切れた。

「サクが……何故ここに……？ ゴホッ！」

言い掛けるザクラスの口から鮮血が吐き出された。シリウはザクラスの腕を取り、肩に担いで立ち上がった。

「詳しい話は後です！ 今はここから逃げることに専念してください！」

静かに、けれど強い口調で言い、懐から錠剤を取り出して飲ませた。

「強壯剤です。その場しのぎですが、村まではなんとか持つはずですよ」

シリウたちの後ろでは、ラディンが迫りくる男たちを退けていた。「援護する！でも長くは持たないからな！早く行け！」

そう言っただけで祭壇に立つ装飾品を、力任せに棚ごと倒していくラディン。足を取られて倒れる男の後頭部を蹴り、背後から襲う男には肘を打ち込んだ。

「すみません！ラディンも、無理はしないでくださいね！」

シリウはザクラスを肩に担いだまま広場を飛び出し、林のなかに消えていった。

「待てっ！」

クロウチが目を見開いて、シリウたちの背中に向かってナイフを投げた。だがそれは、横から放たれた気の弾によって打ち落とされた。

「間違えるな！お前の相手はオレだぜ！」

サクがクロウチの頬を殴り、弾き飛ばした。

「くああっ！」

軽がると吹き飛び、転がったクロウチの身体は、粉々に破壊された祭壇に土煙を上げながら突っ込んだ。

「くっ……！」

クロウチは後ろ手に何かを探った。

「！サク、気を付けろ！」

ラディンがクロウチの不審な動きに気付き、サクに声を掛けた。「何か仕掛けるつもりだ！」

サクとラディンは背中合わせに立ち、同時に周りの様子を伺った。男たちもシリジリと二人に近づいていく。

その時、一瞬空気が冷え、風が止まった。

「なんだ？」

サクの体に悪寒が走った。

その時、倒れた祭壇の棚が盛り上がり、山のようになったかと思うと、中からゴミを押しつけるように巨大な獣が現れた。

「んだよ、あれ！」

驚くサクに、クロウチは腰を抜かして座ったまま、にやりと答えた。

「ゴルム。この祭壇の守り神です。起こしたが最後、すべてを破壊し食い尽くすでしょう！ あなたたちもこの祭壇も全て、チリとなり消滅するのです！」

ゴルムの肢体には茶色い剛毛が覆いつくし、首元まで裂けた口からは唾液と共に、鋭い牙が月明かりに輝いている。体全体に力をこめて咆哮を上げると、空気が歪み、木々が震えた。その咆哮の振動は、林の中を走るシリウにも届いた。

シリウはザクラスの身体をしつかりと支えながら、振り向いた。

『サク……ラディン……』

ザクラスは息を荒げ、立っているだけでもつらそうだ。シリウは心を鬼にして、一路サツフル村へと向かった。

祭壇の広場では、男たちが次々と洞穴へと逃げこんでいた。ゴルム出現に、自分たちではどうすることもできないと感じ取ったのだろう。ガラオルが騒ぎに気付いて現われる前に、サクたちもここから逃げ出さなくてはならない。

「一気に片を付けるぜ！」

サクとラディンは顔を見合わせて拳を握った。ゴルムはその長い腕を振り下ろし、二人はソレを素早い動きで避けた。ゴルムは二人に照準を合わせたように、追い回った。太い足から伸びる爪が、広場の床に深々と傷を残し、破片を散り放つ。

「ははははあっ！ 逃げる逃げる！ そして自分のしたことを悔

いるのだあつ！」

クロウチは狂ったように笑っていた。その顔面に、ゴルムが蹴り上げた瓦礫が当たり、下敷きになると、それ以上物言わなくなつた。

「逃げ回るのにも飽きたな！」

「サク！ お前、余裕だな！」

ラディンが額に汗をたらしながら、飛んでくる瓦礫やゴルムの爪を避けながら言うと、サクはラディンに笑った。

「ラディン！ 少しだけ時間作れるか？」

「えっ？」

「オレに時間を作ってくれ！ 動き回ってちゃあ、力が溜まらねえ！」

軽がると障害を避けながら、サクがラディンに頼んだ。ラディンはぐつとゴルムを睨み

「分かった！ 任せとけっ！ 頼むぜ、サク！」

と、迫りくるゴルムの前に立ちはだかった。

「いざ目の前になると、でかいなあ！」

ラディンの三倍はあるつかという巨体に一瞬ひるみかけたが、目を閉じて精神を集中させるサクを見つめ、信じることにした。

「お前の相手は俺だあ！」

半ばヤケになって叫ぶラディンを、ゴルムは巨体を揺らしながら追う。ラディンはあるだけサクがゴルムの視界に入らないように、少しずつ遠くへと誘導していった。

ガリッ！

「うわあっ！」

足元の瓦礫が崩れ、ラディンの体がバランスを失った。

「っ！」

倒れながら慌てて振り返ると、目の前にゴルムが迫ってきていた。口元から流れ落ちる唾液が、ラディンの傍らに落ちる。

「サク！ もう限界だぞー！」

ラディンは両腕を顔の前で覆い、やがて訪れるだろう強い衝撃を覚悟した。

「ラディン、充分だ！ 行くぜゴルム！ 爆拳剛馬あー！」

バッケンゴウマ

ゴルムの背後からまばゆい光と共に赤い馬の形になった気の固まりが襲い、ゴルムの頭は溶けるように吹き飛ばされた。

「！ すげえ……」

ラディンが首のないゴルムを見上げていると、その体がバランスを失い、ゆっくりとラディンの上へと倒れはじめた。

「えっ！ うわあっ！」

慌てて逃れ、立ち上った土煙が治まると、その向こうにはサクが技を放った両手を構えたまま立っていた。

「サク……お前って、すげーんだな！」

ラディンが呆然と言うと、サクは背を伸ばし鼻をすすって笑った。ラディンはサクに駆け寄ってその肩を叩いた。

「よし、この調子でガラオルの野郎もやっつけて……」

「ダメだ！」

「？ なんてだよ？」

ラディンが意表を突かれた顔をすると、サクは固い表情をして言った。

「今はダメだ。 あいつの中には、まだヤツハの父ちゃんが生きてる。 今倒すわけにはいかねえ！」

「だけど！ 今ガラオルは瞑想中で動けねえはずだ！ このチャンスをみすみす逃すのかよ？」

ラディンが焦って言うと、サクはラディンを強い眼差しで見つめた。

「それでも！ 今はダメだ！」

「サク……」

ラディンはサクの真つすぐな視線に言葉を失った。

「今のオレは、ヤツハの気持ち分かる。オレもヤツハと同じように父親をなくして、あいつの中に生きてると知ったら、オレもま
ずは父ちゃんを助けたいと思う！」

「分かったよ……勿体ねえけど……仕方ないよな。また絶対、チ
ヤンスはあるよな！」

ラディンが元氣付けるようにサクの肩を叩くと、彼はにっと笑っ
た。

「じゃあ、早くここから逃げ出そうぜ！」

サクとラディンは、今や瓦礫の山となった祭壇の広場を後にした。

しばしの静かな時……

サクとラディンがサツフル村に着いたころには、夜が明け始めていた。

戦闘の時にラディンが負った傷が思ったより深く、それに疲労も重なって、移動に時間が掛かったのだ。昇り始めている太陽にうつすらと照らされながら二人がやっとのことで村に近づくと、村の入り口に人影が見えた。

「？」

眩しさにしばたかせながら目を凝らすと、その人影も二人に気付いたように走ってきた。

「サク！ ラディン！」

駆け寄ってきたのはヤツハだった。

「ヤツハ！ ちゃんと留守ば……んがっ！」

いきなりサクの顎にヤツハの膝が入った。

「何やってんのよ！ カイルもザクラスさんも大ケガだし、あんたたちはなかなか帰って来ないしっ！ 心配したんだからねっ！」

息まくヤツハに呆然となるラディンの前で、吹っ飛ばされたサクは涙目で

「仕方ねえだろ？ 色々大変だったんだ！」

と強気な表情をした。ラディンもサクの傍に寄り添い

「俺が思ったより深手で、戻るのが時間がかかっただけなんだ。

心配かけて悪かった」

とヤツハに弁解した。するとヤツハは、サクとラディンの間に寄りかかるようにその肩を抱き締めた。

「でも良かった！ 無事で！」

その瞳には、うつすらと涙が滲んでいた。サクとラディンは驚いた顔をしたが、すぐに顔を見合わせて微笑んだ。

「さ、皆待ってる！」

ヤツハが二人を立たせて先導しようとする、ラディンの足が止まった。

「ラディン？」

「俺は……」

視線を落として躊躇するラディンに、サクが微笑んだ。

「何やってんだよ？ 行くぞ！」

「でも俺、お前らの借りを返しただけで……」

「オレたち、仲間だろ！」

ラディンの言葉を遮って、サクは言った。

「借りとか貸しとか、もう無いんだよ！ あー腹減った！ 早く行こうぜ！」

「サク……」

驚いた顔をしたラディンに、ヤツハも微笑んだ。

「たくさん料理を作って待ってたのよ！ パンナさんの手料理は、すごく美味しいんだから！」

ヤツハに手を引かれ、ラディンは歩き始めた。

「あ、料理の前に、パンナさんのげんこつが先だと思うけどね」

いたずらっぽく笑うヤツハに、サクは慌てて頭を抱えた。

「パンナ……って？」

ラディンの問いに、サクが苦い顔をして答えた。

「オレの母ちゃん……」

数刻後……

たくさん料理が並んだテーブルの前に、大きなたんこぶをこしらえたサクとラディンが並んで座っていた。

「さああなたたち、たくさん食べておくれよ！」

パンナが満面の笑みで言った。

彼女は帰ってきた二人の顔を見るなり

「あなたたちはっ！ 心配ばかりさせて……」

と大きな拳で鉄拳を与えたが、すぐに二人を抱き締めて無事を喜んだ。

『なんで俺まで……』

たんこぶをさすりながらふてくされるラディンの横で、サクは何事もなかったかのように料理を口に運んでいる。

「あんたの話はヤツハに聞いたよ！ 色々助けてくれたそうじゃないか！ あたしからも礼を言うよ！ ありがとう！」

パンナはラディンにそう言って、部屋に響くほど明るく大きな声で笑った。

「で、でも俺、最初は敵で……」

恐縮するラディンに、パンナは笑い飛ばした。

「昔のことなんていいんだよ！ さ、早く食べないと、サクに全部食われちゃうよ！」

「え？ ……ふっ！」

ラディンは横で両頬いっぱい頬張るサクを見て、思わず吹き出した。

「どうしたの、ラディン？」

ヤツハが不思議そうに聞くと

「さっきまで命懸けで戦ってきた奴の顔じゃないかって」

とラディンが答えた。 ヤツハは首をかしげて笑った。

「サクはそういう人よ。 いつだって緊張感がまるで無いの」

「んだよ！ オレだって緊張感くらい」

口から食物を飛ばしながら話すサクに、またパンナのげんこつが飛んだ。

「行儀の悪いことをするんじゃないよ！ 全くこの子は！ ちゃんとしたしつけもしてくるって言うから兵士養成学校へ行かせたのに、全然変わってないじゃないか！」

パンナは顔をしかめた。 サクは叩かれた頭をさすりながら、それでも料理を口に運んでいる。 と、ラディンを見ると

「あれ、ラディン食わないのか？ 美味いぞ、これ！」

そう言つて、目の前の大皿から骨付きのモモ肉を取り、手渡した。ラディンは終始押され気味にいたが、すぐに微笑むと、サクと同じように料理にかぶりついた。疲れきった体に染みこむような良質のたんぱく質の旨みが口中に広がった。

「う、美味しい！」

脂を口の周りに付けたまま驚いて言うラディンに、サクは笑った。「なっ！」

「たくさんあるから、遠慮なく食べな！」

パンナも嬉しそうに微笑み、ラディンは大きく頷いて、サクと競争するように空いた腹を満たしていった。

「……ん」

静かな部屋のなか、カイルは目覚めた。

頭がぼんやりしたまま、周りを目だけで確認しようとする、目の前に人影が現れた。

「カイル、目を覚ましたのですね？」

カイルの左側に、シリウが座っていた。心配そうな顔で覗き込んでいる。気付くと、シリウはカイルの手を握り締めていた。

汗ばんだ温もりが、カイルの左手を包んでいた。

「……シリウ……俺は……？」

カイルは自分がどうしてここにいるかを思い出すのに、しばらくの時間を要した。

「ガングを倒して……それから……はっ！」

カイルは慌てて起き上がるうとしたが、シリウに両肩を優しく押さえられた。

「まだ、寝ていてください。大丈夫。もう終わりましたから」

シリウは落ち着かせるように優しく微笑んだ。

「ザクラスさんは？」

再び寝かされながらカイルが聞くと、シリウは頷いて言った。

「命に別状はありません。今、隣の部屋で寝ています。ここは
サツフウル村の医者の家です。あなたは、ラディンに連れられて
ここに来たようです」

シリウのゆっくりとした説明に、カイルは力なくベッドに沈んだ。

「そうか……俺は何も出来なかつたんだな……」

シリウは首を横に振った。

「いいえ。そんなことはありませんよ。あなたは、僕たちを先へ
行かせてくれたじゃないですか。もう少し遅かったら、間に合わ
なくなるところでした。でも……」

シリウは口調を落として眉をしかめた。

「あなたにこんな怪我をさせてしまった……僕の方こそ、申し訳な
くて……」

カイルの右腕には、肩から指先まで包帯が巻かれ、体の至るところ
にあざが出来、顔はまだ少し腫れていた。シリウはカイルの頬
を優しく撫でた。

「ヤツハにも、バレてしまったみたいですね？」

「ああ……そのことなら、出かける少し前にもう。それに、パン
ナさんにも」

「そうだったんですか。ヤツハが一人でああなたの看病をしてくれ
ていたみたいですよ。皆にバレないようにって」

「ヤツハに礼を言わなきゃ……」

カイルは苦笑した。シリウは優しく微笑み

「本当に、心配しましたよ」

と言いながら、少しその瞳には涙が滲んでいた。

「シリウ……」

「良かった。目を覚ましてくれて……」

カイルはその言葉に胸が熱くなった。

「ありがとう」

シリウはフツと笑うと微笑み、カイルにゆっくりと近づいた。

カイルの退院祝い

「カイル〜！ 無事かあつ？」

いきなりけたたましい声と共に扉が開き、シリウは弾けるように座り直した。

飛び込んできたサクを捕まえ損ねたヤツハが、二人を見て気まずい顔をした。

「こらあつ！ いきなり入ったら、二人の邪魔でしょうが！」

改めてサクの腕をつかんで出ていこうとするヤツハを、カイルの言葉が引き止めた。

「ヤツハ！ いいよ。俺も、皆と話がしたい」

「ほら、なっ！」

サクが無邪気に笑うと、ヤツハはその頭を軽く叩いて

「だから少しは気を遣いなさいっての！ 良かった！ カイル、気が付いたのね？」

と、嬉しそうにカイルのベッドの傍らに近づいた。その顔には少し疲れが浮かんでいたが、はちきれそうな笑顔に吹き飛ばようだった。

サクは、シリウに助けられながらゆっくりとベッドに座るカイルを見て

「だいぶやられたみたいだな！」

と笑った。だがそれは、心底安心した心から出た言葉だった。

カイルは苦笑した。

「あの男は、ガンクだったんだ。養成学校に居た頃より随分強くなっていた」

カイルは包帯に包まれた右腕をそつとさすった。

「ガンクって、あの悪知恵だけは働いてたガンクの事？ あいつ、退学になってからガラオルの手下なんかになってたの？」

ヤツハが驚いて言う

「オレもシリウも気付いてた。まさかカイルがこんなに追い詰められるとは思わなかったけどな」

サクは苦笑した。二人とも、もしガンクならカイル一人で充分だろうと思っていたのだ。まさかガンクがそこまで実力を上げているとは思っていなかった。

「僕たちの思惑が甘かったんです。ホントに申し訳ない……」

シリウはうなだれていた。カイルは苦笑し

「シリウたちの性じゃない。俺が勝手にラディンの加勢をしようと思っただけだから」

と慰めた。ヤツハは

「そうよ。カイルの怪我はもう大丈夫。後は痛み止めを使いなから、自己治癒力に任せるしかないわ。とにかく、まだ絶対安静だからね」

と微笑みながら、カイルの傍らに立って薬の調合を始めた。

「カイル、痛みはどう？」

と聞くと、カイルは少し顔をしかめた。

「まだ少し……指先の感覚が鈍いんだ」

「だいぶ締め付けられてたみたいだったし。しばらくは無理しないように！」

強い口調で言いながら、ヤツハはカイルに飲み薬を与えた。

「ありがとう、ヤツハ。ずっと看病していてくれてたみたいで……」

おとなしく薬を飲み、礼を言うと、ヤツハは顔を赤らめた。

「いいのよ、そんなの……あたしに出来ることはこれくらいしか無かったから……」

「そう言えば、ラディンは？」

カイルの言葉に、三人は扉の方を見た。誰も居なかったが、皆は気配を感じていた。ヤツハが小さく笑ってパタパタと走っている、廊下を覗き込むと、そこには壁に寄りかかって静かに俯いているラディンがいた。ヤツハが明るく

「ラディンもさ、中に入っておいでよ！」

と声を掛けると、ラディンはゆっくりと顔を上げ

「あ、ああ……」

と戸惑った表情をしながら部屋の中へ入った。

「ラディン、俺をここまで連れて来てくれてありがとう。よくこの村って分かったね」

カイルが微笑むと、ラディンは照れたように頬を赤らめ、視線を外して

「いや、俺はただ、借りを」

と言いかけると、サクがその肩を抱いて言葉を遮った。

「貸し借りの話は無しだつて言つたろ？ ラディンはオレたちの仲間なんだから！ 皆もいいだろ？」

三人の答えは決まっていた。

「勿論」

「ああ」

「喜んで！」

それぞれが頷き、声を掛けた。

「お前ら……いいのかよ？」

ラディンは驚き、皆の笑みを見ながら鼻を擦ると、やっと照れ笑いを浮かべた。

それから数日の間、カイルの状態を見ながら、四人は病院とパンナの世話になった。

サクはラディンと訓練に明け暮れ、シリウは穏やかに読書をし、カイルはヤツハの手当てを受けながら、怪我の回復に専念した。

四人はソラール兵士養成学校を出てから、しばらくぶりの穏やかな時を過ごした。

やがてカイルが歩けるようになり、退院をした夜、パンナは手料理を用意してカイルを迎える用意をした。

サクやシリウ、ラディンに交じって、先に具合もすっかり良くなったザクラスも、パンナにあれこれと指示されてバタバタと動き回っている。

「俺も病人だったんだから……」
と言つと

「男が泣き言を言うんじゃないよ！ あんたの命の恩人を、そんな気持ちで迎える気かい！」

とパンナの怒号が飛んだ。大黒柱が悲惨なものである。やがてヤツハに付き添われてカイルがやってきた。足取りもしっかりしている。顔の腫れもすっかりひき、少しのあざが残るだけだ。

「すごい！」

家に入るなり飾り立てられた部屋の様子に驚くカイルを、パンナは早速テーブルへと促した。

「まったく、男は雑でしようがないよ。本当はもつと綺麗に盛り付けるつもりだったんだけどね……」

パンナは奥から大皿を持ってきた。

「自分たちでやりたいって言うもんだから……」

見ると、大皿の上には大きなケーキが乗っていて、色とりどりのフルーツやクリームで不均一に盛り付けられた中央には、チョコペンで書いたようなメッセージが、いびつな文字と絵で飾られていた。

『おかえるなさい、カイル』

「ふっ！ 一体誰が書いたんだよ？」

笑いながら言うカイルの前で、サクとラディンが肘を突きあっている。

「でも、ありがとう。こんな俺のために。嬉しいよ！」

満面の笑みは、今までサクもシリウもヤツハもラディンだって見

たことのない眩しさを放った。初めて会った時の仏頂面とは打って変わって、カイルの笑顔は柔らかく優しいものになっていた。

それは、カイル本人も気付いていないことだった。

「お帰りなさい、カイル！」

ヤツハが言うと、サクとシリウ、ラディンも笑顔で頷き、カイルの退院祝いは和やかに始まった。

皆パンナの手料理に舌鼓を打ち、久しぶりに集まった仲間たちは盛り上がった。ザクラスも久しぶりに帰ってきた息子サクの冒険話に、興味深く聞き入った。

ザクラス自身も若いときは兵士をめざし訓練をしていたのだが、腰を痛め断念するしかなかった。男としては、出来れば兵士として強くありたいもの。それが出来なかった心の痛みは、サクへと受け継がれた。ザクラスからそんな話を聞いたわけではなかったが、サクは心のどこかで察知していたのかもしれない。ザクラスは、サクが元気に話す姿を目を細めて見つめていた。

やがて料理も無くなりかけた頃、シリウが切り出した。

「では、カイルがもう少し回復したら、ヴィルスへ向かいますよ。学校へはまだ何も連絡していませんし、明らかに進路も外れていく……きっと心配しています」

「そうだな。でもガラオルのことは、どうするんだ？」

ヤツハも緊張した顔をした。シリウは眼鏡を上げた。

「今の僕たちには、知識が足りません。それに実力も。ここは焦らずに、養成学校に戻ってレベルをアップさせることを最優先したほうがいいと思うんです」

その時、カイルは強く言った。

「俺のことなら、もう心配ない。明日からでも出発出来るよ！」

「ちよつとあんたたち！ 一体何の話をしてるんだい？ また危険なことをしようとしているんじゃないだろうね？」

パンナが焦りながら言葉を挟んだ。するとザクラスが彼女の肩

を押さえた。

「パンナ。彼らはもう立派な経験をしてきている。もう子供じゃないんだ。見守ってやろうじゃないか！」

「でもあんた……」

心配そうに眉をひそめるパンナに、ザクラスは深い輝きを持った瞳でしっかりと頷いた。そしてサクたちを見ると、ゆつくりと話した。

「私のかつての夢を君たちが叶えてくれることは、とても嬉しい。だが、今君たちがしようとしていることは、大人でも難しいことだ。生半可な努力では絶対に叶えられないだろう。ただ、こんなに深い絆に繋がれた仲間たちがいる。一人じゃないことを心に留めなさい。そして……」

ザクラスは微笑んだ。

「私たちを実の親だと思つて、何かあれば頼つてきなさい」

サクはじつと父ザクラスの顔を見つめていた。シリウたちの心に、ザクラスの言葉が深く染み込んだ。

「そうか、サクたちには、帰る場所があるんだ……」

ふとしたラディンの呟きに、一同は息を飲んだ。それに気付いたラディンは、わざと肩をすくめて唇を尖らせた。

「俺には帰る場所が無いからさ」

そうおどけて言うラディンに、サクがわざと大きな声で

「そんなのこれから作ればいいじゃないか？ 養成学校に入るのが嫌なら、ヴィルスの町に住めばいい。仕事だつてすぐに見つけられるだろうしさ！」

とフォローした。

「そうよ！ ヴィルスになら、あたしたちはいつだつて会いに行けるし！」

ヤツハも微笑んだ。すると、パンナが口を開いた。

「そうだ！ 行くところが無いなら、うちに居れば？」

サクが驚いて母パンナを見た。

「何言つてんだよ？」

パンナはザクラスと顔を見合わせて微笑んだ。

「この村に居てくれれば、心強いしね！ 実際、頼りになる若者が少なくて困ってるんだよ」

教養や稼ぎを求めて栄えた町に行く若者は多い。サツフル村も、そんな状態だった。そして、帰って来る者も多くない。若く強い者が居てくれれば、万が一、流族や獣たちに村を襲われても対処できる。

そんな状況も話しながら、ザクラスとパンナはひとつの案を出したのだった。

ラディンは二つの選択を迫られ、困惑していた。

「考えがまとまるまで待つてるからさ！ ゆっくり考えたらいいさ！」

サクがラディンの肩をポンと叩くと、安心したように頷き

「そうする」と答えた。

静かで穏やかな夜が村を包んでいた。

衝撃の別れ

その夜、カイルは物音に気付いて目が覚めた。

「？」

隣のベッドで眠るヤツハを起こさないようにそっと起き上がると、部屋を出た。隣の部屋では、サクとシリウが寝息をたてている。

カイルはそつと家の扉を開くと、周りを見渡した。すると、月明かりに照らされて、庭に横たわった大木に座る人影が目についた。
『ラディン？』

ラディンはベンチ代わりの大木に座り、じつと夜空を眺めていた。カイルは彼に近づいてその横にそつと座ると、同じように夜空を見上げた。

「カイル？」

気付いたラディンは少し驚いたような目をしたが、すぐにふつと笑って再び見上げた。

「綺麗だな」

カイルが静かに言うと、ラディンは後ろに手を付いて微笑んだ。

「こんなにゆつくりと夜空を眺めたのなんて、初めてかもしれないねえ」
カイルはちらとラディンを見て俯いた。

「俺は、いつも眺めてた。そうしている間は、心が解放される気がしていたから……」

「そつか。こんな宝を知らなかったのが勿体ない気がするよ」

ラディンは笑った。その瞳には、星が映ったように輝きが灯っていた。穏やかな表情だった。

カイルは再び見上げると呟いた。

「まだ、迷ってるのか？」

ラディンは黙っていた。カイルは静かに話し始めた。

「養成学校で……俺はずつと一人でいたんだ。誰かとするむ気なんて塵とも思ってた。一人ですべて終わらせる気でいたから」

ラディンは黙って聞いていた。

「けど、あいつらと出会って、最初は面倒臭いだけだったけど、そのうちに何ていうか……心が落ち着く感じがし始めたんだ。旅を始めて、同じ目的を果たすために助け合う。本当は俺、危険な事に周りを巻き込むのが怖かったんだと思う」

ラディンはいつの間にか、少し後ろからカイルをじっと見つめていた。

「今になって思うんだ。仲間って、いいなって」

カイルの横顔は、月明かりに照らされて輝いていた。その頬には、柔らかい笑みさえ浮かんでいた。

「それに、ラディン」

カイルは少し振り向いて、照れたように言った。

「お前に『仲間の事を思うなら』って言われた時、衝撃を受けた」

「そう?」

「俺にも、仲間だっという心があったんだって、気付かされてさ」

ラディンはふっと微笑み、そっと呟いた。

「……あんたってさ……」

「?」

カイルが振り向くと、ラディンはフツと微笑んだ。

「まあ、どっちでもいいや!」

そして勢いよく立ち上がると両手を挙げて大きく伸びをした。

大きく息を吐くと、両手を腰に当てた。

「やっぱ、俺はまだまだだな!」

「ラディン?」

カイルはラディンの背中を見上げた。

今まできつと苦労を重ねてきた背中だ。隆起した筋肉が、服の上からでも容易に分かる。幾多の困難を乗り越えて来たであろう後ろ姿をぼんやりと見ていると、ラディンがため息と共に言葉を吐き出した。

「俺は、やっぱりあんたたちとは行けない」

「えっ！　ここに残るってことか？」

カイルは振り向かない背中に尋ねた。　ラディンは首を横に振った。

「いや……俺はここに残ることもしない」

「！　じゃあ……？」

カイルは思わず立ち上がった。

「どこに行くつもりなんだよ？」

その言葉は、放浪の身であるラディンには厳しい問いかけだった。ラディンは空を見上げた。

「さあ……わかんねえ……けど……」

ラディンはゆっくりと振り返った。

「必ずまた会えるさ」

「ラディン……？」

ラディンのまっすぐな視線を受けて、カイルは何故か胸がざわついた。　ラディンはそれを見透かしたように微笑んだ。

「俺は、男でも女でもどっちでもいいと思ってる。　今は、シリウがあんたを好きな気持ちができる」

「？　何言ってる……」

カイルの言葉は、ラディンに遮られた。　ラディンの唇に、カイルのソレが優しく包まれていた。

「！　っ？」

カイルは弾かれるように後退りをした。

「なっ！　何っ！」

ラディンは真っ赤になって唇を拭うカイルを、頭を掻きながら苦笑して見つめた。

「！　ごめん、つい」

「つつっ！　ついって！　お前っ！」

泡を食って涙目になって言うカイルに、ラディンは優しく言った。

「俺、もつと強くなるよ。　そして、あんたを迎えに行くから」

「え？　なんだって？」

カイルは動揺し、ラディンの言葉が全く頭に入らなかった。ラ
ディンはゆっくりと後退りをした。

「じゃあな」

カイルはやっと、うつすらとした理解が出来た。

「ラディン！」

彼はシートと口の前に人差し指を立ててウインクした。

「皆によろしく言っておいてくれよ！」

「ラディッ……！」

思わずラディンの裾をつかもうとしたカイルの手は、宙を待って
いた。彼の姿は、夜の闇と共に消えてしまっていた。

「……ラディン……勝手な奴……」

カイルは唇にそっと触れた。ほんの何秒かの間、感じた感触は、
カイルの胸を熱くしていた。カイルにとっては、初めての体験だ
った。

今にもこぼれ落ちそうな満天の星空が、ずっと立ち尽くすカイルを
見下ろしていた。

「ラディンが居ねえ！」

サクの大声で、カイルは目が覚めた。

隣で眠っていたヤツハはすでに起きてベッドには居ない。カイ
ルは横になったまま、綺麗に畳まれた毛布をぼんやり見つめていた。
昨夜の事は夢だったような気がしていたが、再び響き渡るサクの
声に、強引なほどに現実に引き戻された。

「ラディン！ どおこだあー？」

ゴチン！という、ヤツハかパンナが食らわせたであろうゲンコツ
の音に、サクの気配が一瞬小さくなった。

いつもの賑やかな朝だ。

賑やかな……ただ違うのは、ラディンがもう居ない事だった。

ソレを知っているのは、まだカイルだけだ。カイルはゆっくり起き上がり、軽い頭痛を感じて左手で顔を覆った。小さくため息を吐くと、意を決して部屋を出た。

すると、ヤツハがディックと共に必死な顔をして駆け寄ってきた。「カイル！ ラディンがどこにもいないの！ ディックにも探してもらってるんだけど、気配さえ無いみたいで……」

あちこち探し回ったのだらう、息が上がっている。

「外も探しましたが、どこにも居ません！」

シリウが窓から中を覗きながら言った。

「荷物も無いみたいなんだ！」

サクはキョロキョロしながらラディンを探している。カイルは静かに息を吸った。

「ラディンは旅に出たよ」

「えっ？」

驚いたヤツハがカイルを見つめた。サクとシリウも動きが止まり、カイルを凝視している。

「今、なんて言った？」

「ラディンは、旅に出たんだ。ここにはもう居ない」

「なんでだよ？」

サクがカイルの胸ぐらをつかんだ。

「オレたち仲間じゃなかったのかよ？ なんで何も言わずに別れなきやなんないんだよ？ おかしいだろ！」

「サク！」

シリウが慌てて窓枠を飛び越えて部屋の中に入り、サクの肩を引いた。

「カイルを責めても仕方ないでしょう？ ラディンは、カイルにそれを伝えたんですね？」

カイルは俯いて答えた。

「ああ。『皆によるしく言うておいてくれ』と」

「なんだよそれっ！」

サクがシリウの制止も振り払うほど、カイルに突っ掛かった。

カイルはなすがままに揺らされ、シリウとヤツハはサクをカイルから引き離すことが精一杯だった。 やつこのことで引き離し、シリウの腕に阻まれたサクは、息を荒げて言った。

「なんで引き止めなかったんだ？」

カイルはハツと顔を上げた。 だがすぐに視線を落とし、眉を寄せた。

「きつと、二人は似てるから……」

ヤツハが静かに言った。

「カイルもラディンも、ずっと一人で生きてきた。 何か通じるものがあつたのよ、きつと……ね？」

優しく尋ねるヤツハに、カイルは切ない顔を見せた。

「皆ごめん。 その代わり、必ずまた会うと約束してくれた」

「ラディンのことだもの！ またひよっこり顔を出すわよ！」

わざと元気な声を出して、ヤツハはサクとカイルの顔を覗いた。

「……分かった」

ふてくされたように呟くサクの肩を掴んでいたシリウの手から、安心したように力が抜けた。

「ふう……ラディンはきつと大丈夫です。 今まで強く生きていたんですから。 それに僕たちはまだ、やる必要があります。 気持ちを切り替えましょう！」

シリウはサクの肩を叩いてキッチンへと向かった。 ヤツハも踵を返して後を追った。 まだ立ち尽くすカイルに、サクがそつと言った。

「いきなり手を出して悪かったな。 オレもビツクリしてさ」

少し頬を赤らめてモジモジしながら言うサクに、カイルはフツと微笑んだ。

「いや……本当なら、あいつも皆に一言残すべきだったんだ。 でも、強く言えなかった……」

サクはカイルの肩をポンと叩いて笑った。

「また、忘れた頃に現れるさ！　今までだってそうだったもんなっ
！」

サクは吹っ切るように伸びをすると

「あー！　腹減ったあ〜！」

とキッチンへと向かった。　その後ろ姿を見ながら、カイルは一

安心したように息をついた。　そして、気持ちを振り切るように皆
の後を追った。

サツフル村から……一路ウイルスへ

出発の日。

村の外門まで見送りに来たのは、パンナやザクラスだけではなく、サツフル村に住むほとんどの村人たちが、サクたちの旅立ちを見送ろうと集まった。

「村の財産でもあるザクラスを救ってくれた恩は決して忘れない。また近くに来たら、必ず立ち寄ってくださいね！」

村長ワンダが村人たちの代表として言葉を送った。

「あんたたち、絶対に無理はしないで仲良く元気でやるんだよ！またいつでも帰っておいで！美味しい料理をたくさん用意して待ってるからね！」

パンナは、あるうことが自分の息子サクではなくヤツハとカイルを抱き締めた。

「おばさん……」

涙目のヤツハを見て、カイルまでももらい泣きしそうになった。パンナはそんなカイルの頭をポンと優しく叩き、微笑んだ。カイルはそつとそのふくよかな胸に顔をうずめて、涙を拭いた。シリウとサクは、その様子を優しく見守っていた。

「こちらこそ、お世話になりました！」

シリウの言葉に、サクたちは大きく手を振って村を出た。

見送る村人たちの中、子供たちの間にちよこんと座るディックがいた。

「いいんですか？ ディックを残して……」

シリウの心配げな問いに、ヤツハは微笑んで答えた。

「ええ。皆優しい人ばかりだし、ディックの事を理解してくれて、子供たちとも仲良くなったもの。それに養成学校に連れて帰っても、きつと入れてはくれないわ」

ヤツハは、ディックを村の番犬として置いていくことにしたのだ。

最初はヤツハの言葉が理解できなくて、ディックは哀しげな声を出してついでこようとしたが、ヤツハの根気強い説得で、ようやく理解した。ヤツハは一度だけ名残惜しそうに振り向いたが、もう小さな固まりに見えるだけだった。

「あの子はここで暮らしたほうが幸せだと思うの」

「そうだな！ オレも苦手な犬と離れられてほっとしたし！」

サクは両手を頭の後ろに組んで口笛を吹いた。

「その割りには、結構いいコンビだったけど」

カイルが笑うと、サクはくるつと振り向いて怒った。

「あいな！ あいつは、オレがラディンと縛られてた時に一人で逃げ出した奴だぜ！」

「あの時は、僕たちにヤツハの居所を知らせようとしてくれたんですよ。それに、すぐに引き返してサクを迎えに行っただしょう？」

「なんだよ！ 皆でディックの味方になるんだな！」

シリウの言葉に口を尖らせてすねるサクを、カイルとヤツハは楽しそうに笑った。

「そんなことより！」

突然のシリウの叫びに似た声で、三人は驚いてシリウを見た。

「な、なによ、いきなり？」

ヤツハが言うと、シリウは眼鏡を光らせて言った。

「何故ラディンはカイルにだけ旅立ちを伝えていったのでしょうか？」
「えっ？ 今、それ？」

ヤツハは目を丸くした。もうとつくの昔に終わった話題だっただけに、サクもきょとんとした顔でシリウを見た。その中でカイルは冷や汗を垂らしながらも、平静を装った。シリウはカイルを怪訝な目で見ながら言った。

「僕は、カイルがラディンと二人だけだったということに腹を立てているんです！」

「それって、ただの嫉妬じゃない……」

ヤツハは呆れたため息をついた。カイルはそっとヤツハの後ろ

に隠れて、気配を消していた。

「だって！ 夜の夜中に二人きりですよ！ 僕としてはですねえ

」

「はいはい！」

ヤツハはシリウの言葉を遮りながら、後ろに隠れているカイルの腕を引つ張り、シリウに押しつけた。

「シリウがカイルを愛しているのは分かったから！」

「ヤツハっ！」

真つ赤になつて言うカイルに、ヤツハは目を細めた。

「カイルだつて素直にならなきゃダメよ！」

人差し指をカイルの鼻先に立てて笑うと、先を歩くサクを追った。

「全く……ヤツハは強引なんだから……」

「僕は嬉しいですけどね」

シリウは嬉しそうにカイルの肩に手を乗せて引き寄せた。

「シリウ、俺は……っ」

カイルはその手を避け、頬を赤らめて何か言おうとしたが、シリウは優しく笑い、遮るように

「さあ、ヴィルスまで急ぎましょう！」

と皆を急ぎ立てた。

「お前らが遅いんだろ？ 早く行くぞっ！」

と迷惑そうに言うサクを囲みながら、四人はワイワイとヴィルスへの帰路に着いた。

「サクたちが帰ってきた！」

「てつきり死んだものだと言ったのにな！」

「怪我一つしてないって！」

「一体どうやって？」

ソラール兵士養成学校の中では大きな騒ぎになっていた。サクたちが入っていった校長室の前には人だかりが出来、長い旅から無事に生還した彼らを一目見ようとしている。

「いいから、授業に戻れ！」

何度もゴンドル風紀教官の怒号が響いたが、生徒たちの群れが散らばることはなかった。

「お前ら邪魔だっ！ どきやがれい！」

野太い声と共に、生徒たちをかきわけて巨体が現れた。 ナトウだ。

「サクが帰ってきただと？」

顔に脂汗を垂らしながら、まだ疑惑の表情をしている。

「本当に帰ってきたのか……？」

ナトウはぴたりと閉ざされた扉を見つめ、信じられないという顔で呟いた。

外の喧騒を遮断された静かな校長室の中では、サク、シリウ、ヤツハ、カイルが並んで立たされ、ファンネル校長からの有難い説教がこんこんとされていた。

「なんでオレたち、怒られなきゃならないんだよ？」

俯いたままサクが眉をしかめて隣のシリウに囁くと、シリウもまた苦笑で返した。

「仕方ありませんよ……色々心配かけてしまったんですから」

「そこ！ 聞いておるのかっ？」

「はっ、はいっ！」

サクとシリウは弾けるように返事をした。

「まったく！ 連絡ひとつよこさないで、散々心配かけおって！ 実力を試すためとはいえ、軽々しくお前たちを行かせたことを何度後悔したか！ 大切な生徒であるお前たちを、たった一度の試験に合格しただけで安易に信じてはならんと、心底胸を痛めておった！

――」

「ファンネル校長！ もうその辺りで。 この子たちも、生半可な経験をしてきたわけではないのですから。 無事に帰ってきたことだけでも有難く思わなくては」

脇に控えていたミランが見かねて助け船を出した。

『ほっ！』

四人が心の中で息をついた。 ファンネル校長は小さく息をつくと、和やかな表情になった。

「そうじゃな。 小言は終わりじゃ。 - -アルコド国から手紙が着いた。『国を救ってくれたこと、大変感謝している』と。 私からも礼を言おう！ よくやったな！」

校長は、サクにアルコド国からの手紙を渡した。 白い簡素な封筒に、しっかりとシーノ王の名前が書かれている。 四人は微笑みあった。

「しばらくは旅の疲れをいやすが良い。 来週から、従来の生活に戻し、自身を高めるために励むこと。 良いな？」

「『』はい！」「『』」

帰還、そして……

四人はファンネル校長の説教から解放され、ホツとしながら校長室の扉を開けた。

その途端、生徒たちの歓声が沸いた。

「サクだ！」

「シリウ！ カイルもいるぞ！」

数々の言葉がサクたちに飛び掛った。 そんな中

「ヤツハあつ！」

と、小柄の少女がヤツハに飛びついた。

「心配してたんだよ！ ホントに、生きて帰ってきて良かった！」

「サリナ……！」

ヤツハは涙目で抱きついていてサリナを抱き締め返した。

サリナはヤツハの二年後輩で、まだ小さな体だが頑張り屋だ。

いつもヤツハの後ろにくっついて授業を受けていた、ヤツハにとって可愛い後輩の一人だ。 今回のアルコド国の件で、ヤツハの事をひどく心配し、一緒に行けなかった事を後悔していた。

「心配かけてごめんね！ ただいま、サリナ！」

サリナは申し訳なさそうに言うヤツハを見上げ、やっと微笑みを見せた。

「サクう！」

「はっ！ お前、まだ居たのか！」

サクは目の前に立ちただかる黒い巨体、ナトウを見上げて嬉しそうに笑った。

「とつくに試験落ちしてると思ってたぜ！」

「なんだとおっ！」

激昂するナトウに、サクは身構えた。

「やるかっ！」

「当たり前だつ！ お前がいなくて体がなまるところだつたぜ！」
ナトウも嬉しそうににやけた。 暴れだすであろう二人を予想して、生徒たちの輪が広がった。

「こらっ！ ここをどこだと思ってるんだ！ 校長室の」
動武道の教官であるサライナが二人を制止しようとしたが、その肩を軽く引かれ振り向いた。

「こ、校長……？」

見下ろすサライナ教官の肩に手を置いたまま、ファンネル校長は微笑みながら首を横に振った。

「好きなようにやらせておきなさい。 久しぶりに会ったんじゃ。

見なさい、二人とも嬉しそうな顔をしているではないか」

「で……ですが」

ガシャーン！

どこかの窓ガラスが割れる音がした。 途端に、ファンネル校長は冷や汗を垂らした。

「ま、まあ、ほどほどにしておくように言っておきなさい」

そして、逃げるように部屋へと入って行ってしまった。

「こらー！ サク！ ナトウ！ 物を壊すな！」

サクとナトウを追うサライナ教官を見送りながら、生徒たちの喧騒の中シリウとカイルは微笑み合った。

「さ、行きましようか」

二人は風のように人混みをすり抜け、その場を離れた。

「しばらくは、賑やかになりそうですね」

シリウは参った、という顔をして人だかりに振り向いた。

「カイル！」

呼ばれたほうを見ると、ミランが少し離れた所に立っていた。

「ミラン先生……」

ミランはカイルを手招きして、医務室へと招いた。

「さて、僕は久しぶりに部屋でゆっくりしましようかね」

シリウは察知すると、独り言を言いながら自分の部屋へと向かうとした。すると、後ろから黄色い声が追いかけてきた。

「シリウ先輩があんな所に！」

「先輩！」

成績優秀なシリウは、それなりに人気もある。女子生徒たちが、団体となってシリウに走りよってきたので、彼は慌てて踵を返して逃げ出した。

「無事で良かった……」

ミランは静かな医務室に入ると白衣を着て椅子に座り、足を組むとかつたるそうな仕草でタバコを吸いはじめた。促されてカイルも対面の椅子に座ると、ミランはじっとその顔を見つめながら長く白い息を吐いた。

「変わったねえ」

「？」

「表情が柔らかくなった」

「そう……ですか？」

カイルは少し赤らんで、自分の頬を押さえた。ミランはフツと笑った。

「外では、色んな経験をしてきたんだろ？」

その言葉に、カイルは背筋を伸ばした。

「はい。今回の旅で、本当にたくさん事を学びました。あ、それと……」

カイルの脳裏にはミランに伝えたいことがたくさん浮かび、少し戸惑った。一呼吸置いて、一番大事だと思ったことを口にした。

「あの……俺の事……シリウとヤツ八には、知られました」

「そう」

ミランはたいして驚いた顔もなく、聞き返した。

「つらかったかい？」

カイルは首を横に振った。

「いえ……不思議に、なんだかホツとしたというか……つらくはなかつたです」

「ん。そうか」

ミランは少し微笑んで頷くと、立ち上がって窓辺に立った。

「じゃあ、もう心配ないね」

ミランは窓から外を見ながら、呟くように言った。

「？」

「正直、私一人ではこの秘密は重すぎた。やがてバレた時に、お前を守りきる自信がなかった。マチ姉さんのようにね……」

「ミラン先生……」

ミランは振り向き、カイルに微笑んだ。

「これからは、何があるかと味方になってくれる仲間が出来たね？」

カイルは息を飲んでミランの話聞いていた。カイルの秘密を

たった一人で背負い、守ろうとしてくれた事を、カイル自身は軽く考えていた。そこまで負担にしていたとは思っていなかったのだ。

カイルは立ち上がった。

「ミラン先生、俺はもう大丈夫です。皆が居てくれるから」

その言葉を聞いて、ミランは安心したように優しい微笑みを見せ

た。カイルもまた、感謝を込めて微笑み返した。

その時、窓の外で爆音が聞こえた。

「何があつたんですか！」

急いでカイルはミランの隣に歩み寄って外を見た。階下のグラ

ウンドでは、サクとナトウが激しく戦いあっていた。

「あいつ……」

そう言うカイルの口元には笑みがこぼれていた。その横顔を見

ながらミランはクスリと笑い、カイルの頭を軽く撫でた。

「？」

「マチ姉さんの育て方は間違っちゃいなかった」

いとおしそうに見つめるその目は、眼鏡を取ればマチそっくりだ。

ミランはすぐに視線を外に向け、空を仰ぎ見た。

「私にもね、いたんだ」

「何がです？」

「……息子……」

ゆっくりと噛み締めるように答えたミランを、カイルは驚いた顔で見つめた。

「ちょうどカイル、あんと同じくらいの年になるかな……生きていたら……」

「生きて……いたら……？」

カイルは胸騒ぎに襲われた。ミランは遠くを見た。

「捨てたんだ。私は、自分の子供を捨てた……」

ミランは、自分の過去の話を始めた。

ミランの過去……カイルとヤツハのデート

「まだ若い頃、私は荒れていてね。夜な夜な街で遊んでは男を引っ掛けていた。そんなとき、間違いを起こした。身籠ったんだ。まだ十八歳だった。親にも相手にされなくなってた私に、子供なんて育てられるわけがない。家族には散々責められ、答えを求められた。それは必然的に、【墮ろせ】という脅迫だった。けれど私は、たった一人で痛みをこらえて産んだ。血を拭き取って抱きかかえた腕の中の息子は、そりゃあくしゃくしゃの顔をして、おとなしく眠っていた。その寝顔を見ていたら、私では母になれないと急に怖気づいちゃった。だから、夜中、人がいなくなった公園の端っこに、タオルにくるんで置き去りにした。……私は、自分の子供を捨てたんだよ……」

「ミラン……先生？」

カイルは言葉を無くしてミランを見つめていた。ミランの頬には一筋の涙が伝い落ちていた。それに気付いたミランは、慌てて指先で拭くと苦笑した。

「首の後ろに、カモメみたいなアザを持ってた。ソルティヤなんて名前まで付けちゃった。今でもあの子が生きているのか、死んでしまったのかもわからない。けれど、私は生き続けてしまった。その罪を背負うために、医者を目指したのさ」

ミランは白衣の襟を正した。

「少しでも、生ける命を救いたくてね……詫びにもならないけれど……」

ミランはいつも勝ち気で、怪我をしてきた生徒に罵声を浴びせながらも治療の腕は確かだった。内心は、自分に頼ってくれるのが嬉しかったのかもしれない。生徒達を自分の息子の様に思いやり、

見守っていたのだろう。

カイルはじつとミランの顔を見つめていた。どんなに考えても、かけてやれる言葉を見つけられなかった。ミランは自虐的にフツと笑い

「変な話をしちまったね。ちょっと思い出ししまっただけさ。忘れてくれ。カイルには関係ないことだ」

ミランは弾けるようにカイルから離れ、ベッドのシーツを整頓しはじめた。

「カイル」

「は、はい？」

ミランはカイルを見ずに手を止めた。

「シリウは、あんたを一目見たときからずっと気に掛けていた。何かあったら、彼を頼りなさい。決して、一人だけで無理をするんじゃないよ」

カイルは胸の動悸を感じた。

「シリウが……？」

「シリウだけじゃない。サクモヤツハも、信じること。出来るね？」

命令口調で言うミラン。眼鏡の奥で光る瞳を証拠に、いつものミランに戻っていた。カイルは安心し、頷いて微笑んだ。

グラウンドでは、サライナ教官が必死にサクとナトウを制止していた。そのうち風紀教官のゴンドルが現れ、罰と説教の嵐が二人を襲うのだろう。

ソラール兵士養成学校には、再び騒がしい風景が戻っていた。

翌日。

シリウは朝から図書室で読書をしていた。

学校に帰ってきてからずっと、シリウは図書室に入り浸って何か調べものをしている。そこへカイルがやってきた。それに気付

き、書物から目を離したシリウの目は、いつも通りの優しい雰囲気
を漂わせていた。

「おはよう、カイル。もう体の調子はいいんですか？」

カイルは頷いてシリウの対面に座った。若さ故だろうか、一晚
眠っただけで随分体が軽くなっていた。慣れた場所に戻ってきた
ことが、回復を助けたのかもしれない。

「シリウこそ、すっかり休めたのか？ 腕の調子はどう？」

カイルが尋ねると、シリウはにっこりと微笑んだ。

「ええ。体調はもうすっかり戻りました。まだ肘には少し痛み
が残っていますけど、ミラン先生の腕は確かですから。しかし、
ラディンもひどいことをしますよねえ」

シリウはおどけながら、包帯に包まれている左肘を動かしてみせ
た。カイルは苦笑いをしながら、シリウの手元に山積みになって
いる本の山を見た。

「何か調べものをしているのか？」

その一冊を手にとって見ると、淡くぼやけた紺色の表紙に白文字
で【魂の行方】と小さくタイトルが載っていた。

「魂の……？」

シリウはカイルの手から優しく本を取り上げると

「ガラオルからヤツハの父親の魂を解放させる方法を探しているん
です。でも、こんな小さな図書室では、情報量が少なすぎる……」
シリウは眉を寄せた。

「何か、俺にも手伝えることはないか？」

カイルがシリウの顔を覗くように言うと、シリウは一変して嬉し
そうに微笑んだ。その時

「カイルっ！」

不意に背中を叩かれ、驚いて振り向くと、ヤツハが満面の笑顔で
立っていた。

「なんだ、ヤツハか」

息をつくカイルに、ヤツハは膨れっ面をした。

「何よ！ お楽しみのところを邪魔して悪かったわね！」

カイルはその声量に焦ってシーツと唇の前で人差し指を立てた。周りの生徒たちが迷惑そうな顔で見ている。

「邪魔じゃないですよ。おはようございます、ヤツハ」

シリウは微笑んだ。ヤツハは少しトーンを落として話した。

「シリウは本当に優しいわね。邪魔ついでにいいかな？」

「？」

ヤツハはカイルを見つめた。

「ね、今日時間空いてる？」

「えっ！ 俺？」

「そう！」

「いや、今日はその……っ！ ちょ、ちょっとヤツハ」

「シリウ、ちょっとカイルを借りるわね！」

有無を言わず、ヤツハはカイルの腕を抱えて、引きずるように図書室を出ていった。

「カイルとヤツハ、すっかり仲良しですねえ」

消えた二人の余韻に浸りながら呟いて、シリウはまた静かに書物へと視線を落とした。

「ちょっとヤツハ！ 一体どこに行くつもりなんだよ？」

「町！」

「えっ？」

引かれるままにカイルは養成学校の敷地を出て、山を下り、気付くと麓の町ヴェイルスに立っていた。

「ヤツハー？」

意図が分からず、若干息が上がりながら、カイルはヤツハに答えを求めた。

「一体どういう事だよ？」

ヤツハはにっこりと微笑んだ。

「プレゼント！」

「プレゼント？」

ヤツハは頷いた。

「そう！ 明後日ね、サクの誕生日なの！ だから、誕生日プレゼントを渡してあげたいのよ」

カイルはやつと離してくれた腕を腰に当てて、迷惑そうに顔をしかめた。

「俺は関係ないだろ？」

するとヤツハは目を丸くして驚いた。

「何言ってるのよ？ カイルだってサクにはお世話になってるでしょ？ 一緒に選んでよ！」

当たり前のように言うヤツハに押されながら、カイルは

「世話って……」

世話になつた覚えはない、と言いそうになつたが、言葉を飲み込んだ。今のヤツハの顔は真剣そのものだ。胸の前で握る細い指に力がこもっている。カイルはその心に免じて、仕方なく、という風に

「分かった」

と頷いた。

「ありがとう！ カイル！」

ヤツハは満面の笑みでカイルの腕に絡み付き、まるで恋人同士のように歩き始めた。

「ちよ、この腕！」

恥ずかしそうに言うカイルに

「イヤなの？ じゃ、手を繋ぐ？」

「どっちも嫌だ！」

逃げ腰のカイルに、ヤツハは楽しそうになおもしろがみついた。

『む……胸が当たるんだよ……』

カイルの腕に、ヤツハの胸のふくらみが伝わっている。いくら女同士でも、やはり動揺する。それを知ってか知らずか、ヤツハ

はぐいぐいと自分の胸を押しつける。

「やめろってー！」

叫びにも似た訴えに、ヤツハは笑った。　　そうこうしているうちに、二人は雑貨屋に入った。

「うわあ……」

棚の中だけでなく、壁や天井までもがファンシーなグッズで覆い尽くされている店内で、カイルはただただ呆然と周りを見渡していた。

今までほとんどモノクロの世界で生きてきたカイルにとって、カラフルで煌びやかな店内は、異世界そのものだった。

「カイルっ！　こっちこっち！」

手招きされ、フラフラしながら近づくと、ヤツハはピンク色のカチューシャを付けて微笑んでいた。　眩しさに目が眩んでいると、カイルの頭上に暖かい感触が触れた。

「ほら、見て！」

姿鏡の前でヤツハと並ぶカイルは、フワフワの帽子を被らされていた。

「わっ！　なんだこれっ！」

驚いて帽子を取ると、ヤツハは残念な声を出した。

「なんで取っちゃうのよ？　似合うわよ、カイル」

ヤツハは微笑んだ。　カチューシャに光が反射して、カイルの目がまた眩んだ。　ヤツハは目を細めるカイルに笑いながら、棚に並ぶ雑貨の品定めをしている。

カイルも手持ち無沙汰で、すぐ横にある棚から小さなぬいぐるみを取り、見つめた。　熊の形をしたソレは、愛らしい表情でカイルを見つめ返している。　フワフワの毛皮が手のひらを暖め、優しい感触に心が和む気がした。

「カイルも、シリウに何か選んであげたら？」

その言葉にカイルは戸惑い、急いでぬいぐるみを棚に戻した。

「なっ！　何で俺がっ！　シリウなんかっ！」

ヤツハは笑いながら

「まあまあ……きつと喜ぶと思うわよ！」

と、雑貨のひとつを手にして会計を済ませた。カイルはまた店内を眩しそうに見回した。

「ね、何か食べようか！」

と言うヤツハの言葉に、気付くと昼も過ぎていた。人の往来は賑やかで、町の繁栄を物語っていた。ヤツハとカイルは、一角のレストランに入った。

「平日なのに、どこもすごい人ねー！」

ヤツハは窓の外を見て目を輝かせた。

「町へはよく来るのか？」

カイルは店員が持ってきた水を飲み、ほっとした顔をした。正直、慣れないことをして少し疲れていた。ヤツハは微笑んだ。

「たまに友達とね。でも休日には来れないから、凄く混んでるのよ。今日みたいに平日なら空いていると思ったのにな……ヴィルススの町を甘く見てたわ」

残念そうな顔をして、水に口をつけた。

「俺は初めて来た」

カイルの言葉に、ヤツハは驚いた顔をした。

「今まで一度も来たことないの？」

カイルは苦笑した。

「ここに来る理由なんてなかったから。それに、そんな余裕もなかった」

カイルはずっと一人で暗い過去を背負い、ただガラオルへの復讐のためだけに生きてきた。だから、町へ遊びに行く考えなど思いつかなかったのだ。ヤツハはそれを察知して、切ない顔をした。

「あたしの父さんがアイツの中で生きていなかったら、もっと早く解決していたかもしれないわね……」

少し俯いて言うヤツ八に、カイルは驚いて首を横に振った。

「ヤツ八、自分を責めるな！ 必ずヤツ八の父さんは助ける！ それに……」

「？」

「ヤツ八の父さんのおかげで、考える時間が出た。それがなかったら多分……犬死にしていた」

ヤツ八は息を呑んだ。そこまで追い詰められていたのかと感じたのだ。カイルは安心させるように、微笑んで見せた。

「だから俺は、ヤツ八の父さんに助けられたんだと思うんだ」

ヤツ八は息をついてカイルを見つめた。

「カイルに笑顔が戻るように、あたしも頑張るから」
その言葉に、カイルは胸を打たれた。

見えない父親を追いかけた結果、大悪党の体の中に息づいているのを知って、落胆しているはずなのに。目の前のヤツ八は、ただ仲間のために元気づけようとしている。カイルは頷いた。

「お互い、頑張ろう！ 願いを叶えるために！ 俺たちなら出来るよ、きつと！」

二人は笑いあった。お互いに、本当の友達を見つけた気がしていた。

そしてさつきとは一変して肘をついてカイルを見つめるヤツ八に、カイルは怪訝な表情で尋ねた。

「何？」

「あたしたちつて、デートしているように見えるかしら？」

いたずらっぽく微笑むヤツ八に、カイルは周りを見渡した。レストランは八割の客で埋まり、誰もお互いを気にする風もなく、自分たちの私欲のために料理を楽しんでいる。カイルは不意におかしくなって吹き出した。

「何よ？」

ヤツ八が顎を上げて不機嫌そうに言った。

「いや、誰もそんなこと気にしてないんだろうなって」

するとヤツハも周りを見渡して、また顎に手を置くとため息を吐いた。

「なあんだ、つまらない！」

膨れっ面をするヤツハの前に、オーダーした料理が運ばれてきた。その途端に、ヤツハの顔がほころび、笑顔になった。

「わあい！ もうお腹ペコペコ！」

すぐにカイルの前にも料理が運ばれ、テーブルの上は美味しそうな香りに包まれた。

「いただきます！」

と満面の笑みを浮かべて食べ始めるヤツハを見ながら、カイルはクスリと笑った。

「何よ？」

気付いたヤツハが料理で頬をいっぱいにして聞くと、カイルはまた笑って言った。

「いや、サクみたいだなあって」

「えっ！ どういう事？」

目を丸くするヤツハ。

「やっぱり、好きな人に似るのかな？」

するとヤツハは顔を真っ赤にした。

「そっ！ そんなの気のせいよ！ あんな雑な食べ方なんてしてないでしょっ！」

懸命に言うヤツハが可愛らしく思えて、カイルはまた笑った。

「カイルだって、しっかりシリウへのプレゼント、買ってあるじゃない！」

ヤツハはカイルの隣の席に置いてある小さな紙袋を指差した。

さっきの店で、カイルも選んで買っていたのだ。だがカイルはニヤツと笑って

「これはサクにだよ！ ヤツハがあげて、俺が渡さないわけにいかないだろ？」

いたずらっぽく見つめるカイルに、またヤツハの頬が膨れた。

「もう！ カイルも早く食べなさい！ 冷めちゃうわよっ！」
まるで母のように急かすヤツハに
「はいはい」

と笑いながら、カイルはフォークを手にした。

それぞれの思い

「ラディン、元気かなあ？」

店から出て歩き始めたヤツハが、ふと呟いた。カイルは空を見上げた。昼下がりの穏やかな日差しが気持ち良くて、眠気を誘われる。

「元気だよ、絶対」

カイルも呟いた。ヤツハはその横顔をちらりと見て微笑み、そうね、と頷いた。

やがて二人は広い芝生の整備された公園につき、一角のベンチに座った。

「ねえ、別れるときのラディンの様子、どうだったの？ 旅立つこと、カイルにだけ伝えて行ったんでしょ？ やっぱり、すごく悩んでた？」

ヤツハはカイルの顔を覗き込みながら言った。カイルは少し困ったように黙っていた。

「正直、少し悔しかったの。できれば、私達にも一言言って欲しかったなあつて。だって仲間なんだもん……」

ヤツハは芝生の上で遊ぶ家族連れを見つめていた。

長いまつげがくるりと上を向き、女の子らしい目元。緩やかな風に、栗色の前髪が揺れている。心から和んだ表情で、父と子が戯れる様子を見つめている。カイルはその横顔を見ながら、ヤツハになら話せると思った。

「ヤツハ、実は……」

カイルはあの夜のことを思い出しながら、ゆっくりと話した。

数分後

「ええええっ！ カイル、ラディンとキスしたのっ？」

案の定、ヤツハの驚きようは半端では無かった。思わず立ち上

がり

「なんでカイルばかりもてるのよっ！」

と悔しそうに言うヤツハに、カイルは

『そこかよ？』

と苦笑するしかなかった。ヤツハはぐいっとカイルの瞳を覗き込んだ。

「じゃっ……じゃあ、カイルのファーストキスはラディンなの？」

そう言われて、カイルは思わず迫るヤツハから視線を外すと

「そ、そうなるよね……」

と頬を赤らめながら呟いた。実際、あの時は一瞬の出来事だったが、近づいてくる顔の速度や唇の感触は鮮明に覚えている。

「シリウには絶対言っちゃだめよ！」

少し睨むように言うヤツハに、カイルは

「い……言わないよ……」

と押され気味に答えた。ヤツハはベンチに座りなおすとふんぞり返り、遠く空を見上げた。

「あーあ！ シリウが知ったら落ち込むだろうなあ〜」

そして再びカイルに向き直った。

「あたしもシリウには言わない！ 約束するから、安心して！」
と小指を差し出した。

「約束！」

カイルは促されて自分の小指を出してヤツハのそれに絡めた。

『約束……か……』

二人の絡む小指を見つめながら、カイルの脳裏には何故か、故郷ザックで自分を待っていてくれるオツカやカゲ、マスターの姿が浮かんだ。

『必ず生きて帰って、セブンスへブンの用心棒になるよ』

カイルはそう約束をした。そんな会話も、かなり昔の話の様に思えた。今までたくさん色んなことがありすぎた。そして今は、ひと時の平和な時間を過ごしていることに、不思議な気分もあった。

「今度オツカを紹介するよ」

「オツカ？」

見知らぬ名前を聞きなおすヤツ八に、カイルは微笑んで頷いた。

「俺の友達。故郷に居るんだ」

「素敵！ 会いたい！ 絶対会わせてね！」

ヤツ八はとても嬉しそうに言った。

夕刻に向かう公園に、二人の楽しい会話が続いた。二人共、とても輝いた笑顔をしていた。

一方その日、シリウはサクを訪ねていた。

サクは、動武道場で汗を流していた。旅から帰ってきてから、訓練に余念が無い。動かずにいられない性格もあるのだろうが、一番は、ガラオルの件だろう。

学校に戻ってきた時、報告の中にガラオルの件は入っていないかった。サクたち四人だけの胸に秘め、次の行動のために自分が出ることをすることに皆で決めた。サクたちがガラオル討伐の為に動いているということは、誰にも内緒だ。

シリウはストレッチをするサクに近寄った。気付いたサクは動きを止め、汗の滲んだ顔を上げ、シリウと分かると健康的に微笑んだ。

「おう、シリウ！ 元気でやってるか？」

昨日のナトウとの乱闘騒ぎで負った頬の怪我が、大きなバンドエイドで手当てされている。シリウはそれには触れず、いつになく真面目な顔でサクに話し掛けた。

その数分後、動武道場は喧騒に包まれた。

サクとシリウが殴り合いを始めたのだ。

普段仲の良い二人が……しかもいつも温厚なシリウがいきなり喧嘩を始めたとあっては、生徒達も戸惑いを隠せなかった。ざわつ

き、手も出せなくて取り囲む生徒たちや、教官を呼びに走っていく生徒。

しばらくして動武道の教官サライナが駆け付けたときには、二人は殴り合いも終えて武道場の真ん中で並び、大の字になって寝転んでいた。その顔は、二人ともどこか満足した表情だった。傷だらけの体で手足を投げ出したまま、サクは天井を見ながら言った。

「分かった！ シリウに任せる！」

シリウは同じように天井を見ながら微笑んだ。

「ありがとう、サク。必ず目的を果たしてきます」

「お前なら出来るさ！」

サクはシリウを見てにっと笑い、彼も汚れた眼鏡で笑った。取り囲む生徒たちやサライナ教官は理解が出来ず、ただ呆然と見ていくだけだった。

突然の決意表明！

翌日、カイルはシリウを訪ねた。相変わらず図書室で書物の山に隠れるようにして調べものを行っているシリウの背中に、カイルはそつと近づいた。そして……

「？　これは？」

シリウは手元にそつと置かれた小さな紙袋を見た。そして驚いたように振り返った。

「別に……　えっ！　シリウ、その顔は……？」

思わず目を丸くして言うカイルに、昨日の乱闘で頬が腫れて額にもアザを作っていたシリウは、調べものをする手を止めて苦笑いをした。

「いえ、これは、何でもありません。それよりコレ、開けてもいいですか？」

「……うん……」

怪訝な顔をしながら小さく頷くカイル。シリウは嬉しそうに紙袋を手に取り、丁寧に封を開けた。そして手を差し込み取り出したのは、カイルのこれまでの雰囲気からは似つかわしい、かわいらしいプリントがされた眼鏡拭きだった。

「おお！」

シリウの頬が緩んだ。

「これを、僕に？」

見上げて微笑むシリウに、カイルは頬を赤らめて言った。

「勘違いするなよ！　サクの誕生日だからプレゼントを買って、昨日ヤツハに町へ連れて行かれて……そのついでだからな！　ついで！」

カイルはそう言い捨て、そそくさと図書室を出ようとした。

「カイル！」

呼び止められて立ち止まったカイルが振り返ると

「ありがとうございます。大切に使いますね」

と、シリウは素直に微笑んだ。カイルは照れたように頬を赤らめ「何の傷か知らないけど、早く治せよ！」

とだけ言うと、プイツと踵を返して図書室を出ていった。シリウはふっと笑って、それから愛おしい表情で手に納まっている眼鏡拭きを見つめた。そしてすぐに振り向くと、カイルが出て行った図書室の扉を見て切ない表情をした。

その翌日はサクの十六歳になる誕生日だった。

だが、カイルを引っ張って町にまで行き、プレゼントを買ったヤツハの心境はそれどころではなかった。

「シリウ！ 『卒業』するって、どういうことよー！」

突っ掛かるヤツハに、シリウはされるがままになっていた。目を吊り上げているヤツハの少し後ろには、黙って立つカイルがいた。

ソラール兵士養成学校では、卒業する時期も自分で決める。自分の力量に限界を感じたとき、将来の職業が決まったとき、自分に満足感を得られたとき、その理由はさまざまであり、それを尋問されることもない。卒業したいと思ったときが、その生徒の卒業する時期なのだ。

ヤツハは、朝の集会でファンネル校長が発表した卒業希望者の名前の中にシリウの名前があったことに驚き、カイルを連れてシリウ

に理由を問いたださそうとしたのだ。

「なんで卒業なのよ？ まだやることはあるはずよ！」
「だからです」

シリウはサクに殴られ腫らした頬のまま、真面目な口調で言った。
「まだやるべきことはたくさんあります。けれど、ココに居ては限界があるんです」

「……どういうこと？」

ヤツハはひとまずシリウの胸ぐらから手を離した。シリウは少し襟を正すと、眼鏡を指先で上げた。

「図書室にあるどんな優秀な書物にも、ガラオルの行方は載っていません。どこかで力を溜めているかもしれない。もしかしたら、もっと大きな力を手に入れているのかも知れない。それを知るには、自ら外に出て情報を得るしかないのです。長い外出をするのであれば、学校に申請しなくてはならない。そこで、僕たちのやるうとして知っていることを知られるわけにはいかないでしょう？ だから、卒業して自由の身になるしかないんです」

淡々と話すシリウ。ヤツハは震えながら後退りした。

「なんで……よ？ なんでそんなこと、簡単に決めちゃうのよ？」
ヤツハはゆっくりと首を横に振りながら、信じられないといった風に呟いた。そして堰を切ったように

「カイルはっ！ カイルはどうなるのよ？ 捨てて行くつもりなの？」

と叫んだ。カイルは黙って立ち尽くしていた。もはや言葉もないという表情で、ただじっとシリウを見つめていた。

「あんまりよ！」

シリウの答えを待たずに叫ぶヤツハの瞳からは、涙が溢れだしていた。

その時

「オレは構わねえよ」

とサクが現れた。その顔はシリウと同じように頬を腫らし、体

のあちこちにアザが出来ていた。シリウよりもひどいほどの傷だらけの顔には、いつものくっつくくない微笑みが浮かんでいた。

「サク、その顔……じゃあ、シリウのそれも……？」

ヤツハとカイルは驚いた顔で二人を見比べた。サクは

「オレも最初は理解出来なくて、思わず一発殴っちまった。その後、拳で語り合った結果がこれだ！」

と、にっと笑って頬の傷を指差してみせた。シリウは静かに俯いた。

「オレは頭が悪いから、シリウみたいに難しいことは考えられねえし、出来ねえ。だから、オレに出来ねえことは、シリウに任せることにした」

ヤツハは俯いて唇を噛んだ。その後ろから、カイルが呟いた。

「分かった……」

驚いてヤツハが振り向くと、カイルがその場を離れようとしていた。

「カイル！ どこに行くつもり？」

引き止めようとするヤツハに、カイルは無表情で答えた。

「シリウが決めたことだ。好きにしたらいい。俺も忙しい。授業があるから」

そう言っただけ小さく手を振って踵を返すと、ヤツハの悲痛な引き止めも空しく、カイルはその場から去った。ヤツハは再びシリウとサクを交互に見ると、睨むように顔を歪ませ、叫ぶように言った。

「皆、馬鹿よ！ もう知らないっ！」

そしてヤツハもまた、どこかへ走り去ってしまった。その後ろ姿を見ながら、サクが静かに言った。

「シリウ、お前はカイルのどこに行っちゃれ。どうせ何も言っただけでなかつたんだろ？」

シリウはその意外にも冷静な様子のサクを驚いたように見つめた。「ヤツハのことはオレに任せろ」

サクはシリウに笑ってみせた。それは思いがけなく頼りがいの

ある表情だった。

「では……お願いします！」

シリウは頷くとサクの肩を信頼を寄せた手で叩き、走りだした。

それぞれの説得

「こんな所にいたのか！」

ヤツハは校庭の隅にある花壇に隠れるようにうずくまっていた。後ろから明るい声をかけたサクの息が上がっている。ヤツハの事を、校内中ずっと捜し回っていたのだ。サクは続けてヤツハの背中に何か言い掛けたが、気配を察知したヤツハの方から口を開いた。

「皆、何考えてるのか分かんない……」

涙声のヤツハ。顔を見なくても、今の今まで泣いていたのはサクでも気が付いた。サクはため息を一つついて、優しく声をかけた。

「あまりシリウに心配かけるなよ」

「心配かけてるのはそっちじゃない！ 皆バラバラになっちゃうのよ！……っ！」

ヤツハは振り向いて睨み、今こそ思いのたけを吐き出そうとしたが、思わずその口がづぐんでしまった。サクの表情が、いつになく固くシリアスだったからだ。

「じゃあ、お前が行けるのか？」

その言葉に、ヤツハは何も言い返せなかった。

「シリウだからやれることなんだ。オレたちはオレたちで、ここ出来ることをするしかないんだ」

サクの口調からは、静かながらも説得力があった。ヤツハはじつとサクを見つめていた。

「シリウは、何も学校から出たいわけじゃねえ。オレたちと離れて、淋しくないわけがねえ。だけどそれよりも大切なものがあるから、シリウは旅立つことを決めただ」

諭すように言うサク of 言葉を聞き、ヤツハは再び俯いて涙を拭いた。サクはそっとヤツハの横に座ると、同じように膝を抱えた。

「シリウが居なくなるのは、オレも寂しい。けど、信じられな
きや仲間じゃねえよ……」

「仲間……」

ヤツハはサクを見つめた。強い眼差しをしているサクの横顔か
らは、どこかで切なさがにじみ出ていた。それでもシリウを送り
出そうとしていることに、心を打たれていた。信じて送り出すこ
とも仲間の役目……。だがヤツハには、心に大きく引っかかるこ
とがあった。

「サク……でもカイルは……」

ヤツハは同性として、友人として、カイルの心境が心配でならな
かった。カイルはシリウの事が好きなのだ。はつきり言わなく
ても、それくらい分かる。

サクは大きく頷いた。

「大丈夫さ！ あいつだつて立派な男だ！ いつまでもクヨクヨし
てたら、オレが一発ぶん殴ってやるぜ！」

「違うの……！」

ヤツハは勢いで口から出そうになった言葉を飲み込んだ。本当
のことは、カイル自身から告げるべきだ。ヤツハは必死に黙って
いるしかなかった。

サクは、それに、と前置きして

「ヤツハの笑顔、見たいからさ。オレはオレで頑張るからよ！」

サクは照れたように指先で鼻を擦った。ヤツハは、予想もして
いなかった言葉に思わず頬を赤らめて俯いた。熱くなる心に、ヤ
ツハは複雑な心境を抱いていた。自分だけこんなに幸せを感じて
いいのだろうか。心にカイルの姿が蘇っていた。ヤツハは複
雑なまま、傍らに置いてある袋に手を伸ばした。

不意にサクの頭がふわりとした感触に包まれた。

「？」

触れると、帽子を被らされていることに気付いた。

「なんだ？」

手に取ると、真横に赤い羽根がアクセントになっている紺色のツバ付き帽子だった。一昨日カイルと町へ出たときにヤツハが買った物だ。

帽子の触れ書きには『ヴァンドル・バードの羽根付き帽子』と書いてあった。

ヴァンドル・バード自体が伝説上の生物なのに、羽根などが手に入るわけがない。売り文句なのだろうが、サクなら素直に喜んでくれるだろうと、ヤツハが決めた物だった。

「こんな時に何だけど……サクの誕生日でしょ、今日？」

サクは、たった今思い出したように目を丸くした。

「！ そうだった！ ケーキ食う日だった！」

ヤツハは思わず吹き出した。

「もう、サクったら……」

サクは満面の笑顔で

「サンキューな！」

と、再び帽子を被った。

風に揺れる赤い羽根を見つめながら、ヤツハの中で、少しだけ落ち着きを取り戻していた。シリウが居ない間、カイルを守れるのは自分だけだと感じていた。

「やはりココに居たんですね？」

シリウはカイルの背中に言った。授業に出るなどと嘘を言って、

カイルは行方をくらませていた。

それを知った時、シリウは真っ先にこの場所が頭に浮かんだ。

案の定、カイルは屋上の貯水タンクに掛かる鉄梯子に座って膝を抱えていた。

ここは、シリウが初めてカイルを見かけた場所だ。そして、自

分たちの仲間にならないかと勧誘した場所でもある。

シリウはそつと近づいた。カイルは気付いているはずだったが、膝に顔を押しつけたまま微動だにしなかった。シリウは気まずそうにカイルの隣に立った。ちょうど長身のシリウの目線とカイルの高度が同じくらいになった。

「止めても行くんだろ？」

俯いたままで、カイルが言った。シリウは少し俯いて

「はい」

とだけ言った。しばらく間があつて、カイルの小さな呟きが聞こえた。

「皆……勝手に離れて行くんだ……」

シリウはそつとカイルを見た。

「カイル……僕は……」

その言葉を遮るように、カイルは梯子から飛び降りてシリウに抱きついていった。首筋からカイルの押し殺した泣き声が聞こえる。

「もう、誰かと別れるのはいやだ！ 一人に……しないで……！」

「カ……ミイル！」

シリウは思わず抱き締め返し、カイルの本当の名前を口にした。

カイルはより一層シリウにしがみつくように力を入れた。

しばらくそうしていた後、フツとカイルの力が緩み、その体はゆっくりとシリウから離れた。

シリウは俯いているカイルの頬を両手で優しく包み、自分に向かせた。カイルの目は真っ赤に充血し、涙がまだ残っていたが、素直にシリウの目と合わせた。

「カイル……僕は、僕にしか出来ないことをやらなきゃいけないと思っっています。分かってくれますか？」

カイルはじつとシリウを見つめ、そして小さく頷いた。

「そんなこと分かっている……シリウが考えなしで動くほどバカじゃないことくらい……」

シリウがホツとした時、カイルは、だけど、と続けた。

「約束して……必ず、帰ってきてと……」

シリウは切ない顔で見上げるカイルに頷いた。

「必ずカイルを迎えに来ます」

シリウの両手に包まれたカイルは目を閉じ、シリウはその唇にそつと自分の唇を合わせた。

一瞬か……果たして長い時間かと思われた口づけの後、シリウはカイルにもう一つ約束をした。

「すべて終わったら、今度こそ、デートしましょうね」

カイルは真つ赤な目で小さく笑った。

許せる涙

数時間経ち、カイルはまだそこにいた。梯子に座って一人で空を眺めながら、夜風に髪を梳いていた。静かに屋上の扉が開き、ヤツハが訪れた。カイルはそれに気付くと、ゆっくり振り向いた。「ヤツハ、どうした、それ？」

カイルは囁くように言った。ヤツハの目は赤く泣き腫らしている。

「そういうカイルだって」

言われたカイルも同じように赤い目をしていたが、だいぶ落ち着きを取り戻しているような穏やかな表情をしている。ヤツハは梯子に上るとカイルの横に座った。

「気持ちいい風ね……」

「ここにいと、気持ちまで風に吹かれるようで、自分さえも忘れそうになる。考え事をする時は、いつもここで夜空を見つめているんだ」

カイルは夜空を見上げたまま、そつと目を閉じた。ヤツハの栗色の髪も、風に揺れている。ヤツハは静かに言った。

「あたしね、考えてたの」
「……」

カイルは目を閉じたままでヤツハの言葉を待っていた。

「あたし、やっぱりシリウを止めるわ」

カイルはゆっくりと目を開けた。

「シリウは、カイルの仇であるガラオルを倒すのと同時に、あたしの父親を助けようとしてくれる。そんな魔法みたいな術を探そうとしている。それはとても嬉しいことだわ。だけど、皆がバラバラになるのは嫌……。サクは『仲間なら信じる』って言ったけど、あたしは、危険を冒してまでして欲しくないの！」

カイルはヤツハの話の聞きながらじつと夜空を眺めていた。

「だからあたし、シリウに、行くのをやめるように言っわ！」

「ヤツハ」

優しい声でカイルが口を開いた。

「あいつが、そんな理由で考えを変えようと思うか？」

「それは……だけど……！」

ヤツハは悲痛な顔をして呟いた。ヤツハも、シリウが生半可な気持ちで決めたことではない事くらい分かっているつもりだ。だが、それよりも強い思いがヤツハの心にはあった。

「大好きなカイルとシリウが離ればなれになるのなんて考えられない！ それに……」

ヤツハは息を吸い込み、言葉を吐き出すように言った。

「死んじゃったらどうするの？」

その途端、カイルは振り切るように勢いよく梯子から飛び降りた。そしてヤツハに向かい合い、諭すようにゆっくりと話した。

「最初からそんな暗いこと考えてどうするんだよ？ それにヤツハは、シリウがすぐ死ぬような、そんな弱い奴だと思ってるのか？」

ヤツハは小さく首を横に振った。カイルはヤツハの両肩を強くつかんだ。

「シリウが死ぬわけがない！ 必ず帰ってくる！ 信じて、俺たちはココで強くなるんだ、もっと！ シリウが帰ってきたとき、自信持って一緒にガラオルを倒しに行けるように！」

ヤツハはカイルを見た。意外なほどしっかりとった瞳に、ヤツハの心が和らんだ。カイルを安心させようと来たつもりが、逆にカイルに励まされてしまった。しかし

「でも……」

カイルの眉が歪み、唇が震えて、思わず噛み締めた。静かにひとつ息を吸うと、震える声で言った。

「今は、泣いてもいいよね？」

カイルはヤツハに抱きついた。やはり気持ちは押さえきれなかった。満点の星空に見守られながら、二人は抱き合って泣いた。

さよならは言わない……卒業

ソラール兵士養成学校卒業希望生たちは、最後の試験に挑む。

これに合格しなければ、卒業を認められないのだ。今回の卒業希望者は、シリウを含めて五人居た。次々に名前を呼ばれ、試験に臨んだ。普段の実技試験よりも難しい卒業試験に苦戦しつつも、どうにか卒業の道を手にした。闘技場の中は興奮の熱気で溢れていた。

残すはシリウ一人となった。

「シリウ・ソム・イクシード。これより卒業試験を行う！ 闘技場中央へ！」

試験官のアナウンスに従い、シリウは闘技場の中央まで歩み行くと、ゆっくりと周りを見渡した。

闘技場を取り囲む傍観席には、卒業試験を見守る生徒たちで埋まっている。勿論その中にはサクたち仲間もいる。

三人共に余裕の表情で座っていた。皆、シリウの勝利を信じているのだ。

シリウは仲間達に見守られている安心感、そして、最後の闘技場を名残惜しむかのようにゆっくりと仰いだ後、指先でそっと眼鏡を上げた。

「対戦相手、前へ！」

審判員が言うと、闘技場の正面にある大きな鉄格子が重い音を立てて上がり始めた。シリウの前に、シャルサム教官によって召喚された幻獣が姿を現した。

全身を厚い殻に包まれ、節足動物のような形をした巨体から突き出る二本の触覚のような先には、小さな球体が揺れている。四本の長く頑丈そうな足が、地面を突き刺すように立っている。

「あなたが最後の相手ですか」

シリウの頭の中で数々の情報が動きだす。

「ガラナサの類でしょうか。属性、無し。弱点、特に無し。

対応するすべは、速さ。さすがに卒業試験ともあれば、少々厄介ですね……」

シリウはあまり面倒でもなさそうに表情を変えぬまま、身構えた。ユラユラと動いていた幻獣の球体が、シリウを捉えたかのように止まった。シリウの三倍はあろうかという巨体から、堅い甲羅に包まれた太い足が振り下ろされた。

「速い！」

生徒の誰かが叫んだ。

卒業試験に出現する幻獣は、普段の試験よりも数倍強く、クセの強い幻獣が召喚される。卒業希望者の心を試すことと同時に、外の世界へ出ることへの背中を押すためだ。普段の実技試験に出てくる幻獣と似た姿をしていても、その実力は予想外なことが多い。幻獣が振り下ろす足が土煙を巻き上げる中、シリウは涼しい顔で軽々とその攻撃を避け続けている。

「すごい……でも逃げ回ってるだけじゃ……」

生徒たちは息を飲んでシリウを見守っていた。

堅い甲羅には剣も通じない。切っ先を手入れしている剣だとして、小さく火花が散る程度で傷ひとつ付けられない。

全身をドス黒い鎧で覆われた幻獣は、今日の卒業試験対戦相手の中では屈指の強敵のようだった。シャルサム教官も、学校一優秀な生徒が卒業とあって、カも入っているのだろう。

シリウは攻撃を避けながら、冷静に様子を見ていた。

「どうやら、関節の辺りはガードが弱そうですね……」

シリウは堅い甲羅を繋ぐ関節に狙いを定め、足の付け根を目掛けて懐に忍ばせておいたナイフを投げた。風を切り裂いて放たれたナイフは、苦い音と共に関節を貫通した。同時に、今までせわしなく動いていた足の動きが止まった。

「当たり前、でしたね！」

シリウは動きの止まった一瞬を逃さず、幻獣の体を駆け上がると、小さな頭的首根っこに剣を突き立てた。

「いきます！ 針剣華シケンカ！」

シリウの気合と共に剣を通じて念が送り込まれ、その身体は内部から膨らみ始め、幻獣はまるで風船のように破裂した。

「わああああっ！」

粉々に砕け散った殻の鎧と体液が降り注ぐ中、歓声と悲鳴が闘技場を包んだ。

いつもと変わらぬ表情で、けれども少し満足げな柔らかい目で見上げるシリウの視線の先に、笑顔で喜ぶサク、ヤツハ、そしてカイルの姿があった。

「ゆっくりしていけばいいのに……」

カイルは開け放たれた部屋の扉に寄りかかって、身仕度をしているシリウの後ろ姿を見ながら憮然として言った。だが、長く居ればその時間だけ別れが辛くなる。それは二人とも同じ気持ちだった。だから、カイルの言葉もただの口上文句でしかなかった。

シリウは無言で少し大きめの斜め掛けカバンに少しの着替えと貴重品、書物などを丁寧に詰めていた。

その時、廊下の方が賑やかになった。

「？」

カイルが振り向くと、何人かの女子生徒が周りを気にしながら廊下を歩いてきていた。本当は、異性の寮に入るのは固く禁じられている。内緒で忍び込んだのだろう。カイルの姿を見ると気まぐずい表情で立ち止まり、仲間同士で顔を見合わせた。状況を察知したカイルは微笑み、優しく声を掛けた。

「シリウなら、中にいるよ」

小さく部屋の中を指差すカイルに、彼女たちは恐る恐る

「あの、このことは誰にも……」

と懇願するので、カイルは笑顔で頷いた。

「分かってる。誰にも言わないよ」

彼女たちはホツとした顔で、そっと中を覗いた。

「シリウさん……」

振り向くシリウに、彼女たちはそれぞれに饞別の品を手渡した。

「どうかお元気で……」

「ありがとう。あなたたちも、お元気で」

「私たちも、頑張ります！」

「はい。無事に卒業出来る様に祈っています」

各々に声を掛けられ、その一人一人に礼を言うシリウ。彼女た

ちは名残惜しむようにゆっくりと後退りしながら扉の所まで行くと、

小さくお辞儀をして部屋を出ていった。カイルは足早に帰ってい

くその後ろ姿を見送りながら、笑った。

「シリウ、あんな可愛い子たちに見送られて、泣くんじゃないよ？」

すると、シリウは驚いたような顔を上げた。

「泣くわけじゃないんですか！」

珍しく不機嫌そうに言つて、貰った品々を一旦テーブルに置くと、

カイルに近づいた。

「僕が泣く時は、カイルから幸せが失われた時です。僕はこれか

ら、あなたの幸せを取り戻しに行きます。だから今は少しだけ、

我慢してくださいね」

シリウはカイルが寄りかかる扉の柱に手を置いた。

「シリウ……」

見上げるカイルに、シリウはそっと唇を落とした。

「僕を信じてください。どうか、悲しまないで。僕にはそれが、

一番の心残りなんです」

「信じてる。俺は、シリウにたくさん助けられた。今度は俺が

助けられるように強くなるから。シリウの方こそ、俺を信じて」

カイルは安心させるように微笑んで見せた。

数分後、人の気配が無くなって静まり返ったシリウの部屋を、カイルは一人で眺めていた。シンプルな部屋の一角にあるばかりでかい本棚には、たくさんの本が立て掛けられている。シリウが残していったものだ。必要最低限の物だけを持って、シリウは出ていった。

「手紙、書きます」

と、わずかな希望だけ残して……。

学校の門の辺りでは、人だかりが出来ていた。皆、シリウを見送るために集まったのだ。

「大げさですねえ……」

門に近づきながら、シリウは苦笑いをした。その人だかりに入ると

「元気でな！」

「あまり無理するんじゃないぞ！」

と教官たちがシリウの肩を叩いて激励する。

「お前が居なくなったら、この学校のレベルも一気に下がるよ！」

「シリウ先輩！　どうかお元気で！」

生徒たちもそれぞれに言葉を掛ける。中には、悲しさから寂しさからか、涙を浮かべる女子生徒たちもいる。

ファンネル校長がシリウを見上げ、誇らしげに微笑んだ。

「シリウ、君は学校の誇りじゃ！　数々の試練をよくぞ耐えぬき、乗り越えたな！　その経験を活かして、立派に生きていくことを願っておるぞ」

シリウは勿体ない、と謙遜し

「僕は、この学校で学ぶことが出来たことを感謝しています。お世話になりました」

と微笑んだ。

「いいのかい？」

と言ったのはミランだった。眼鏡の奥で、瞳が心配そうに揺れている。たくさんの思いがこもったその言葉に、シリウはコクリと頷いた。

「人にはそれぞれに、思うところがあるのです。それは、ミラン先生も同じでしょう？」

それはカイルのことなのか、シリウには話していないはずの自身の息子のことなのか、シリウの表情からは読み取れなかったが、ミランはシリウの決意だけは感じ取れた。

「分かった。体には気を付けな！」

口調は変わらなかったが、いつもと違っていたのは、くわえ煙草が無かったことと、まるで子供を送り出すような優しく和やかな笑顔だった。

「シリウ！」

ヤツハが駆け寄った。その目にはすでに、涙が溢れそうになっている。

「カイルが見つからないの……学校中探したけど、どこにも居ないのよ！ シリウを見送るっていう大事な時なのに！」

切羽詰り焦った様子で言うヤツハに、シリウは微笑んだ。

「カイルには、今さっき挨拶をしました」

ヤツハは少し驚いた顔をしたが、すぐに安心したように息をついて微笑んだ。

「そうだったの……良かった！」

「シリウ！」

サクが近づいてきてシリウの前まで来ると、ゆっくりと拳を差し出した。シリウは微笑みながら自身の拳を握り、サクのソレにコツンと当てた。

『頼んだぜ!』

『はい』

目で会話をするように笑顔を交わし、シリウは学校の門を一步だけ出た。そしてゆっくりと振り向き

「皆さん、お元気で！」

と高く手を挙げると、踵を返した。

誰もシリウの行き先を聞かない。

それは、この学校の昔からの風習だ。

もう会えないかもしれないし、もし次に会ったときは、相対する存在になっている……そんなことも、ざらにあるからだ。自分の力を過信して、世間に飲まれ死んだ生徒たちも少なくはない。見送る人々の瞳には、卒業し自分の願う道を生きることができるといふ憧れと、荒波に向かう背中を誇りに思う輝きが宿っていた。

再会。 シリウとラディンの今

シリウからの手紙は、一ヶ月後に届いた。

そこには、自分はいたって元気だということと、順調に自分が思う情報を集めているということ。そして、サクやヤツハ、カイルがしっかりと訓練しているかどうかを心配しながら簡潔に締められていた。

寄り添うようにシリウからの手紙を読んだ三人は、安心した笑顔を浮かべた。

「シリウも頑張ってたんだ。オレらも遊んじゃいられねえよな！」
嬉しそうに言うサクに、ヤツハとカイルは顔を見合わせて笑った。
「サクったら、昨日だってナトウと喧嘩してたくせに！」

そう言いながら、ヤツハは絆創膏の貼られている鼻先を指先で弾いた。

「な、なに言ってるんだよ！ あれも立派な訓練だよ！」
慌ててふんつとそっぽを向いて拗ねるサクに、カイルは明るい声を上げて笑った。

カイルはこのところよく笑う。
学校の中では相変わらずクールでいて、そんな笑顔を見せるのはサクやヤツハの前だけの事だったが、そんな笑顔を見ながら、サクやヤツハも内心ホッとしていた。

シリウが学校を出てからしばらくの間はカイルもさすがに落ち込んだ様子でいたし、気遣う二人の語り掛けにも空笑顔を見せていたが、やがて日が経つにつれてその表情にも明るさが戻ってきたのだ。

三人は何かにつけて一緒に行動し、次の年のグループ試験にも余裕でクリアした。もはや彼らに合うグループは、学校の中には他には居なかった。実力、精神共に、確実に成長していたのだ。

やがて三人は、カナン山で偶然見つけた小さな湖の湖畔でくつろ

ぐよつになつた。木々に囲まれた湖は学校からも見えにくく、隠れるようにのんびりとした静かな時間を楽しめた。

そんなある日だった。

いつものように湖の畔でそれぞれに時間を潰していた三人は同時に、背後に気配を感じた。

「誰だっ！」

サクが飛ぶように立ち上がって身構えた。ヤツハとカイルも緊張し、身構えた。

ガサガサと近くの木の枝が揺れ、三人の前に静かに何者かが降り立った。同時に、三人は驚いて目を見開き、サクがその人物の名を呼んだ。

「ラディン！」

彼はゆっくり立ち上がると、笑顔を見せた。

「よっ！ 元気そうだな！」

ピツと片手を挙げてにんまりするその顔は、何も変わっていないかった。

変わった所と言えば、黒いチリチリの髪の毛が肩下辺りまで伸びたことくらいか。くつきりとした二重の黒い瞳も、明るく元気な力を放っている。衣服から覗くがっしりした筋肉質な手足も、相変わらず陽に焼けたように健康的だ。

「ラディン！ お前、今までどこで何やってたんだよ？」

サクが嬉しそうに飛び付き、肘鉄を食らわせた。

「ぐあっ！ なにすんだ、このやろっ！」

ラディンとサクは湖畔を駆けまわって、会えなかった時間を感じさせない様子でふざけあつた。それを見て、ヤツハとカイルは笑つた。

「ホントに久しぶりだな！ いきなり会いに来るなんてズルイぜ！ 来るなら来るって連絡くらいしろよな！」

後ろからラディンの首に腕を巻き付けて締め上げながら、サクが言った。すると、大げさに苦しんでいたラディンの様子が少し変わった。

「どうした？」

気付いたカイルが尋ねると、ラディンはサクの腕をそつと緩めて振り返り、三人を眺めた。

「実は、シリウのことで来たんだ」

その一言で、三人に緊張が走った。

「シリウのこと、知ってるのか？」

サクが驚いて声を上げた。カイルとヤツハも、じつとラディンを見つめている。ラディンは頷いて、落ち着かせるように少し微笑んだ。

「とにかく話す。聞いてくれ」

三人は湖畔に腰を下ろして、ラディンの話を聞いた。

「半月くらい前の話だ……」

ラディンは遠く思い出すように話し始めた。

ラディンはサツフル村でサクたちと別れた後、行く当ても無く山を越えていた。そして偶然たどり着いたゴロナゴという山あいの町で、探偵事務所で働きながら武道場で剣術を習う毎日を過ごしていた。

ある日ラディンは、請け負った仕事【密偵】を失敗して追われることになった。状況は多勢に無勢で、ついにラディンは路地裏に追い込まれ、追って来た屈強な男たちに囲まれた。あわや命はこれで終わりかという時、ラディンは目の前に光を見た。

青い炎の向こうには、細身で長身の男が立っていた。

「な、なんだこの青い光はっ？」

「熱い！　なんかヤバイな！　逃げるぞ！」

あつという間に散っていく男たちを余裕の表情で見送ると、男はゆっくりとラディンに近づきながら

「大丈夫ですか？」

と手を差し伸べた。そしてラディンの顔を見た途端、男は驚いた顔をした。

「あ、あなたは！」

「あなたは！ シリウ？」

お互いがその姿を見て驚いていた。ラディンはシリウに手を引かれて立ち上がりながら

「なんでこんな所に？」

と目を丸くした。

「ま、偶然ここに来たというところですよ」
微笑むシリウに、ラディンは苦笑した。

あの時……

ラディンは何も言わずに姿を消した。カイルにだけ、別れの言葉を伝えた。そして、あるうことか口づけをした。

その事を、目の前に居るシリウは知っているのだろうか？
自分の事をどう思っているのだろうか？

ラディンの心を読むように、シリウは優しく微笑んだ。

「会えて良かった。突然何も言わずに居なくなってしまったから、ずっと心配していたんですよ」

『どうやらカイルとのことは深くは知らないみたいだ……』

ラディンは心の底でホッと一息をつく

「こんな所で立ち話もなんだし、俺の部屋に来ないか？ 旅をしてきたのなら、疲れてるだろ？ 少し休んでいけよ。話も聞きたいし。な？」

と自分の部屋に招いた。そして久しぶりの再会の喜びを分かち合い、お互いの話を始めた。

「俺はあれからしばらく山や森の中で修行していたけど、一人じゃ限界があるってことに気付いて、どこか修行が出来る場所を探して彷徨って、偶然この町に着いたんだ。ゴロナゴは静かな所だし、武術も盛んだってことを聞いて、ここで働きながら武術を学ぶことにしたんだ」

ラディンは久しぶりの友人に、とても嬉しそうに話した。シリウは出されたお茶を飲みながら興味深く聞き入っていた。何も告げずに姿を消したことに、何も言及しなかった。

「それで、あんたはなんでこんな所に？ ヴイルスの兵士養成学校に行ってたんじゃないのか？」

一通り話した後でラディンが不思議そうに尋ねると、シリウは微笑んだ。

「卒業しました。それで自由の身になったので、ガラオルの情報を収集しながら旅をしているんです」

手荷物は肩に掛けた大きめの鞆のみ。腰には短剣を装備しているくらいで、軽装だ。変わった所といえば、少し髪の毛が長くなつた位で、眼鏡をかけた知的で繊細そうな雰囲気は変わらずだった。『ガラオル』の言葉に、ラディンの心に熱がこもった。

因縁深き相手。昔は手下として働いていたが、今は敵対する感情しかない。その上、ラディンが守りたい相手カイルの仇でもあるのだ。

「ガラオル……」

ラディンが強い瞳で呟くと、シリウは固い表情で頷いた。

「サクモヤツハもカイルもまだソラー兵士養成学校に残って、自分を高める訓練をしています」

「そうか……俺も頑張んなきゃな！ でもここでは、ガラオルの噂は全然聞かねえ。俺が世話になつてる探偵事務所も、しけた依頼ばかり受けるだけだし。だけど、その気になつたら何か情報が見つかるともな。この町は商業の町としても有名なから、流通がさかんみたいだし、何らかの情報は流れてきてるかもしれねえ」

そこまで話したラディンはふと自分の拳を握り、見つめた。

「……てことはあんた、カイルを置いてきたってことか？」

ふと投げ掛けた質問にシリウはフツと俯いたが、すぐに顔を上げた。

「カイルは大丈夫ですよ。サクモヤツハも傍にいますし。慣れた場所ですから、寂しくは無いはずですよ」

そういうシリウの顔は、やはりどこか心に引っ掛かるものがあったのだろう、小さな影を背負っているようだった。だがラディンは、不謹慎にも心の中でガツポーズをとっていた。

『じゃあ、もしかしたら俺にもチャンスあるかも知れねえ！』

「どうしました？」

首をひねるシリウに、ラディンは愛想笑いでごまかした。

「い、いや、なんでもねえ！ それより、これからどうするんだ？ しばらくここに居るのか？ それともまた旅を続けるのか？」

シリウは頷いた。

「確かこの近くにハアヤという小さな村があるはずなんですが、そこに行こうと思っています」

「そこに、ガラオルの情報があるのか？」

シリウはそれには答えず、手にしていたお茶を飲み干した。

「はあ。美味しかったです。ご馳走様でした。ではこれで」

おもむろに立ち上がり荷物を手に取るシリウに、ラディンは慌てて立ち上がった。

「お、俺も何か手伝おうか？ この町にも少しは慣れてきた。それに今は探偵事務所働いてるから、裏の情報も手に入れられるかもしれないぜ！」

だがシリウは軽く手を挙げた。

「いえ。ラディンは自分を高めるために訓練を続けてください。

もしかしたら、いずれは力を貸して頂くかもしれません。では、突然会ったばかりにお邪魔してすみませんでした。お仕事頑張ってくださいね」

微笑みながら優しく断って部屋を出ていこうとするシリウに、

「デインは何も出来なかった。ただ一言

「無理すんなよ!」

と去っていく背中に投げることしか……。

ラディンの本当の名前

「シリウは、そのまま出て行っちゃった」

ラディンは話終わると、ひとつ息を吐いた。

「ハアヤという村に何かあるのかしら？」

ヤツハの呟きに、ラディンはそこなんだ、と指を立てた。

「ハアヤ村には黒い噂があつて、なんでも、魔女が住んでいるとか……」

「魔女？」

カイルが繰り返したので、ラディンは頷いた。

「確かにすぐ近くにある村なんだが、何か面白いものがあるわけでもないから観光に訪れる人もいないし、いつも霧だか雲だかに包まれてるっていうんで、ゴロナゴ町も気持ち悪がつて関与したからないんだ。だから、噂のまま放つてあるってわけだ」

「……」

カイルの胸に、一抹の不安がよぎった。 ヤツハがそれに気付き、

カイルの肩を叩いた。

「きつと大丈夫よ」

「そうさ！ シリウを信じて今まで来たんだ！ ちゃんと手紙も送つてくれてるし、心配ないって！ な！」

氣遣うサクの笑顔に、カイルの表情が和んだ。 深く信頼しあう姿を見て、ラディンは安心したように息をついた。

「あんたら、前よりずっといい顔してるよ！」

ラディンは立ち上がると、湖畔に立つて水面を見つめた。

「シリウの事でナーバスになってんじゃないかって、正直心配してたんだ。 おせっかいだつたみたいだな」

「まあな！」

「うわあっ！」

サクがいきなりその背中を蹴つた拍子に、ラディンの体はバラ

スを崩して湖に落ちた。拍子に、水しぶきが高々と上がった。

「「ラディン！」」

驚くヤツハとカイルの前で、サクもまた服のまま湖に飛び込み、腰までの深さの中で慌てるラディンの腕を掴むと力任せに引き揚げた。

「いきなり何すんだよ！」

全身ずぶ濡れのラディンは、サクに向かって飛び付いた。二人は再び湖に沈み、ずぶ濡れで体を起こすと、同じタイミングで笑い始めた。

「オレたちはたくさんを経験を乗り越えてきた。今あるのは、お互いに支え合った結果なんだ。その絆は、ちよつとやそつとじゃ切れねえんだよ！」

サクは、たくましさを備えた笑顔で言い、ラディンに拳を差し出した。

「？」

きょとんとしているラディンにサクが

「なんだよ、お前もオレたちの仲間だろ！ だからシリウのことを教えに来てくれたんだろ？」

と言うと、ラディンは照れたように鼻を擦り、自分の拳をサクのそれに突き当てた。二人が笑いあう様子を見ながら、ヤツハとカイルは顔を見合わせ、呆れたように肩をすくめると笑った。四人の笑い声が湖畔に揺れた。

「つたく……それにしても、いきなり突き飛ばすなんてひでえことするよな！」

やがて湖から上がったラディンは、おもむろに服を脱ぎ始めた。

「なっ！ 何してんのよ！」

頬を赤くして慌てて踵を返すヤツハに、ラディンは怪訝な顔で「服を乾かさなきゃ、帰れねえだろっが！ 風邪ひいてもいいって

のか？」

と、少し震えながら脱いだ服を木の枝に引つ掛けた。湖畔では、カイルが薪を集めて淡々と火を起こし始めている。

「カイルは平気なのっ？」

と慌てた口調で言うヤツハに、カイルは

「もう慣れた」

と笑った。

「何言ってるんだよ？ カイルも男だろ？」

とサクもそそくさと服を脱ぎながら言った。いつも性格を表すかのように立っている短い黒髪が、ぺたりと寝て雫を垂らしている。

「あ、そっか！」

ヤツハの慌てた言葉に、ラディンが

「カイルも脱げば？」

と笑った。

「なんで俺が脱ぐんだよ！」

「ついでついで！」

「俺は濡れてないだろっ！」

「男同士なんだから、いいじゃん！」

サクも面白がってカイルの腕を取ると、ラディンが嬉しそうにその裾を掴んだ。

「お前ら〜〜！」

カイルの声は怒りに奮え

「もう一回、頭冷やしてこいつ！」

と言う怒号と共に、二人の体はまとめて湖へと叩き落とされた。

大きな水しぶきが上がる前で、カイルは大きいため息をつき、その後ろではヤツハが大笑いしながら拍手を贈っていた。

「まったく……ひでえことするよな！」

再び岸に上がった二人は、並んで火の前にしゃがみこむと大きな

くしゃみを連発した。

「自業自得だろ！」

と言いながら、不機嫌そうに薪をくべるカイル。その様子を面白おかしそうに笑い続けるヤツハ。

「あなたたち、まるで兄弟みたいね！」

ヤツハの言葉に、サクとラディンは顔を見合わせた。そしてお互いに指を指すと

「「なんでこいつとっ！」」

と声を八モらせた。

「そういう所が、よ！」

笑うヤツハに、懨然としていたカイルもつられて笑っていた。

「ったく！ 勝手に言ってる！」

ラディンは肩下まである縮れた髪の毛をひとつに束ねると、絞るように水を落とす。水を大量に含んでいた髪の毛から雫が滴り落ちて、褐色の背中を滑り落ちる。適度についた筋肉の盛り上がりは、今まで独自に訓練を続けてきた証なのだろう。無駄の無い体を見事に作り上げている。

カイルはぼんやりとその後ろ姿を眺めながら、突如ハツとした顔をした。

「ソルティヤ……」

その唇からこぼれ落ちた言葉に、ラディンはビクリと肩を震わせた。そしてゆっくりカイルに振り向くと

「な、なんでその名前を……？」

と声を震わせた。カイルは思わず洩れた言葉に驚きながらも、確信したように改めてラディンを見つめた。

「！ やっぱり……」

「何の話？」

ヤツハが興味深そうに寄り添った。サクも何事かときよとんとしている。無言でカイルに食い入るように見つめられたラディンは、観念したように言った。

「ソルティヤ……俺の本当の名前だ」

「なんだって？」

サクが飛び上がった。驚いた。

「何で二つも名前があるんだよ？ 普通一つだろ？」

納得出来ない顔で尋ねるサクに、ラディンは

「いや、【ラディン】っていうのは、俺が勝手に付けた名前なんだ」と苦笑いして頭をかきむしった。水しぶきが周りに飛んだ。

「でも何で、そんな名前をカイルが知ってるわけ……？ カイルって一体どんな情報網を持つてるのよ？」

ヤツハの問いに、カイルはラディンを見ながら呟くように言った。「首の後ろに、カモメのような形のアザがある……」

その言葉に、ラディンは慌てて自分のうなじを押さえた。

「だ、だから何であんたが知ってるんだよ？ 誰も知らねえハズだぜ？」

驚きの眼差しで見るラディンの手をサクが取って首の後ろを見ると、そこにはカモメのような形をしたアザがくっきりと浮かんでいた。

「本当だ！ カモメのアザがある！」

「カイル、なんで？」

驚きながら言うヤツハに、カイルはラディンに言った。

「俺は、お前の母親を知ってる」

「えっ？」

ラディンは目を見開いてカイルを見た。

「俺の……母親……？」

それっきり言葉を無くすラディンの前で、カイルはおもむろに立ち上がった。

「会いに行こう！」

そう言うカイルを見上げ、動けないでいるラディンの肩を優しく抱いたヤツハがカイルに尋ねた。

「えっ？ ラディンの母親は近くに居るっていうの？ すぐに会え

るの？」

サクもカイルを見つめて答えを求めた。カイルは微笑みながら頷いた。

「ああ。すぐに会える。行こう、ソルティヤ！」

その名前に、ラディンの肩が再び震えた。それに気付いたヤツハが見ると、ラディンは固い顔をしていた。

「ラディン……？」

「……ない……」

小さな声で何かを呟くラディンに、サクが言った。

「どうしたんだよ？ お前、自分の母ちゃんに会えるんだぜ？ 良かったじゃねーか！」

サクも、母親に会うということとはラディンにとっては幸せなことなのだと感じ、その背中を押した。

「俺は会いたくねえ！」

ラディンはサクとヤツハの手を振り払って、後退りした。

「？ なんてだよ？」

「お母さんに会えるのよ？ ずっと会えなかったんでしょ？」

訳が分からず困惑するサクとヤツハ。カイルもまた、ラディンの意外な反応に戸惑っていた。ラディンは不機嫌さを体いっぱい表して、叫ぶように言った。

「母親だと？ 俺はそいつに捨てられたんだぜ！ そんな奴に会いたいわけねえだろうが！ それに、その母親って奴は、俺に会いたがってるのかよ？」

「いや、それは……」

カイルは言葉に詰まった。行方知れずの息子の話をしているミランの顔は、カイルには半ばあきらめているように見えた。カイルには、自信を持ってラディンの背中を押すことが出来なかった。

その時

「自分の子供に会いたくない親が居るわけないじゃない！」
ヤツハが言った。

「どんな理由があつたのか分からないけど、きっとラディンだつて会いたかつたはずよ！　ずっと一人で生きてきたんだもの。　ずっと寂しかったはず！」

「くっ！」

ラディンは木の枝から生乾きの服を無造作に掴み取ると

「あんたらに、一体俺の何が分かるつてんだよ！　放っておいてくれ！」

と言い捨て、走り去ってしまった。

「ラディンっ！」

三人はラディンの姿をあっけにとられて見送った。　我に返った

カイルが

「ラディン待つて！」

と走りだした。

「カイルっ！」

ヤツハが引き止めると、カイルは悲痛な顔で振り返った。

「ラディンのお母さんつて……？」

「ミラン先生だよ。　……俺、あいつのこと何も考えてなかった……

……謝らなきゃ！」

カイルはそう言つて踵を返すと、ラディンの母親の正体を知つて再び驚いている二人を残して、ラディンを追った。

幼少時代

ラディンは、湖の反対側にある山肌には不釣り合いなほど大きな岩にもたれてうずくまっていた。心の中が複雑に入り交じり、息も荒く、しばらく落ち着けないままであった。

そんなラディンの脳裏には、幼い頃の思い出が蘇っていた。

小さな山の麓にあるサウロパという村に、一人の元気な少年がいた。

両親は優しく、決して裕福ではなかったが、毎日を心の豊かさで埋め尽くしてくれていた。それほど不便さを感じることもなく過ごしていた。

少年は、黒髪に黒い瞳の両親とはまったく違った、金のサラサラした髪の毛に茶色い瞳をし、肌は透き通るように色白だった。

その少年は「ソルティヤ」と呼ばれていた。

物心付いた頃から、ソルティヤは村の子供たちに苛められていた。両親とは髪の色も瞳の色も全く違う子供など居るはずがないと罵られ、「拾われ子」と笑った。

だがソルティヤは自分を真つ直ぐに見つめ愛してくれる両親が大好きだったし、愛していた。だから誰に何と言われようと、両親を疑うことはなかった。

そんなある日、外で一人遊んでいたソルティヤが家に入ろうとすると、中から両親が話す声が聞こえてきた。それは小さな声だったが、何故だか胸騒ぎと共に気になったソルティヤは、そつと扉に耳を付けた。

「あの子も十歳になろうとしている……そろそろ本当の事を話すべ

きかもしれないな……」

重苦しく低い声に、高く柔らかな声が答えた。

「そんな……ソルティヤは誰が何と言おうと私たちの子供です！あの日村はずれで泣くソルティヤに出会ったとき、子供が出来ない私たちに神様が与えてくれたのだと、あなたも喜んだじゃありませんか？」

「それはそうだが……このまま本当の事を隠し通せると思うか？」

実際あの子は、両親との成りが違うというだけで、心ない言葉を掛けられている。このままでは、ソルティヤが可哀想だと思わないか？」

「でもあなた……」

二つの声は、それきり押し黙ってしまった。ソルティヤはどうしたらいいのか分からなくなり、激しい動悸と共に扉を離れた。

近所をあてもなく歩いていると、村一番のガキ大将ナルクと出くわした。

ソルティヤはナルクが苦手だった。

いつも二人以上の子分を従えて肩で風を切るように歩く姿は、子供ながらに人を圧倒する気迫がこもっていた。子供たちは誰も逆らわないので、ナルクはすっかり王様気分だった。そんなナルクにとってソルティヤは、格好の苛め相手だったのだ。顔を見るたびに蔑んだ目で見下し罵声を浴びせるナルクが、ソルティヤにはとても苦手な相手だった。

珍しく今日のナルクは一人だった。

夕刻近いので、家に帰る途中だったのだろう。だが子分がいてもいなくても、ナルクは変わらなかった。

「おう、ソルティヤじゃねえか？こんな所で何やってんだ？やっぱり『うちの子じゃない』って追い出されたか？」

人目もはばからず大笑いするナルクに、ソルティヤはいつも以上に胸が騒めくを感じた。さっき聞いてしまった両親の会話によ

って、ソルティヤは何を信じていいのかわからなくなっていた。

ソルティヤの睨むような目に気分を害したナルクは、眉をしかめた。「なんだ？ 何か不満でもあるのか？」

そう言いながら、握りこぶしを見せた。太く褐色の腕は、数々の喧嘩を乗り越えてきた傷が幾つも刻み込まれている。大抵の子供たちは、それを見せられると尻込みして何も言えなくなる。ソルティヤも例外ではなかった……

だが、今日のソルティヤは違っていた。少し俯いて自身の両拳を握ると、ぎゅっと目を瞑ってナルクへと殴りかかっていったのだ。「うわああああっ！」

「なっ？」

突然ソルティヤが飛びかかってきたので、面食らったナルクは思わず尻餅を付いてしまった。

「うわあああっ！」

ソルティヤはナルクに馬乗りになると、言葉にならない声を出しながらナルクの頬に拳を叩きつけていった。

「っにするんだ、てめえ！」

ナルクもやられてばかりではなかった。二人は土煙をあげながら転げまわり、殴りあった。

やがて日が暮れ、足を引きずりながら家の扉を開けたソルティヤを迎えたのは、いつもと変わらない両親の笑顔だった。それはすぐに、驚きの顔になった。

ソルティヤの傷だらけの顔や体、ボロボロになった衣服。母親はソルティヤに駆け寄り膝まづくと

「一体これは……また苛められたのね？」

と涙目で言いながら、ソルティヤの腫れた頬を包んだ。その手は、細く暖かった。

「母さん……」

ソルティヤは、笑顔を作って見せた。

「俺は、母さんの子供なんだよね？」

母親は目を見開いた。次にソルティヤは奥に座る父親の顔を見た。

「父さんの子供なんだよね？」

ソルティヤを見つめる父親の顔が少し固くなった。

三人は初めて作り物の笑顔を交わした。

その夜、ソルティヤは家を出た。

ほんの少しの着替えと食糧だけを小さな鞆に詰め込み、覚えたばかりの字を並べて書いた置き手紙を、そっと台所のテーブルの上に残し、静かに家の扉を開けた。

遠い思い出だった。

もう思い出すことはないと思っていた。育ててくれた恩は忘れることはない。だが、嘘をつき続けられるのは、耐えられなかった。

一人でも生きていける。

そう思った。

今まで『独り』だったのだから。

いつの間にか、うずくまるラディンの傍にカイルが立っていた。

三人の決意！

「行こう！」

そう言うサクに手を捕まれ、引つ張られるようにヤツハが訪れたのは、ソラール兵士養成学校の医務室だった。

机に向かって何か書いていたミランは、勢い良く扉を開けたサクを見たが、特に驚いた様子もなくペンを止めて、またか、という顔をした。

「サク……今度はどこを怪我したんだい？」

くわえ煙草で、半ば呆れた声を出して背もたれに身をゆだねるミランに、サクは詰め寄るように近寄った。

「会ってやれよ！」

「んっ？」

意味が分からず困惑した顔のミランに、サクの後ろからヤツハが補足した。

「ミラン先生の息子さんが、見つかったのよ！」

「！」

ミランは背もたれから体を離し背筋を伸ばして、ヤツハを見、サクを見て目を丸くした。

「一体何を……」

「首の後ろにカモメのアザがある！ ソルティヤって名前のラディンが、先生の息子なんだろう？」

「サク、言ってることが滅茶苦茶！」

ヤツハが慌てて制止し、ミランに説明をした。

旅先で出会った友人ラディンについさつき再会し、ひよんなことから首にあるカモメのアザを見つけたこと。ソルティヤと言う名前にひどく反応したこと。その話をカイルから聞いたということ

一通り話を聞き終わったミランは、すっかり短くなったタバコを
もみ消した。そして長いため息を吐いたあと、後れ毛を耳にかけ
た。

サクとヤツハは並んでベッドに座り、ミランの様子を見つめ、答
えを待っていた。

「分かった」

そう返事をしたミランに、サクは嬉々として立ち上がり、言った。
「あいつならまだ湖に居るはずだ！ まだ間に合うぜ！」

ヤツハも立ち上がって湖に向かう気持ちを整えた。だがミラン
は椅子から腰を上げる様子も無く

「待て。誰が会うと言った？」

と冷たく言った。サクとヤツハは驚いてミランを見つめた。

「あんたたちの話は分かったと言っただけ。会うとは言っていない」

そう言つとそっぽを向き、また書き物を始めた。

「な、なんでだよ？ 自分の子供だぜ？ なんで会ってやんないん
だよ？」

サクが納得行かない顔でミランに言った。掴み掛かりそうな勢
いのサクの腕に、ヤツハは必死でしがみついた。だがそのヤツハ
にも、ミランの気持ちが分からないでいた。

「先生、どうして……？」

ミランは手元に視線を落としたまま面倒臭そうに言った。

「用はそれだけかい？ あたしは忙しいんだ。用が無いなら出て
いきなさい！」

「先生！」

サクが叫ぶように突っ掛かると、突然ミランが立ち上がった。

そしてずかずかと二人に近づくと、視線を合わせないように背中を

押して部屋から追い出していく。

「ちよ、ちよつと先生っ？」

二人があたふたしている、ミランは

「あたしは忙しいって言ってるだろう！ 仕事の邪魔だ！ 出ていきな！」

と言い捨て、ぴしゃりと扉を閉じてしまった。

「ミラン先生っ！ なんでなんだよ？ 自分の息子だろっ？ ラディンに会ってやれよ！」

サクは扉を叩きながら言ったが、その扉が開く気配はなかった。向こう側では、扉にもたれて額に手を当てて俯くミランがいた。

「何で……今更……」

「お節介なんだよ……」

ラディンは後ろに立つカイルの気配を感じながら、両膝に顔を埋めたまま言った。

「自分を捨てた奴なんか、会えるわけないだろうが……」

カイルは何も言えないでいた。親に会いたいと思うのは、当然だと思っていたからだ。ヤツハもサクも、自分の親を大切に思っている。カイルは戦争孤児だったので、両親の顔すら知らない。

育ててくれたマチのことは、勿論本当の母のように慕っていたが、やはりふとした時に実の親を想う時はあった。だから誰でも、親に会いたいと思う心に違いはないと信じていたのだ。

だが、ラディンは違っていた。

少し手を伸ばせば届く親に、会いたくないという。ラディンは母を『自分を捨てた奴』と罵倒した。

言葉を失ってしまったカイルの前に、ラディンは立ち上がった。

まだ上半身裸で、手には生乾きの服を握っている。立ち去ろうとするラディンを引き止めたくて言葉を探していると、ラディンは

すれ違いざまに

「あんただけは、分かってくれると思ってた……」
と呟いた。

「っ！」

振り向くと、すでにその姿は消えていた。

「ラディン！」

その気配はもう無く、カイルは何も出来ずに立ち尽くしたまま、湖からの風に吹かれていた。

「カイルっ！」

ヤツハがカイルの姿を見つけて駆け寄ってきた。サクも一緒だ。

「ラディンは？」

サクの問い掛けに、岩にもたれてうなだれていたカイルはゆっくりと顔を上げた。

「もう居ない……」

消え入りそうなほど小さな声で言うカイルに、ヤツハが心配して近づいた。

「何があつたの？ ラディンに何か言われたの？」

カイルは俯いてため息をついた。

「嫌われた……」

「えっ！」

ヤツハが聞き返すと、カイルは頭をかきむしった。

「誰だって、親には会いたいと思うだろ？ 俺だってそうだ……」。

自分の親を、自分を捨てた奴だと言うあいつに、かけてやる言葉がまるで見つからなかった……」

「カイル……」

ヤツハがカイルの震える肩を抱いて、寄り添った。その時サクが呟いた。

「シリウなら……こんな時、どう言っかな……？」

その言葉に、二人は顔を上げた。

「ほら、あいつ、色々と器用だからさ、こんな時どういうのかなあ
って、さ。きつとこんな時だって、簡単に解決しちまうんじゃない
かな？」

サクは苦笑いして頭をかきながら言った。

「シリウに会いたい……」

カイルが呟いた。ヤツハは小さく震えるカイルの身体を優しく
抱き締めた。ヤツハにも、どう言葉を掛けていいのか分からない
のだ。ただ抱きしめてやることしか、自分の気持ち伝えられな
かった。その様子を見て、サクが意外に明るい口調で言った。

「よし！ 会いに行くか？」

「えっ？」

ヤツハはサクを見た。

「会いに行くって……もしかして、ラディンが教えてくれた村まで
行くってこと？」

「ああ！」

サクは強く頷いた。

「いい機会じゃねえか。ラディンとも仲直りしてえしさ、こんな
所ですぶってるのも飽きてきたし、シリウにばっかいい格好さ
れるのも癪だし！」

サクはにっこり笑った。

「サク、それって……」

ヤツハが言い掛けると、サクは拳を握り上げた。

「卒業するんだ！」

「！」

カイルもその思いがけない案に、急に心の扉が開いたような気が
した。

「そうだな……」

そう呟いて微笑むと、頷いて言った。

「待ってるだけじゃ、つまらないしな！」

少し明るくなったカイルに、ヤツハは呆れた顔をして言った。

「本当にあんたたちは……ま、カイルはシリウに会いたくて仕方ないから分かるけど！」

そして笑顔になると

「分かった！ こうなったら、あたしも付き合っわ！ 三人で卒業しましょー！」

と、勢いよくカイルの肩を叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4816v/>

ヴァンドル・バード

2012年1月5日00時02分発行